

28) と類似している。また中野市立ヶ花窯跡（中野市教委1995）に同類の甕がみられる。3と4は口縁部に沈線が巡っている。

5・6は須恵器杯Bで、底部は5が回転糸切り未調整で、6が回転ヘラ削り調整である。高台がやや内側に入って接合され、杯腰部が直角に近く立ち上がっている。7は須恵器杯Aで底部ナデ調整である。8は口縁部が面取りされた甕Dである。

上記の出土土器より粘土探掘跡は大きく2時期に分類される（第225図・第10表）。また、遺物が出土しない土坑、および出土遺物から詳細な時期が判明しない土坑については、形状と覆土から下記のいずれかの時期に属するものと推定した。

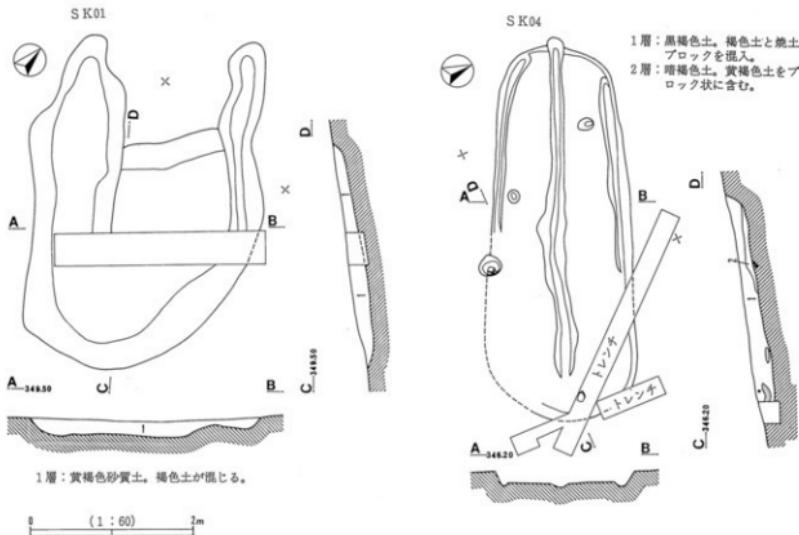
8世紀前半期—SK20、21、SK24、SK32、SK45、SK53、SK62、SK71、SK73、SK77、SK81、SK87、SK88、SK97、SK98、SK99、SX01。

8世紀後半期から9世紀初頭期—SK22、SK23、SK31、SK34、SK39、SK68、SK79、SK95。

4 その他の遺構

SK01（第234図） 東向きの斜面部、SY02の東側7.5mに位置し、2.8m×2.7mの不整な方形に2カ所の溝状の突出部を持つ。焼土、炭化物などは確認されず、遺構内での人の活動の痕跡は確認されない。覆土より窯業、瓦10点、須恵器の甕・蓋が各1点出土したが、本遺構に伴う遺物は確認できず、出土遺物から遺構の時期は明言できない。しかし、清水山窯跡、牛出古窯遺跡でも窯に近接した不整形な土坑が存在しており、これらの土坑と同様な性格の遺構であると推定され、いずれかの窯跡構築に関わるものであると考えられる。

SK04（第234図） 東向き斜面部、SY06の南側約13m位置し、4.64m×1.72mの隅丸の長方形を



第234図 池田端窯跡 SK01・04

呈する。斜面下方の東側は、壁面が確認できず推定線（破線部）で示している。土坑底面は約8度傾斜しており、長軸方向に中央部と両壁際に幅15cm前後、深さ約5cmの溝が検出された。覆土には炭化物と焼土粒や焼土塊が認められ、特に土坑底面には多量の炭化物が出土した。火床面は確認されなかったが、覆土中に焼土塊が認められることを考え合わせると本遺構内で火を焚いたことは明らかである。浅いピットが3ヵ所確認されたが本遺構の施設であるか否か判断できない。覆土中より須恵器甕片が1点出土したのみであるが、遺構は窯跡群と粘土探査跡の間に位置しており、また粘土探査跡群からびるSD12の延長上に位置することから須恵器生産に関わる遺構であると推定される。

SD05（第197図） SY04の斜面上方に弧状に巡る溝である。長さ約8m、幅50cm～60cm、深さ約35cmの断面V字状で、覆土は黒褐色土の単層で、近世以降の溝の覆土と明瞭に区別された。覆土上層より土師器甕の破片が出土した。遺物から奈良・平安時代の遺構と思われるが遺構の性格は不明である。

SD12（第189図） 東向き斜面部の窯跡群と粘土探査の土坑群とを結ぶ方向に走る溝である。長さ約50m、幅50cm～60cm、深さ10cm～15cmで、わずかに蛇行しながら等高線にはば平行する。溝の南端部は確認したが、北端部は検出面が低いため確認できず、溝はさらに北方向に続く。溝底面のレベルはほぼ水平で、北端が南端より約5cm高く中央部がわずかに両端よりも窪んでいる。出土遺物は須恵器片・土師器片が数点出土したが、詳細な時期を判別できる遺物はないが、窯跡と粘土探査跡との位置関係から須恵器生産に関わる遺構と推定される。

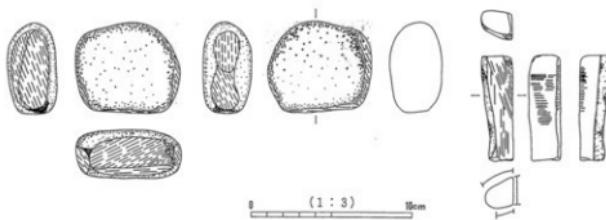
SF01（第189・232図） 粘土探査土坑群の北西約60mの緩斜面部に直径約30cmの火床面が確認され、火床面の周辺には土師器甕片などがまとめて出土した。火床面は表土直下に検出されており、竪穴住居址に伴うものかどうかは確認できなかったが、竪周辺に長胴甕が出土する事例は多く、火床面は竪の残存部分である可能性が高い。

出土遺物（第232図下段1・2） 1は胴部表面は縦方向のヘラ削り、内面は胴上半部がカキ目、下半部はハケ目である。2は口縁端部が面取りされており、胴部の表面は縦方向のヘラ削り、内面は粗いハケ目である。

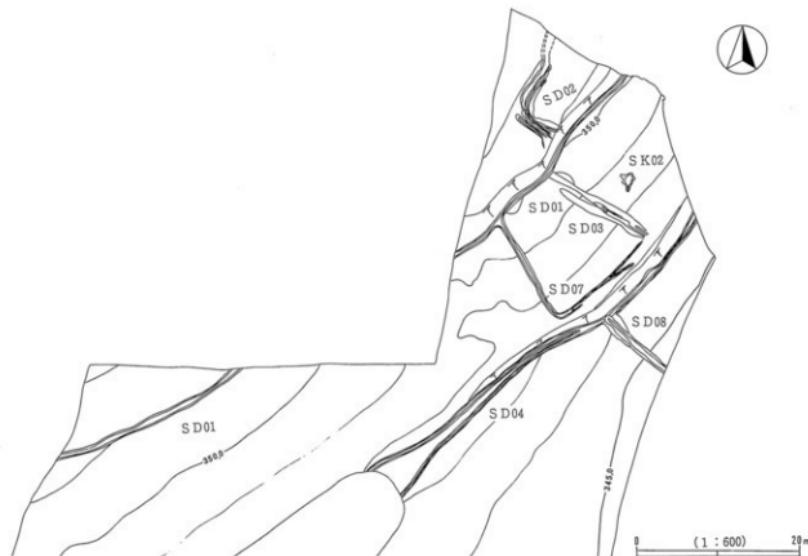
第5節 近世以降の遺構

①区と②区北端に溝6条と土坑1基が確認された。（第236図）。いずれも時期を判断できる遺物がなく詳細な時期は不明であるが、表土に近似する覆土であることから近世以降のものと判断した。

SD01・04は等高線と平行する削平面と一致しており、さらに、SD03・07・08はSD01・



第235図 池田罐痕跡 時期不明石製品



第236図 池田端廻跡 近世以降の遺構

04に規制されており、いずれも2段の削平面よりも新しい溝である。SD03・04ではわずかにずれる溝が重複しており、数回の掘り直しが行われたものと思われる。なお、SD03覆土にはSY02で焼かれたと思われる瓦がまとまって大量に出土した。

SD02はL字状に曲がる溝であるが、複数の溝が重複しており、数回の掘り直しが行われたものと思われる。また、等高線と平行する削平面に規制されていないことからSD01他などよりも古い溝と思われる。

註

1 分析結果の報告は上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14（平成9年度刊行予定）に掲載する。

引用・参考文献

- 斎藤孝正 1995a I 第3章 1 猿投窟と出土遺物 「須恵器集成図録」第3巻東日本編1
- 斎藤孝正 1995c I 第3章 2 尾北窟と出土遺物 「須恵器集成図録」第3巻東日本編1
- 後藤健一 1990 追記 「静岡県湖西市吉美中村遺跡」
- 高橋一敏 1990 A地点 「静岡県湖西市吉美中村遺跡」
- 中野市教育委員会 1995 参考資料 「長野県中野市安源寺遺跡（中野市西部アイサービスセンター建設敷地内）発掘調査報告書」

第8章 牛出古窯遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

牛出古窯遺跡は長野県中野市大字牛出字芝野704他に所在し、JR飯山線立ヶ花駅より北東に約1.3kmの位置にある。千曲川の東岸に広がる高丘陵の北西縁の河岸段丘状の地形に立地する。従来、段丘崖の斜面に須恵器窯跡が存在することが知られていたが、集落跡としては周知されていなかった。調査区は、林檎などの果樹栽培を行う畠地で、現在の牛出の集落から東へ200m、千曲川から約700mのところにある。遺跡周辺には3段の平坦面があり、本遺跡の範囲は一番高い平坦面とその下の平坦面にとどまる。一番下の平坦面は牛出遺跡とされており本遺跡とは区別されている。本遺跡では一番高い平坦面を上段段丘面、その下の平坦面を下段段丘面とし、その標高差はおよそ15mである。下段段丘面には主に古墳時代初頭の集落跡と中世の墓が、段丘崖の斜面部には奈良時代窯跡、上段段丘面には旧石器時代石器、奈良・平安時代の住居址が確認された。

牛出古窯遺跡と同時期もしくは前後する時期の周辺の遺跡をあげると、北西200mの牛出遺跡では中世の集落跡が確認されており、本遺跡の中世の墓との関連が予想される。弥生時代後期末から古墳時代初頭では牛出遺跡・がまん淵遺跡・安源寺遺跡・栗林遺跡・七瀬遺跡などの集落跡があげられる。がまん淵遺跡は弥生時代後期の集落跡で南に1.5km、牛出遺跡は600m北西の千曲川の川岸に立地しており、本遺跡と同時期もしくは前後する時期の集落跡である。安源寺遺跡、栗林遺跡、七瀬遺跡は弥生時代後期から続く集落跡で直線距離で、1.2kmから3.0kmの距離にある。集落跡以外では安源寺遺跡で前方後方形周溝墓が調査されている。須恵器生産関連では、本遺跡は高丘陵古窯址群の北西端の窯跡となる。

2 調査の概要

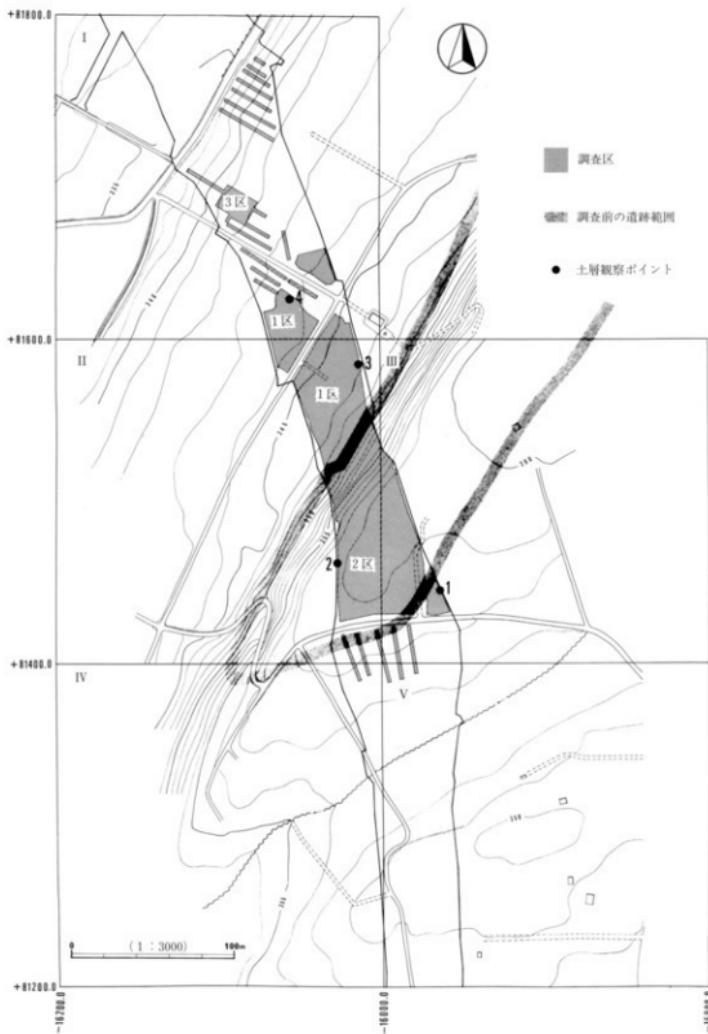
(1) 調査範囲と調査方法

調査範囲 (第237図) 表土剥ぎを行い遺構の有無を確認した範囲を第237図に示した。本調査開始前の、窯跡としての遺跡推定範囲は斜面部から上段段丘面にかけてであったが、重機によるトレンチ調査により下段段丘面にも遺跡が広がることが確認され、下段段丘面を1区、斜面から上段段丘面を2区として調査を開始した。その後の試掘により1区の北西約100mに土師器が出土し、そこを中心に調査区(3区)を広げたが、他に遺構・遺物は確認されなかった。

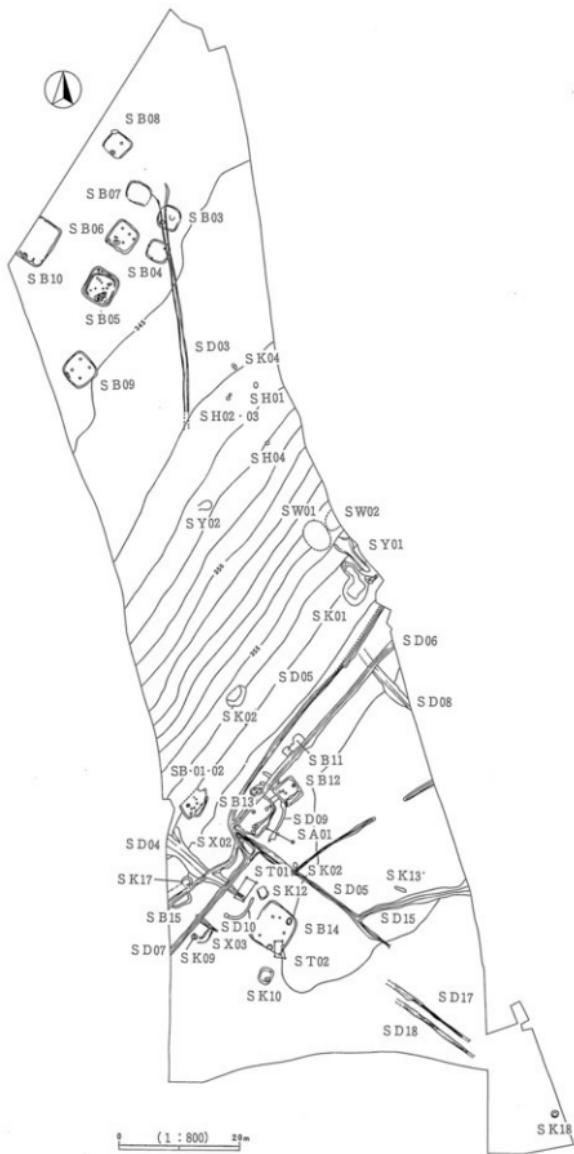
グリッドは長野県埋蔵文化財センター仕様により設定し(第1章2節3項参照)、日々地区と調査区との関係を第237図に示した。

調査の方法 重機によるトレンチ調査で遺構・遺物の確認されたところを、重機により全面表土剥ぎを行い、遺構の調査を行った。トレンチ調査時点で出土した遺物はトレンチごとに一括して取り上げ、その他遺構検出時に確認された遺構外の遺物は、2m×2mの小地区単位で取り上げた。なお、1区の古墳時代の調査では遺構外の遺物についても出土地点を記録した。遺構の調査では、特に住居址の遺物の出土位置はほぼ全点記録した。更に、1区住居址の調査では、管玉、ガラス玉が出土する可能性があったため、

覆土を3mm角のふるいにかけ、残った土をウォーターセパレーションにかけた。その結果、SB 0.5以外には玉類がほとんど含まれていないことが判明した。遺構の調査終了後、数点の旧石器時代と思われる剥片が出土した上段段丘面で人力による試掘を行った。遺物が出土した試掘坑を中心に調査区を設定し、両刃鎌で掘り下げた。



第237図 牛出古窯遺跡 調査範囲



第238図 牛出古窯遺跡 遺構配置図

なお、遺物の取り上げと遺構の実測は㈱写真測図研究所のコーディクシステムによる単点測量を行った。

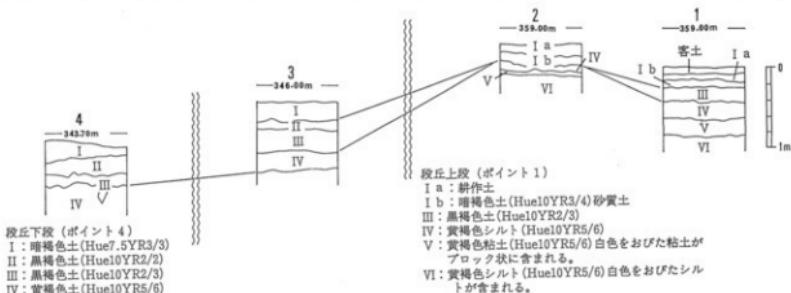
(2) 調査経過（調査日誌抄）

調査期間 平成5年（1993年）4月6日～同年7月2日、同年11月1日～同年12月22日	
4月6日 斜面部表土剥ぎ開始。	7月1日 地形測量（㈱写真測図研究所に委託）
4月7日 痕跡検出。	SB10以外の1区遺構調査終了。
4月12日 発掘開始式。	7月2日 貝ノ木遺跡調査のため調査を一時中断。
4月13日 SB01-02検出。	11月1日 調査再開。2区で表土剥ぎ開始。
4月14日 遺構掘り下げ開始。	11月4日 SB11-12の奈良時代住居址など遺構調査開始。
4月15日 1区（下段段丘面）トレーンチ調査。	11月10日 旧石器時代と思われる剝片が散点出土。
4月21日 2区南部のレンチ調査開始。	11月11日 旧石器の確認のため試掘開始。
4月26日 1区で中世の埋葬施設を確認。	11月16日 1区でグリオシをして調査終了。
5月13日 1区で古墳時代の住居址（SB03～SB08）を検出。 2区遺構密集地区を除き確認調査終了。	11月19日 古代の遺構調査と並行して旧石器時代の調査開始（SQ 05～06）。
5月20日 下段段丘面の道路北西側トレーンチ調査開始。	11月22日 宇照寺跡より乗具貝合流。
5月24日 古墳時代住居址発掘開始。 覆土の水洗いを並行して行う。	12月3日 第2回目の空操実施（2区）（㈱写真測図研究所に委託）。
5月26日 SB05より勾玉出土。	12月8日 磨製石斧を含む旧石器時代ブロックを新たに確認（SQ 07）。
6月8日 SB09を確認。	12月13日 調査と並行して遺物の水洗い注記を開始。
6月12日 現地説明会。見学者90名。	12月17日 SQ 07調査終了し牛出古窯跡の発掘作業終了。
6月16日 SB05より鉄製品出土。	12月21日 2区で重機による埋め戻し。
6月18日 空操実施（㈱写真測図研究所に委託）。	12月22日 機材を撤収し調査終了。
6月24日 SB10掘り下げ開始、ガラス玉出土。	

(3) 調査結果の概要

本遺跡では旧石器時代、古墳時代前期、奈良・平安時代、中世の遺構を調査した。段丘斜面部には奈良時代の須恵器窯跡が、その上方の上段段丘面（2区）には旧石器時代のブロックと奈良・平安時代の集落跡が、そして下段段丘面（1区）には古墳時代前期の集落跡と中世の墓跡が確認された。旧石器時代のブロックでは台形様石器と局部磨製石斧を伴う石器群が出土した。古墳時代前期の集落跡ではほぼ同時期と見られる竪穴住居址5棟、竪穴状遺構3基を調査し、箱清水式の特徴を残す在地の土器と東海系の土器が出土した。奈良・平安時代では、須恵器窯跡1基と、工房跡を含む住居址6棟、土師器焼成遺構と思われる焼土坑2基などを調査した。中世では古錢を伴う火葬骨の埋葬施設を3基調査した。この他にも、平安時代の埋葬施設と思われる遺構が1基検出されている。

(4) 基本土層 本遺跡では段丘上段と下段で層序が異なっているが、第239図に示した段丘下段の土層観察ポイント3の層序を牛出古窯遺跡の基本層序とした。I層は暗褐色土、II層は黒褐色土、III層は黒褐

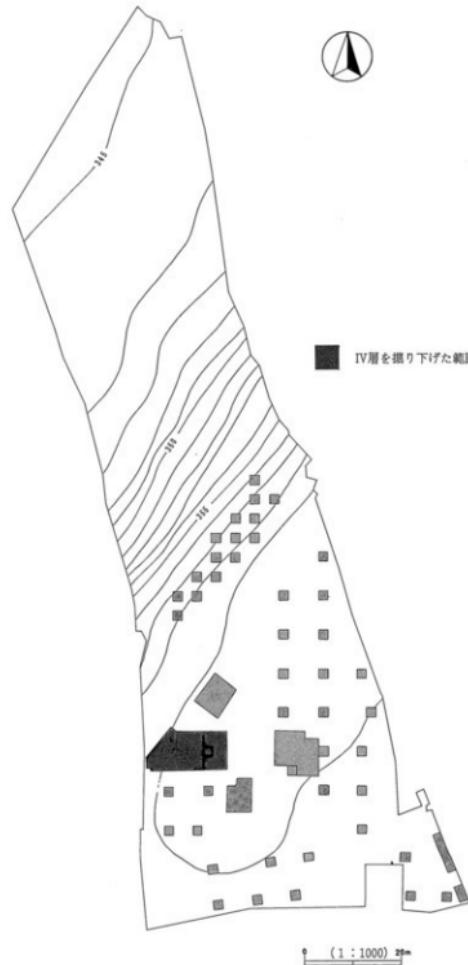


色土、IV層は黄褐色土である。III層上面で中世の埋葬施設を確認し、II・III層中より奈良時代の須恵器が、III層より縄文時代中期の土器片が出土している。

段丘上段では、IIまたはII・III層が欠落している。特に奈良時代の遺構が集中する段丘の縁辺部にはII・III層が欠落する。I層の下面は不連続面で明瞭に分層され、II層またはIII層が流失していることを示している。ポイント1の土層は、I層が暗褐色の砂質土、III層が黒褐色土、IV層は黄褐色シルトで段丘下段のIV層とは土質が異なり、旧石器時代の遺物を包含する。V層は黄褐色粘土、VI層は黄褐色シルト、VI層以下は砂層とシルト層の互層が続きその下は砂疊層になる。この砂層と砂疊層が斜面部では検出面に露出する。

第2節 旧石器時代の遺構と遺物

旧石器時代の石器が検出された上段段丘面は、沢田鍋土遺跡、がまん淵遺跡などと同じ丘陵面である。その上段段丘面の調査区のはば全域に2m×2mの試掘坑を設定しIV層を掘り下げ、遺物が発見された試掘坑を中心にして4か所の調査区を設け、それぞれSQ 05、SQ 06、SQ 07、SQ 08とした。SQ 05・06・08にそれぞれ1つ、SQ 07には3つの合計6つの遺物集中箇所が認められる。これらの集中箇所を以下のようにブロック1～6として捕えておきたい。SQ 05調査区の遺物集中をブロック1、SQ 06調査区の遺物集中をブロック2、SQ 07調査区の遺物集中は東側からブロック3、ブロック4、ブロック5、SQ 08調査区の遺物集中をブロック6とする（第241図）。これらのブロックは、段丘面の縁で周囲よりやや高まった場所に位置している。なお、調査はIV層上面まで重機で掘り下げ、そこから人力で掘り下げを行っている。試掘を行っていない所は、IV層上面を全面にわたって1cm弱掘り下げており、遺物点数が多いブロックを見落としている



第240図 牛出古窯遺跡 旧石器時代調査範囲

可能性はほとんど無い。

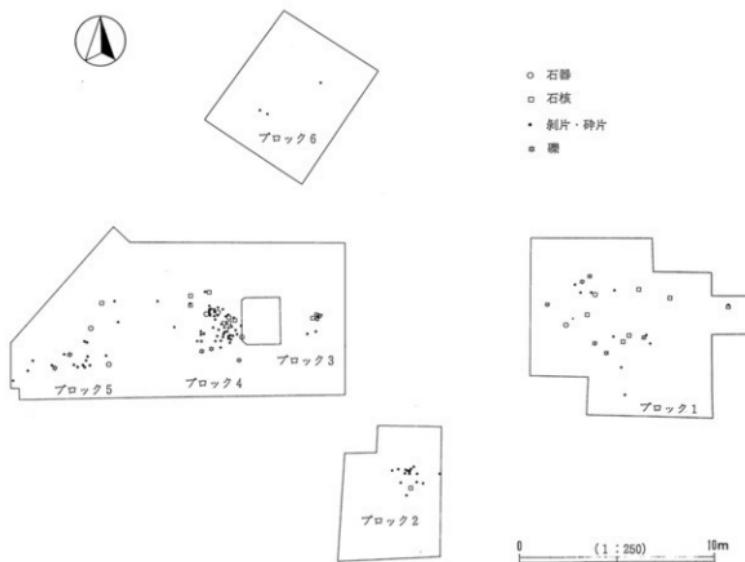
出土層位 耕作により浮き上がったものを除いて、すべての石器の出土層位は基本土層IV層（黄褐色シルト層）である。なお、同じ段丘面にある他の遺跡においても旧石器時代の遺物は本遺跡のIV層に相当する黄褐色シルト層より出土している。基本土層については1節述べた。

さて、上段段丘面では基本土層III層が欠落しているところがあり、ブロック2、ブロック5、ブロック6では中世以降の堆積層（II層）の直下に旧石器時代の包含層（IV層）が続いている。そのような場所ではIV層の上部が流失しており、現在残されている遺物は、本来遺跡に残された遺物の全体ではなく部分であると考えられる。

以下に各ブロックの内容を示し、それぞれのブロックの関係について触れてみたい。なお、出土遺物は第244～第247図に示し、1～8はブロック1、27・28はブロック3、11～18・20～25はブロック4、9・10・19・26はブロック5である。各遺物の属性は付章遺物観察表に示した。

ブロック1（第242・244・245図）

局部磨製石斧未製品1点、二次加工のある剝片1点、剝片10点、石核4点、礫5点で構成され、およそ9.3m×6.4mの範囲に分布する。出土点数は少ないが、含まれる石材は黒曜石、蛇紋岩、流紋岩、チャート、砂岩、めのうとバラエティーに富む。また、剝片の数に比べ石核が多いのが特徴的である。ただし、IV層上面からも遺物が検出されており、上層に浮き上がったため失われた遺物があると思われる。



第241図 牛出古窯遺跡 旧石器時代遺物分布図

1は蛇紋岩の円礫に数回の大きな剥離痕が認められ、石材から考えて磨製石斧の素材もしくは未製品と思われる。2・3は分厚い板状の剝片を素材として周辺部から剝片剥離を行っているもので、同様の特徴を持つものを本報告書では石核とした。4は数回の打面転移を行っている石核である。石材は、2が砂岩、3が流紋岩、4がめのうである。礫は2kgを越えるものが2点で他は小形のものである。これらの礫は、2m～3mの間隔を置いて分布している。なお、断面図の長方形は礫の出土レベルを示す。

ブロック2（第242図）

石核1点、剝片・碎片15点から構成され、2.4m×1.6mの範囲に分布する。1ないし2個体の同一母岩からなる赤色チャートの石核と剝片が主体となり、珪質頁岩3点、安山岩と凝灰岩が各1点含まれている。遺物は表土直下のIV層上面より検出されている。本ブロックの上部は流失してしまった可能性が強い。

ブロック3（第243・247図）

石核1点、剝片2点、礫3点で構成され、直径1m以内に納まる小範囲に分布する。ブロック4に近接するが石材構成が異なるため少數ではあるが分離しブロック3とした。28は流紋岩の石核で2点の剝片と同一母岩と思われる。礫は安山岩と花崗岩で3点とも拳大の大きさでまとまって出土した。なお本ブロックは一部重機により掘り下げており、遺物のサンプリングエラーが他のブロックに比べ多い可能性がある。

ブロック4（第243・246・247図）

磨製石斧1点、台形様石器1点、スクレイバー1点、使用痕のある剝片1点、石核7点、剝片・碎片53点、礫3点より構成される。重機による試掘でブロックの東側が失われていた可能性が強いが、現在確認される分布範囲は3.2m×3.4mの範囲に納まる。石材構成では黒曜石と蛇紋岩が主体となるブロックで、この他に黄色の鉄石英が2点含まれる。

11は基部の二側縁に調整加工を施した台形様石器、12は搔器状の刃部のスクレイバーで、13には切断と微細な剥離痕が認められる。いずれも黒曜石である。9は刃部が丹念に磨かれている磨製石斧の欠損品で平面分布ではブロック5の中に含まれる。しかし、ブロック4の蛇紋岩の剝片と同一母岩と思われること、II層より出土しており原位置から平面的にも移動していると考えられること、以上のことから9の磨製石斧はブロック4の分布範囲内にあったものが斜面下方に動いたと考えられ、本来はブロック4の遺物であったと理解しておく。また、蛇紋岩の剝片には研磨面が認められるものが多く、9と同一個体の可能性が高く、本ブロックの蛇紋岩の剝片は、磨製石斧の第1次の製作にかかわるものではなく、破損・破壊もしくは再加工によって生じたものであると判断される。また、砥石などの研磨具は認められない。礫はブロック周辺部に分布しており、5.7kgの人頭大ほどの大形の礫がある。礫表面は、発掘時の傷で使用痕があるか否か観察できない。

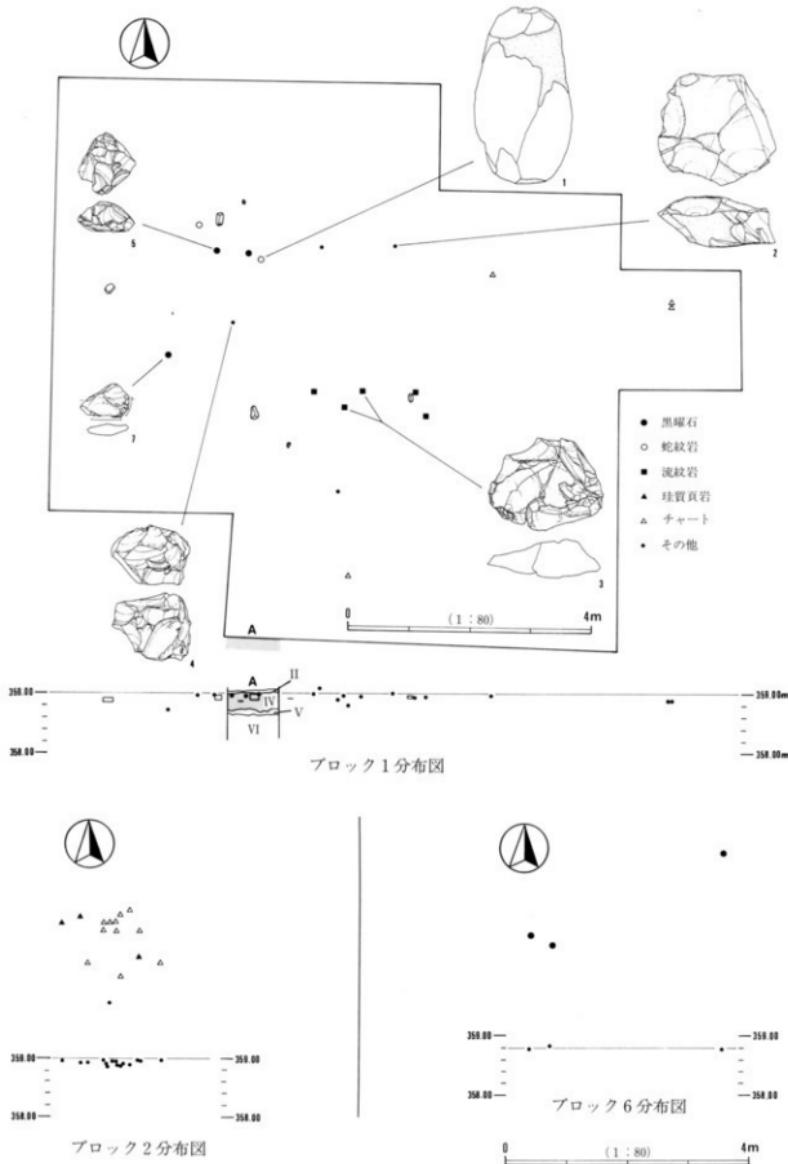
ブロック5（第243・246・247図）

台形様石器1点、石核1点、剝片・碎片18点、礫2点より構成される。ブロック4に比べ散漫に分布しており8.4m×2.9mの細長い範囲に分布する。石材構成は流紋岩、黄色い鉄石英、黒曜石、チャート、安山岩と多様で、それぞれの石材別に分布範囲を見ると更に小さな集中範囲が確認できる。2点の礫はほぼ同一レベルで出土しており、生活面のレベルを示していると思われる。本ブロックは地表面からおよそ25cmで検出され、遺物を包含するIV層は非常に薄く、IV層と共に遺物が流出した可能性が強い。

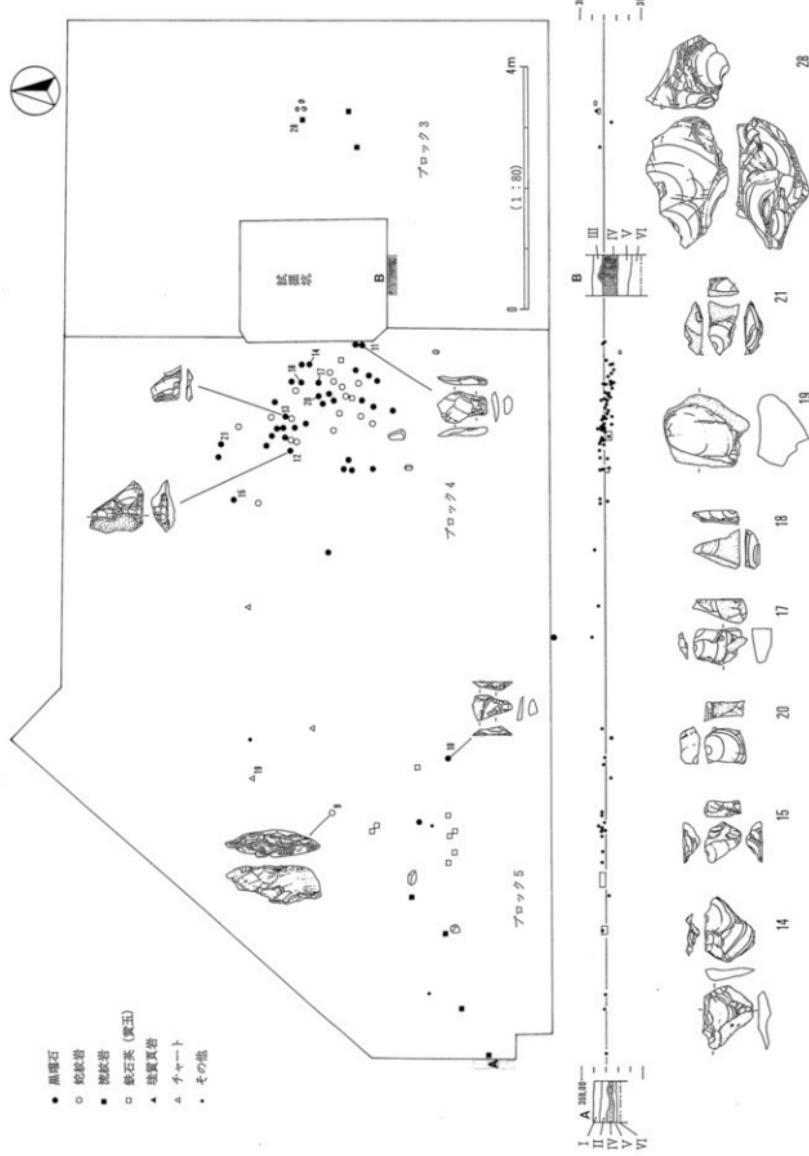
10の台形様石器は切断と裏面での剝片剥離により形状を作り出した後、基部表面に細かな調整加工を行っている。前述したが、9の磨製石斧はII層中より出土したもので、本来ブロック4に含まれていたものと思われる。

ブロック6（第242図）

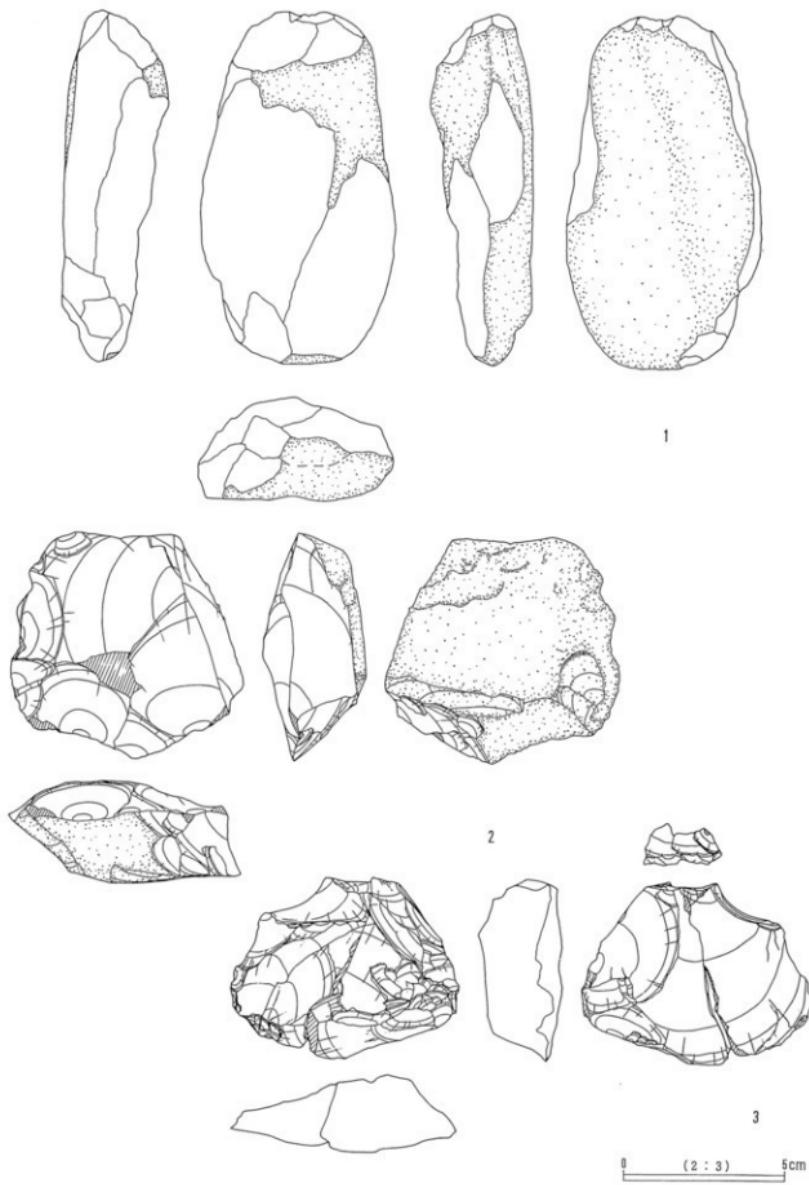
旧石器時代の調査を開始した検出面で剝片が認められ、調査区を設定し掘り下げたが、黒曜石の剝片が



第242図 生出古窯遺跡 ブロック1・2・6 石材別遺物分布図



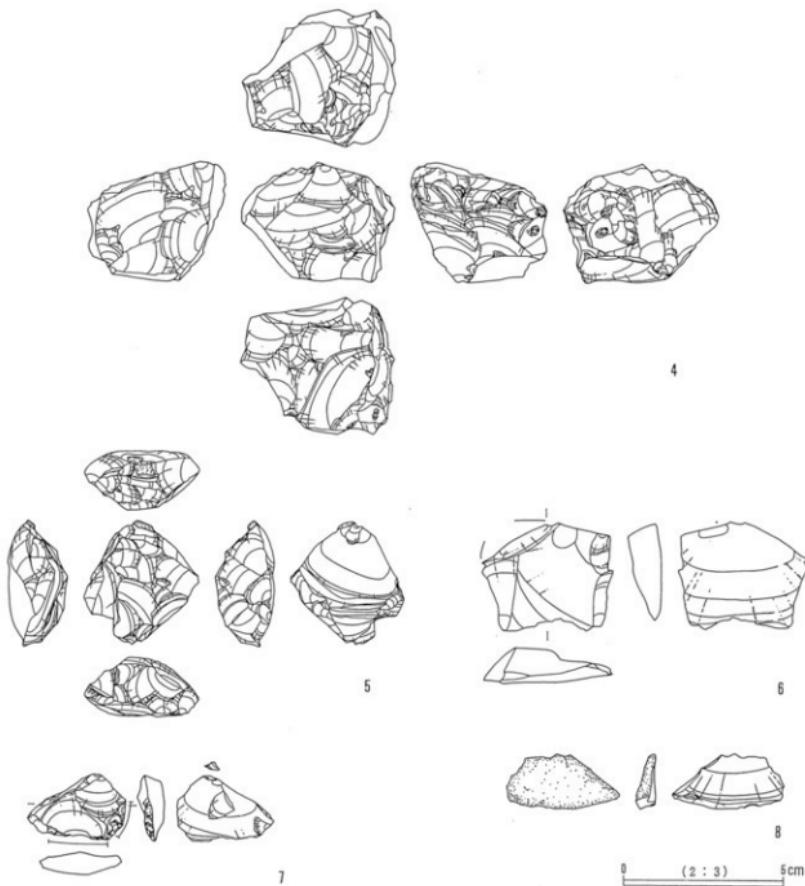
第243図 牛出古窯遺跡 ブロック 3・4・5 石材別遺物分布図



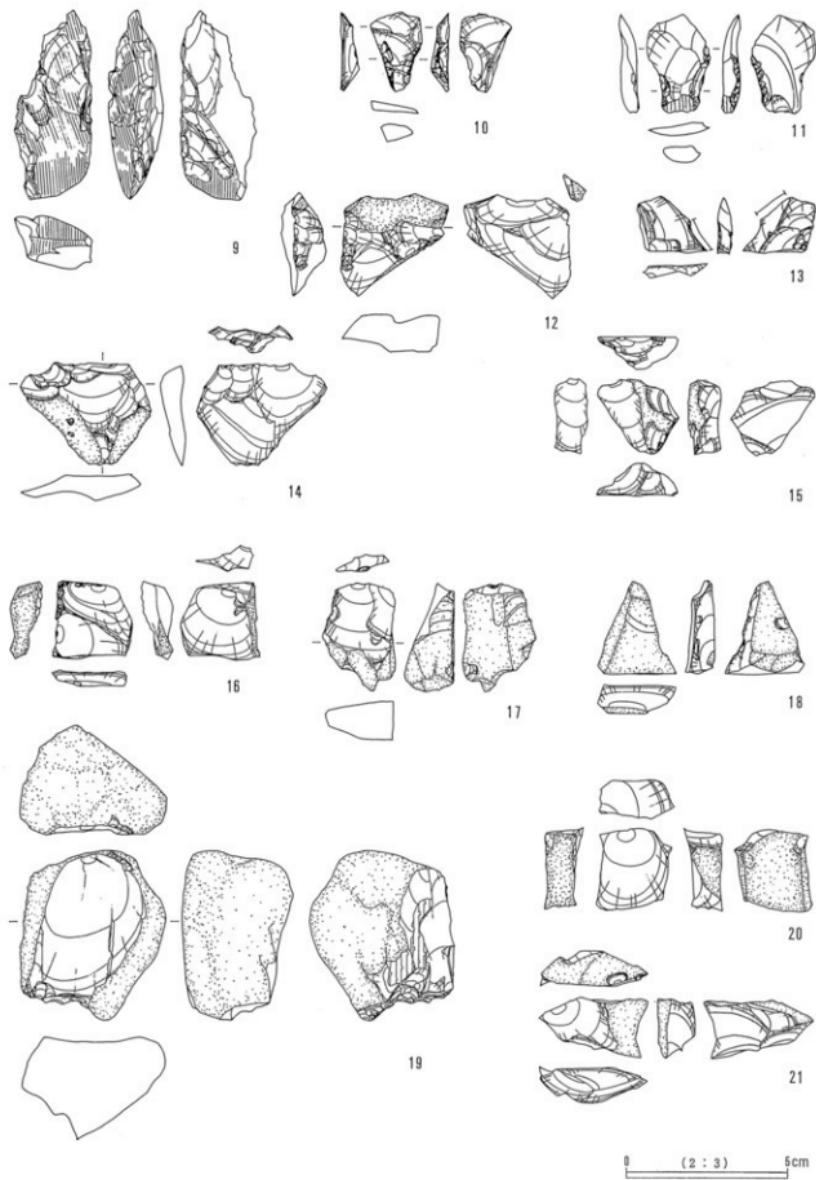
第244図 牛出古窯遺跡 ブロック1出土遺物(1)

3点出土したのみである。他ブロックと同様に包含層の流失が考えられ、更に多くの遺物より構成されていたブロックの残存と考えられる。

牛出古窯遺跡上段段丘面では、以上の6つのブロックが確認された。すべて本遺跡基本土層IV層より出土したものではあるが、周辺遺跡の状況と同様に、時期差を層位的に検出することは不可能であるため、出土層位でブロックの同時性は議論できない。ブロック4と5は類似する台形様石器の存在と同一母岩と思われる鉄石英が両ブロックに含まれていることから同時期に残されたものと判断できる。またブロック

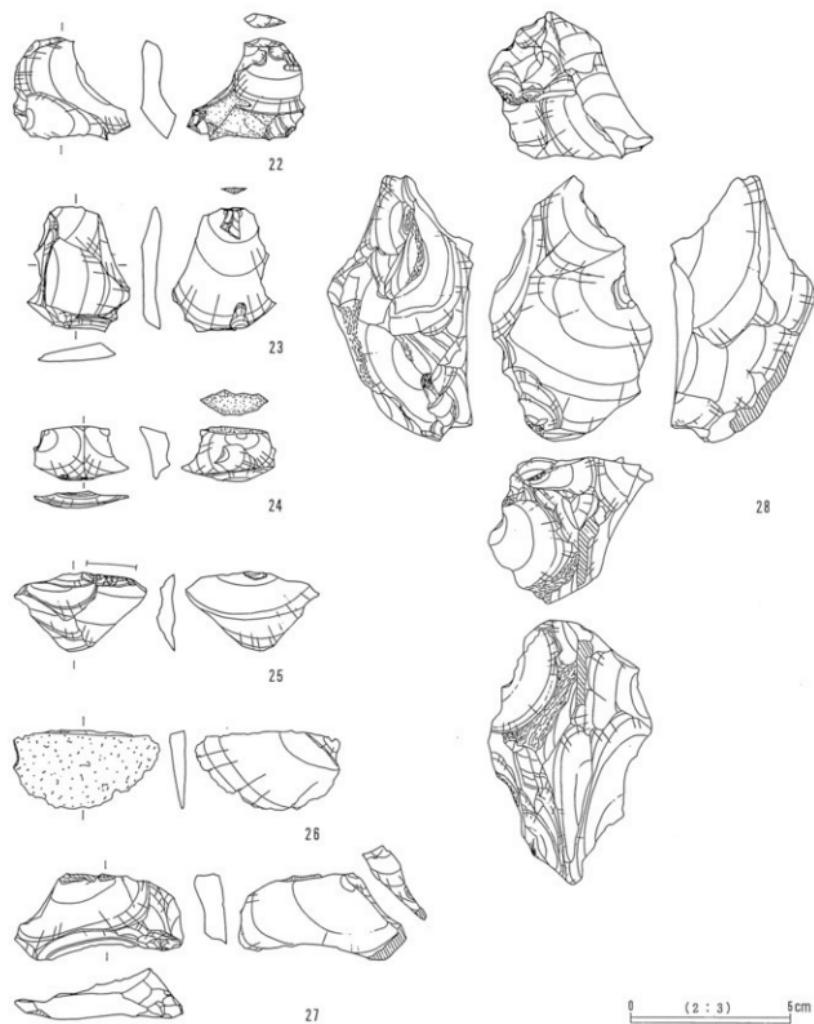


第245図 牛出古窯遺跡 ブロック1出土遺物(2)



第246図 牛出古窯遺跡 ブロック3・4・5出土遺物(1)

3はブロック5と同一母岩の可能性がある流紋岩を共有しており両者は同時期のブロックと判断できる。以上のことからブロック3・4・5は有機的関係を持つブロックと認定できる。ブロック1には磨製石斧の未製品と見られるものがあり、野尻湖遺跡群の調査成果によると本ブロックはAT層より下位の石器群



第247図 牛出古窯遺跡 ブロック3・4・5出土遺物(2)

と考えられ、ブロック4との関連が想定される。他のブロックについては時期を判断する石器がなく、積極的に同時期性を示すデータは認められないが、ブロック2にはブロック5の石核（第246図19）と類似するものが認められ、石材もブロック間で相互に関連を持ち、すべてのブロックがおよそ37mの円の中に納まっていることから、ブロック2・6についても同時期の所産と考えるのが妥当と思われる。以上のことから本遺跡出土のブロックは何らかの有機的関係を持つブロック群と評価したい。

第3節 繩文時代・弥生時代の遺物

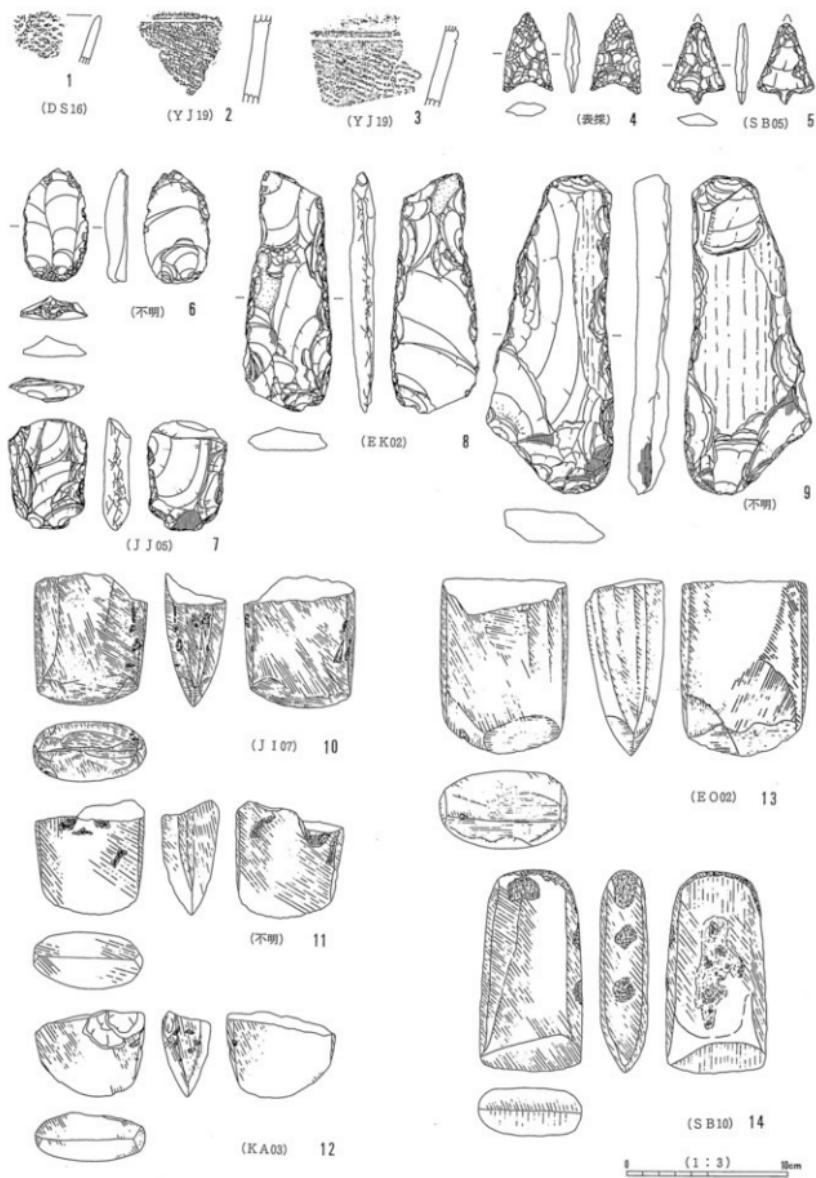
縩文時代から弥生時代の遺構は検出されず、土器片と石器が数点出土したのみである。

縩文時代の遺物（第248図）

土器では早期の楕円押型文と中期前葉の土器片が数点出土したのみである。中期の土器は調査区北隅に集中しており、調査区外に遺構が広がる可能性もある。石器では石鎌3点、打製石斧6点、スクレイバー1点、石核3点、剝片19点が出土している。

弥生時代の遺物（第248図）

弥生時代中期と思われる甕の破片数点と太形蛤刃石斧が出土した。甕は縦羽状の櫛描直線文の胴部破片で、弥生時代後期の終わりから古墳時代にかけての遺物の可能性もあり4節の第272図に示した。磨製石斧は5点出土しており、その内4点は下段段丘面より出土したものである。完形品はSB10覆土より出土した1点のみ（14）で、他は刃部のみの欠損品である。14は他の4点に比べ扁平であること、完形品であること、側面及び正面に敲打痕を有すること、住居内覆土出土ということ、以上のことから14の磨製石斧は、他の4点とは異なる経緯で本遺跡に残されたものであると推測される。すなわち、10～13は弥生時代中期の遺物であり、14は古墳時代前期には転用されて使われた可能性がある。



第248図 牛出古窯遺跡 繩文・弥生時代の遺物

第4節 古墳時代の遺構と遺物

1 概要

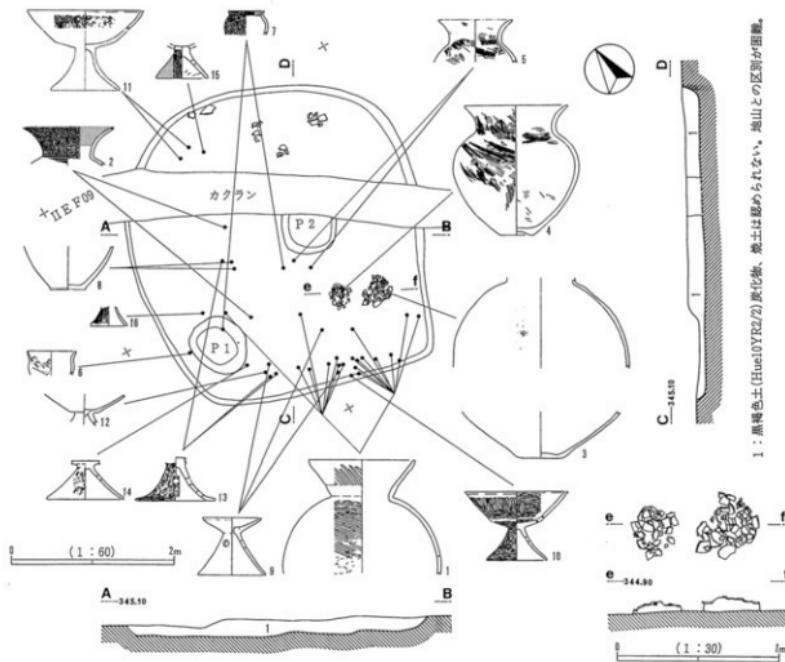
下段段丘面に古墳時代前期初頭の集落跡が検出され、当該期の竪穴住居址が5棟と竪穴状遺構の3基を調査した。後者は形状が竪穴住居址に類似するものの、規模が小さく炉跡、柱穴、貯蔵穴などの施設が検出されず竪穴状遺構として区別した。この他に、直径30cm前後のピットが18基発見されたが掘立柱建物址と認められるものはない。なお、S B 05（5号住居址）からは骨片、管玉、勾玉、ガラス小玉、砥石、ヤリガナなどが出土しており、住居址内の埋葬施設を想定させる遺物の出土状況が確認された。

古墳時代前期の遺構集中区より北西に100mの地点で、古墳時代中期と思われる土器器片が十数片出土しているが、遺構は検出されなかった。なお、図示した土器の観察記録は付章の遺物観察表に掲載した。

2 竪穴住居址・竪穴状遺構

S B 03（3号竪穴状遺構）（第249・250図）

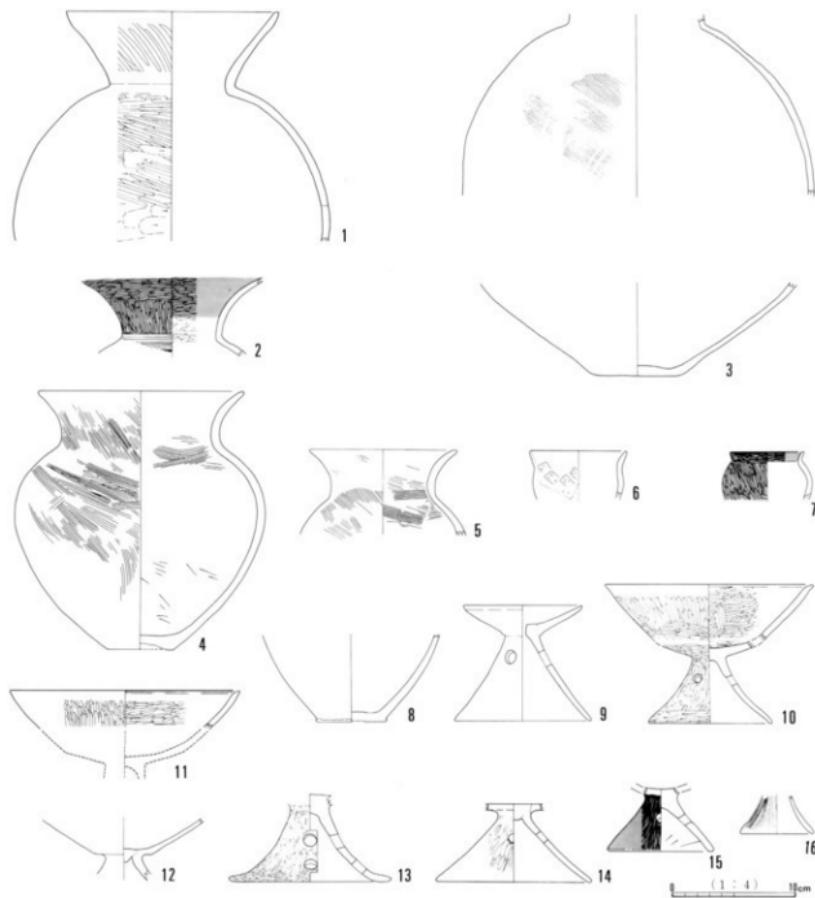
遺構の構造 3.54m×3.80mの隅丸方形を呈している。ただし、壁際の覆土と地山との区別が非常に困難



第249図 牛出古窯遺跡 S B 03

で、住居址の形態も不明確である。床面もはっきりとは確認できず掘り下げ過ぎたところもある。ピットが2ヶ所検出されたが、柱穴と思われるものはなく、炉跡も確認できない。床面からの深さはP 1が14cm、P 2が18cmで、覆土は住居址覆土と類似するが、本遺構に付属する施設であるとは断定できない。遺構中央部が配水管施設により搅乱されている。

遺物出土状況 第249図に出土地点を示した土器はすべて覆土下部から床面にかけて出土したものである。このうち床面出土の土器は、3・4・9・12・13・14である。3と4は床面に破片がまとまって出土したが、失われた破片があり完形にはならない。これらは住居内に廃棄され、その後押しつぶされたもの



第250図 牛出古窯遺跡 S-B03出土遺物

と思われる。このうち3は6号住居址の2と同一固体である可能性が高い。これらに対し、1は接合する破片が比較的広範囲に分布しており、破片となったものを住居内に廻棄したものと思われる。10はEF14グリッドおよび4号住居址出土の破片と接合している。検出面よりガラス玉が1点出土した。P1・2からは遺物は出土していない。

出土遺物 図示したものの他に、口縁部破片で、櫛描波状文・簾状文を有する甕（以下箱清水系の甕とする）1片、高环6片（この内赤色塗彩されたもの2片）、土師器壺・甕9片、鉢形土器1片、その他1片、ガラス小玉1点（第257図12）がある。なお、覆土中に奈良時代の須恵器片が3点混入している。

S B 0 4 （4号竪穴状遺構）（第251・252図）

遺構の構造 3.48m×3.28mの隅丸方形を呈し、検出面より10cm～14cmの深さである。床面は不明瞭で、硬織な部分は検出されない。小さなピットが3ヶ所確認されたが本遺構の施設であるかは不明である。柱穴や炉跡は検出されず覆土にも炭化物等は含まれず、土器以外には人の行為の痕跡が感じられない遺構である。

遺物出土状況 図示したもののうち、6以外は覆土下部から床面にかけて出土したものである。ただし、床面から出土したものと検出面から出土したものが接合している例もあり、出土レベルの差は余り有為なものではない。4・7・8の3点は床面に横倒しの状態で出土し、一部を欠損しているもののは完形に復元できるものである。なお7はピットの覆土上面に出土しており、出土レベルが当時の床面であったと推定すると、P1は本遺構の廻棄時には埋没していたものと思われる。

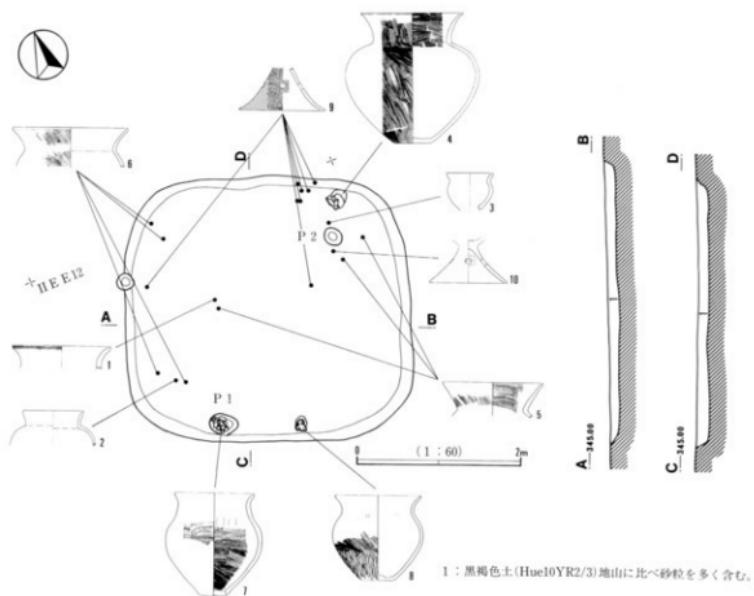
出土遺物 図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系甕1片、土師器壺・甕4片、高环11片（この内赤色塗彩された高环5片）、器台1片が出土している。なお、奈良時代の須恵器片が2片混入している。

S B 0 5 （5号竪穴住居址）（第253～257図）

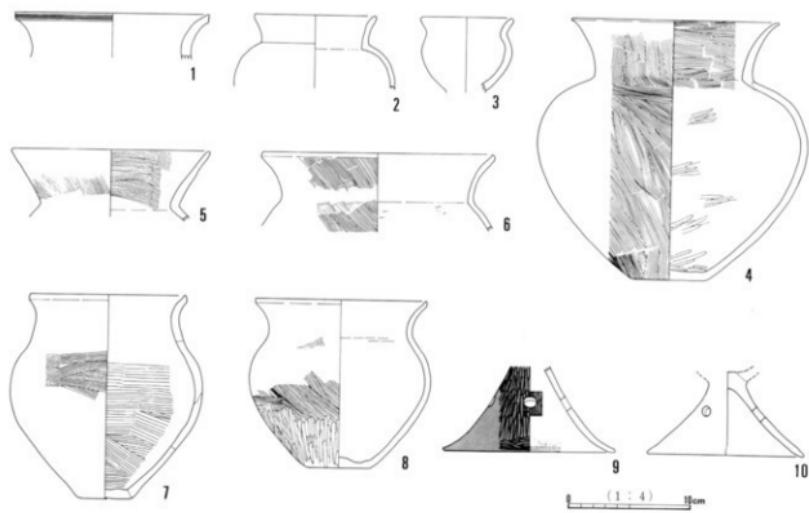
本遺構は拡張を行っており、新旧二段階の遺構が重なっている。拡張以前を5a号住居、拡張した新しいものを5b号住居として記述する。なお、土層断面でも切り合いは非常に確認しにくく、覆土掘り下げ中には5b号住居の床面を明確に捕らえることができず、5a号住居の床面まで一気に掘り下げており、遺物の出土状況と残されたセクションベルトの観察とから新旧関係を明らかにした。すなわち、後述するB群の遺物群が5a号住居の壁立ち上がりを覆っており、5a号住居の方が古いと判断した。また、遺物の出土状況から5b号住居が住居としての機能を失った後、埋葬施設になったと考えられる。

遺構の構造 5a号住居は内側のわずかに窪んだ部分で、およそ4.40m×4.00mの隅丸方形を呈し、検出面より37cmの深さである。P3・9・7・12が柱穴に相当すると思われ、深いもので床面から70cm、浅いものでも35cmである。P12の断面観察によると、深さ30cmのところで柱穴の直径が17cmに対し柱痕は10cmであった。床面に火床面が検出されたが、柱穴から想定される中心線からははずれた位置にある。この火床面は床面を掘り下げ過ぎたためにわずかに焼土と思われるものが認められたのみであるが、地床炉の底面であると思われる。南東壁の一部に周溝と思われる溝が検出された。

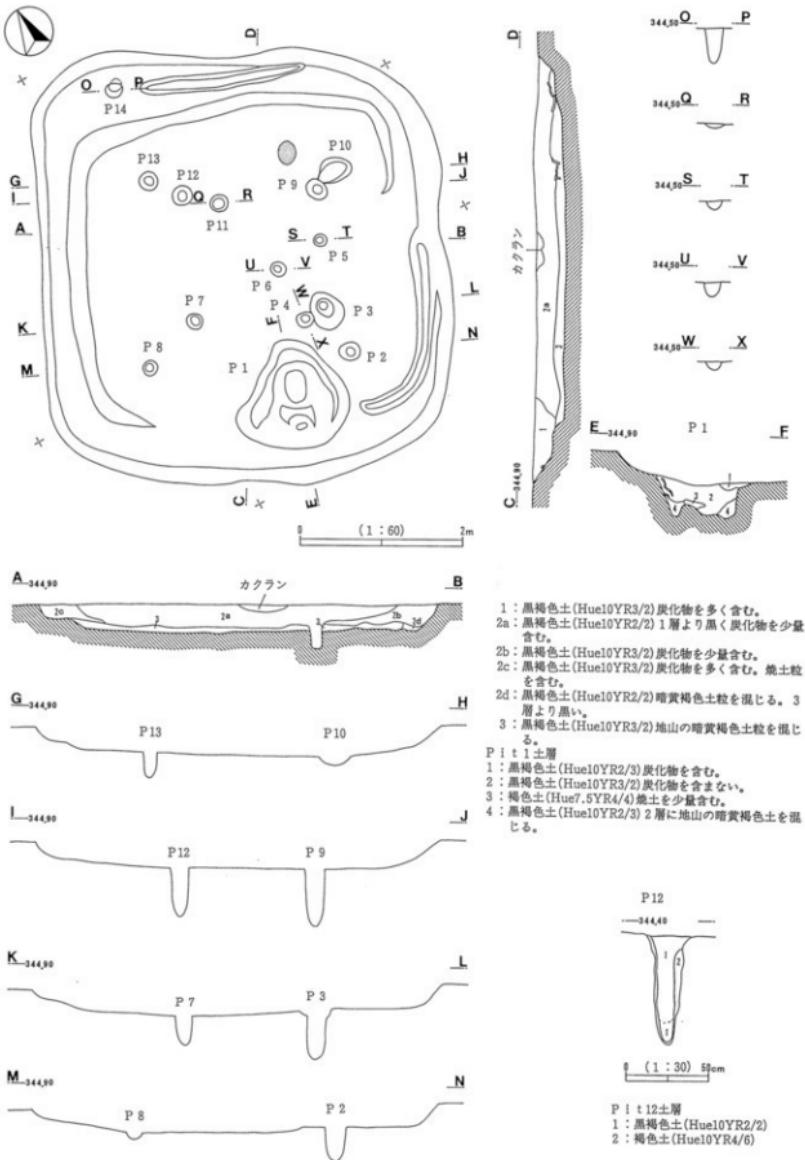
5b号住居は、5a号住居址よりも一段高い床面で、4.94m×5.28mの隅丸方形を呈し、検出面よりおよそ30cmの深さで床面となる。P2・8・10・13が柱穴に相当すると思われるが、P10は非常に浅く不定形であり、5a号住居の柱穴としたP9が5b号住居の柱穴として機能していた可能性もある。P1は上端では不整な形状をしているが、底面部分では隅丸の方形を呈しており、およそ100cm×60cm、深さ80cmの規模の貯蔵穴と思われる。5b号住居の床面を3層上面とすると、炉跡と思われる焼土は検出されていない。遺物の出土状況から考えて、5a号住居の床面を共用することはあり得ないので、先に述べた炉跡を



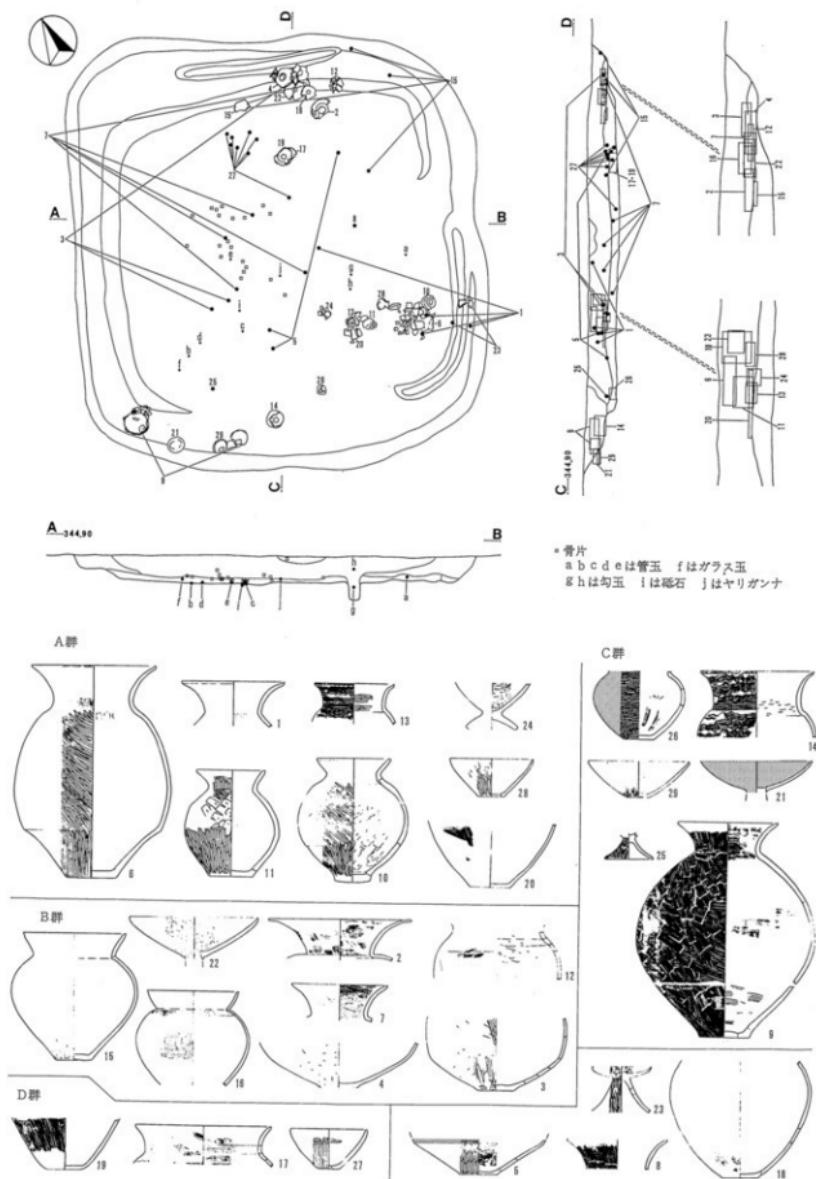
第251図 牛出古窯遺跡 S B04



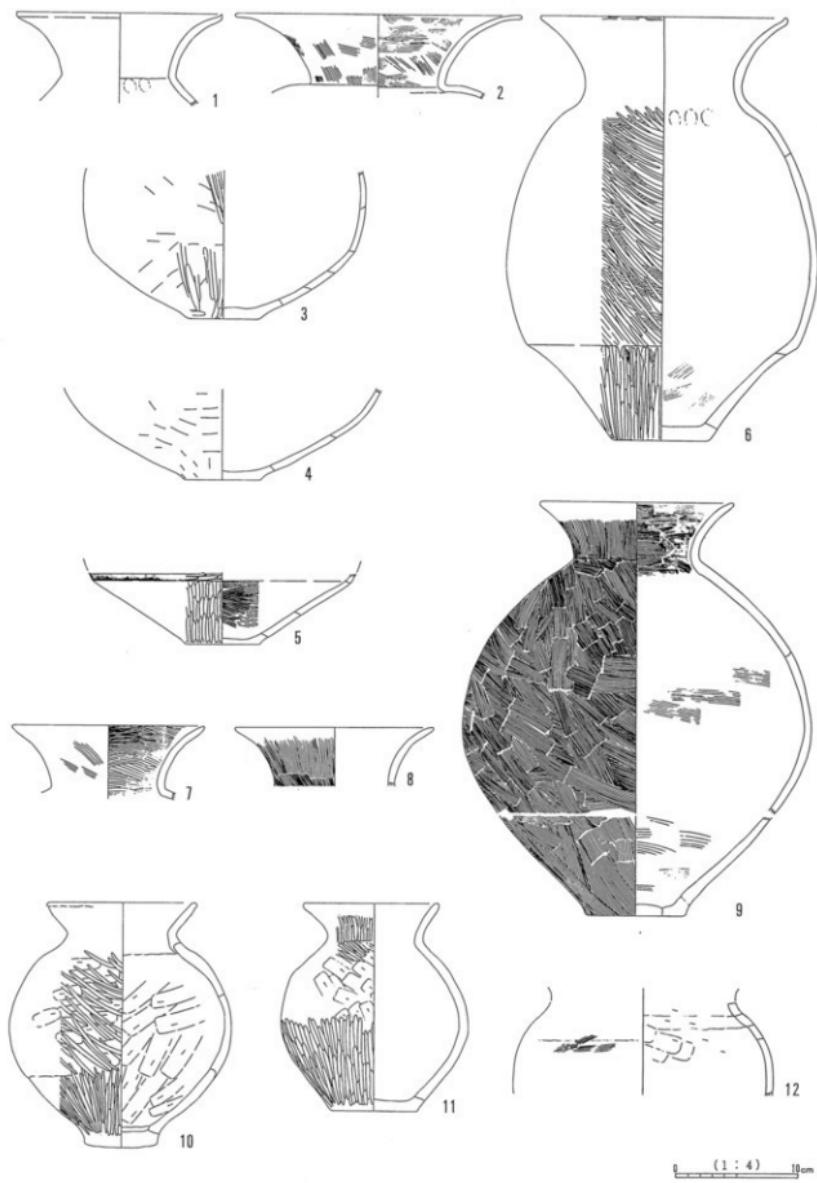
第252図 牛出古窯遺跡 S B04出土遺物



第253図 牛出古窯遺跡 S.B.05



第254図 牛出古窯遺跡 SB 05遺物出土状況

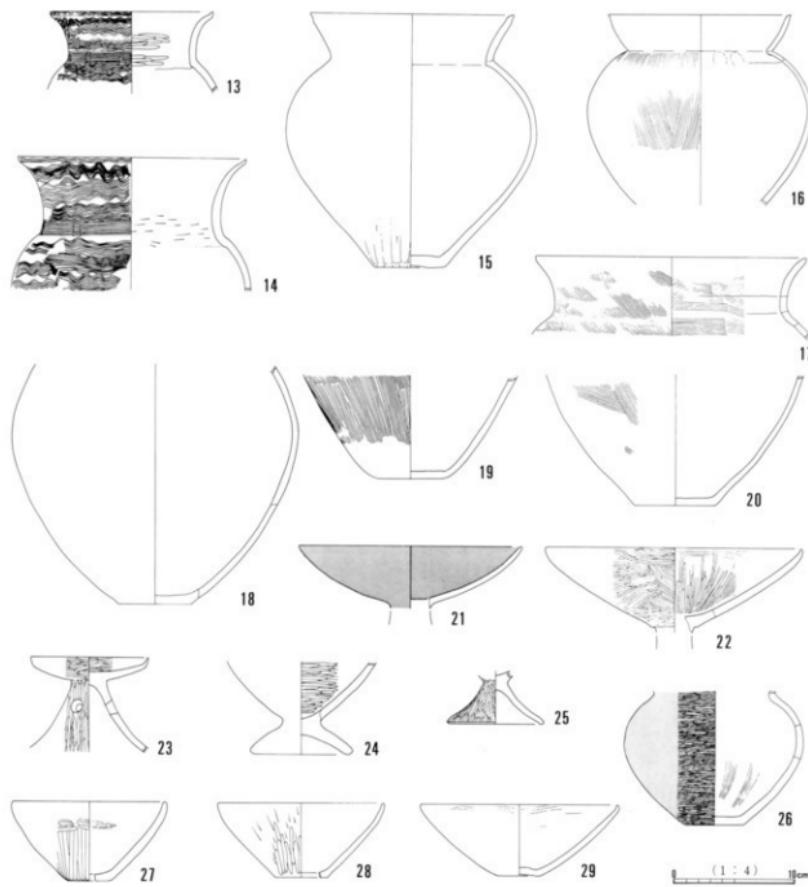


第255図 牛出古窯遺跡 SB 05出土遺物(1)

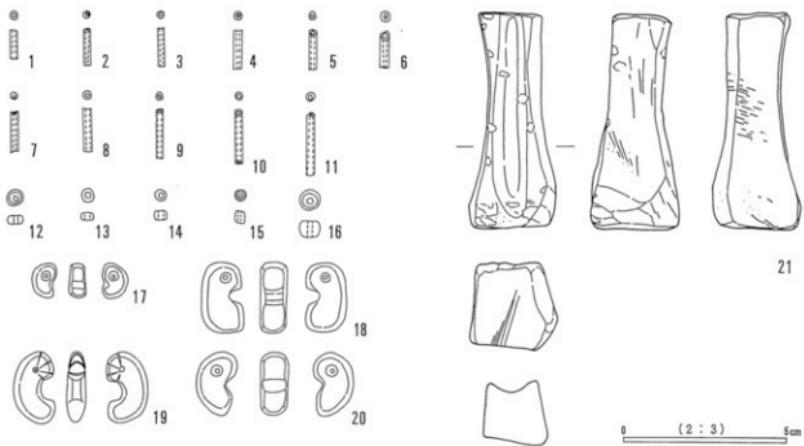
共用することは考えられない。北東壁際に浅い溝と住居内側に傾いたP14が検出されたが、本遺構の施設か否かは判断できない。この他に浅いピット（P 5・6・11）が検出されており、このうちP 5は5号住居の施設であることがセクションベルトの観察から確認されている。また、後述する玉類の出土状況から覆土内埋葬の可能性もあるためセクションベルトを観察したが、覆土内の掘り込みは確認できなかった。

覆土 1層、2a層、2b層は類似した層である。2c層は多量の焼土と炭化物が含まれた層で、北西壁際に帯状に広がっている。また3層には地山の暗黄褐色土粒が含まれておらず、埋め戻しによる堆積と判断される。

遺物出土状況（第254図） 完形、もしくは完形に近い形の土器が多く出土しているのが特徴的である。



第256図 牛出古窯遺跡 S B05出土遺物(2)



第257図 牛出古窯跡 S B 05他出土玉類など

第11表 牛出古窯跡 玉類観察表

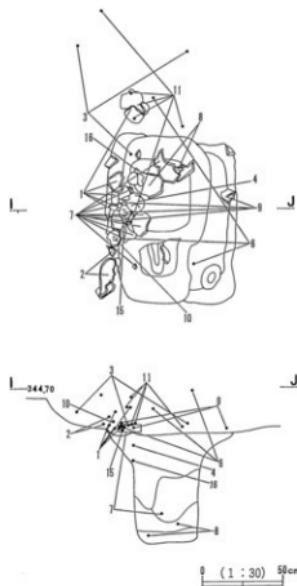
図版No.	整理No.	遺構名	器種名	石材	色調	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	備考
図-1	3011	SB 05	管	玉	滑石	9	3		完形 片面穿孔
# 2	3006	SB 05	管	玉	鉄石英	11	3		完形 片面穿孔
# 3	3003	SB 05	管	玉	滑石	12	2		完形 片面穿孔
# 4	3010	SB 05	管	玉	滑石	11	3		完形 片面穿孔(片面割れ)
# 5	3010	SB 05	管	玉	鉄石英	12	3		欠損 片面穿孔
# 6	3013	SB 05	管	玉	鉄石英	11	3		欠損 片面穿孔
# 7	3012	SB 05	管	玉	鉄石英	13	2		欠損 片面穿孔
# 8	3013	SB 05	管	玉	めのう	13	3		完形 片面穿孔
# 9	3007	SB 05	管	玉	鉄石英	15	3		欠損 片面穿孔
# 10	3004	SB 05	管	玉	滑石	16	3		完形 片面穿孔
# 11	3009	SB 05	管	玉	滑石	19	3		欠損 片面穿孔
# 12	3001	SB 03	ガラス玉	ガラス	スカイブルー	3	5		
# 13	3013	SB 05	ガラス玉	ガラス	スカイブルー	2	4		
# 14	3013	SB 05	ガラス玉	ガラス	スカイブルー	3	4		
# 15	3017	SB 10	ガラス玉	ガラス	スカイブルー	4	3		
# 16	3002	SB 05	ガラス玉	ガラス	スカイブルー	5	6		
# 17	3008	SB 05	勾	玉	ヒスイ	11	7	6	両面穿孔
# 18	3005	SB 05	勾	玉	ヒスイ	22	14	10	両面穿孔
# 19	3015	SB 05	勾	玉	不明	22	12	5	片面穿孔?
# 20	3016	SB 09	勾	玉	ヒスイ	20	14	10	両面穿孔
# 21	3014	SB 05	砥	玉	砂岩	67	27	27	47.3g

床面付近から骨片、管玉、勾玉、ガラス小玉、砾石、ヤリガンナ？が出土しており埋葬施設である可能性を指摘できる。なお骨片については、小破片であるため人骨とは断定できない。玉類は出土地点を示したもの以外にも覆土のウォーターセパレーションにより検出されており、合計で管玉11点、勾玉3点、ガラス小玉3点が出土している。S B 0 5以外の住居址の覆土もすべてウォーターセパレーションを行った結果、本住居址の玉類の出土数は特別に多い(第11表)。これらの玉類は副葬もしくは住居廃絶時に遭棄されたものと思われる。本構造は床面出土の遺物が多く、出土状態から大きく4群に分けて捕らえることができる。A群は1・6・10・11・13・20・24・28の8個体で、5b号住居の床面にまとまって出土したものである。6・10・11は完形品に復元され、出土状態から見て特に一括性が高い。6の出土レベルが他に比べ高いのは、直立状態で置かれていたものが、埋没過程で横転したため出土レベルが高くなつたと判断される。B群は2・3・4・7・12・15・16・22で、5b号住居北東壁際にまとまって出土した一群である。重なるように出土しており非常に一括性の高い一群である。なお、A群に含めた1は3と同一個体と思われる。C群は、9・14・21・25・26・29で、5b号住居の南西壁際に並んで出土した一群である。9は脣部以上の部分と底部が離れて出土したもので完形には復元できず、破損してから本住居に持ち込まれたものである。26はP 1の上面で出土したもので出土レベルがやや低く、P 1埋没後に廃棄されたものである。D群は、17・19・27で、5a号住居床面で出土し、17と19は重なつて出土している。なお8はP 5内、18はP 1内より出土している。

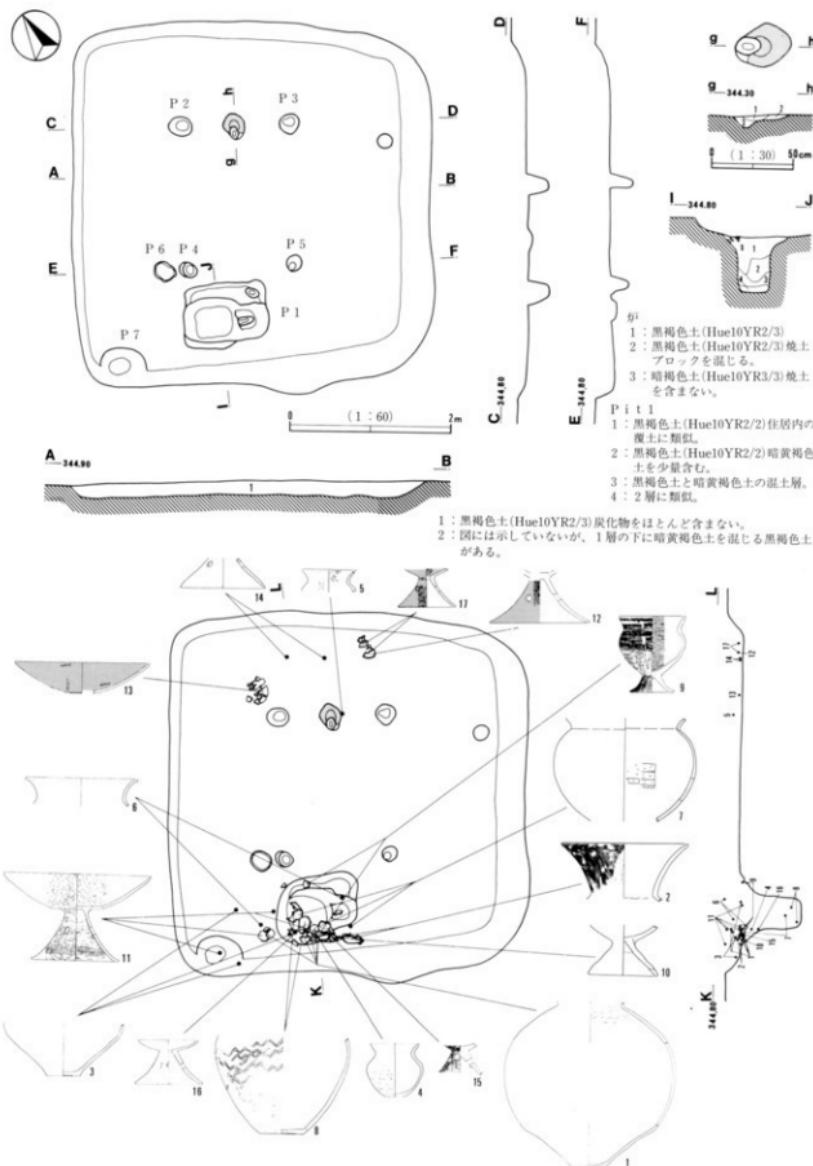
出土遺物 図示したものの他に口縁部破片で、箱清水系甕8片、その他壺甕10片、小形土器1片、高坏13片(その内赤色塗彩されたもの2片)が出土した。土器以外では管玉11、勾玉3、ガラス小玉3、砾石1、ヤリガンナ？1が出土した(第257図)。なお、覆土中に繩文式土器1点、弥生時代中期土器片1点、奈良時代の須恵器片4点が混入している。

S B 0 6 (6号竪穴住居址) (第258~260図)

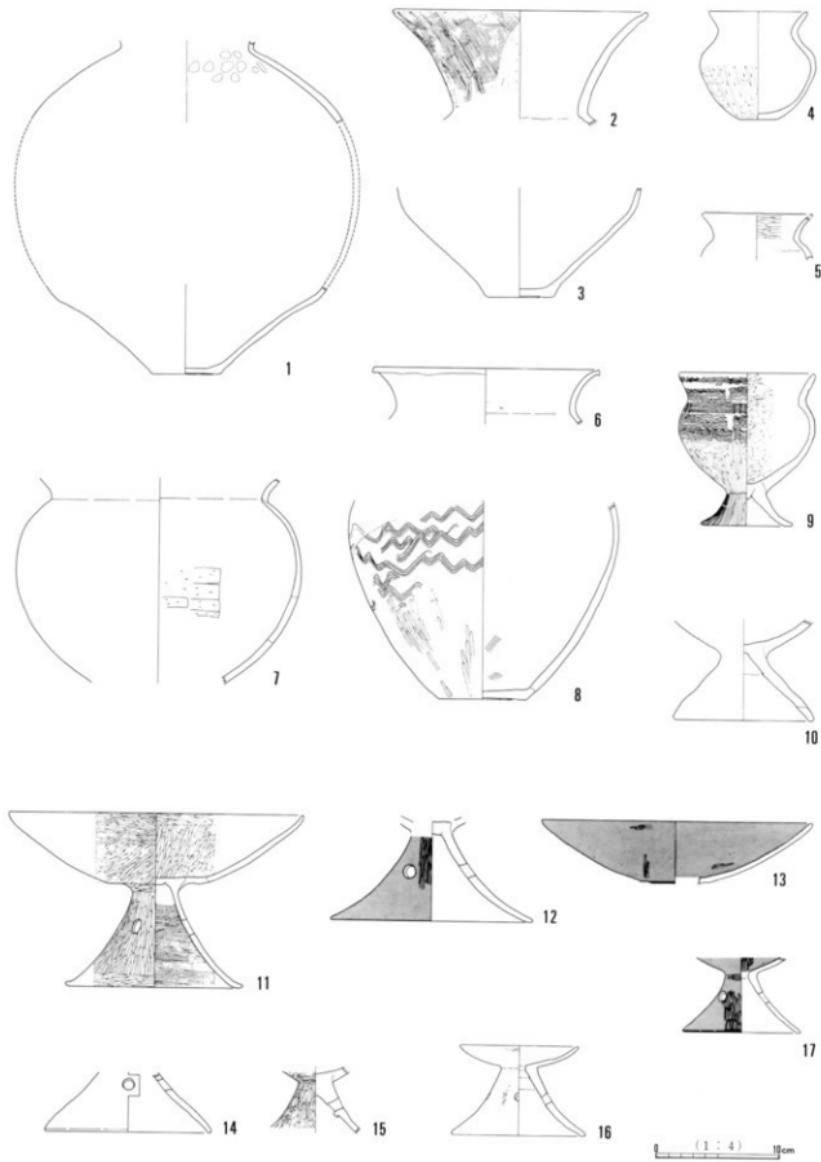
遺構の構造 4.38m×4.43mの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さはおよそ20cmである。柱穴はP 2・3・4・5で、直径18cm~24cm、深さ24cm~30cmである。P 1は3段構造になっており、1段目は1.0m×0.8mで浅い窪み状のもので、2段目は床面からの深さ約30cmのテラス状、3段目は深さ72cmで65cm×55cmの長方形の底面は平坦になる。炉跡は地床炉でP 2とP 3の中間に位置し、床面から7cm窪んだ皿状の火床面が確認された。火床面は一部がさらに深く掘られて落ち込んでいるが、その部分の覆土には焼土が含まれていない。P 7は深さ10cmほどの浅い皿状に窪むピットである。住居址の覆土は黒褐色土で分層できず単層である。



第258図 牛出古窯遺跡 S B 0 6 Pit 1 遺物出土状況



第259図 牛出古窯跡 S B06



第260圖 牛出古窯遺跡 S B06出土遺物

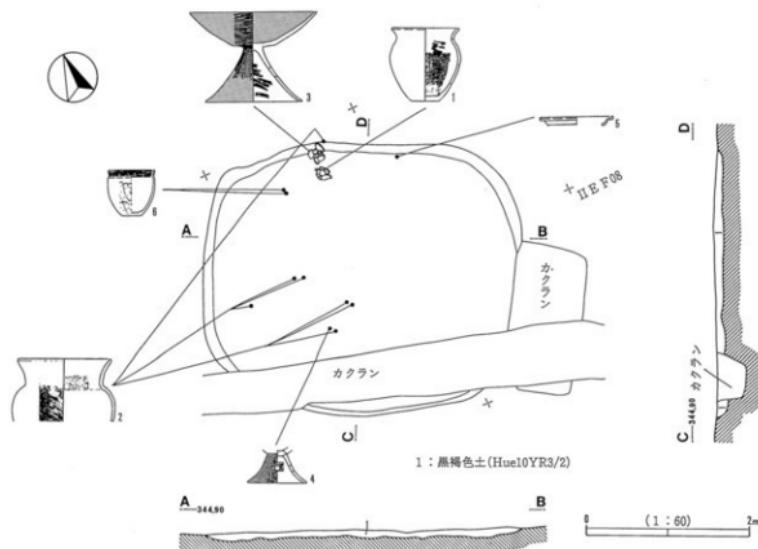
遺物出土状況 第258・259図に出土状況を示した。P 1の上面からやや落ち込んだところにまとまって遺物が出土している。図の1・2・3・4・6・7・9・10・11・15・16がそれに当たり、出土状況から一括性の非常に高い遺物群である。7はピットの底部付近から出土したものとピット上面出土のものが接合したもので、これらの遺物群がP 1埋没開始時にはすでに本住居内に存在していたと考えられる。すなわち、壁際に置かれていた土器群が、P 1が完全に埋没する直前に崩れ落ちた、と推定できる。以上の解釈が正しいとすると、P 1の下部から出土した8の甕もこれら一群の土器と一括遺物であると考えられる。この他に12・13・17も床面から出土したもので、本住居にともなう遺物である。

出土遺物 図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系の甕1片、箱清水系の壺3片、その他壺甕10片、広口短頸壺？1片、高坏12片が出土している。なお、奈良時代の須恵器片17点が混入している。

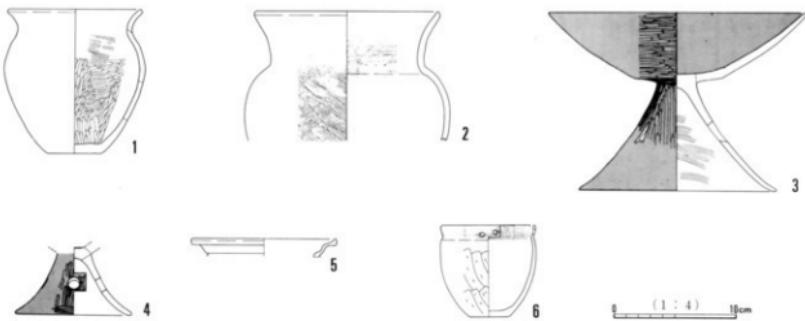
S B 07 (7号竪穴状遺構) (第261・262図)

遺構の構造 3.92m×3.34mの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さはおよそ5cm～10cmである。柱穴、炉跡、貯蔵穴などの施設はなく、床面は明瞭には確認できない。配水管埋設などにより一部破壊されている。覆土は黒褐色土の単層で、地山の土とは区別し難く、やや黒ずんだ範囲を遺構として掘り下げたもので立ち上がりも明確には確認できなかった。

遺物出土状況 1・3が床面から出土したものである。他は、覆土中より出土したものである。出土遺物は他の遺構に比べ少なく、図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系の甕1片、土師器甕2片、高坏4片（この内赤色塗彩のもの3片）が出土している。



第261図 牛出古窯遺跡 S B 07遺物出土状況



第262図 牛出古窯遺跡 S B07出土遺物

S B 0 8 (8号竪穴住居址) (第263・264図)

遺構の構造 3.90m × 推定3.70mの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さはおよそ4cm～8cmと浅い。床面は明確に捕らえることができず、柱穴は確認されない。炉は地床炉で、皿状に約5cm窪んだ火床面が確認されている。P 1は貯蔵穴と思われる。配水管理設により一部破壊されているが、60cm × 推定70cmの隅丸の長方形で床面から深さ45cm、底面は平坦である。

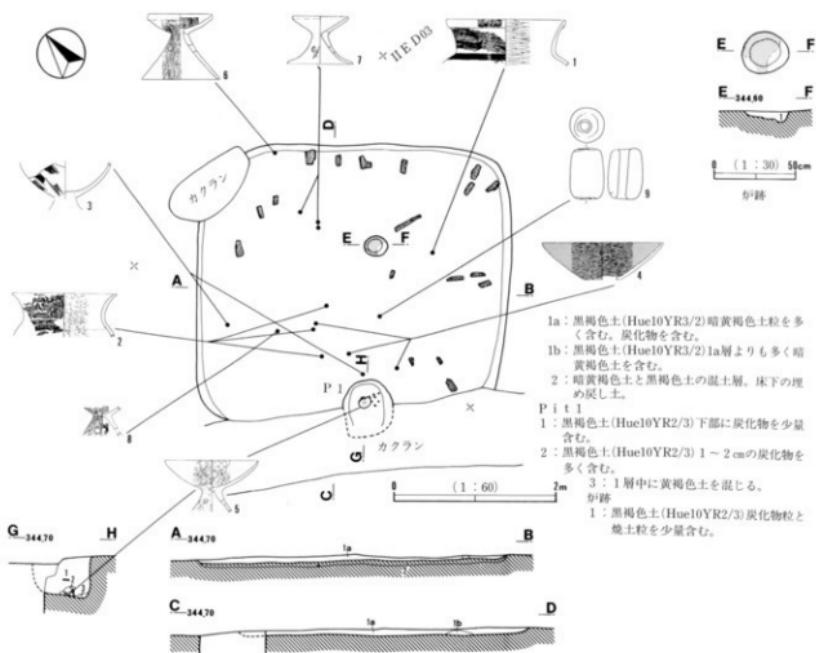
遺物出土状況 図示したものでは2・4・9が検出面より出土したもので他は床面直上出土である。5はP 1底面に置かれた状態で出土した高坏で脚部が欠損している。この高坏の上にのる2層中には直径1cm～2cmの炭化物が多量に含まれており、そのうち10片の樹種同定をしたところ、同定可能な8点すべてがブナ科コナラ属クヌギ節（クヌギなど）であった。また、住居床面付近には18点の炭化材が出土した。これらは長さ15cm～38cmの板材及び丸太材で、建築部材の一部であろう。同定の結果17点がブナ科コナラ属クヌギ節、1点がブナ科コナラ属コナラ節（コナラ・ミズナラ、カシワ、ナラガシワなど）である。なお、樹種同定は㈱バレオ・ラボの藤根久氏に依頼した。^(注1)

出土遺物 図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系甕1片、箱清水系壺1片、土師器甕1片、壺1片、高坏5片（この内赤色塗彩のもの2片）、内湾口縁鉢3片が出土している。土器以外では大形の土鍤が1点出土した。なお、奈良時代の須恵器片4点が混入している。

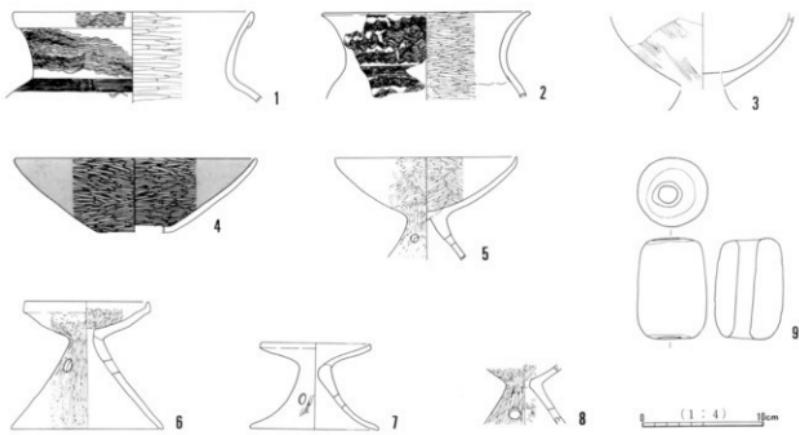
S B 0 9 (9号竪穴住居址) (第265～267図)

遺構の構造 4.98m × 4.80mの隅丸方形を呈しており、検出面からの深さは約20cmである。覆土と地山の土が類似しており立ち上がりが不明瞭で床面は他の住居址同様堅緻な部分は認められず、床面の検出が困難である。柱穴はP 2・3・4・5で直径約30cm、深さはP 2以外は25cm前後で、P 2のみ40cmとなる。P 2とP 3の間の焼土が炉の痕跡と思われるが、薄い焼土層が確認されたのみで他の地床炉で認められる窪みは確認されない。貯蔵穴と思われるP 1は48cm × 65cmの隅丸の長方形、深さ40cmで底面は平坦となり、完形の壺が置かれている。P 6は直径30cm深さ15cmで本遺構の施設であるか否か不明である。

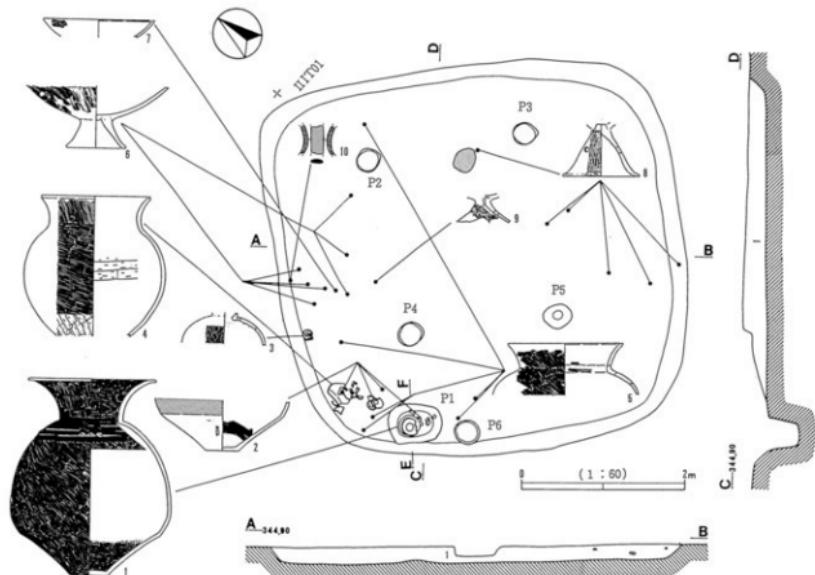
P 1の覆土中より炭化材の小片が出土しており、樹種同定の結果12点がブナ科コナラ属クヌギ節、1点がブナ科コナラ属コナラ節（コナラ・ミズナラ、カシワ、ナラガシワなど）である。このような状況はS B 0 8の貯蔵穴と思われるP 1にも見られる。すなわち、①底面付近にまとまって炭化材の小片が出土する。②出土する炭化材はほとんど全てがクヌギ節1種であり、まとめて出土した炭化材が同一固体で



第263図 牛出古窯遺跡 S B08遺物出土状況



第264図 牛出古窯遺跡 S B08出土遺物



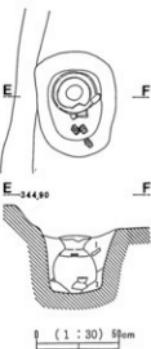
1: 黒褐色土(Hue7.5YR3/2)炭化物粒を少量含む。

第265図 牛出古窯遺跡 S B 09遺物出土状況

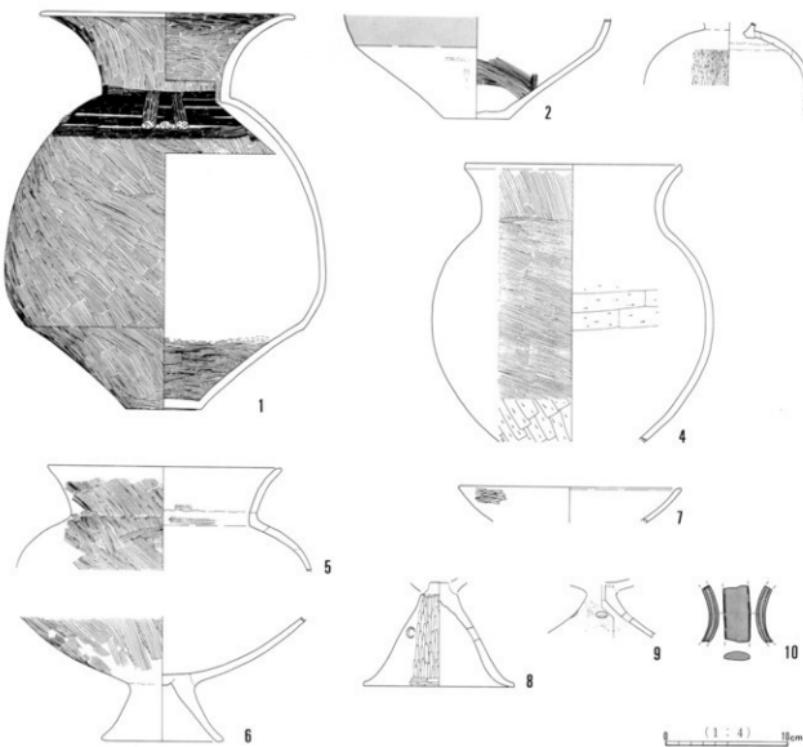
ある可能性がある。以上の2点から、S B 08とS B 09の住居廃絶後の貯蔵穴に材が落ち込んだと推定され、その材は貯蔵穴の上に乗せられていた可能性がある。ただし、炭化材が小片であるため材が板材であったのか丸太材、角材であったのかは判別できない。更に、S B 05、S B 06、S B 10の貯蔵穴では、いわゆる二重ピットのように浅い窪みがめぐらされている痕跡が認められた。これは蓋を落とし込むためのものと考えられ、他の住居址に於ても、住居使用時には貯蔵穴に何らかの蓋が被せてあった可能性が強いと推定される。なお、上記の樹種同定は拂バレオ・ラボの藤根久氏に依頼した。^(註2)

遺物出土状況 1はP 1内より完形で出土した壺で住居使用時にピット内に置かれていたものと思われる。甕内には土のみが詰っており、他には何も検出されなかった。図示したものの中で2・3・4は床面出土の遺物で、2は床面から出土したものとP 1内の甕に接して出土したものが接合している。また、他の図示した遺物はすべて覆土の下部より出土したものである。

出土遺物 1・2は箱清水系の甕形土器で、2は赤色塗彩されているが、1は全面ハケ調整により赤色塗彩は見られない。3は表面が丁寧にみがかれ、内面には輪積痕が明瞭に残る。4・5・6は變形土器、

1: 黒褐色土(Hue10YR2/2)炭化材と焼土を含む。
2: 喻褐色土(Hue10YR3/3)地山帶黄褐色土を混じる。

第266図 牛出古窯遺跡 S B 09Pit 1



第267図 牛出古窯跡 S B09出土遺物

7～9は高坏で、7は口縁端部に面取りをした東海系の高坏と思われる。10は両端を欠損し、全面に赤色塗彩された何かの把手の一部かと思われる。図示したものの他に、口縁部破片で箱清水系の壺形土器5片、土師器の甕形土器7片、高坏13片（その内赤色塗彩されたもの2片）が出土している。覆土のウォーターセパレーションにより勾玉（第257図20）が1点見つかったが、作業時の手違いでこの勾玉がS B 0 5の遺物である疑いがある。なお、縄文式土器1片、奈良時代の須恵器片2点が混入している。

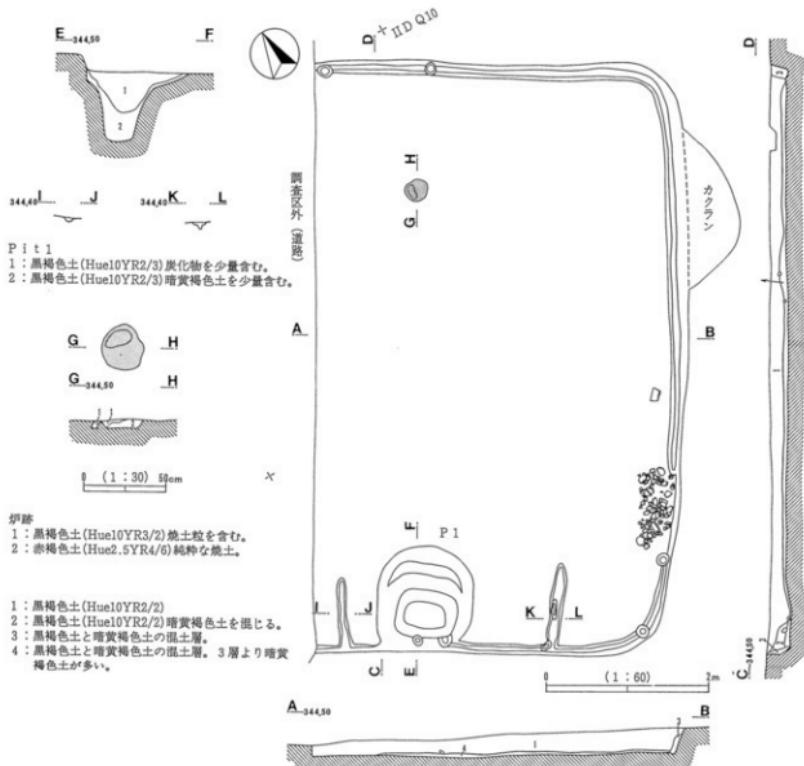
S B 1 0 (10号竪穴住居址) (第268～270図)

遺構の構造 本遺跡で最大の竪穴住居址であるが、西側が道路下になっており調査できなかった。推定される規模は、炉と貯蔵穴を中心軸とした左右対称構造を想定すると $7.28\text{m} \times 6.60\text{m}$ 、二本の間仕切りと壁との距離が等間隔とすると更にスリムとなり、 $7.28\text{m} \times 5.64\text{m}$ の隅丸の長方形となる。床面までの深さはおよそ20cmである。柱穴は床面を斜めに検出したが確認されず、本住居には主柱穴がないことを確認した。壁際には周溝がめぐっているが、南東壁で1mに亘って周溝がとぎれ、南西壁ではP 1の両わきに周溝に直行した間仕切りと思われる溝がのびる。また周溝中に直径約15cm、床面からの深さ15cm～20cmのピットが4カ所確認された。炉は地床炉で $26\text{cm} \times 28\text{cm}$ の範囲の僅かに窪んだ不整椭円形の火床面が検出された。

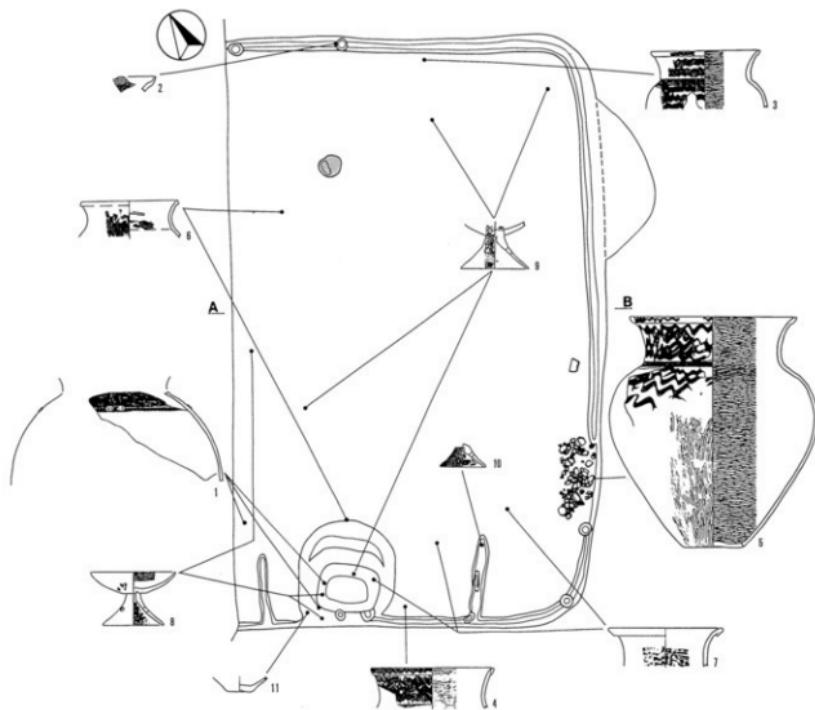
P 1は120cm×120cmの隅丸方形の浅い窪みの中に60cm×76cmの隅丸方形の深い穴がある二段構造の貯蔵穴とされるものである。底面は平坦で、床面からの深さは86cmと他の住居の貯蔵穴に比べかなり深い。またP 1の壁際の周溝の延長線上に2つの小ピットが見つかった。

遺物出土状況 図示したもののうち1・8以外は床面出土である。5は周溝の途切れる南東壁際に出土したもので、ばらばらに割れた破片が床面にへばりつくように出土した。すなわち土圧により割れたではなく、破片に割れた後に床面に廃棄されたと推定される。1・4・7・8はP 1覆土出土の破片と接合した。

出土遺物 図示した土器の他に、口縁部破片で箱清水系壺形土器3片、箱清水系壺形土器1片、土師器壺形土器・壺形土器17片、高坏17(内赤色塗装のあるもの4)片が出土している。覆土のウォーターセパレーションによりガラス玉(第257図15)が1点出土した。この他に覆土上層から奈良時代須恵器片16点、弥生時代磨製石斧1点が混入している。磨製石斧については、古墳時代に転用品として用いられた可能性もある。



第268図 牛出古窯遺跡 S B10



第269図 牛出古窯遺跡 S B 10遺物出土状況

3 その他の遺構

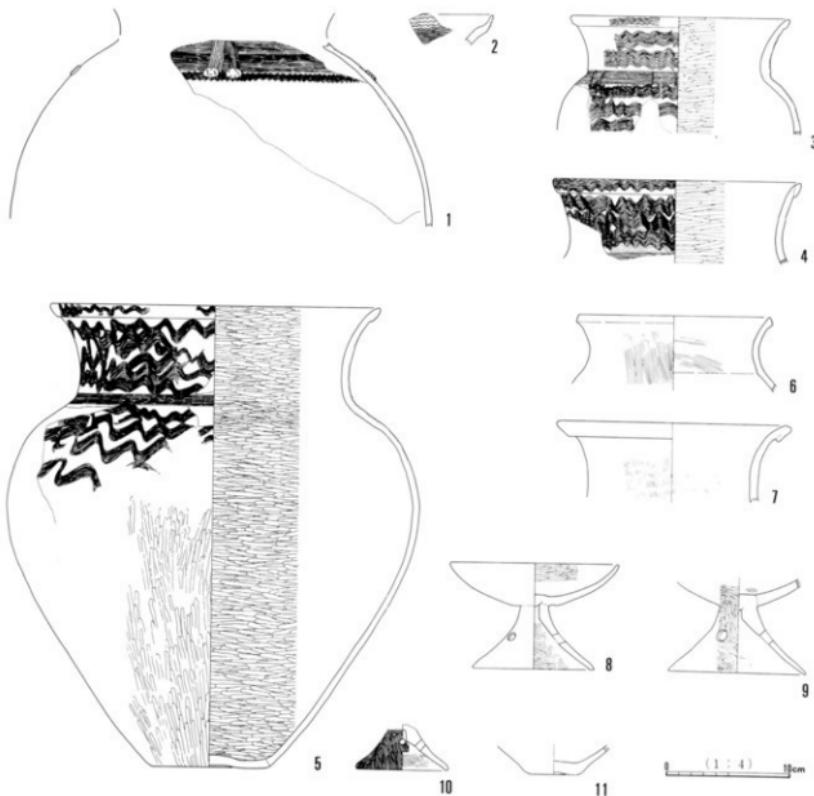
ピット群（第271図）

18基の小ピットが確認されたが、ピットの配列から掘立柱建物址ではないようである。ピット群はS B 0 8の北東側とS B 1 0の北東側との2ヶ所に集中して見られる。直径20cm~30cm前後のもので遺物は出土していない。覆土が類似することから住居址などと同時期の遺構と判断した。ピットの配置のみを第271図に示した。

4 遺構外の出土遺物とその出土状況（第271・272図）

第271図は遺構の配置と遺構外の遺物の出土状況を示したものである。ドット1つは土器片1片を示す。道路側のS B 0 8、S B 1 0付近に遺物が見られないのは、包含層が削られてしまったためである。これは表土を剥いだ状態でS B 0 8の床面がほとんど露出する状態であったことから確かめられる。それ以外の部分では、多少なりとも包含層及び包含層と同時期の堆積層は残っている。

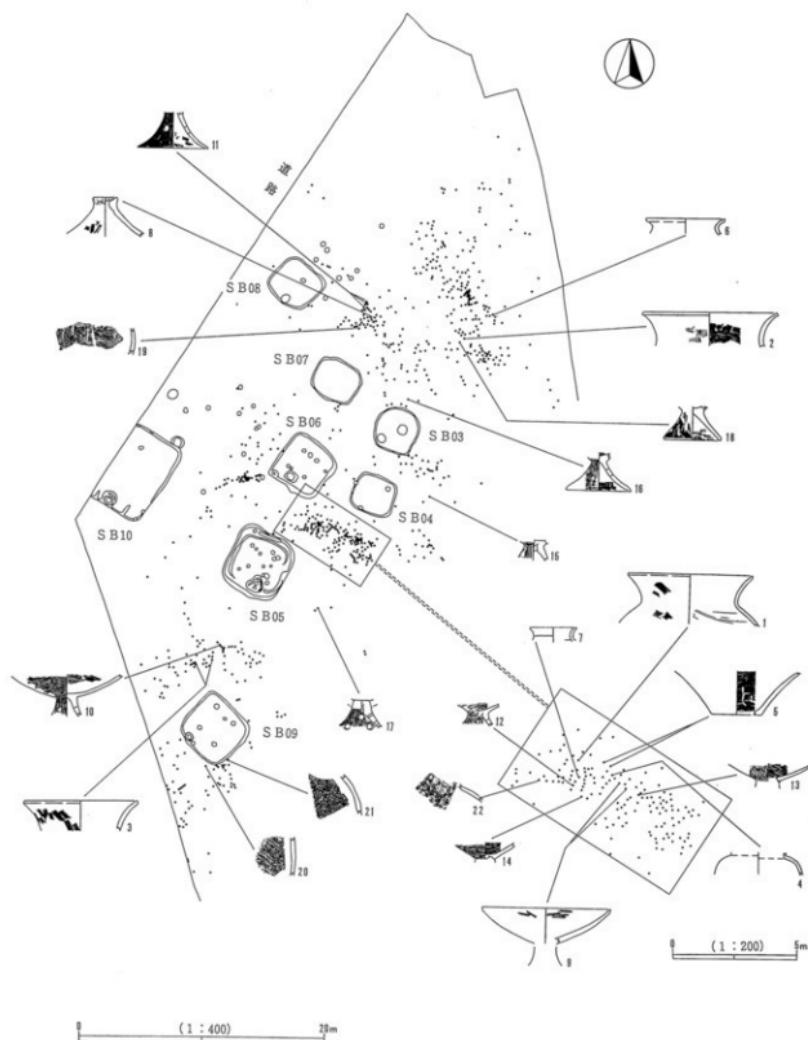
S B 0 5の北東側の遺物集中箇所は、比較的大きい破片が同一レベルでまとまって出土しており、集落内において何らかの意味を持った空間であったことを想定させる。この他にS B 0 8の東側にも土器片の



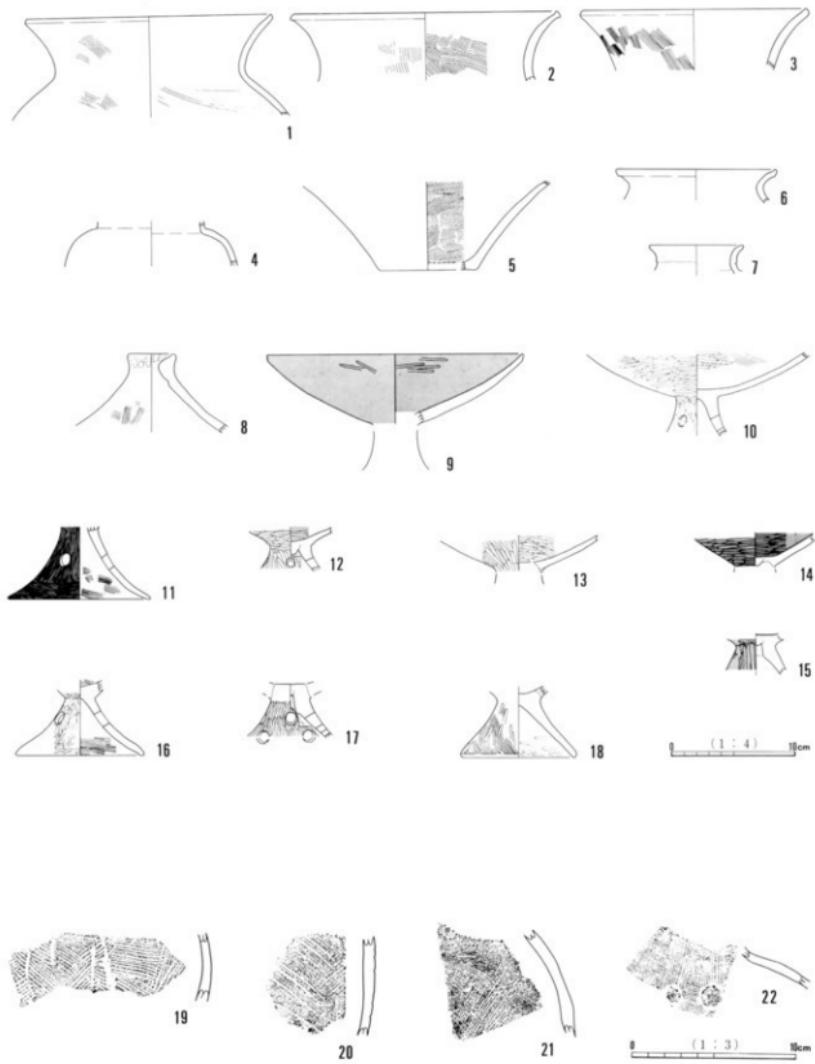
第270図 牛出古窯遺跡 SB 10出土遺物

集中が認められる。遺物出土状況と遺構との関係を見ると、住居址の周辺に土器片が残されていることが観察される。住居内覆土から多くの土器が出土していることも考慮すると、土器は住居周辺を含む意味での居住空間内に廃棄されたと考えられる。調査区東壁側には住居址がなく、遺物の量が希薄になっていることから、SB 03、SB 08より北東側には居住城が広がらないものと想定される。また、SB 09の南西側は、遺物が調査区の境界まで出土していることから、調査区外に居住空間が広がる可能性がある。更につけ加えるならば、本調査区から道路をはさんだ北西側も調査したところ、遺構は検出されていない。ただし、道路の北西側は表土を剥いだところ検出面は一段下がっており、遺構が千曲川の氾濫により削られた可能性がある。

なお、第272図19・20・21の縦羽状の柳描直線文の變形土器は、当該期のものではなく弥生時代中期の變形土器である可能性もある。弥生時代中期の遺物は、太形蛤刃磨製石斧が出土しているのみで、他に弥生時代中期の土器は見られない。



第271図 牛出古墳遺跡 古墳時代遺構外出土遺物の分布



第272圖 牛出古窯遺跡 遺構外出土遺物

第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1 概要 (第273図)

奈良・平安時代に属する遺構は、上段段丘面から段丘崖にかけて、須恵器の窯跡1基、灰原3、竪穴住居址6棟、掘立柱建物址2棟、竪穴状遺構2基、墓坑1基、焼土坑3基、性格不明の溝、土坑他が検出された。主な遺構の出土遺物については第12表にその概要をまとめた。

2 窯跡関係の遺構

SY01 (1号窯) (第274~276図)

段丘斜面の上半部に位置し、主軸方向はS-45°-Eで斜面に直行する。調査区の東端に検出された。
土層 1層は表土、2層群(2a~2e層)は天井崩落後の堆積層、3層群(3a·3b層)は崩落した天井部の窯体を主体とした層、4層群(4a~4d層)は燃焼部から前庭部に堆積する炭化物を多量に含む層、5層群(5a·5b層)は窯壁と窯底、6層群(6a~6c層)は窯底と窯壁構築以前に埋められた層、7層は床下のピットの覆土である。窯底部部分の地山は砂層であり、土を貼って窯底を作っている。なお、4a層と4c層が分層してあるが、漸移的な変化である。

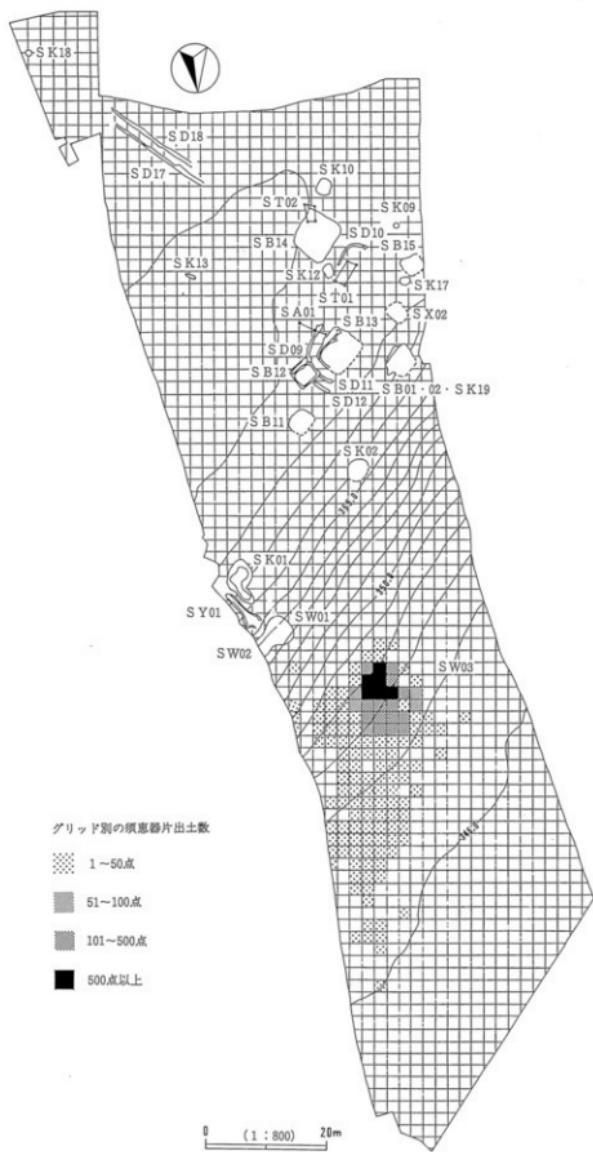
遺構の構造 半地下式無階無段の登り窯、煙道、窯尻は残っていない。前庭部を含めた全長7.40m、最大幅95cm、床面傾斜27°である。燃焼部から焼成部の全長は4.84m。窯壁は一部ずれ落ちているが、そのほかは比較的良好な状態で残っている。崩れ落ちた窯体片から窯の修復回数を観察すると、焼成面が2面認められるものがあることから、本窯は最低2回の焼成が行われている。いくつかの窯体片には直径1.5cm~4.5cmの管状の空洞が見られ、天井部を支える骨組材の痕跡と思われる。セクションG-Hの窯壁の裏側に直径3.5cmの棒状の炭化物が検出されている。これも天井部を支える

第12表 牛出古窯遺跡 遺構別口縁部(低部)破片数

遺構名	須恵器					土師器				黒色土器	備考
	杯A	杯B	蓋	壺	大甕	杯	碗	長甕甕	その他甕		
SB01	0 1	2 1	1	0	1 1	0	0	0	3	0	0
SB02	26 11	15 6	42 7	24 2	6 2	0	0	0	1	3	0
SB11	8 5	3 3	16 3	0	0	0	0	0	0	0	0
SB12	10 5	8 3	10 2	17 3	2 1	0	0	0	1 1	4 1	0 高台付き高杯1 高杯2
SB13	23 9	16 6	115 23	37 5	12 3	2 1	0	0	4 1	13 1	0 高台付き高杯1
SB14	8 5	2 1	18 2	0 1	3 1	3 1	0	3	0	0	0 羽蓋1
SB15	11 4	5 2	18 4	3 1	2 1	0	0	0	1	1	0
SK10	1 0	0	1 0	0	0	0	1	0	8 1	4 1	0
SK12	3 1	2 1	5 1	0	0	0	1	0	1	0	0
SK13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
SY01	118 41	22 6	88 5	6 1	11 1	アーテ アーテ					0
SW01	96 6	22 4	86 6	アーテ 6	アーテ 6	アーテ 6					0
SW03	672 142	448 76	775 49	アーテ アーテ	アーテ アーテ	アーテ アーテ					0 杯蓋つまみ65

上段の数値は遺構内出土の口縁部破片数、ただし杯A·Bは底部破片数。

下段の数値は残存率を累積加算した数値。小数点第一位を切り上げ。



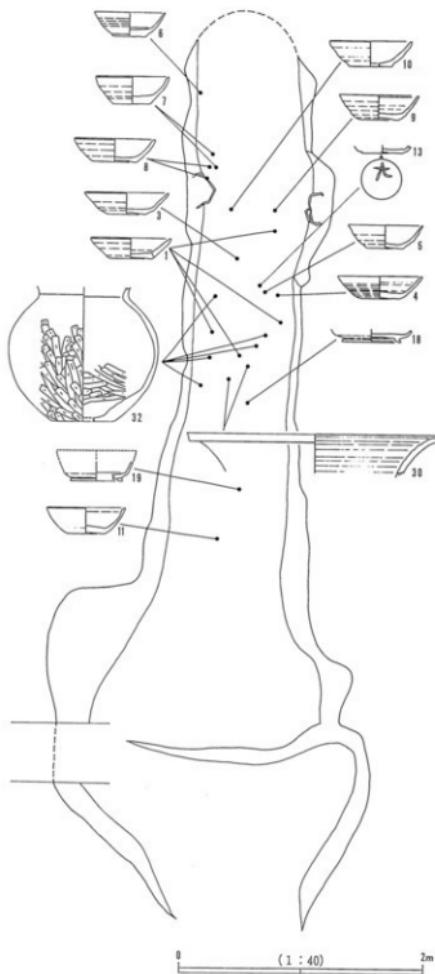
第273図 牛出古窯遺跡 奈良・平安時代遺構配置図

骨組材と思われる。焼成部と燃焼部の境界部分には不整形なピットがある。舟底状ピットに類するものであると思われるが、ピット上面を焼けた窯底が覆っていたか否かは調査時の不注意で確認できなかった。焼成部上端の窯底下的掘り込みは底面が焼けており、覆土(6cm)に焼土ブロックを含む。窯体を築いている土は、壁面及び天井部ではスサを含む粘土で、窯底はスサを含まない砂質の土である。

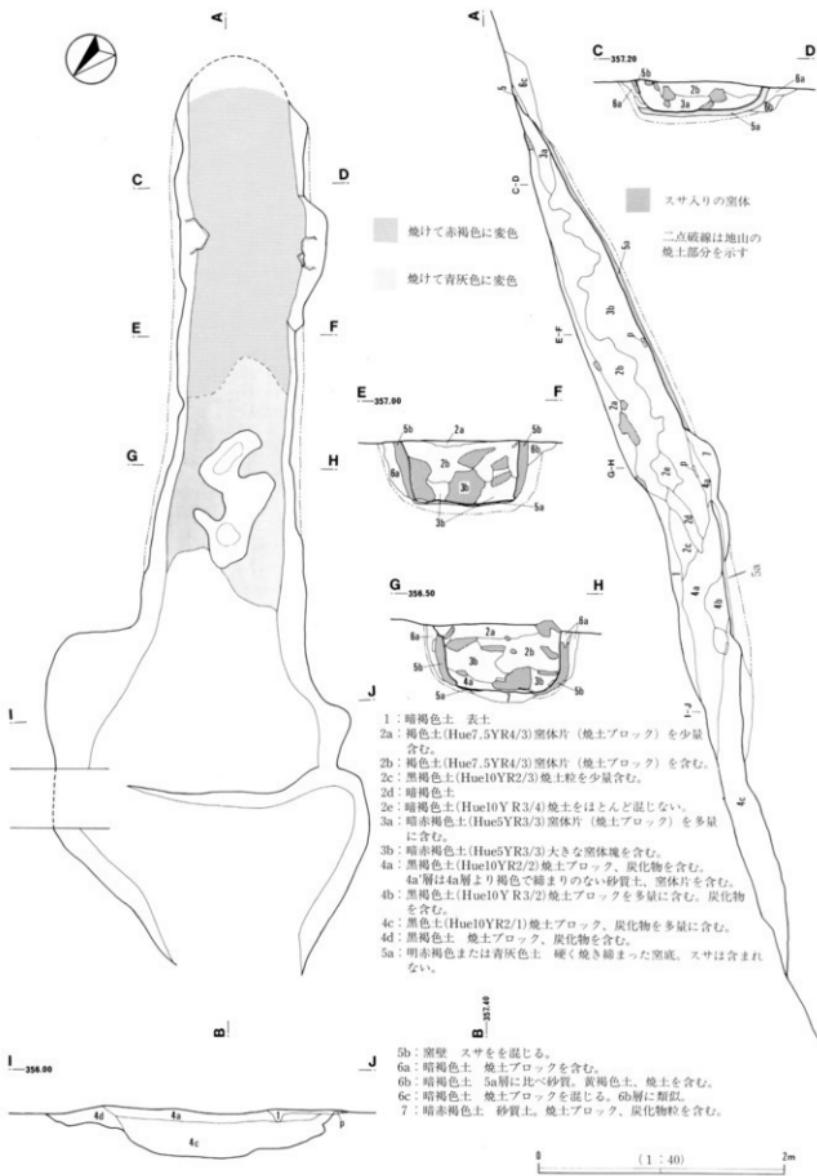
灰原 燃焼部から前庭部にかけて炭化物を多く含む黒褐色土が広がる。更にその斜面直下にはSW01・02が広がり、SY01内灰原の続きと思われる。更にSY01で焼かれた須恵器を捨てたと思われる灰原(SW03)が認められる。

遺物出土状況 遺物は、3層下部から床面にかけてと4層群中より出土している。焼成部床面には小破片も含めて200点余りが出土した。第274図には実測した遺物のうち焼成部床面より出土した物の出土位置を示した。また、スサ入り粘土と須恵器片が付着した物が35点出土した。これらは焼台と思われるが、一括して取り上げたため出土地点は不明である。燃焼部から前庭部の灰原にかけて多くの須恵器が出土している。

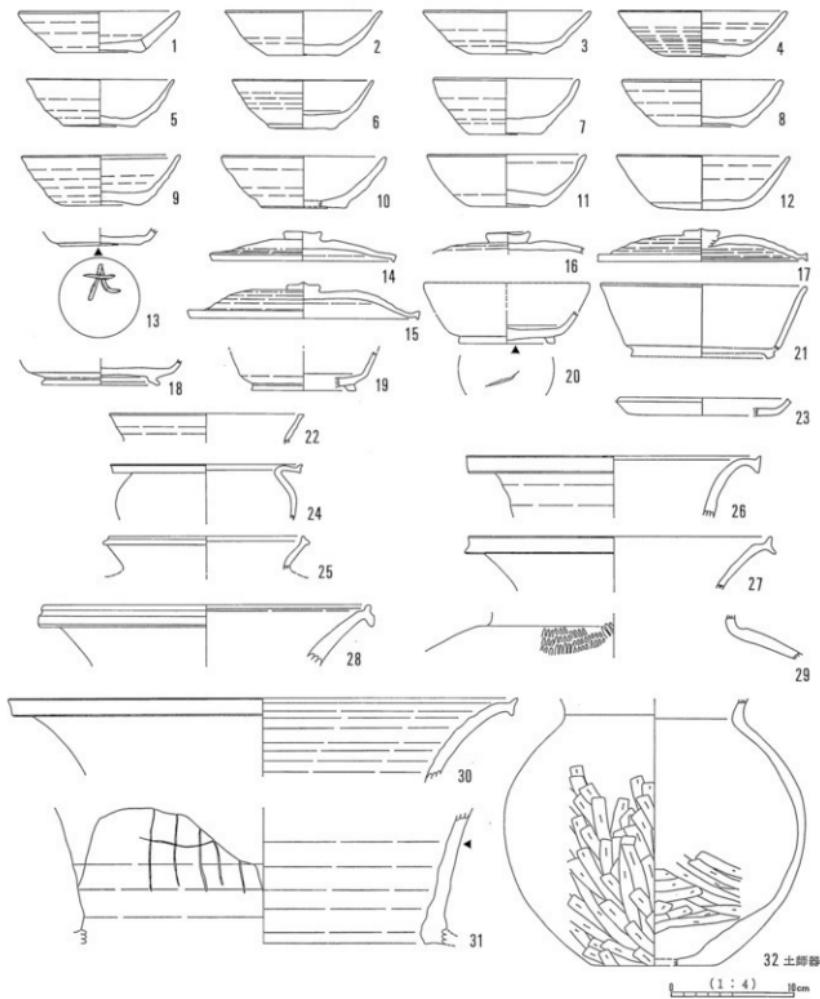
出土遺物(第276図) 須恵器杯A(1~13)、蓋B(14~17)、杯B(18~21)、皿C(23)、短頸壺C(22・24・25)、甕A(26~31)、球胴甕(32)が出土している。杯Aは全点糸切り未調整である。杯Aの6・7・10は底部は回転糸切りの際、円柱部分に近い下方を切ったため底部が分厚い。底径は6cm前後である。杯Aの法量は3種類みられ口徑から、1類(6・7)、3類(1~5、8・9)、4類(10~12)に分類される。13の杯底部外面には刻書「大」がある。文字は枝状工具の小口を用いたと思われる。筆順は「人」の後に横の「一」が描かれている。杯Bは回転糸切り後外周ヘラ削りされるものが多く、20のみ回転ヘラ切り後ナデ調整さ



第274図 牛出古窯遺跡 S.Y.01遺物出土分布図



第275図 牛出古窯遺跡 S Y01



第276図 牛出古窯跡 S Y01出土遺物

れている。破片が多く杯Bの法量は、明瞭なものがないが大小2種類と思われる。19・20は小さめのもの、18・21は大きめのものである。高台が底部の内側に巡る高台径の小さいものが多い。18の高台は丸みを持ち、外側にはみ出す踏ん張り型である。杯Bと同様に、蓋Bも法量に2種みられる。14は口径の小さいもの、15・17は口径の大きいもの。蓋の口縁部と天井部の屈曲部がはっきりとしており、15・17のように屈

曲部から天井部にかけて沈み込むものもみられる。23は皿Cの破片と思われる。破片であるため、形態がはっきりとしないが、口縁部が斜めに面取りされていて底部は平らであると思われる。皿ではない可能性もあり、類似例を待ちたい。24は短頸壺Cで、焼き歪の口頸部をもつ。口縁部が上方に向く形態と思われる。25は短頸壺Cの口頸部と思われる。口縁部に沈線が巡っている。26と27は甕Aで、器壁が薄い。28は口縁部に沈線が巡り受け口状を呈する。30と31は大きめの甕Aである。31は頸部に5本の縦線と1本の横線のヘラ描きがみられる。29は甕Aの体部と思われる。体部上部に最大径がみられる。100は土師質の球胴甕である。内外面とも体部下半部はハケ目に近いヘラ削りが施されている。

S Y 0 1は、杯A、杯Bは回転糸切りが主であるが、法量が安定化せず、杯Bにヘラ切りが残る。ヘラ切りと糸切りの過渡期の窯と思われる。美濃須衛窯ではヘラ切りに変わって回転糸切りが主流になることはなく、また陶邑古窯址群は回転糸切りが主流となるのは律令体制崩壊期である。猿投窯では、回転糸切りが杯以外で普遍化するのが岩崎25号窯（猿投第IV期 8世紀中葉）からであり、杯A（猿投窯無台枕）のほとんどが回転糸切りとなるのが黒塙1号窯（猿投第IV期第3小期 8世紀後半）からである。このことからS Y 0 1は、この時期猿投の影響を受け、まだ回転ヘラ切りを残す糸切りへの転換期、つまり8世紀中葉から8世紀後半期と考える。

S W 0 1・S W 0 2（1号・2号灰原）（第273・277図）

S Y 0 1直下の斜面に広がる。炭化物、焼土、須恵器片と窯体を含んだ黒褐色の薄い包含層で、約4m×約6mの範囲に広がり、中央がくびれる瓢箪形の分布を示す灰原である。調査区外にもう1基窯跡が存在することを想定して、くびれの西側をSW 0 1、東側をSW 0 2としたが、明確には分離できず、遺物包含層は5cm～10cmの厚さで分層はできない。出土遺物は少なくテン箱2箱に満たない。

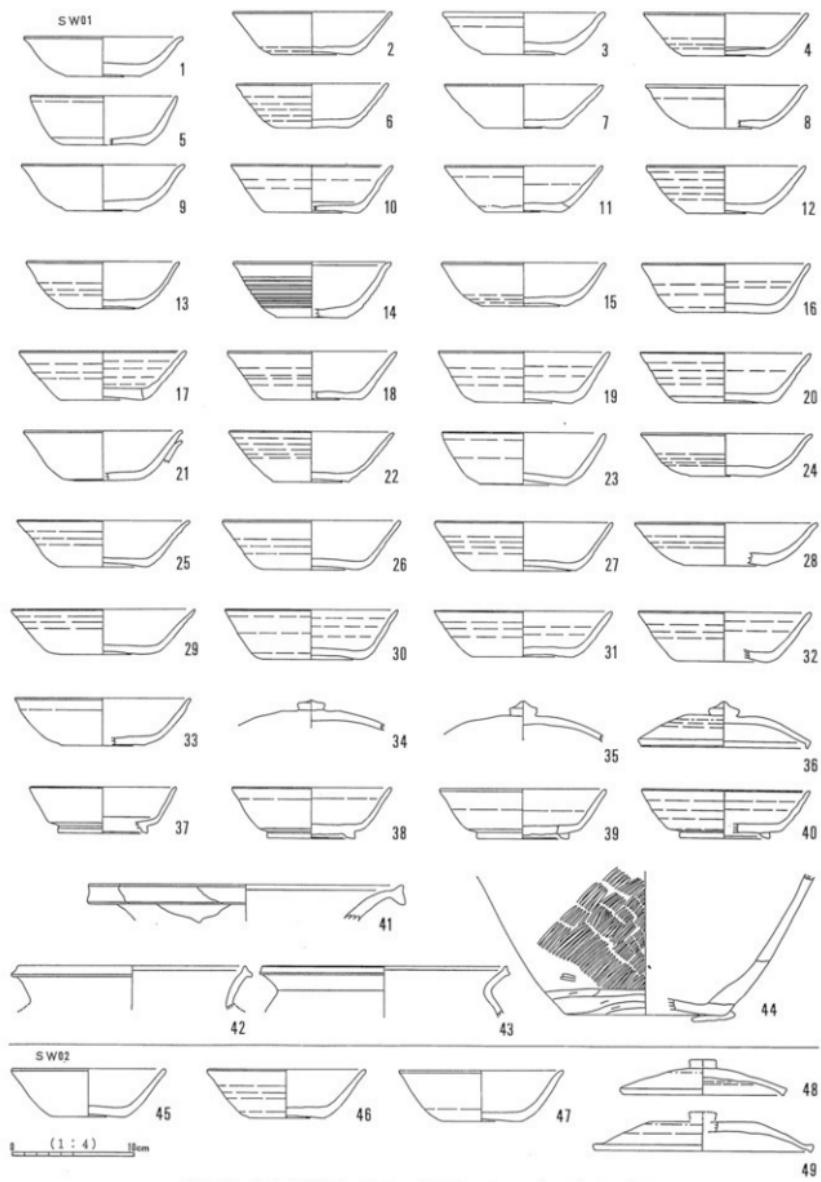
出土遺物（第277図） SW 0 1では須恵器杯A（1～33）、蓋B（34～36）、杯B（37～40）、短頸壺C（42・43）、甕（41・44）が出土している。杯Aはすべて回転糸切り未調整であり、法量が口径差から3種類に分けられ、2類（1～14）、4類（15～25）、5類（26～33）である。形態は底部立ち上がりから口縁部まで逆台形に開く形態が多く、杯身に膨らみを持つもの（5・8・9・13・24・28・30・33）は数少ない。14は杯身にヘラ状工具によるナデ調整がされており、数条の沈線がみられる。35と36の蓋Bはツマミ中央部が凸である。36の口縁部から天井部に到る折り目ははっきりした稜がみられる。杯Bの法量は、1類（37）、2類（38～40）の2種である。42と43の短頸壺Cは有段口縁である。41の甕AはS Y 0 1の26・27の甕Aと類似する。44は甕Aの平底底部である。

SW 0 2では須恵器杯A（45～47）、蓋B（48・49）が出土している。杯Aは回転糸切り未調整で、形態は1号灰原のものに類似している。法量は2類（45・46）、3類（47）の2種ある。蓋Bは大小2種であり、48は口縁の屈曲がわずかで、49は口縁の屈曲が小さく口縁から天井部にかけての境目が沈み込むような形態である。2点ともツマミが欠損している。

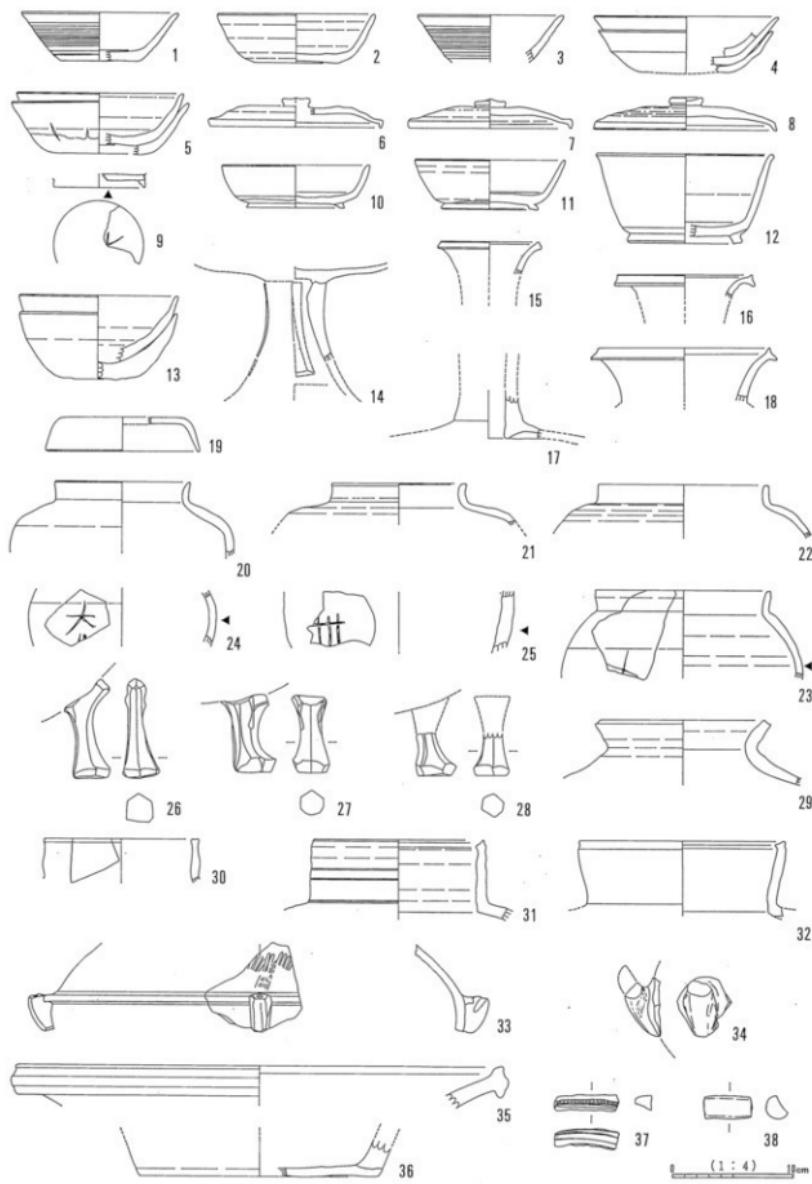
S W 0 3（3号灰原）（第273・278図）

S Y 0 1の斜面斜め下方の緩斜面に、須恵器が多量に出土する地点をSW 0 3とした。須恵器はおよそ8m×12mの範囲に特に多く認められ、第273図に示すように遺物密度の高いところでは、2m四方のグリッドに500点以上の須恵器片を出土している。遺物包含層は分層されず、基本土層II層からIII層に相当すると思われる。炭化物や焼土は余り含まれず、遺物が多量に出土していることから、須恵器のみを捨てた物原であると思われる。ただし、出土遺物にはS Y 0 1では見られない糸切り底の須恵器杯なども含まれており、S Y 0 1で焼かれた須恵器以外のものが少量含まれているようである。

出土遺物（第278図） 須恵器杯A（1～5・13）、蓋B（6～8）、杯B（9～12）、高杯（14）、長頸壺（15～18）、壺蓋（19）、短頸壺B（20～23）、三足壺の脚（26～28）、短頸壺C（29）、短頸壺B（30～32）、



第277図 牛出古窯遺跡 SW01（上段）・SW02（下段）出土遺物



第278図 牛出古窯遺跡 SW03出土遺物

凸帶付四耳壺（33）、甕把手（34）、甕A（35）、甕底部（36）が出土している。

杯Aは回転ヘラ削り未調整である。1と3はSY01の杯Aに類似し、外傾する逆台形である。2・5は1などに比べ、外傾が少なく箱型で、腰部に丸みを持つ。1と3には杯身にヘラ状工具によるナデ調整がされており、数条の沈線がみられる。杯Bの法量には4種みられる。12は腰部が丸みを帯び、底径が小さく外傾し、口縁部も丸みを帯びやや外反する。11も底径が小さく外傾する。9は法量が小さく底部に「×」とおもわれるヘラ描きがみられる。9と10の高台は断面三角形である。13は楕円形の底部丸底の杯Aである。4・5・13は杯の重ね焼きである。13には火拂が認められる。

14の高杯は脚部破片のみの出土である。長い脚部には長方形の透孔がみられる。美濃須衛窯では古墳期からみられる脚の透孔が9世紀代まで残る。このことから高杯脚の透孔は美濃須衛窯の影響と思われる。

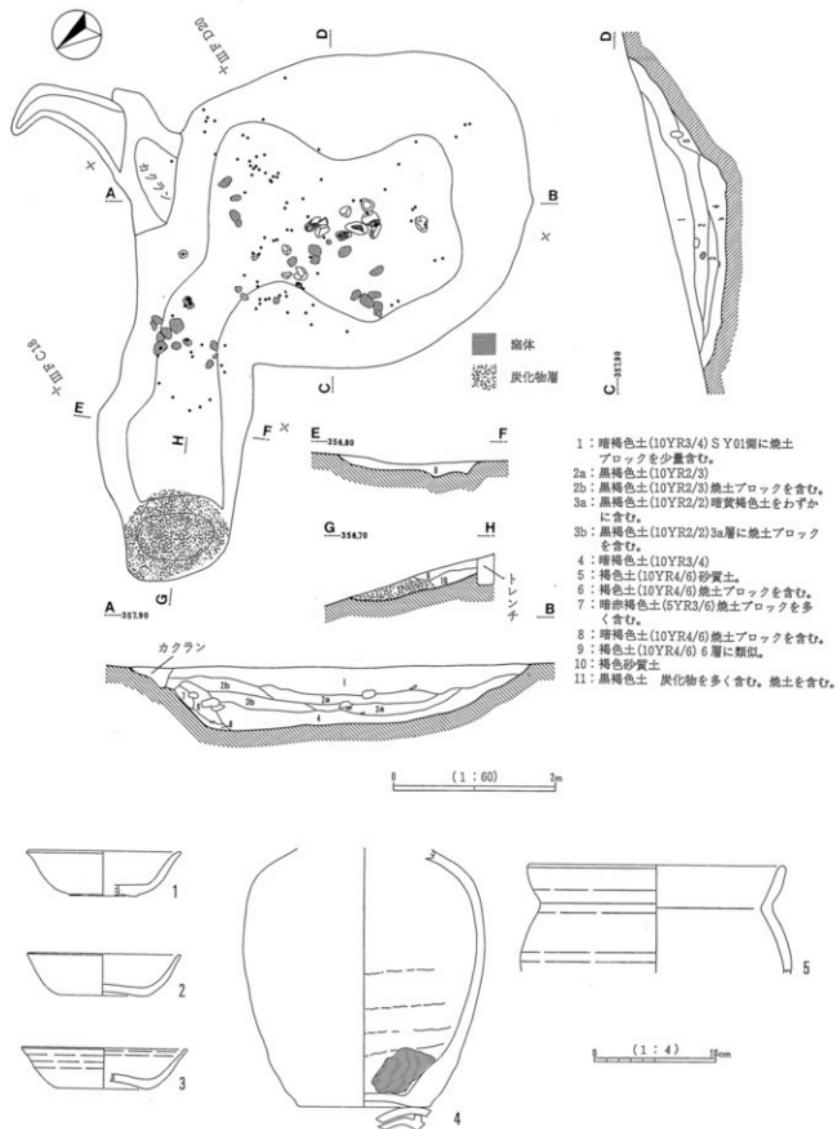
長頸壺の15は口縁部に折り返しがみられる。17は長頸壺口頭部接合部分の破片である。肩部の接合部に粘土帯を巡らせ、その上に口頭部をのせ接合したものと思われる（第181図3）。16と18は大きめの長頸壺である。口縁部の折り曲げ部が顕著である。短頸壺Bの20は口唇部が断面三角形であり、21と22と23は口唇部の断面が方形である。19の壺蓋は、短頸壺Bの蓋であり、蓋内面天井部にカキ目がみられる。23～25の短頸壺Bの体部外面中央部に「大」「×」「×」のヘラ描きがみられる。26～28は金属器の三足（獸足）壺の模倣品と思われる。3つの脚とも断面六角形にヘラ削りされ、獸足の爪を思わせる部分は面取りされている。三足壺は短頸壺Bに類する壺に三足接合していたものと思われる。26は細身で脚が長い。しかし27は脚が若干太く短い。また26は壺の胴下半部に接合されるが、27は底部付近に接合されると思われる。この3点が同一個体の一部とは思われず、このような金属器模倣品を複数生産していた可能性がある。壺や硯の獸足は稻田山13号窯（美濃須衛窯第IV期第3小期前半）、鳴海32号窯（猿投窯第IV期第2小期）など8世紀中葉から9世紀初頭の窯跡で出土している。29は口径が小さく体部径がかなり広い短頸壺Cである。30～32は甕Bで口縁部が平らなもの（30）と若干内面に傾くもの（31・32）がみられる。33の凸帶付四耳壺は凸帶部が断面方形であり、耳部の穴が貫通していない。34は甕Bの把手の部分であろうか。35は甕Aの口縁部で、36は甕Aの平底と思われる。37は甕の体部の上端を切り落としたもので、38は粘土紐の半截である。

時期 杯Aの形態は第278図2のように箱型の様相も残している。また三足（獸足）壺の存在や高杯の脚の透孔、凸帶付四耳壺の存在などから美濃須衛IV-3、猿投IV-2などに対比される8世紀中葉から9世紀初頭の様相を持つと思われる。

S K 0 1 (1号土坑) (第279図)

造構の構造 SY01に並んで斜面部に位置する。平面形は4.02m×4.60mの不整な橿円形で、その北端が斜面下方に張り出す。なお、東側に伸びる溝状の張り出しは攪乱である。覆土中には人頭大の焼けた礫が9個まとまって出土し、張り出し部の先端には炭化物層が広がっている。しかし、明確な火床面は確認されず、覆土中に含まれる焼土はSY01から流れ込んだものと思われ、本造構内で火を焚いた可能性は少ない。焼けた礫は、被熱した時の原位置ではなく、被熱後本土坑の覆土中に廻棄されたもので、炭化物はSY01からもたらされたと考えられる。覆土は自然埋没状態を示している。出土遺物は焼けた礫と窯体片の他に、須恵器片が出土し、遺物からSY01と同じ時期と考えられる。本土坑の性格については、清水山窯跡にも類似した土坑が窯跡に隣接しており、窯体を構築するための土を取った穴であると推定されるが、SY01より新しい時期の遺物もわずかに含まれており、これらの遺物を混入と見るか否か、問題点を残している。

出土遺物（第279図） 須恵器杯A（1～3）、短頸壺（4）、土師器長胴甕（5）の出土がみられる。杯Aは回転糸切りである。4は口縁部が欠損した短頸壺Bと思われる。底部に焼台替わりに用いたと思われ



第279図 牛出古窯遺跡 SK01

る杯Bの破片が融着する。土師器長胴甕5はロクロ甕で、口縁部が肉厚で内湾の頸部が「く」の字状となる。口頸部の特徴はいわゆる北信甕⁽¹³⁾である。

3 竪穴住居址・掘立柱建物址・柵列

S B 0 1 (1号住居址) (第280図)

上段段丘面の斜面落ち際に位置する。一部は消失しているが、隅丸の長方形を呈しており、3.05m×2.05mの規模と推定される。床面は不明瞭で、柱穴、竈は検出されず、覆土中には拳大から人頭大の礫が検出された。覆土中より出土した礫の重量分布は第13表に示したとおりで、総重量153kgになる。一部の礫は焼けて変色しており、覆土中には焼土のブロックも検出されている。須恵器片、土師器片を24点出土しているが、これらはS B 0 2の遺物が混入したものと思われる。

S B 0 2 (2号住居址) (第281・282図)

本遺構は、調査時点で遺構の重複を認識できず、SK 19と同一の遺構として掘り下げたが、断面から推定すると焼土坑(S K 19)に切られていると判断できる。上段段丘面の斜面落ち際に位置する。

遺構の構造 S B 0 1の床下に検出された。床面は一部は消失しているが、方形を呈しており、残存する部分では一辺4.00mを測る。床面は不明瞭で硬い面はない。柱穴は認められない。竈は斜面上方の壁の中央から南西よりに位置する。須恵器壺片を竈の芯材として用いており、両袖部分には壺片が直立して出土し、竈内及び周辺には芯材に用いられた須恵器片が崩れている。竈内には支脚石が置かれている。竈の脇にあるP 5(直径約35cm深さ16cm)から杯と杯蓋が出土した。杯はピットの底面より出土し、杯蓋は底面から8cm高いレベルで出土した。P 9と竈の間にL字形に曲がった浅い溝が検出され、竪穴住居の施設と考えられる。なお、P 1～P 4はS B 0 2の覆土を掘り込んでおり、本遺構の施設ではない。S B 0 1の柱穴とも考えられるが、柱穴にしては位置が不自然である。

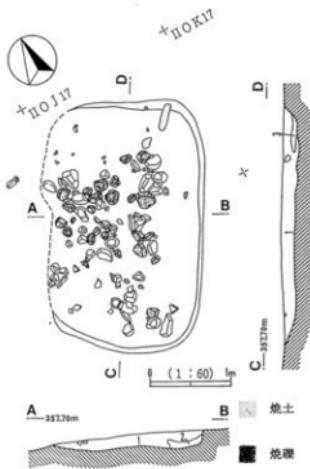
遺物出土状況 ピット内に埋められた遺物と、床面上出土の遺物と、竈付近にまとめて出土した遺物の出土状況を第281図に示した。これらはS B 0 2に直接関わる遺物である。これ以外のものは覆土中より出土したものである。なお、第282図15の坏Bは焼土坑(S K 19)内から出土した遺物である。

出土遺物(第282図) 須恵器杯A(1～4)、蓋B(5～9)、杯B(10～16)、碗C(17・18)、甕C(20)、土師器小型甕(21・22)、鉢B(23)、長胴甕(24・25)、土鍤(19)が出土した。

杯Aの底部切り離し技法には3種類ある。1は静止糸切りの杯Aである。底径が大きく8.2cmある。2は回転ヘラ切りで底部がやや丸みを帯びている。3と4が回転糸切りの底部である。口径が12.8cmと14.0cm

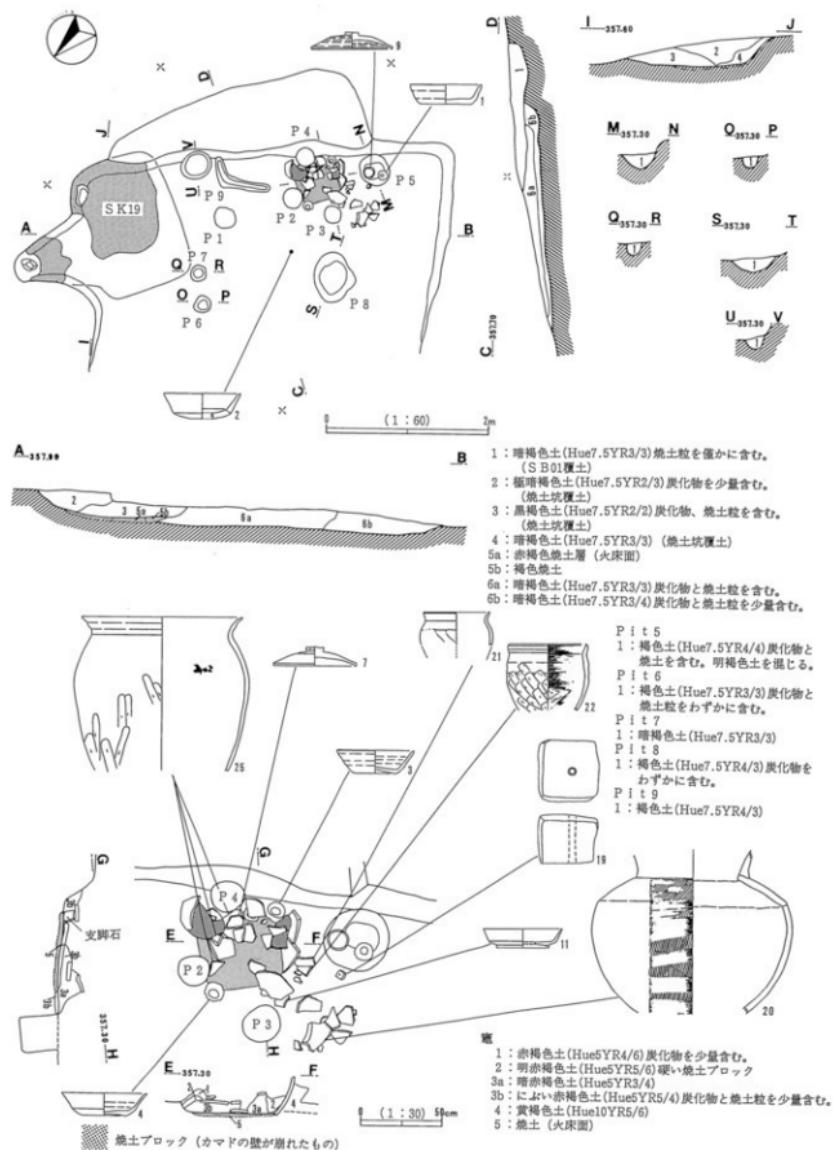
第13表 牛出古窯遺跡 S B 0 1 出土礫の重量分布

重量	~1kg	1.1~2.0kg	2.1~3.0kg	3.1~4.0kg	4.1~5.0kg	5.1~6.0kg	6.1~7.0kg	7.1~8.0kg	8.1~9.0kg	9.1~10kg	合計
個数	41	25	9	9	3	1	1	1	0	1	91

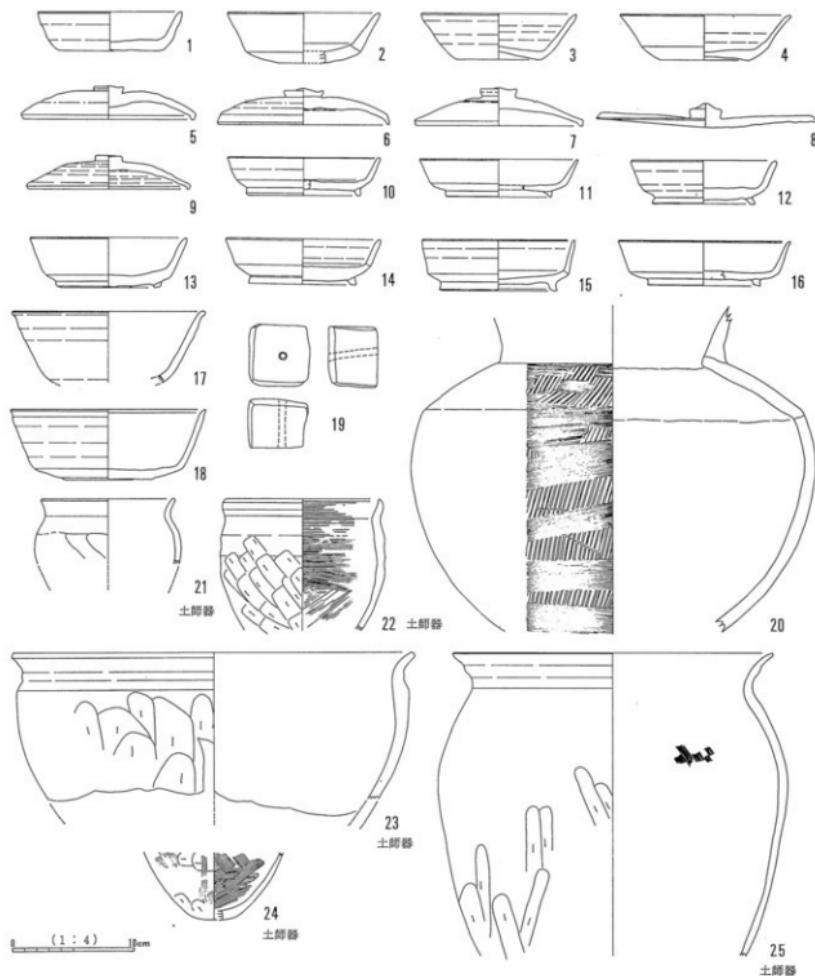


第280図 牛出古窯遺跡 S B 0 1

- 1: 單褐色土(Hue7.5YR3/3)焼土粒を僅かに含む。
- 2: 單褐色土(Hue7.5YR3/4)焼土粒を含む。小砾を多く含む。
- 3: 暗褐色土(Hue7.5YR4/4)砂質土。地山崩落土。



第281図 牛出古窯遺跡 S B02



第282図 牛出古窯跡 SB02出土遺物

で底径が6.6cmと7.4cmである。3は焼け盃がある。杯Bには回転ヘラ切り未調整の杯に高台を付けたもの（13・14）と回転ヘラ削り調整した後に高台を接合したもの（10・12・15・16）がみられる。10は回転ヘラ切り後、回転ヘラ削りしている。11の高台は断面三角形である。15・16は杯底部と杯身の境目に角張った稜がみられ、高台が他に比べ内側に巡っている。蓋Bの5～7・9は口径がほぼ等しい。5は天井部2/

3まで回転ヘラ削りが及んでいるが、6・7・8は1/3しか回転ヘラ削りが行われず、天井部分が丸身を帯びる。7はツマミの回りに沈線が巡っている。8の口径は17.8cmで天井部が偏平である。これは18の椀蓋であろうか。椀Cの18は底部が回転ヘラ切り未調整で小さい。17・18は口縁部下に沈線が巡っており、その部分をツマミながら口縁をわずかに外反させている。金属椀の模倣品と思われる。20は甕Cである。体部上半に屈曲する部分がみられるが、体部と肩部の接合部で歪んだ物と思われる。平底であろう。土師器小型甕の22は口縁部が内湾している。内面はカキ目調整され、外面は斜めヘラ削りされている。23の口頭部はロクロ整形され、頭部にロクロ痕がみられる。胴部はヘラ削りされている。北信型の鉢であろうか。25は口頭部がロクロ整形されており、頭部にロクロ痕が残る。胴部は継位ヘラ削りである。24は砲弾形の底部である。19は立方体で中央に径4mmの穴が貫通する土錐である。外面は全面に布目痕がみられる。

時期 SB 02の杯Aには回転ヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りの3種がみられ、数量的には回転糸切りが上回っている。糸切りとヘラ切りの技法が交じりあう様相が認められる。猿投窯第IV期第1小期(8世紀中葉)、美濃須衛窯第IV期第2小期後半(8世紀中葉～後半)の時期にヘラ切りと糸切り技法が交じり合う様相がわずかにみられる。したがって、SB 02はほぼ8世紀中葉から後半の時期の住居址と思われる。

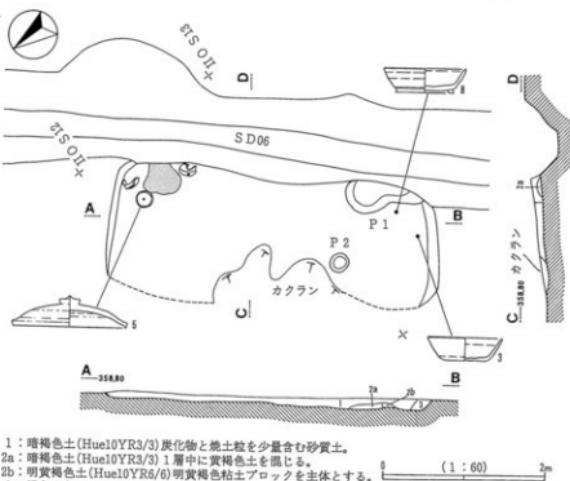
SB 11 (11号住居址) (第283・286図)

上段段丘面の斜面落ち際に位置する。

遺構の構造 住居の北西半分は床面が消失しており、南東壁の立ち上がりはSD 06により壊されているが残存部では一辻4.1mを測る。覆土は厚いところで8cmしかなく、上層部は流失しているものと思われる。住居址中央部は床面まで搅乱されている。竈は東の角に火床面のみ確認され、その両脇に須恵器甕の破片が直立して出土した。これは竈の芯材として使われたものであると思われる。P 1は深さ10cm、P 2は深さ3cmの浅い窪みである。いずれも本住居址の施設と考えられる。

遺物出土状況 第283図に床面出土遺物の出土地点を示した。

出土遺物 (第286図上段) 須恵器杯A (2~4)、杯B (6~8)、蓋B (5)、器種不明 (1) が出土している。1は口唇部が面取りされており、内面もロクロナデがあまり丁寧に行われておらず、底部は回転ヘラ削りしている。蓋か杯かはっきりしない。類例を待ちたい。杯Aには、回転ヘラ切り(2)と回転糸切り(3・4)の2種類の底部切り離し技法がみられる。両者とも底径は7cm~8cmと大きめで、形態も箱形で類似する。4は回転糸切り痕が太く粗い。杯Bも杯A同様2種類の切り離しがある。6は回転ヘラ切り未調整であり、7は回転糸切り後、外周ヘラ削りしてお



第283図 牛出古窯遺跡 S B 11

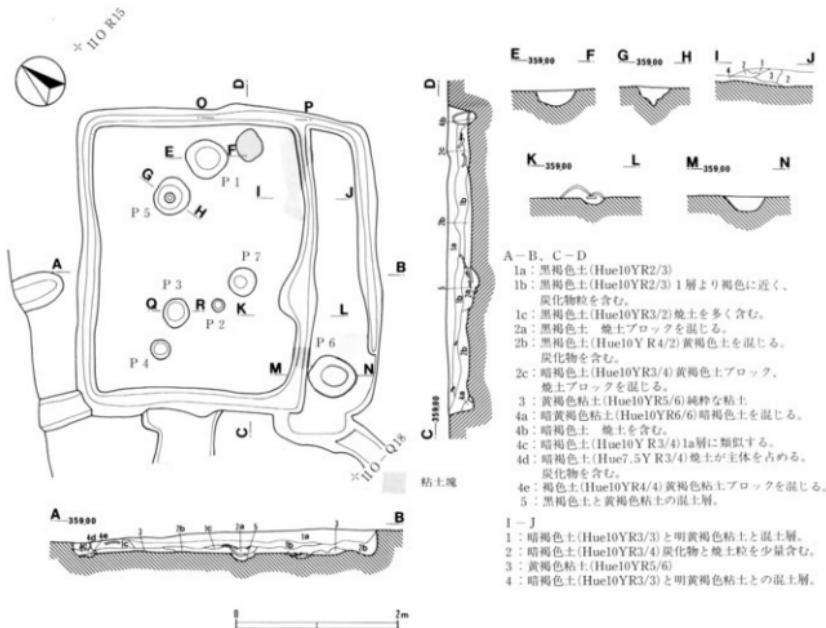
り、8は回転ヘラ削りを行っているため切り離し技法は不明である。7と8は底部から杯腰部に明瞭な棱がみられる。

時期 杯Aの回転ヘラ切りと回転糸切り技法の交じり合うSB02とはほぼ同一期と思われる。

SB12 (12号住居址) (第284~287図)

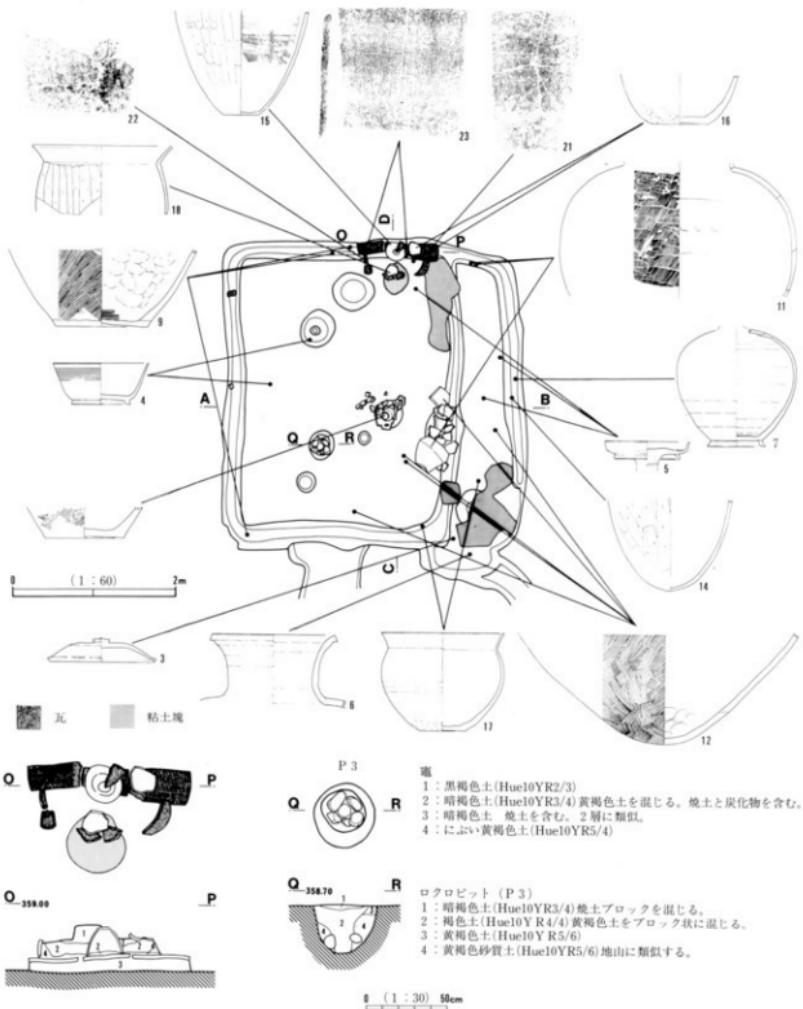
上段丘面の斜面際に位置する。SD09 (SD11)・SX01と切り合い関係にある。SX01がSB12の覆土を掘り込んでいることが確認された。SD09とは覆土が類似しており遺構の新旧関係は確認できない。

遺構の構造 3.7m×3.8mの方形を呈し、南西壁に張り出し部がある。硬い床面は認められず、床面が明確に捕らえられない。周溝が張り出し部分を除いて「の」の字状に巡っており、部分的に須恵器甕片を覆い被せるように置いている。周溝内の覆土は、竈に近い部分では焼土と炭化物を含む暗褐色土で、竈から離れた部分では黄褐色土を含む褐色土となる。竈は北東壁のほぼ中央に位置する。瓦を芯材として用いたと思われ、火床面の両脇に直立した平瓦が出土し、竈周辺に瓦が数点出土している。火床面壁際の周溝上面を平瓦が覆っており、その中央部に長胴甕が伏せて置かれている。これも竈に関連する施設かと思われる。煙道は認められない。P1は直径約50cm、深さ20cmで、焼土ブロックと0.5cm~1cmの炭化物が覆土に含まれており、竈に関連した穴であろう。P3は直径40cm、深さ30cmで、底面に内径約10cmの円を描くように拳大の礫を並べている。いわゆるロクロビットである。P6は深さ10cmと浅く、黄褐色粘土塊に覆

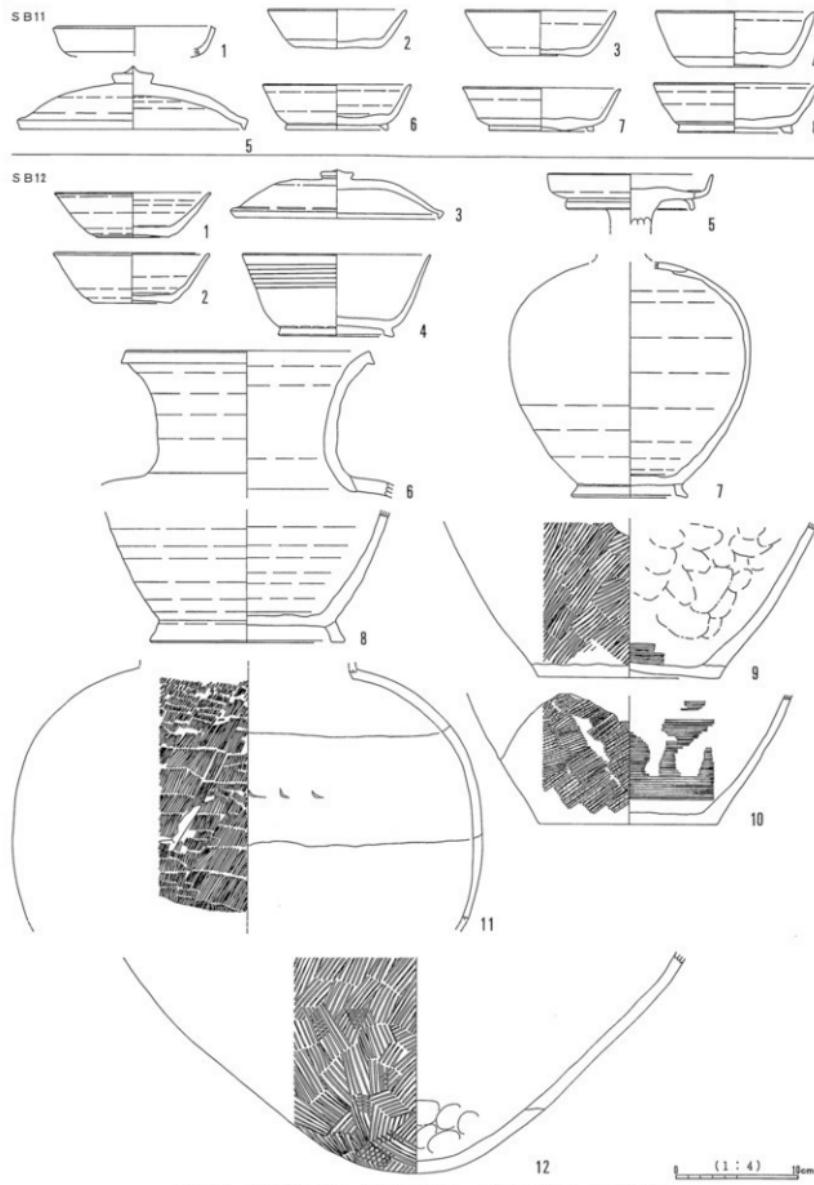


第284図 牛出古窯遺跡 SB12

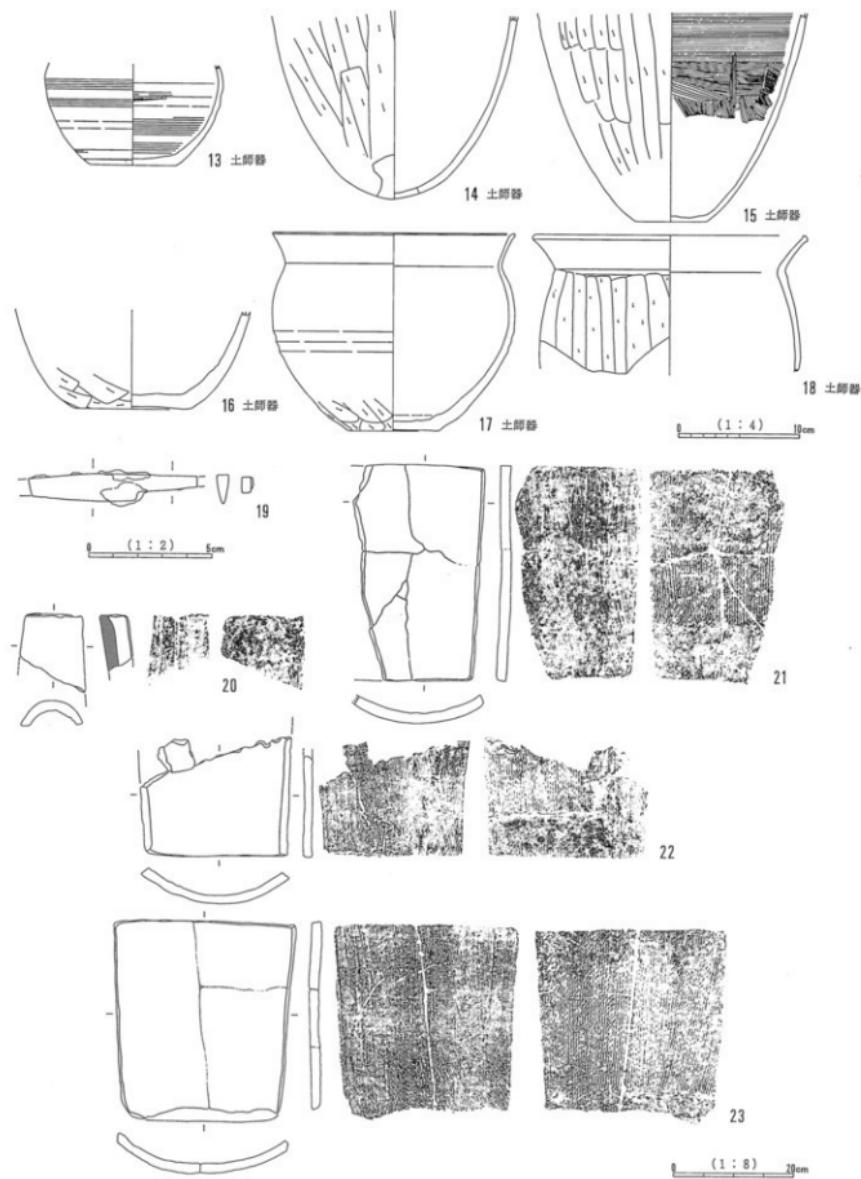
われている。P 7には須恵器甕底部が埋められており、甕の内側には焼土ブロックが含まれており甕自身も被熱している。甕の直下は火床面となっており、炭化物と焼土ブロックを含む覆土がその下に続く。P 2・4は深さ4cmほどの浅い窪みである。P 5は床面を剥いた時に検出され、直径48cm、深さ16cmで、さらに底面中央に直径10cm、深さ8cmの穴が確認された。



第285図 牛出古窯遺跡 S B12遺物出土状況



第286図 牛出古窯遺跡 S B11（上段）・S B12（下段）出土遺物(1)



第287図 牛出古窯遺跡 S B12出土遺物(2)

遺物出土状況 第285図に床面直上に出土したものと、住居施設の一部として用いられているものを示す。また、竈付近とP 6を覆って粘土の塊が出土している。北西壁の周溝内に炭化材が直立して出土している。

出土遺物（第286図下段・287図） 須恵器杯A（1・2）、杯B（4）、蓋B（3）、高杯D（5）、長頸壺C（7）、長頸壺底部（8）、甕A（6・9・10）、甕（11・12）、土師器小型甕（13・17）、長胴甕（14・15・18）、甕底部（16）、布目瓦（20・23）、鉄製刀子（19）が出土した。

1と2は回転糸切り底の杯Aである。SY 0 1の杯A（第276図2）に法量や形態が類似する。1は内外面に火拂が見られる。4は回転糸切り後末調整の杯Bである。高台は杯底部外側に付けられ、深身の逆台形を呈する。杯腰部は丸みを帯びる。杯身部は板状工具を当ててナデ調整を行っており、数本の沈線がみられる。3はツマミの外周の天井部を回転ヘラ削りして平らにした器高の高い蓋Bである。口縁端部の折りは少なく、口縁部と天井部の折り目が明瞭で沈み込みがある。4の杯Bとセットと思われる。5は高杯Dである。身の浅い杯Bに脚部を取り付けている。長野市の田牧居帰遺跡、上ノ田遺跡でも同様の高杯Dが出土している。中野市立ヶ花窯跡でも完形の高杯Dが出土している（第382図）。7は頸部が欠損しているが、頸部の細い金属器模倣の長頸壺Cである。高台が高く外側にはみ出す形態である。8は長頸壺Bの底部と思われる。高台が高い。6は器壁の薄い甕Aの口頸部である。9と10は甕Aの平底の部分である。11・12は周溝に敷かれていた甕である。これらの甕の口縁部は不明であるが、11は体部が球形であり、12は丸底である。11・12は奈良時代前半期の甕Aの胴部や底部であると思われる。土師器小型甕は13・17がみられる。13は口頸部を欠く胴部球形、平底で、内外面カキ目調整である。17は球胴形の壺で口径と胴部径が等しく、やや頸部が屈曲する。回転ナデ調整で底部外側に削り調整がみられる。18の長胴甕は口径が胴部径よりも大きく、胴部外面は縦位のヘラ削り調整である。14の底部は砲弾形で、15は胴下半部が砲弾形、小さな平底である。16は球胴形の甕の平底部と思われる。

瓦が竈から出土している。20の丸瓦は凸面に網目のタタキ成形痕を残しており、凹面には布目痕と、桶型の痕跡を残す。21・22・23は平瓦で凹面に糸切り痕と桶型痕、布目痕を残す。21～23の平瓦は凸面の幅の狭い部分、網目タタキ目の一端が約4.5cm幅で消されている。これら瓦は池田端2号窯で焼かれた平瓦（第204図）と形状、大きさ、胎土、焼成度などの特徴が類似しており、池田端より持ち込まれた可能性が高い。

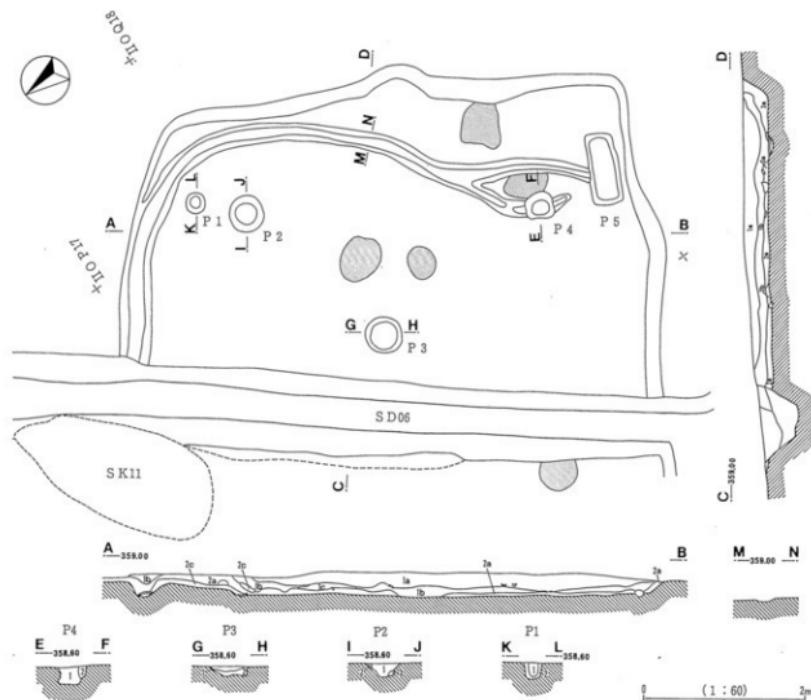
時期 SB 0 2、SB 1 1と違い回転糸切り技法が主となる時期の住居址で、これらの住居址より若干新しいと思われる。また、池田端窯跡製瓦の竈への転用や奈良時代前半期のものと思われる甕の遺溝への転用から、奈良時代前半期より多くの時間が経過しない時期と考えられよう。さらにSY 0 1の杯Aとの類似から、本住居址は8世紀中葉から後半の時期とおもわれる。

SB 1 3・SK 1 1・SD 0 9・1 1・1 2（13号住居址）（第288～294図）

上段段丘面の斜面際に位置する。SK 1 1はSB 1 3の施設の一部であることが整理途中で確認された。また、SD 0 9・1 1・1 2もSB 1 3の関連施設である可能性が高いのでここでまとめて記述する。ただし遺物等の注記は調査時点の遺構名をそのまま使用している。なお、SX 0 1はSB 1 3の関連施設である可能性があるが、SX 0 1の詳細は別項で述べる。

遺構の構造 SB 1 3はSD 0 6により一部破壊されている。斜面下方の壁は流失しており確認できない。他の住居址の形態から推定して、一辺6.56mのほぼ正方形をしていたものと考えられる。覆土は大きく二分され、下層には黄褐色土又は黄褐色粘土を混じている。SX 0 1と切り合うセクションポイントAのところでは2a層がSX 0 1の覆土に続いているように観察され、SX 0 1との前後関係は確認できない。柱穴は確認されない。竈は南東壁の中央からやや南隅によったところに位置する。調査時の不注意で、

火床を確認したのみで上部構造や窯内の覆土については一切不明である。窯のほかに、床面に4か所の火床面が確認されている。また、北東壁から窯の手前を通りP5に至るL字状の溝があり、須恵器窯の破片が蓋のように溝上を覆っている(第290図)。セクションA-Bで窯が溝に陥没したため1b層が溝の部分だけ落ち込んでいることが観察され、このことから須恵器窯が溝の上に蓋として載せられていたことを確認できる。この窯片の蓋には最低4個体分の窯が使用されており、復元実測可能なものの3個体を第292・293図に示している。SK11とした部分の須恵器窯片の並び方から、溝はSD06を越えて更に斜面下方に伸びていたものと思われる。この溝は幅20cm~30cm、深さ5cm~12cmで底面は5cmほどの高低差はあるが、ほぼ水平で一方に傾斜する構造ではない。SK11は、砂質土の色がくすんだ部分を掘ったものであるが



- 1a: 噴褐色土(Hue10YR3/3)砂質土。
 1b: 噴褐色土(Hue10YR3/3)砂質土。炭化物、焼土粒を含む。
 1c: 噴褐色土(Hue10YR3/3)砂質土。多量の炭化物、焼土粒を含む。
 2a: 噴褐色土(Hue10YR4/4)黄褐色土をブロック状に混じる。炭化物、焼土粒を含む。
 2b: にいわゆる赤褐色土(Hue5YR4/4)焼土ブロックを混じる。
 2c: 黄褐色粘土(Hue10YR5/6)2a層の土を小量混じる。
- P i t 1
 1: 噴褐色土(Hue10YR4/4)黄褐色粘土を混じる。炭化物を含む。
 2: 明黄褐色粘土。床面に見られる粘土が落ち込んだもの。
 3: 噴褐色土(Hue10YR4/4)1層より多く黄褐色粘土を混じる。
- P i t 2
 1: 噴褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を多量に含む。
 2: 噴褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を含まない。
- P i t 3
 1: 噴褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を多量に含む。
 2: 噴褐色土(Hue10YR4/4)砂質土。
- P i t 4
 1: 噴褐色土(Hue10YR3/3)炭化物を多量に含む。焼土を小量含む。
 2: 棕褐色土(Hue10YR4/4)砂質土。

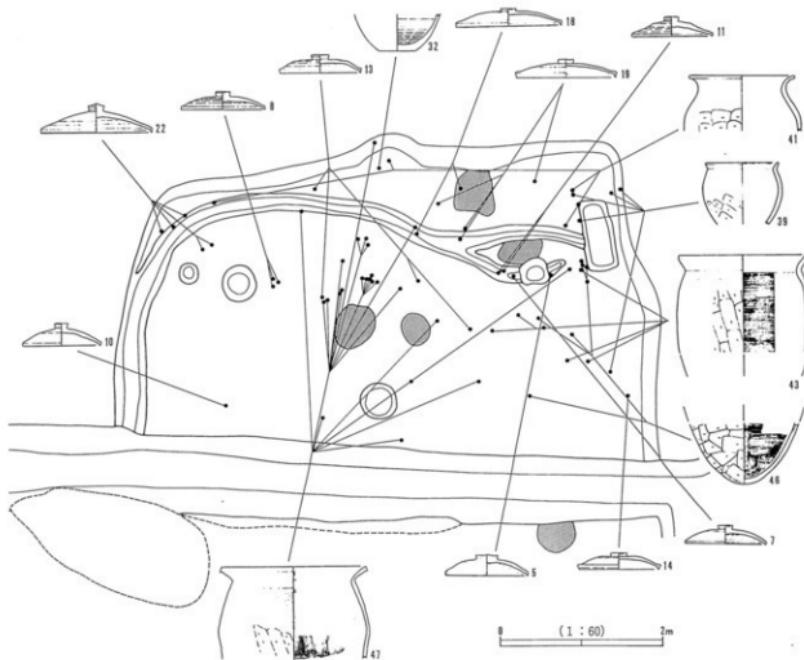
第288図 牛出古窯遺跡 S B13

出土遺物はなく色がくすんだ部分は住居内の溝からの水がしみ込んだため変色したものと推定され、遺構ではないと判断したものである。P 1は直径22cm、深さ20cmで、住居覆土とは異なった土が入っており、住居廃絶時点ではすでに埋まっていたものである。P 2は直径40cm、深さ18cmで、床面に分布した粘土の一部が落ち込んでいる。P 5は長方形を呈し、底面は溝とほぼ同じ高さで溝と関連した施設である可能性が強い。覆土には焼土と炭化物が多量に含まれているが、火床面は認められない。P 3は直径42cmで、深さ13cm、P 4は直径34cmで深さ20cmである。床面に認められる複数の焼土と床面出土の炭化材などから見て焼失住居の可能性がある。

遺物出土状況 第289図に床面及び2層から出土した遺物を示し、第290図には住居使用時の原位置をとどめていると判断される遺物を示した。竈の南側には杯と杯蓋が置かれている。その中の2点の杯には「別」の文字がヘラ書きされている。P 2の北西側の床面には黄褐色粘土塊が分布していたが、範囲が記録されていないので図示できない。また板状の炭化材が床面より出土し、コナラ節9点、クヌギ節3点という鑑定結果である。

出土遺物（第291～294図） 須恵器杯A（1～4）、杯B（26～29）、蓋B（5～25）、高杯B（30）、短頸壺（31・32）、甕A（33～38）、土師器小型甕（39・40）、長胴甕（41～47）が出土している。

杯Aはほとんど回転糸切りの杯であるが、上層から出土したもには回転ヘラ切りの杯Aの破片がある。

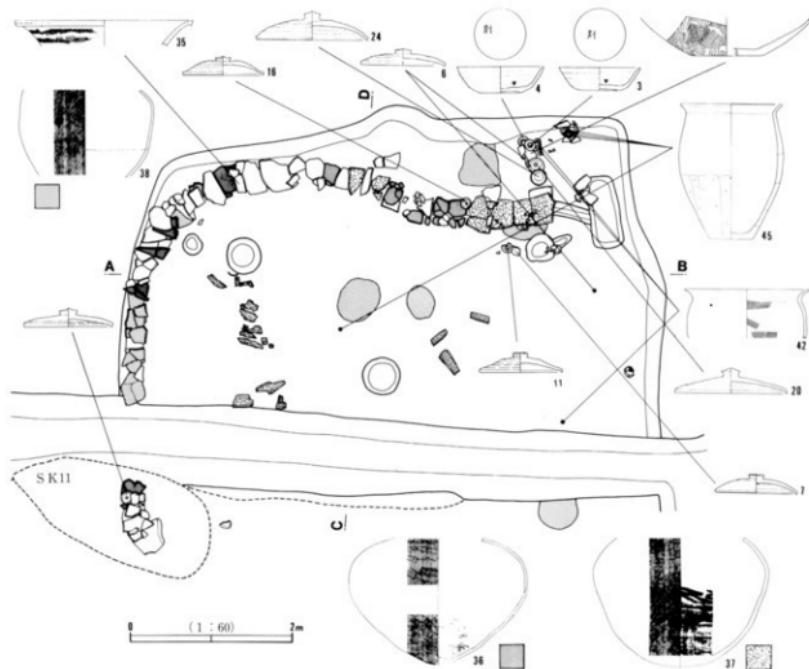


第289図 牛出古窯遺跡 S B 13遺物出土状況(1)

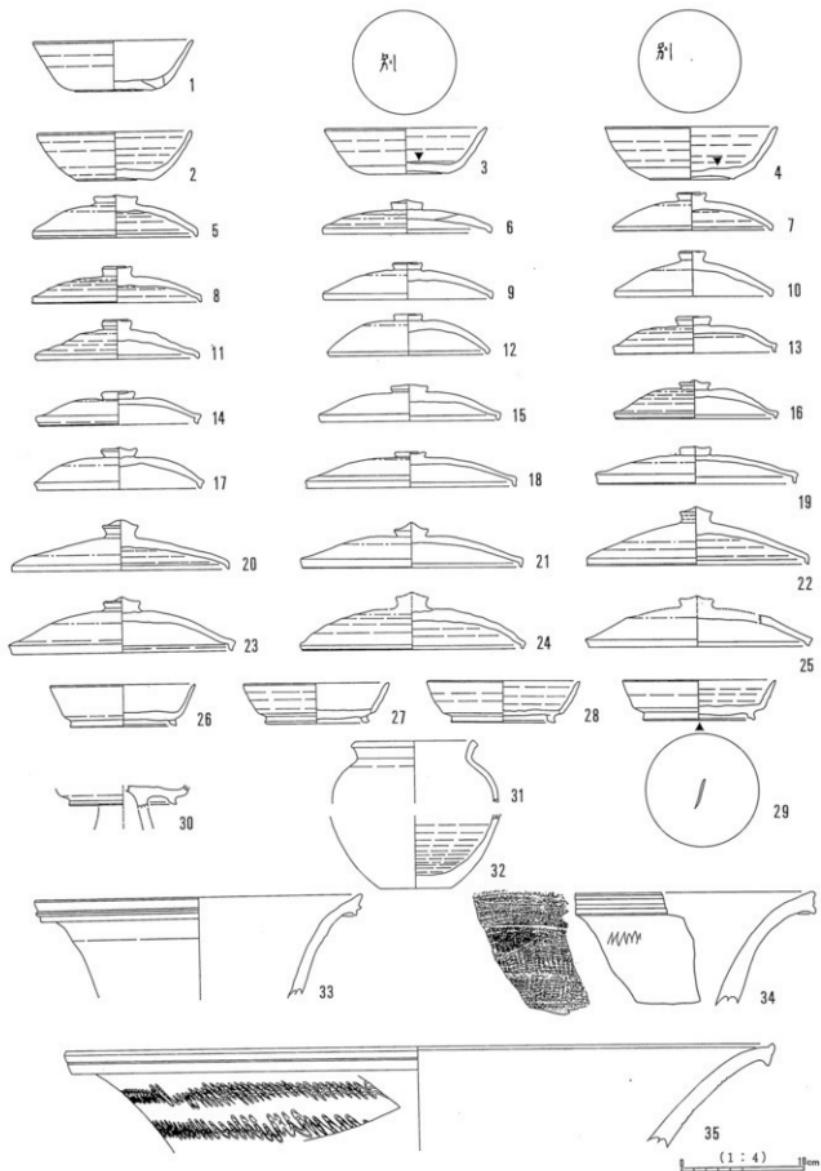
杯Aの3・4の底部内面には「別」のヘラ書き文字がみられる。杯Bの底部の調整方法は回転糸切り未調整、回転ヘラ切り、回転糸切りで外周を回転ヘラ削り調整したものがあり多様である。杯Bの法量差はほとんどなく均一化している。30の高杯DはS B1 2のものと類似する。31は短頭壺Cの口唇部が面取りされたものである。体部下半部の32は体部上半部球形の31と同一個体かあるいは類似する個体である。甕Aの33は器壁の薄い、口縁部に細い凸部が巡っている甕である。34の頸部のタタキで整形後、スリ消し調整している。頸部は波状のヘラ書きがみられる。35は頸部に34のようにタタキ目が残り、その上に櫛描波状文が描かれている。口頸部が欠損する36の甕Aはやや尖った丸底で、肩部がかなり張るタイプである。36は胴下部に同心円文の當て具痕がみられる。体部のみの37・38は球形に近い形態をしている。底部は丸底と思われ、36～38は清水山1号窯の甕Aの形態（第154図190）に近似すると思われる。

土師器小型甕39は口頸部が短く口径と胴部径に差がなく、底部形態は40と類似すると思われる。

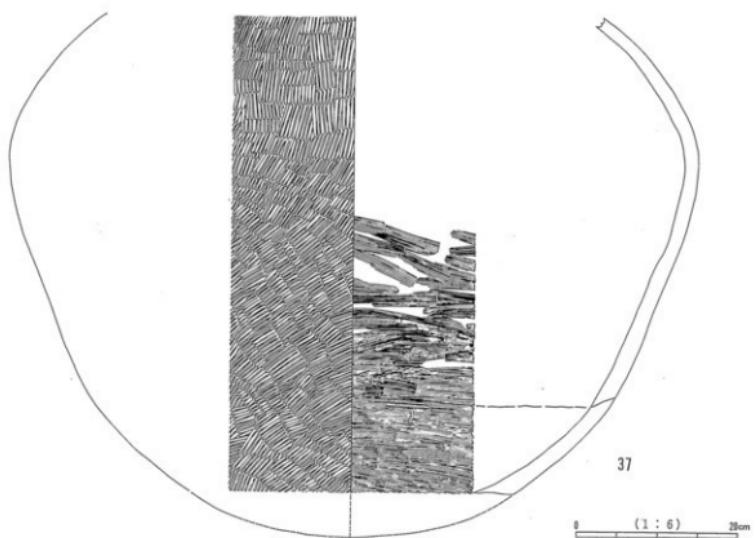
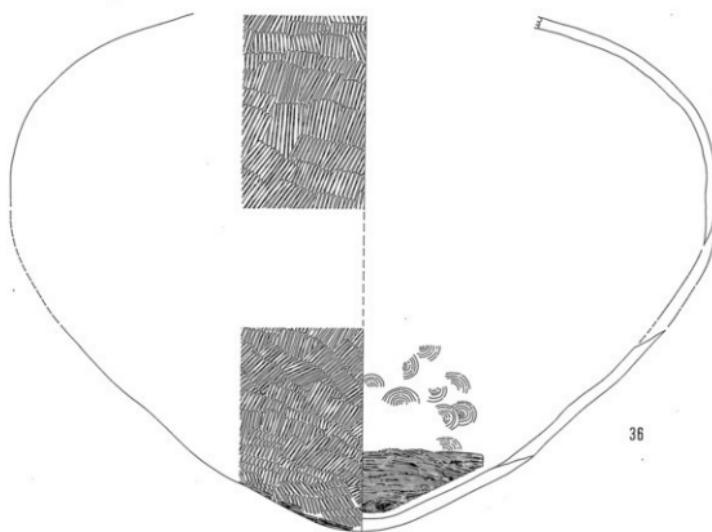
長胴甕にはいろいろなタイプがみられ、41は口縁径が小さく、胴部上半に最大径があり、頸部下に横位のヘラ削り調整が行われている。42は口縁部が「く」の字に屈曲しながら開く形態。43は胴部径と頸部径に差があまりなく口縁が開く形態で内面カキ目、胴部外面縦位の短いヘラ削り調整で口頸部回転ナテ調整



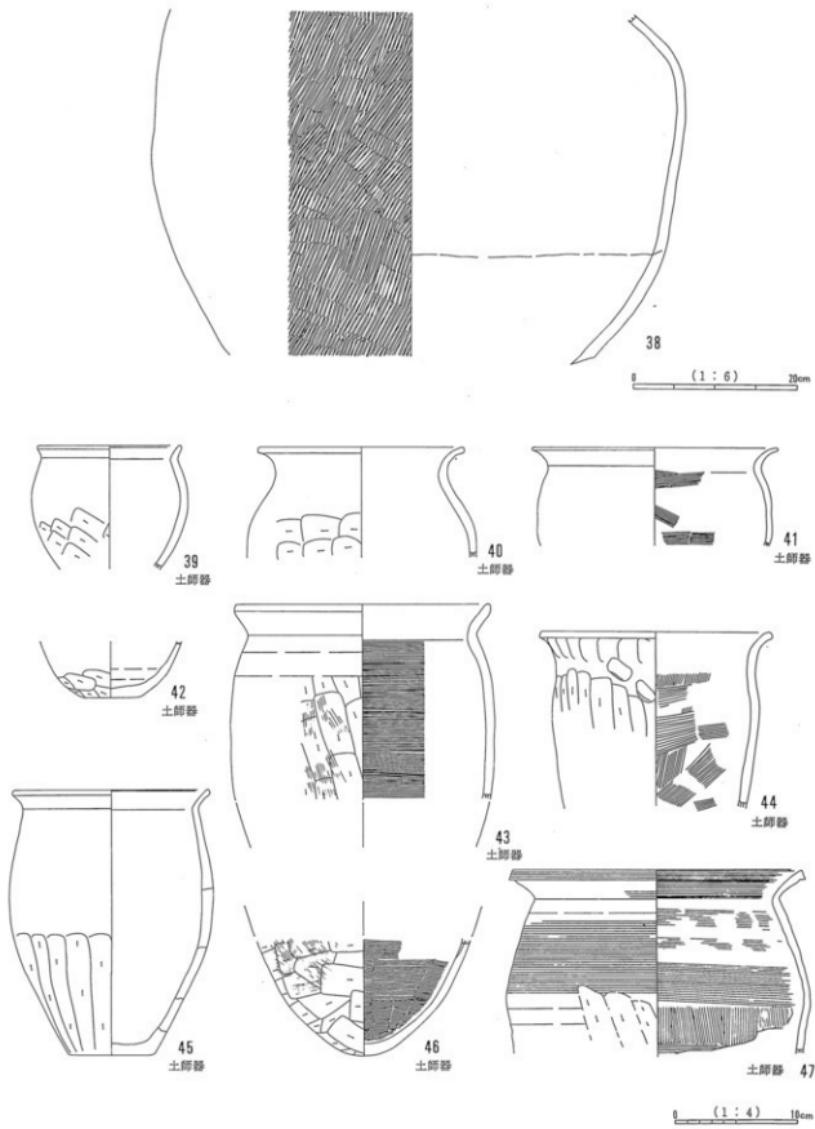
第290図 牛出古窯遺跡 SB13遺物出土状況(2)



第291図 牛出古窯跡 S B13出土遺物(1)



第292図 牛出古窯遺跡 S B13出土遺物(2)



第293図 牛出古窯遺跡 S B13出土遺物(3)

のいわゆる北信甕である。46は43の砲弾形の底部と思われる。45は平底で、胴部下半部縦位へラ削りである。47は口頸部から胴上半部の内外面カキ目調整し、胴下半部外面を縦位へラ削り調整している。また胴部と口頸部の境目が屈曲し、口唇部が斜めに面取りされ、ハケ状工具を当ててロクロ回転しカキ目調整している。口唇部の特徴から北信甕と同様の北陸系の長胴甕⁽¹⁾（佐沢1988a、坂井1993、小林1993）である。

なお、第294図に示したSD 05・06出土遺物は、出土位置から考えて、SB 13の覆土に含まれていたものと思われる。1・2は底部内面に深くはっきりと「別」の字がヘラ描きされている。SB 13内出土のものと合わせて「別」とヘラ描きされた須恵器は4点になる。3の土製紡錘車は上面が山状に盛り上がり、中央に直径8mmの穿孔が見られる。

時期 SB 11と同様な高杯Dが出土し、須恵器杯Aが回転糸切り離しがほとんどであることなどから、SB 13はSB 12とはほぼ同時期でSB 11以降のあまり時間差のない時期の住居址と思われる。

SB 14（14号住居址）（第295・297図）

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。

遺構の構造 6.26m×6.88mの方形を呈する。形態からP 4・6・9は柱穴の可能性があるが、他のピットは柱穴とは思えない。竈については、南壁際の東隅よりに火床面が確認され、その近くに3個の川原石が出土している。石組の竈が想定されるが、竈周辺は攪乱されており詳細は不明である。硬い床面は認められないが、2層群が貼り床で、2層上面が床面と思われる。

遺物出土状況 第295図に床面出土のものを示す。杯蓋は完形品で、他は破片または欠損品であった。覆土も浅く遺物数は少ない。

出土遺物（第297図上段） 須恵器蓋B（2）、甕A（6、7）、凸帶付四耳壺（5）、土師器杯（1）、椀（3、4）、羽釜（8）が出土している。

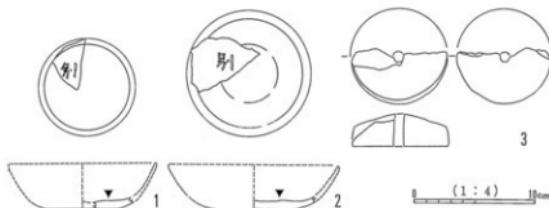
2は口縁端部の折りが少なく、天井部の1/2の所まで回転ヘラ削りされておりその部分が平らになっている。ツマミが中央部から少しずれたところに接合されている。5は凸帶付四耳壺で凸帶部は断面三角形であり耳部分は欠損している。6・7の甕Aは口縁折り曲げ部分が三股状になっている。土師器杯Aは回転糸切り底であり、杯身がやや丸みを持って立ち上がっている。底部内面中央部はやや盛り上がっている。口径が10.6cm、底径が5.6cm、器高が低く2.9cmである。3と4は土師器椀B底部の破片である。底部が小さく、高台が断面三角形を呈し、やや外向きに傾斜して取り付けられている。8の羽釜は鋸が一巡りしている形態で小型である。この他に鉄錐が3点出土している。

時期 土師器椀や羽釜の存在⁽⁴⁾や特徴から、平安時代中葉期の住居址と思われる。

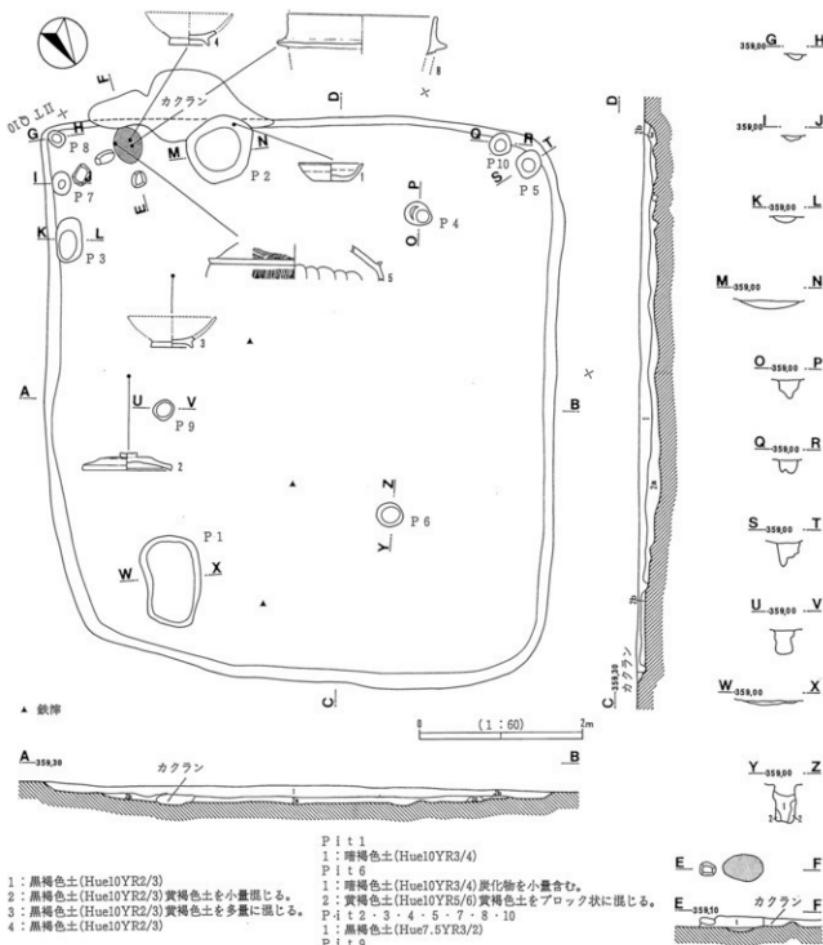
SB 15（15号竪穴状遺構）（第296図）

上段丘陵面の斜面部に位置する。

遺構の構造 SD 13と配水管埋設により破壊され、また北西側の斜面下方は流失してプランは確認で



第294図 牛出古窯遺跡 SB 13関連 (SD 05・06) 遺物

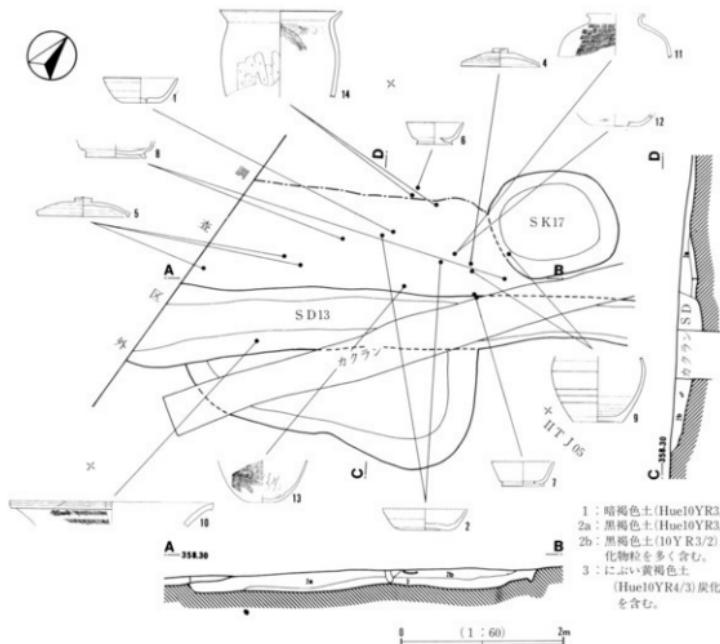


第295図 牛出古窯跡 SB14

きない。当初、住居址として調査を進めたが、竈、柱穴など住居に関連する施設は確認されず、掘り込みのみが確認されたので竪穴状遺構とした。

遺物出土状況 実測図に示した遺物の出土位置を第296図に示した。覆土中から多くの遺物が出土しており、遺構より斜面下方の表土中にも S B 1 5 から流失したと思われる遺物が多数出土している。

出土遺物（第297図下段） 須恵器杯A（1～3）、杯B（6～8）、蓋B（4・5）、短頸壺（9）、甕A



第296図 牛出古窯跡 S B15

(10・12)、甕C (11・13)、土師器長胴甕 (14) が出土している。

杯Aには回転糸切りのもの (1・2) と回転ヘラ切り (3) のものがみられる。6と7の高台は杯底部のやや内側に巡っており、杯腰部には明瞭な棱はみられない。8は底径が大きく、高台は杯底部の内側に巡っている。杯腰部には明瞭な棱がみられる。9は短頸壺の体部下半部であり、球形体部に沈線が數本巡っている。10は甕Aであり、S B 1 3の第291図35と類似する。12は平底ぎみで、10の甕Aの底部と思われる。11は甕Cであり、丸底ぎみの13がこの甕Cの底部の形態と思われる。11は体部と頸部の境目がくの字となり上に開く形態で口唇部が薄い。胸部は継縫ヘラ削りである。

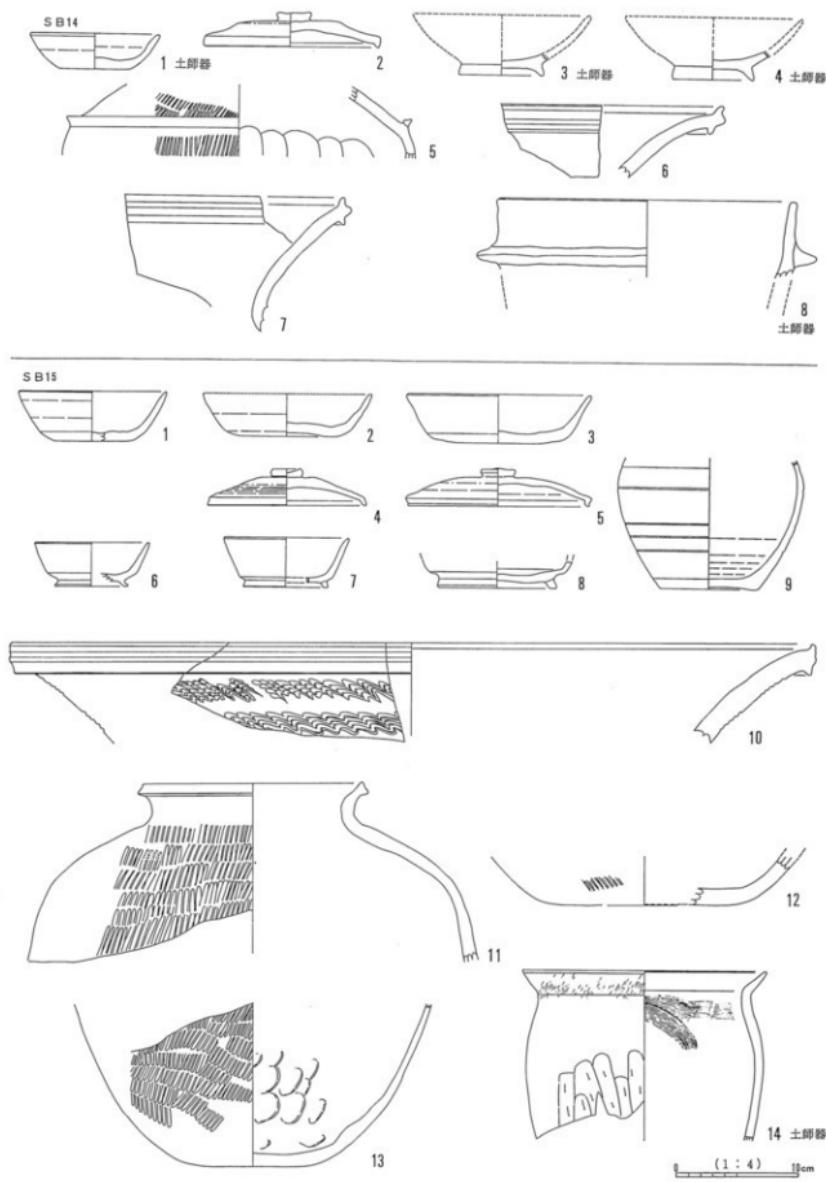
時期 ヘラ切りと糸切り技法の交り合う S B 0 2 や S B 1 3 とはほぼ同一期の住居址と思われる。

S T 0 1 (1号掘立柱建物址) (第298図)

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。平面形は1間×1間で、規模は南北列4.0m、東西列1.8mで面積7.20m²を測る。それぞれのピットは、直径20cm~24cm、検出面からの深さは14cm~24cmである。出土遺物はないが、奈良・平安時代の遺構の覆土に類似するので同時期の所産であると判断した。なお、S T 0 1の南側に、SD 10及びSK 0 7があるが、位置関係からS T 0 1にかかわる施設とも考えられる。

S T 0 2 (2号掘立柱建物址) (第298図)

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。S B 1 4床下に検出された。平面形は1間×1間で、規模は南北



第297図 牛出古窯跡 S B14（上段）・S B15（下段）出土遺物

列2.4mと2.9m、東西列1.4mと1.7mで面積3.86m²を測る。それぞれのピットは、直径16cm~23cm、検出面からの深さは8cm~16cmである。出土遺物はないが、奈良・平安時代の遺構の覆土に類似するので同時期の所産であると判断した。

S A 0 1 (1号柵列 SK 0 8・1 4他) (第299図)

調査時点でSK 0 8、SK 1 4としていた土坑と未命名の土坑が一直線に並ぶことが整理中に明らかとなつた。規模と覆土が類似することから相互に関連した穴と認定した。出土遺物はないが、覆土の様子から奈良・平安時代の遺構と判断した。居住施設と関連した遺構と思われるが、その性格は不明である。

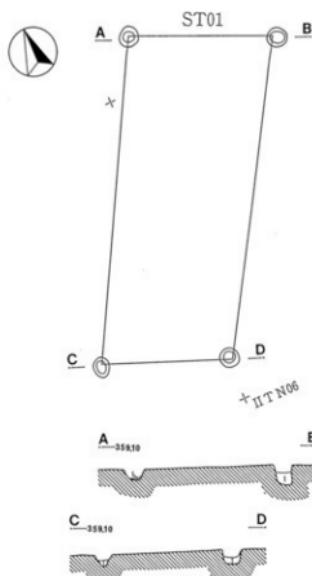
4 墓坑

SK 1 3 (13号土坑) (第300図)

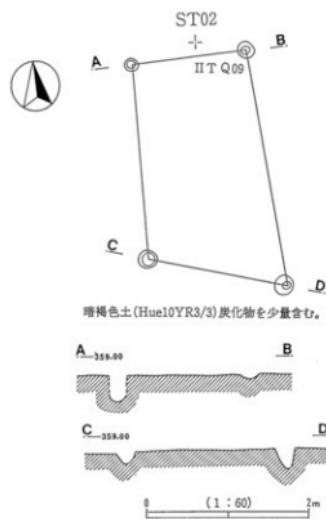
上段丘陵面の居住域から離れた平坦部に位置する。長さ2.08m、幅0.40m、深さ26cmで、短辺が弧状の細長いカブセル形を呈する。底面はほぼ平坦で、浅いピットがひとつある。土坑内より黒色土器の杯が3個出土した。1つは西側の壁際に接して、2つはピットの脇に合わせ口の状態で出土した。これらの杯のうち1点に墨書きが認められたが、文字の判読はできない。

土坑墓と想定して土坑中央部のセクションベルトから採取した土壤のリン・カルシウム分析を行い、土坑内にリン酸とカルシウムが多く含まれていることが明らかとなった。分析者は、「リン酸がどのような物質に由来して富化されたかであるが、土坑の下部ではなく上位で含量が高くなること、堆積物が周辺土壤より有機質であることからすると、リンの含量の増加は土坑内に入れられた物質よりも、むしろ土坑を埋積した土壤に起因する可能性がある。」⁽¹⁵⁾としているが、土坑の形態、出土遺物の状況から本遺構は土坑墓と推定され、リンの含量の増加は遺体埋葬の結果であると考えた方が妥当であろう。

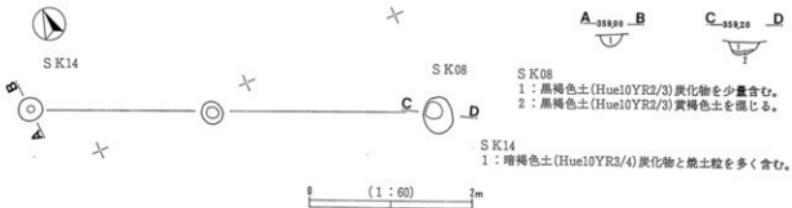
出土遺物(第300図) 1~3は内面黒色処理された杯Aである。3には墨書きが見られるが墨がうすくて判読できない。



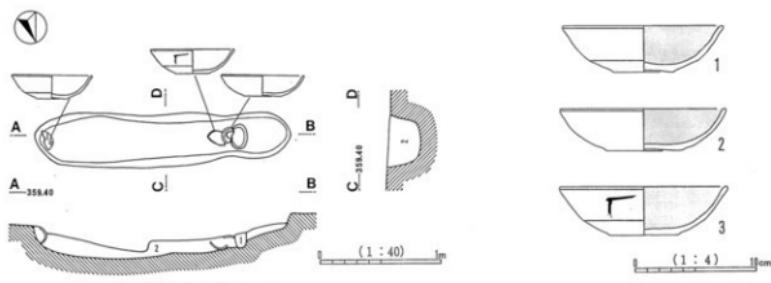
1: 墓褐色土(Hue10YR3/4)黄褐色土をブロック状に混じる。



第298図 牛出古窯遺跡 S T 01・02



第299図 牛出古窯遺跡 SK A01



第300図 牛出古窯遺跡 SK K13

5 焼土坑

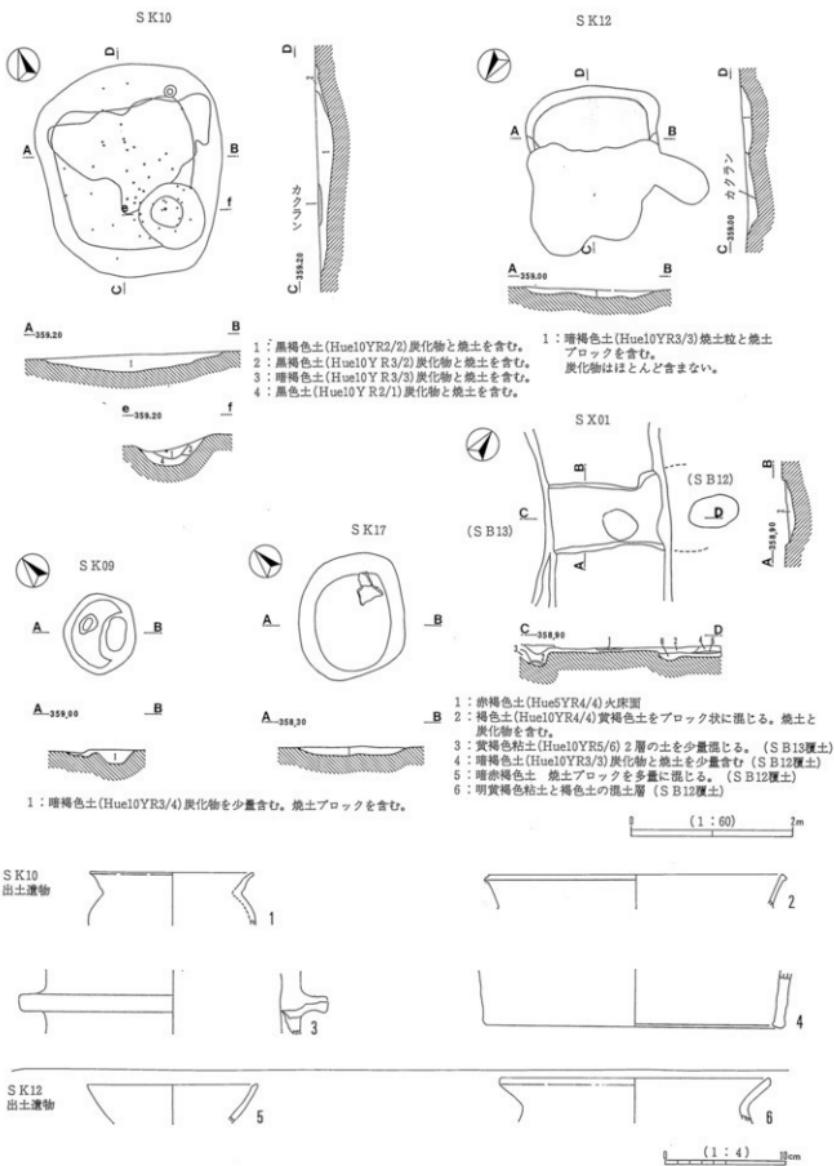
SK 10 (10号土坑) (第301図)

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置する。南北2.60m、東西2.24mの不整な隅丸の方形で、最深部は検出面より24cmの深さである。底面の北半分に火床面が認められ、覆土には焼土と炭化物が含まれている。床面には大小二つのピットが確認され、SK 10と類似する覆土であったが、焼土坑に関連した施設か否かは確定できない。遺物は床面から浮いているものが多い。遺構の構造と出土遺物から本遺構は土師器の焼成遺構と判断した。

出土遺物 覆土中より須恵器片9点、土師器片約130点が出土した。須恵器は杯・甕、土師器は杯・長胴甕(2)・小型甕(1)・羽釜(3)・瓶(4)が出土した。2と同じタイプの長胴甕口縁破片が他に6個出土しており、本遺構で焼成された甕であると思われる。破片から推定して長胴甕はケズリ調整で平底である。この他に植物纖維を混入した焼けた粘土塊が8点出土し、窯壁のような上部構造に用いられたものと思われる。また、須恵器には奈良時代の特徴を示す杯があり、土師器とは時期が異なることから須恵器は混入したものと考えられる。

SK 12 (12号土坑) (第301図)

上段丘陵面縁辺の平坦部に位置し、北西側は攪乱によって破壊されている。規模はSK 10よりやや小さく、残存する一辺が1.58m、覆土は厚さ12cmで焼土ブロックを多く含んでいる。底面と壁面の全面が赤



第301図 牛出古窯遺跡 S K09・10・12・17、S X01

褐色に焼けた火床面となっている。SK10と遺構の規模は異なり、遺物の出土量も少ないが、癪体と思われる粘土塊が出土していることから、本遺構も同様に土師器の焼成遺構と判断した。

出土遺物 須恵器片31点、土師器片44点が出土した。須恵器は杯、杯蓋、甕、土師器は長胴甕(6)、杯(5)である。この他に植物纖維を混入した焼けた粘土塊が25点出土し、窯壁のような上部構造に用いられたものと思われる。また、土師器焼成遺構とすると須恵器は混入したものである。多量の混入した遺物が見られることから、図示した土師器も混入した可能性がある。

SK19 (19号土坑) (第281図)

SB02の覆土内に掘り込んでおり、SB02の床まで掘り下げた時に確認された土坑である。

遺構の構造 底面と一部の壁面が硬く焼けている。残存している火床部分から平面形態を推定すると、隅丸方形で北側に張り出し部分があるものと思われるが、張り出し部分については、火床面が途中でとぎれており、焼土坑の施設である確認はない。焼土坑底部の火床面の残存範囲は80cm×80cmである。遺構の切り合い関係からSB02→焼土坑→SB01の順に作られたものと観察される。

6 その他の遺構

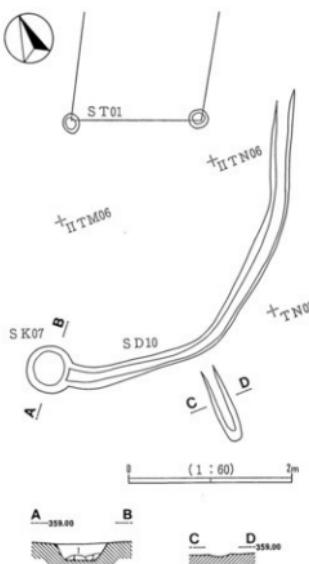
SD10・SK07 (10号溝・7号

土坑) (第302図)

ST01の南側に隣接し、「Y」字状の溝の一端に直径66cm、深さ20cmの土坑が掘られている。土坑と溝の覆土の切り合いは認められず、一つの施設と考えられる。検出面が低いため溝は底面のみが残っており、「Y」字状に分岐する部分は底面が検出されていない。また、溝は北東方向へまだ続くものと思われる。SK07より須恵器片が数点出土している。ST01に近接しており、関連施設の可能性を考慮したい。

SD17・18 (17号・18号溝) (第273図)

上段丘陵面平坦部に確認された。調査区南東側に2条の平行した浅い溝である。それぞれの幅約30cm~60cmで、約1.0mの間隔で平行して走っている。検出面が低いため、およそ17mに渡って確認されたのみであるが、さらに南東方向と北西方向とに続く溝であると思われる。北西側に溝を延長させると豊穴住居群がある場所に当たり、二本の溝はいずれかの居住施設に関連したもの、例えば集落へ通じ道路施設であ



1 : 黒褐色土(Hue7.5YR2/2)炭化物、燒土粒を少量含む。
2 : 噴褐色土(Hue10YR3/3)地山の黒褐色土(Hue7.5YR4/4)を混じ、燒土粒を含む。
3 : 噴褐色土(Hue10YR3/3)2層より燒土を多く含む。

第302図 牛出古窯遺跡 SD10・SK07

ると思われる。出土遺物はないが、覆土から奈良・平安時代の遺構と判断した。

S K 0 2 (2号土坑) (第303図)

上段丘陵面縁辺の斜面部に位置する。斜面下方は流失しており、全貌は不明である。底面も凸凹しており、出土遺物も見られない。覆土より奈良・平安時代のものと判断した。

S K 0 9 (9号土坑) (第301図)

上段丘面縁辺の平坦部に位置する。60cm×68cmの楕円形を呈し、底面には大きな凹凸がある。覆土から判断して奈良・平安時代のものとしているが、出土遺物が無く遺構の時期については明言できない。さらに後世の所産であるかもしれない。

S K 1 7 (17号土坑) (第301図)

上段丘面の斜面部に位置する。南側がS B 1 5に接しており、両遺構間で接合する遺物もあり、S B 1 5の一部であったものかもしれない。底面から須恵器壺の破片が出土した。

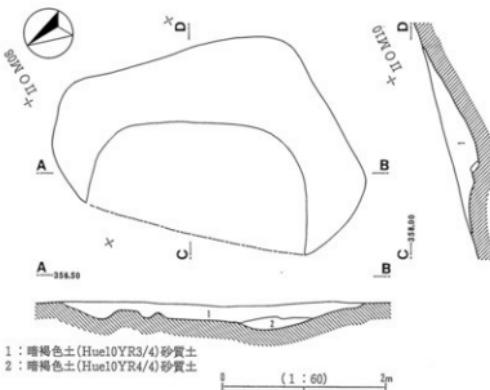
S K 1 8 (18号土坑) (第304図)

上段丘面の平坦部に位置し、他の遺構が集中する地区からは約60mほど離れて単独で存在している。直径約1.04m、深さ0.8mの円筒形の土坑である。覆土の2層以下は埋め戻しによる人為的な体積層と考えられ、特に6層・7層は、硬く締まった土であたかも土坑中央に何かを置きそのままわりに土を詰めて突き固めたようである。その後土坑内の物質は腐食により消滅し土坑内に陥没が起こり1層が自然堆積した、と土層断面観察により推定される。出土遺物

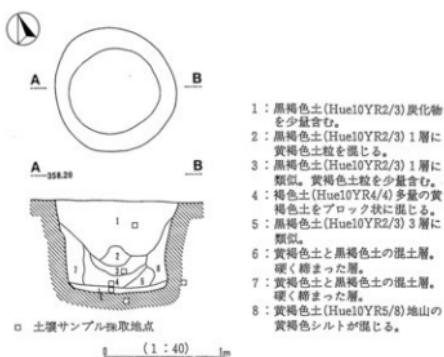
はなく、時期は不明である。覆土の1層が、基本土層II層に類似することから、绳文時代から平安時代のいずれかの時期の遺構であるとしか言えない。なお、土坑墓である可能性を考えてリン・カルシウム分析を行ったが、土坑内とその周辺との土壤中のリン・カルシウムの量に有為な差はない、という分析結果が得られている。

S X 0 1 (第301図)

S B 1 2とS B 1 3の間に検出された浅い溝状の遺構である。住居址と切り合う部分では不整な形状をしている。検出面で火床面が1ヶ所確認されている。他に、S B 1 2の覆土中に確認された火床面の可能性がある焼土は、層位が異なっており先述の火床面と同一



第303図 牛出古窯遺跡 S K 02



第304図 牛出古窯遺跡 S K 18

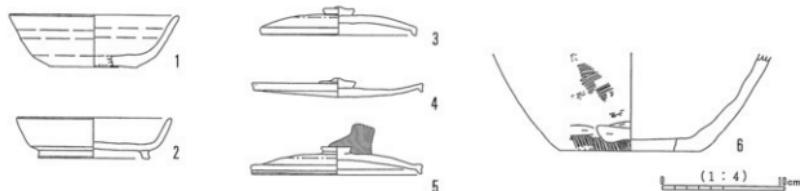
時期ではないと判断される。覆土には黄褐色土または灰色粘土がブロック状に混じており、人為的な埋め戻し土もしくは盛り土の崩落による堆積と考えられる。また、SX 01の覆土2層はSB 13の床面の覆土につながっていることから、本遺構は、住居址が埋没する過程で形成されているか、もしくは住居址に関係する施設であったか、の二通りの解釈ができる。以上の覆土の観察からSB 12→SB 13→(=)SX 01となる新旧関係が確認される。遺構の性格は不明である。出土遺物はないが、SB 13との関係から奈良時代後半期のものと考えられる。

SX 02 (第273・305図)

上段段丘面の斜面部に位置する。自然流路のSD 04と配水管埋設により破壊され、覆土のみが残されているため形態は不明である。覆土の暗褐色土中に須恵器片が含まれている。SB 15と同様の竪穴状造構であるかもしれないが残存部がわずかであるため詳細は不明である。

出土遺物 (第305図) 須恵器杯A (1)、杯B (2)、蓋B (3~5)、甕底部 (6) がみられる。1は回転糸切り未調整で、法量のやや大きめの杯である。6は平底である。

時期 SB 13と同類の杯や蓋がみられ、同時期（8世紀中葉—後葉）のものと思われる。



第305図 牛出古窯跡 SX 02出土遺物

第6節 中世以降の遺構と遺物

1 集石土坑（墓坑他）

覆土に焼骨と炭化物を含む土坑と、その上面に人頭大の礫を配しているものが2基確認された。火葬墓と思われる。

SH 01 (第306図・第14表)

被熱した礫が直径約80cmの円の範囲に不規則に配されている。礫を除去すると直径約50cm、深さ12cmの皿状の土坑が検出された。土坑の覆土には炭化物と焼土と焼骨が含まれていた。覆土上面より、古銭が3枚まとめて出土した。土坑を覆っている礫の多くは被熱しており、礫面の一部が赤褐色または黒褐色に変色している。被熱している礫面の位置関係を観察すると、変色部分が連続しないことから、礫は原位置で被熱したのではなく、被熱後土坑上に集められたものであると判断できる。土坑底面は焼けていない。したがって、本遺構は火葬施設ではなく火葬した焼骨を埋葬した施設と考えられる。火葬時に被熱したものと考えらるる礫が土坑上面に配されていることから、火葬の場所も本遺構に近接したところと考えられるが、その痕跡は検出できなかった。

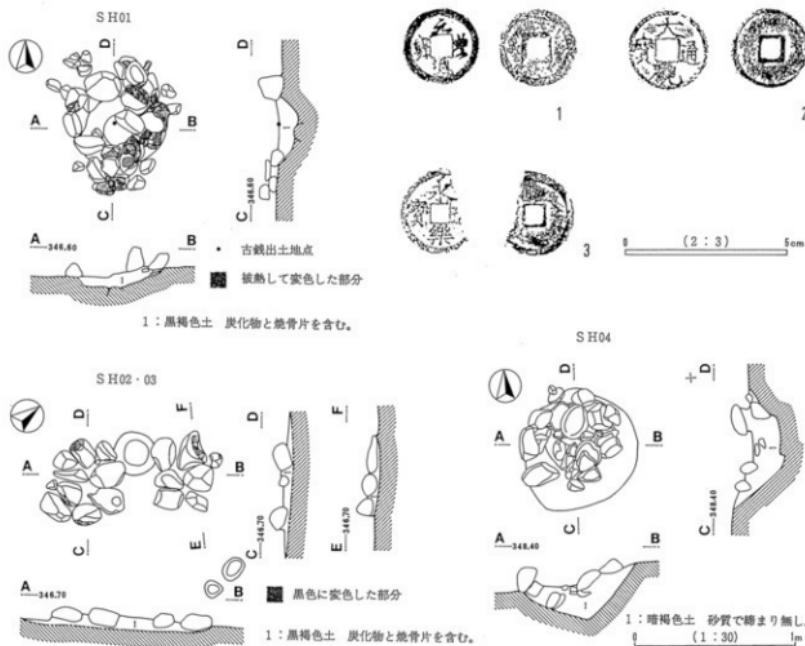
出土遺物 古銭 3点（第14表）。大觀通宝は被熱のためか、一部黒色に変色している。焼骨。

第14表 牛出古窯遺跡 出土銭貨一覧

図版 No.	出土地点	銭貨名	初鋳造年	王朝名	外径	備考
第306図-1	SH01	元豐通宝	1078年	宋	24.9mm	
第306図-2	SH01	大觀通宝	1107年	宋	25.0mm	被熱で一部黒色に変色している。
第306図-3	SH01 SH02付近 DT12グリッド	永樂通宝 開元通宝 祥符元宝	1408年 621年 1008年	明 唐 宋	26.5mm 24.9mm —	欠損 周囲欠損

SH02・03（第306図）

III層上面に、人頭大の礫を約50cm四方に平らに配したものが二か所並んでいる。礫はすべて焼けており、部分的に黒く変色しているものがある。変色した被熱部分が連続しないことから推定して、礫は焼けた後に円形もしくは方形に配されている。礫の下はわずかに皿状にくぼんでいることがセクションから観察されるが、検出面を下げ過ぎたため、掘り込みの形状は不明である。窪みのほぼ中央部にはピットが検出された。直径27cm、深さ5cm、覆土は礫下の窪みの覆土と同様に、焼けた骨片を含む黒褐色土である。以上の状況から、礫の配列は2つのまとまりになるが、これらは同時に配石されたものでひとつの遺構として捕らえられる。火床面は認められない。出土遺物は焼骨片のみ。SH01と同様に、火葬した焼骨を埋葬した施設と考えられる。遺構付近から開元通宝が出土している（第14表）。



第306図 牛出古窯遺跡 SH01・02・03・04

SH 04 (第306図)

直径70cmの土坑中に礫が落ち込んでいる。礫の数点は赤褐色に焼けている。覆土は基本土層II層に類似し、SH 01・02・03の覆土とは異なり焼骨は含まれない。出土遺物なし。遺構の性格は不明である。時期は中世以降のものである。

2 炭窯

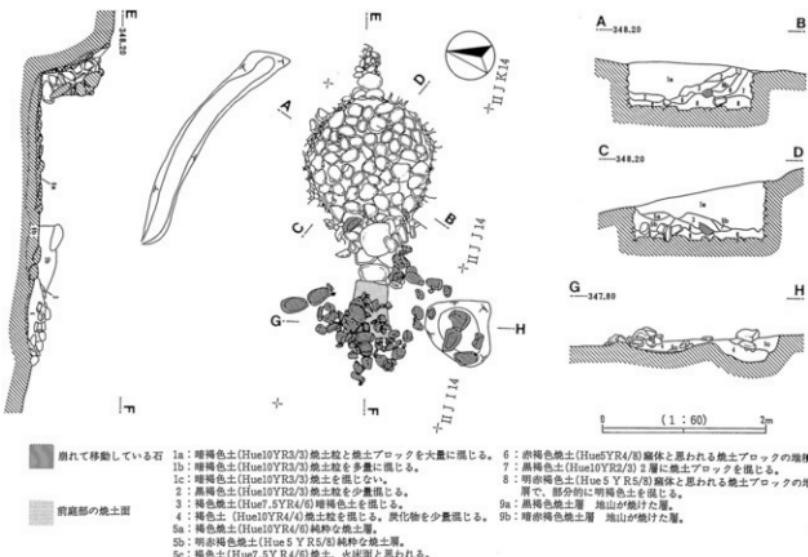
下段丘面に炭窯が1基検出された。時期は限定できないが本項で取り上げる。

SY 02 (第307図)

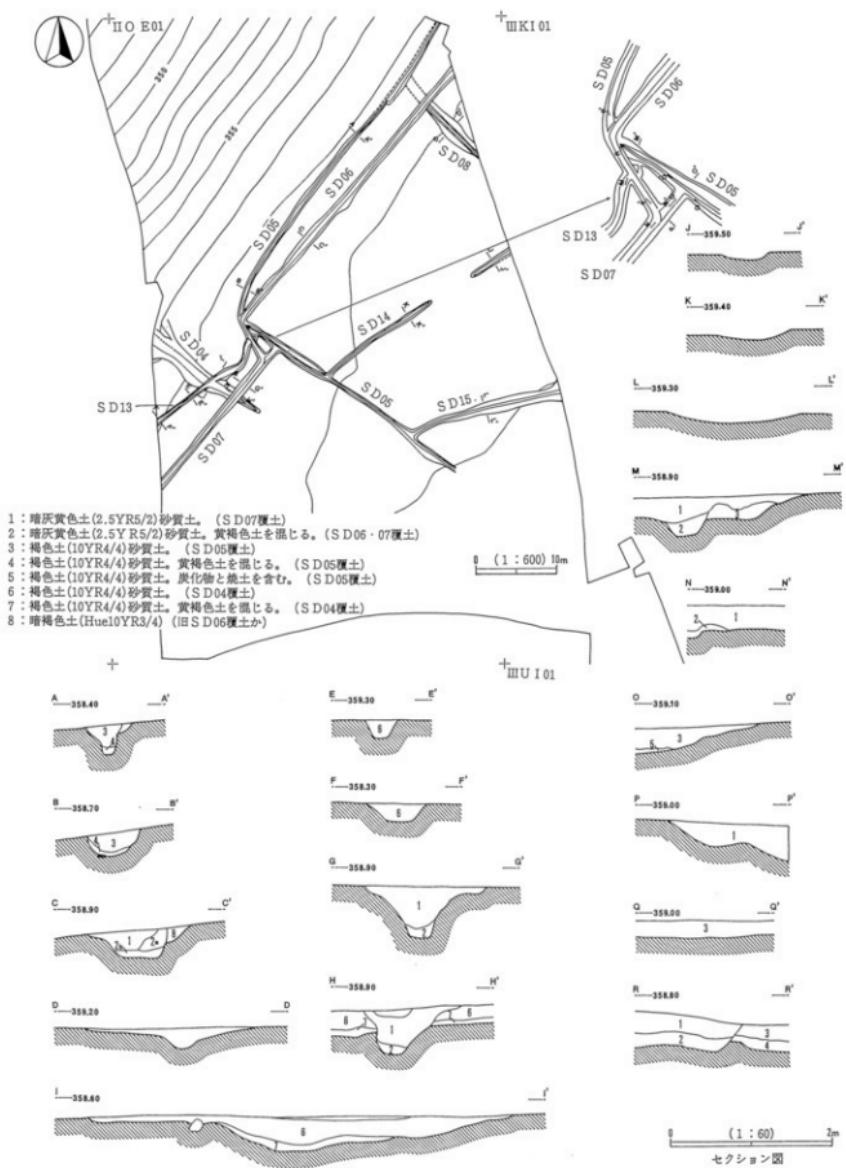
窯の構造 内径約1.6mの円筒形に石を積み上げ、東西方向に焚き口と煙道とが対峙して構築され、床面には平石が敷きつめられている。壁面では石と土との隙間に土が詰められている。窯底での敷石部分の規模は、南北2.7m、東西1.48mである。焚き口西側には焚き口を構築していたと思われる焼けた石が崩れ落ちている。窯の天井と思われる焼土ブロックが覆土に堆積しているため、天井部は土で覆わっていたものと推定される。焚き口部西側の土が焼けており、炭の窯出時に焼けたものと思われる。ちなみに、炭焼きの経験者の話によると、この窯は、いわゆる白炭を焼く窯であるとのことである。

付属施設 焚き口の南西側に直径50cm、最大深さ50cmの不整形な土坑が検出された。民俗例からこれは焚口部を塞ぐための土を取った穴と判断できる。また窯体北側に幅30cm、長さ2.95m、深さ15cm~20cmの溝があるが、窯よりも斜面下方に位置しており、窯との関連があるか否かは不明である。

時期決定ができる遺物がなく、時期は不明である。



第307図 牛古出窯遺跡 SY 02 (炭窯)



第308図 牛出古窯遺跡 近世以降の溝

3 溝

SD 04・05・06・07・08・13・14・15 (第308図)

SD 04は自然に侵食されてできた溝であるが、他は人工的な溝である。断面の切り合い関係から、(SD 04→) SD 05→SD 06・07の順に掘られていることがわかる。また、SD 14・15はSD 05に関連した溝であると捕らえることができる。SD 08は基本土層Ⅰ層が覆土であり、他の溝よりも新しい。これらの溝は覆土から見て中世以降の溝であることは明らかであるが、時期を決定できる遺物は出土していない。性格も不明である。

註

1 分析結果は上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14(平成9年度刊行予定)に掲載する。

2 註1と同じ。

3 北信甕は短い口縁部と砲弾形の胴部、丸底が特徴である。口縁部が回転ナデ調整されている。口縁部と胴部上半部にロクロ痕やカキ目を残し胴下半部に外面ケズリ、内面ハケ調整がされている。北信地域を中心に分布している。直井(直井 1996)氏によると「8世紀後半頃出現し、あるいは導入され、10世紀代まで煮炊具の中心として存在する。」とされる。

北脇甕の特徴は北信甕と同様であるが相違点は北信甕の方が胴下半部の丸味がやや少ないことタタキ技法の痕跡が確認されない個体が多いこと(直井 1996)である。

坂井氏は北脇系の甕を2分類し、9世紀後半以降加賀方面においてみられる口縁部が短く立ち上がり受け口状となるタイプと、口縁端部をロクロでつまみ上げられた越後系のタイプをあげている。また、北信甕は口縁部を回転ナデ調整(ロクロナデ)しているとした。

また坂井氏は北信系の甕と越後系の甕は形態の相違だけでなく胎土にも相違がみられるとし、北信系の胎土は砂粒が多く、赤味が強く、越後系胎土は白くて肌色に近く砂粒が少ないと指摘した(坂井 1993)。

ロクロ土器器甕の口縁端部は、面取りしたようなものと捕み上げるような面取りのあるものと回転ナデのものがあり、これらの三種が栗林遺跡焼成遺構(中島 1994)では同時に焼成されていたことが報告されている。

4 羽蓋は松本平では松本11期(10世紀後半)に長胴甕と小型甕に代わって出現すると小平氏は述べている(小平 1990)。

武藏国の中世成立期の煮炊き土器を扱った水口氏によると(水口 1991)、武藏型甕A類(口頭部「区」の字形)・B類(口頭部「コ」の字形)から甕C類へ転換する第II段階第2小期(下限は10世紀後半)に羽蓋が登場し、この段階で須恵器の生産が終わっている。羽蓋は第IV段階(下限は11世紀後半)まで続くとしている。

5 註1と同じ。

引用文献

- 小平和夫 1990 第3章第5節古代の土器 『一松本市内その1—最終編』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 小林真寿 1993 所謂「北信型の甕」について 向坂鋼二選曆記念論集
- 坂井秀弥 1993 長野県飯山市平安期佐渡塙須恵器・越後系土器 『北脇古代研究』4
- 坂井秀弥 1989 b 北脇型土器長甕の製作方法 『新潟県考古学講話会会報』3 新潟県考古学講話会
- 佐沢 浩 1988 a 古代の土器 『長野県史』考古史料編(四)
- 直井雅尚 1996 信濃における奈良平安時代の土器器甕について 『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 中島庄一 1994 第III章栗林遺跡第6節5遺物「土器器甕焼成構の土器」 『一長野県中野市内栗林遺跡・七瀬遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘報告書19
- 水口由紀子1991 武藏国における中世成立期の煮沸土器小考 『埼玉考古学論集設立10周年記念論文集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第9章 調査の成果と課題

第1節 高丘丘陵における中期・後期旧石器時代移行期から後期前半期の石器群—がまん淵遺跡を中心として—

1 高丘丘陵の旧石器時代遺跡

(1) 高丘丘陵の地形

高丘丘陵は長野盆地の北端部、盆地が幅を狭めて収束する部分に位置し、西を画する西部山地に平行するように南北に延びる細長い丘陵（長丘・高丘丘陵）の南端部分にあたる。西部山地と長丘・高丘丘陵の間には千曲川が嵌入蛇行し、両者を分断する。丘陵の南端部では西部山地との距離がやや広がり、盆地底部が湾状に入り込み、丘陵は西部山地から延びる半島状の地形をなしている。

次に高丘丘陵の形成過程を概観し、遺跡の形成年代について考えておきたい。フォッサマグナの海に約1400万年前に誕生した古長野湾（ほば松本盆地と長野盆地、飯山盆地以北）は約170万年前には陸地化し、約70万年前筑摩山地の隆起により松本盆地と長野盆地にあたる地域が分断される。そして、約50～60万年前、長野盆地の西縁部を境に西部山地側が隆起、河東山地側が沈降する活動が開始され、盆地西縁部に沿って細長い凹地が長野市から飯山市にかけて形成された。これが初源期の長野盆地である。凹地には周囲から河川が流れ込み、豊野町付近を中心として、湖が形成され、厚い堆積層を形成した。この湖を古豊野湖と呼び、堆積した地層を豊野層と呼ぶ。

20～40万年前、盆地西縁部は激しい断層運動により隆起し、盆地西縁部の境界を明瞭にするとともに、豊野層を不整合に覆う角礫層や砂礫層からなる南郷層が形成される。南郷層は20～10万年前の間に堆積したと考えられている。その後、西部山地はさらに激しい隆起運動を行い、盆地よりの西部山地裾部分に新しい丘陵群を形成した。高丘丘陵はこの隆起運動によって形成された新しい丘陵群の一つであり、豊野層と南郷層をのせ、盆地底部と西部山地との境界線を形成している。

このように、高丘丘陵に人類が活動できる環境が形成されたのは、高丘丘陵が湖底より隆起した20～10万年前以後のことであると考えられる。したがって、高丘丘陵の旧石器時代遺跡は少なくとも20～10万年前以後に形成されたものであると考えられるのである。

高丘丘陵は半島状をなして、盆地底部に突き出しているが、その先端部分の東側は延徳田園と呼ばれる低湿地になっている。ボーリング調査で、地下35mに厚さ5cmに堆積した始良Tnが確認されている。始良Tn降下以後35mの土砂が堆積し、低湿地を埋めることになる。とすれば、遺跡が営まれた当時、延徳田園一帯には湖が形成され、高丘丘陵はその湖に突き出していた可能性もある。

(2) 高丘丘陵の遺跡と立地

盆地底部に突き出した高丘丘陵にはがまん淵遺跡をはじめ、沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、牛出古窯遺跡、浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡が知られ、千曲川を挟んだ対岸の西部山地裾部の丘陵には南曾峯遺跡が知られている。結論が前後してしまうが、南曾峯遺跡は中期旧石器時代新段階、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺

跡は中期・後期旧石器時代移行期、立ヶ花表遺跡、浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡は後期旧石器時代前半期に編年される石器群である。中期及び移行期の遺跡は高丘丘陵南半部分の限られた範囲に集中し、特に移行期のがまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡は丘陵の先端を二つにわける小さな谷を挟んで隣接している。

ところで、がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡については若干の説明が必要である。埋蔵文化財センターは半島状に突き出した高丘丘陵の先端を二つにわける小さな谷底に沿うように建設された高速道路幅部分を調査しているが、高速道路の建設に伴い周辺道路も整備され、それらの道路部分については中野市教育委員会が調査している。したがって、がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡は調査時期を違えて、埋蔵文化財センターと中野市教育委員会でそれぞれ調査した経緯がある。がまん淵遺跡石器出土地点は谷の東斜面に位置し、埋蔵文化財センターの調査範囲を越えて東側に広がる可能性があった。この部分については中野市教育委員会が調査する計画であったが、掘削面が豪雨で崩落し調査出来なかった。

谷の西斜面に位置する沢田鍋土遺跡は中野市教育委員会による2回の調査が実施されている。1回は埋蔵文化財センターの調査区に平行する道路整備に伴うもの、2回目はその調査区の北端に直行して西に延びる道路建設に伴うものである。中野市の第1回目の調査区では細石刃石器群のブロックと搅乱層からベン先形の台形様石器及び剥片類を検出している。第2回目の調査では移行期のブロックを検出している。このブロックは1回目の調査区からやや西に離れている。こうした調査結果から、谷の斜面には移行期あるいは後期前半期のブロックが複数存在していた可能性が高い。その意味で、細石刃ブロックに含めた大型石器や中野市教育委員会の1回目の調査で検出された打製石斧様の石器については移行期ないし後期前半期の所産である可能性も否定できない。

ちなみに、後期前半期の立ヶ花表遺跡も沢田鍋土遺跡の調査区とはやや距離をおくが同じ西斜面に位置している。このように、谷を挟む東西の斜面には点々と、移行期から後期前半期のブロックが分布していると思われ、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡は谷を挟んで分布するブロック群が発見された地点の名称といった趣さえある。

高丘丘陵の先端に開析された小さな谷という地形条件と遺跡の立地は強い関連性をもっていると考えられる。場合によっては先ほど推測した延徳田園の湖が谷底にまで広がり、谷の斜面は湖に面した斜面であったかもしれない。水辺付近は丘陵部の単純な森林植生ではなく、より多様な植生をもった水辺環境を形成し、空のひらけたスペースを提供したであろう。数少ない移行期の遺跡が狭い範囲に複数分布するのは当該期の遺跡がこうした限定的な立地環境を要求したためであろうか。

2 ガマン淵遺跡

(1) 石器の分類

石器は（1）素材剥片剥離技術→（2）素材剥片の細分→（3）調整加工の部位と石器の形態の順に階層的に分類する。がまん淵遺跡の石器の形態は調整加工によって素材剥片の形状を大きく変えておらず、素材剥片のあり方が石器の形態=機能に大きな影響を与えると考えられるからである。こうした石器の形態と調整加工のあり方は二つに解釈可能であろう。第1の解釈は石器形態と素材剥片剥離は無関係であり、造ろうとする石器形態に似合う剥片を選択したため調整加工が少ないとする場合、第2の解釈は剥片剥離と石器形態が結びついており、造ろうとした石器にあわせて剥片を剥離したため調整加工が少ないとする考え方である。

また、これとは別に、石器の全体的な形態は全く意識されておらず、刃部のみが意識されていたと考えることもできよう。このように考えれば刃部のみの分類を行うべきであり、分類基準は全く異なるものと

なろう。が、筆者は否定的である。すでに、前期段階に優美な斧状の両面加工石器が存在し、それがどのような意識と結びついていたかは別として、人類は特定の形の石器形態を作り続けていたからである。

さて、仮に第1の解釈が正しければ特定の剥離方法で作られた剥片の類型が石器の形態に結びつかないであろうし、第2の解釈が正しければ剥離方法、葉材剥片の形態、石器の形態が有機的に結びつくことになろう。がまん渾遺跡のみでは明確にはならないが高丘丘陵の石器群全体を視野にいれると、第1と第2の解釈の中間的な様相を示していると考えられる。画一的な素材提供→多様な形態への加工という調整加工技術に大きく依存する後期旧石器時代後半期の石刃技法による手法とは異なる石器製作のあり方である。

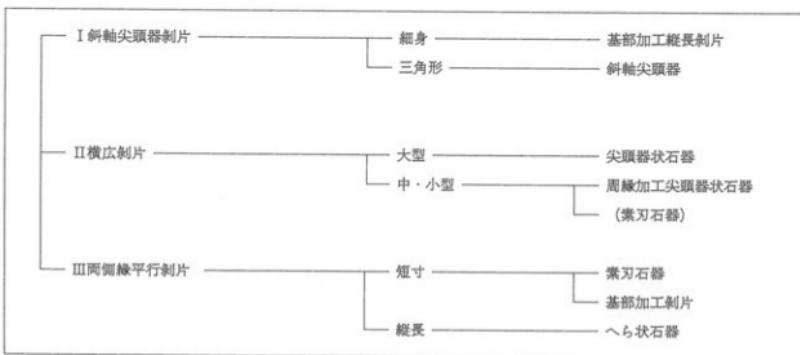
素材剥片はI 斜軸尖頭器剥片、II 横広剥片、III両側縁平行剥片に分類する。

I 斜軸尖頭器剥片は三角形の剥片で、主要剥離の方向と石器の軸が斜めに傾くもの(安斎・1988)、円盤状石核から剥離されたとされる。おそらく、ひとつの円盤状石核から1・2枚の斜軸尖頭器剥片が剥離された程度であったろう。

斜軸尖頭器剥片はA細身の三角形とB三角形の二者に分類できる。前者を斜軸尖頭器剥片とするに抵抗があるかもしれないが、第43図4を見れば斜軸尖頭器剥片と同じであることが理解されよう。主要剥離面の方向と剥片軸及び稜がずれ、細いけれども三角形を呈し、通常の斜軸尖頭器剥片と同様な要件を満たしているものと思う。A細身のものは基部加工縦長剥片の葉材となり、B三角形はそのまま斜軸尖頭器として利用される。

II横広剥片は長さに比して、横幅の広い貝殻状剥片である。平坦な剥片剥離作業面が用意されれば、普通はこの形態の剥片しか剥離されない。もっとも、原則的な剥離技法であろう。大きく厚い横広剥片と中・小型の貝殻状剥片の二者がある。前者は1例であるが、尖頭器状の石器の素材となっている。後者は周縁加工や両面加工の尖頭器状石器、素刃石器の素材として利用される。

III両側縁平行剥片は剥片の両側縁がほぼ平行するものをさし、短寸のものと縦長の二者があり、前者は素刃石器、後者はへら状石器の素材となる。



第309図 石器分類表

(2) 石器各説

A基部加工縦長剥片（第43図2・3）

細身の斜軸尖頭器剥片を素材とし、基部を中心として背面及び腹面の両面から平坦な調整剥離が認められる。2では側縁にまで調整剥離が認められ、3も基部付近に大きめの剥離が認められる。調整剥離は刃

部を作出するものではなく、打面部分の幅を狭くし、全体に柳葉状の形態に仕上げるためと思われる。

高丘丘陵では沢田鍋土遺跡に類例を求めることができる。また、野尻湖遺跡群立ヶ鼻遺跡、安沢遺跡、権現山遺跡II、七曲遺跡などにも類例を求めることができようか。基部加工縦長剝片は佐藤宏之氏の定義にかかるものであるが、細身であるという相違点がある。むしろ、佐藤氏が初期ナイフ形石器に先行する形態の石器として取り上げた基部加工縦長剝片は本稿で基部加工剝片として分類する石器により類似する。しかし、初期ナイフ形石器との形態的な類似のみに限れば本例のほうが、基部加工剝片より類似度が高いといえよう。

B斜軸尖頭器（第50図 61・64・65）

斜軸尖頭器剝片をそのまま用いた石器である。三例とも先端部分の側縁にマイクロコンタクトフラクチャーを観察することができることから、石器として利用されたものと考えた。64は基部及び先端部分に調整剝離様の剝離痕が観察される。61にも基部に剝離が認められるが調整剝離かどうか判然としない。いわゆる斜軸尖頭器剝片と比較するとやや幅に比して長さが短い。打面を水平に位置させると横広剝片や両側縁平行剝片との類似性が目立つ。福島県上野出島遺跡（第313図8～10）や馬場壇A6層（第313図1）に類例を求めることができようか。

がまん淵遺跡の斜軸尖頭器の先端部分にマイクロコンタクトフラクチャーが観察され、尖頭状に交差する鋭い縁辺が刃部であると考えられると同時にこの石器の機能を暗示している。斜軸尖頭器には縁辺が未調整の場合と調整剝離痕のような小剝離が認められるものがある。これらの小剝離痕が使用痕である可能性も否定できない。また、大きく素材剝片の形状を変えた例もあるが、刃部再生の可能性も考える必要があろう。

C尖頭器状石器（第50図59）

大型で厚い横広剝片を素材として、主に腹側からの平坦剝離により片面加工の尖頭器状の形態に加工されている。類例として、南曾峯遺跡の両面加工の尖頭器状石器（第314図2）、福島県大平遺跡（第313図33）や竹ノ森遺跡上層（第313図40）の矛状石器に類例を求めることができようか。

D素刃石器（第50図60）

厚い中型の横広剝片を素材とする。打面部分とステップフレイキングとなった先端を側縁とした台形状の石器である。側縁にあたる打面部分に急角度な調整剝離が認められる。

E周縁加工尖頭器状石器（第50図63）

横広剝片が利用されたと思われるが、素材剝片の変形が著しく、どのような素材剝片であるか断定できない。腹側からの調整剝離により桃実状の平面形態に加工される。中期新段階の石器群を構成する両面加工や周縁加工のスクレイパーと同種の石器であると考える。

F基部加工剝片（第312図28）

短寸の両側縁平行剝片を素材剝片とし、基部に調整剝離がなされる。打面は急角度の小さな剝離によって取り除かれ、基部の背面と腹面に打面側からの平坦な調整剝離が認められる。類例は沢田鍋土遺跡に認められる（第312図17）。佐藤宏之氏が初期ナイフ形石器に先行するとした基部加工縦長剝片との類似性が高い。先端の縁辺にマイクロコンタクトフラクチャーが認められる。

後出と考える沢田鍋土遺跡では素刃石器（第312図20・21）とは分離されることから、基部加工剝片としたが、機能的には素刃石器との類似性が指摘されよう。

J一側縁加工石器（第50図58）

縦長の剝片を素材とし、その一側縁に並列するやや急角度の小さな調整剝離痕が認められる石器である。類例は沢田鍋土遺跡に認められる（第312図16）。

また、後期前半期に認められる弧状ナイフ形石器（佐藤1992）と形態的に極めてよく似ている。系譜として連続するものとは思えないが、機能的には類似しているのであろう。

Hへら形石器（第43図1）

大型の縦長剝片を素材とし、基部及び側縁に小さな調整剝離を施した石器である。素材となった剝片の背面は先端部分に礫面を残し、主要剝離面と同じ打面から剝離されたと思われる細長い剝離痕が残る。佐藤宏之氏がへら形石器に機能的連関を示すとした秋田県松木台III遺跡出土例に類例を求めることができようか。

(3) 剥片剝離

A. 石核

石核（残核）の分類についてはがまん淵遺跡からの出土例のみでは、資料数が少なく、類型化できないため、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡（台形様石器伴出）、浜津ヶ池遺跡（台形様石器伴出）、立ヶ花表遺跡（台形様石器伴出）の石核を加えて分類した。移行期から後期旧石器時代前半期までを一括して取り扱うことには問題があるが、驚くほど類似する部分が多く、移行期から後期旧石器時代への移行が連続的であること示す結果となっている。

第1類（第310図1～5）：円盤状ないし盤状を呈し、打面と剝片剝離作業面がそれぞれ表裏面に位置するものを本類とした。打点は選択された打面の全周をめぐり、結果として剝片剝離の方向は石核の中心に向かうことになる。がまん淵遺跡1・2・4、牛出古窯遺跡3、沢田鍋土遺跡5を本類とする。がまん淵遺跡4を本類に含めることには若干の躊躇したが、石核が臨機的な石器として利用されたものと考えた。

比較的大きなものは、採取してきた原石をそのまま利用するのではなく、いったん分厚い剝片に分割して用いている様子ががまん淵遺跡1や牛出古窯遺跡3の表皮を残したものから伺われる。剝離面が表裏両面に認められるが、その数はどちらか一方の面に偏り、打面がある程度固定されていたことを示している。

残された剝離痕からみると、これらの石核から剝離された剝片は貝殻状ないし台形を呈した横広剝片であったと考えられる。

例外として、牛出古窯遺跡2がある。この例には石核が切断されたかのように、縁辺の一部が分厚くなっている。これが故意なのか、偶発的なものなのかは判断しかねるが、分厚い縁辺の角近くを打点にした剝離では4cm前後の長さをもつ剝片が剝離されたており、注目される。おそらく、剝離された剝片は加撃の方向と剝片の長軸が交差する三角形であろう。

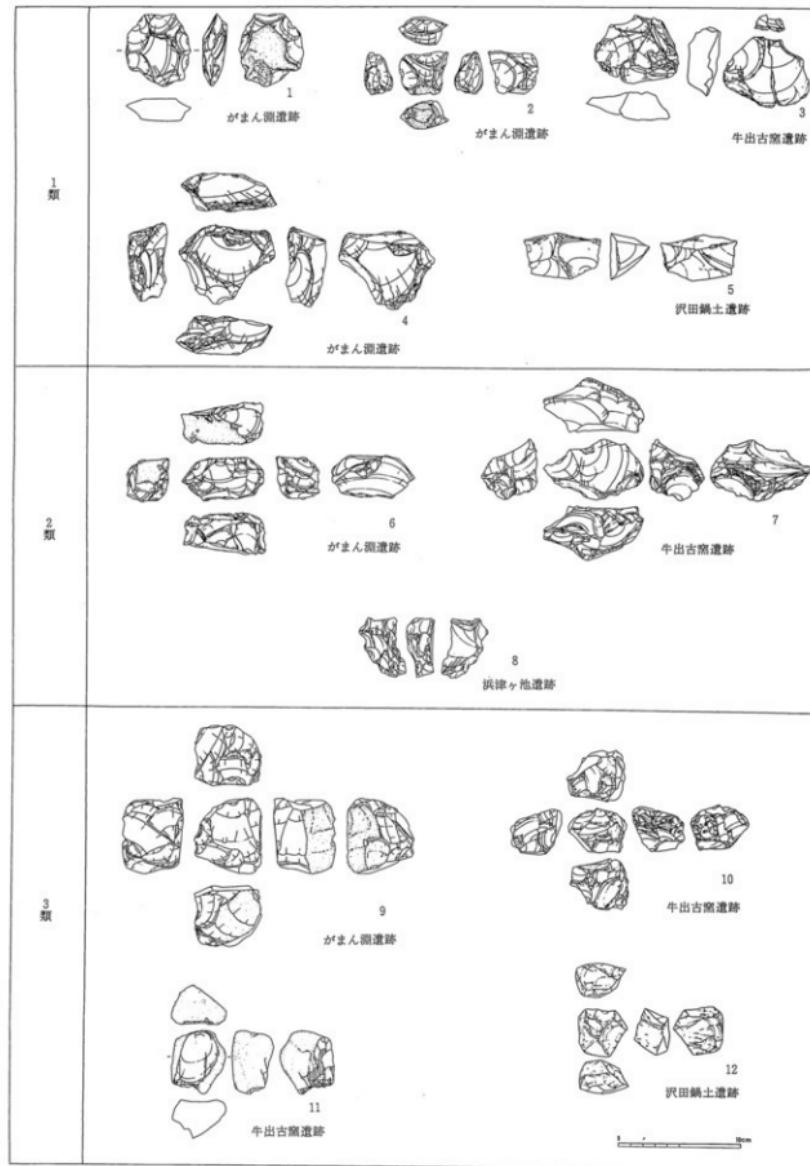
第2類（第310図6～8）：三角柱ないし角柱の形態をしたもので、側面に打面を設定し、隣接する側面を剝片剝離作業面として、打点を横方向に移動させながら、複数回の剝片剝離が行われている。1類と比較すれば、剝片剝離角が小さくなっている。

がまん淵遺跡6、牛出古窯遺跡7を本類とした。また、立ヶ花表遺跡や浜津ヶ池遺跡からも出土している。がまん淵遺跡6は二つの打面と二つの剝片剝離作業面が認められ、両打面とも積極的な打面調整は認められない。牛出古窯遺跡7は打面が固定され、大きな剝離痕が残る。未発達な打面調整の可能性もある。

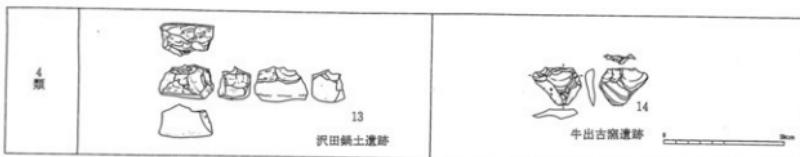
なお、がまん淵遺跡6では打面となった二つの側面及び上下の頂面に礫の表皮が残り、ほぼ角柱状の転石がそのまま石核として利用されたと考えられる。

第3類（第310図9～12）：立方体の石核で打面と剝片剝離作業面を入れ替えて剝片剝離作業を行う石核である。同一打面から数回の剝片剝離が行われる。がまん淵遺跡9、牛出古窯遺跡10・11が本類にあたる。また、牛出古窯遺跡11は本例の初期段階に何らかの理由で、剝片剝離が中止されたものであろう。

全体的には台形ないし貝殻状の剝片が剝離されたものと考えられるが、がまん淵遺跡9の例では初期の剝



第310図 石核分類表(1)



第311図 石核分類表(2)

片剥離作業面から、礫面を残した縦長剝片が2ないし3枚剥離されたであろう。石器群の中に認められる縦長剝片にはこうした過程で剥離されたものが含まれていよう。

第4類(第311図13・14)：本類には不定形の石核を一括しておく。今後の資料の増加の中で類例が増加するものと考える。沢田鍋土遺跡13、牛出古窯遺跡14・第246図12は厚い剝片の裏面から素材剝片を剥離している。

B接合資料

接合資料3 (第47図39~42)

3例の剝片が接合した例である。40は三角形、41は縦長剝片、42は三角形の剝片である。40と41は同一打面から、42は180度逆方向の打面から剥離される。打面は剥離面を利用するが、打面調整は認められない。剝片はいずれも礫面を残しており、剥離行程の初期の段階で剥離されたものであろう。接合資料の背面には両極の打面とは異なる方向、左側縁には90度横方向から、右側縁には下部打面と同一方向及び45度の方向からの剥離痕が認められる。これらの剥離は接合剝片が剥離される以前の段階のものである。残された礫面は緩やかなカーブをもっており、石核の原材は直径10cm前後の転石であった可能性が高い。接合した剝片が剥離される以前に、上下の打面は形成される。

この接合資料は縦長の剝片が、両極にある打面から、打面を固定して複数回の剝片剥離が行われたことを示している。縦長剝片の連続的な剥離へと結びつく可能性もあり、重視されなければならない。

接合資料4 (第47図43~45)

二つの横広剝片が接合した例である。両剝片は打面を共有する。打面は平坦な剥離面であるが打面調整は認められず、打点は横方向に移動する。両剝片の打面と45度あるいは90度方向を変えた剥離痕が両剝片の背面に残されている。

(4) 小結

素材剝片を大きく三類に分類した。斜軸尖頭器片（1類）は中期旧石器時代を特徴づける剝片であり、横広剝片（2類）は中期旧石器時代から後期旧石器時代にかけて、両側縁平行剝片（3類）は移行期に特徴的な剝片とすることができるよう。

中期旧石器時代に認められる斜軸尖頭器剝片と横広剝片が作り出す剝片双極構造は、縦長剝片と短寸な側縁平行剝片を含めて、がまん渕遺跡の石器群にも基本的に受け継がれているものと推測される。また、周辺加工の尖頭器状石器は中期旧石器時代新段階の特徴的な石器であり、斜軸尖頭器剝片とともに伝統的な要素と考えられよう。

こうした中期旧石器時代との同質的傾向と反対に新しい様相を見せる部分もある。一つは基部加工縦長剝片の素材となった細身の斜軸尖頭器剝片の出現である。斜軸尖頭器剝片と同質に剝片剥離過程によって剥離されたものと考えているが、縦長剝片への志向性が強く斜軸尖頭器剝片剥離過程に反映された結果ではないかと考える。この要求は移行期をとおして両側縁平行剝片の縦長化へと結び付いていくことになる

と考えられるが、がまん淵遺跡では斜軸尖頭器剝片の剝片剝離過程にも求められていたのであろう。

また、剝片基部に対する調整剝離が、縦長剝片や両側縁平行剝片に顕在化する。がまん淵遺跡では両側縁平行剝片や細身の斜軸尖頭器剝片（縦長剝片）を素材とした石器に限定してこの傾向が認められるが、後続する沢田鍋土遺跡では横広剝片の基部加工も顕在化し、定形的な石器形態を形成している。基部加工やその他調整剝離には平坦剝離が基本的に利用されるが、一側縁加工石器（第50図58）と基部加工剝片（第50図62）には比較的急角度で並列しながら連続する剝離が認められる。中期旧石器段階では平坦剝離を用いて、素材剝片の形状を大きく変えるのが一般的であり、こうした急角度の調整剝離は新しい要素とすることができるよう。

石器は基部加工縦長剝片、基部加工剝片、尖頭器状石器、一側縁加工石器、へら状石器、周縁加工尖頭器状石器、斜軸尖頭器、素刃石器に分類した。周縁加工尖頭器状石器や斜軸尖頭器は中期旧石器時代前半期を特徴づける石器であり、中期から移行期に連続する尖頭器状石器、素刃石器を除く他は新出の石器である。

以上見てきたように、がまん淵遺跡の石器群は中期旧石器時代的様相と移行期の両特徴を備えており、中期新段階から移行期への過渡的な石器群ということができ、移行期の古い段階の石器群であると考えられよう。そして、中期新段階的な伝統的様相と移行期の新しい様相の併存は中期旧石器時代の石器群を母胎として移行期の石器群が成立していることを示しており、その間には急激な変化が存在しなかったことは確かであろう。

安斎正人氏は移行期の石器群は石子原遺跡→平林遺跡→山方遺跡と変遷しているとする。この変遷観に従えば、がまん淵遺跡は石子原以前の段階とすることができようか。

3 高丘陵の石器群

(1) 変遷段階の想定

本節ではがまん淵遺跡を含めた高丘陵の石器群を概観し、中期旧石器時代新段階から後期旧石器時代前半期までの石器群の変遷過程を想定しておきたい。高丘陵の石器群については、地質学的な年代測定や理化学的な年代測定は行われていない。したがって、各遺跡石器の石器群を同時区分するためには、石器や剝片の形態、剝片剝離技術、石器組成など類似性や差異をこれまでの編年に対比させ、その変遷を想定する他に手段はない。この手法は大きな誤ちを犯す危険性が高いが、がまん淵遺跡の考古学的な位置づけを考えるために、敢えて高丘陵の石器群の変遷を想定しておきたい。

高丘陵の当該期の遺跡にはがまん淵遺跡の他に、南曾峯遺跡（第314図）、沢田鍋土遺跡（中野市教育委員会1995）、立ヶ花表遺跡、牛出古窯遺跡、安源寺遺跡（長野県考古学会1969）、浜津ヶ池遺跡（中野市教育委員会1996）がある。これらの石器群は斜軸尖頭器剝片が含まれる南曾峯遺跡、がまん淵遺跡のグループと含まれない沢田鍋土遺跡、立ヶ花表遺跡、牛出古窯遺跡、安源寺遺跡、浜津ヶ池遺跡のグループに大きく二分することができる。

斜軸尖頭器剝片を含むグループには斜軸尖頭器剝片を中心に組成されている南曾峯遺跡、斜軸尖頭器剝片と両側縁平行剝片が併存し、半両面加工の尖頭器状石器を組成するがまん淵遺跡がある。

斜軸尖頭器剝片剝片、半両面加工の尖頭器状石器は中期旧石器時代新段階を特徴づける石器類である。一方、両側縁平行剝片は縦長志向性をもつ移行期の特徴を具現していると考えられる。したがって、斜軸尖頭器状剝片の減少と両側縁平行剝片（寸詰まりの縦長剝片）の増加を当該期の石器群変遷の大きな流れと考え、南曾峯遺跡→がまん淵遺跡という時間的序列を想定しておきたい。

一方、斜軸尖頭器状剝片剝片を含まない石器群は台形様石器を伴わない沢田鍋土遺跡と、台形様石器を伴う立ヶ花表遺跡、牛出古窯遺跡、浜津ヶ池遺跡があり、後者では使用される石材も黒曜石に集中し、様相を大きく変えている。沢田鍋土遺跡は短寸の両側縁平行剝片や素刃石器を組成とし、台形様石器を欠落させることから、台形様石器を伴う石器群の前段階に編年されるであろう。また、台形様石器を伴う石器群は明確な基部両側縁加工を持たない台形様石器から組成される立ヶ花表遺跡、基部両側縁加工の台形様石器に局部磨製石斧が伴う牛出古窯遺跡、やや小型の幾何学的な台形様石器を伴う浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡という変遷序列を想定しておきたい。

南曾峯遺跡→がまん淵遺跡→沢田鍋土遺跡→立ヶ花表遺跡→牛出古窯遺跡→浜津ヶ池遺跡・安源寺遺跡という変遷が考えられ、南曾峯遺跡は中期旧石器時代新段階、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡は移行期、立ヶ花表遺跡以降は後期旧石器時代の所産であり、立ヶ花表遺跡が関東武藏野台地関東ロームX層ないしIX層段階、牛出古窯遺跡がIX層、浜津ヶ池遺跡・安源寺遺跡はVII層段階に相当すると考えておきたい。

(2) 斜軸尖頭器剝片の変質

斜軸尖頭器は南曾峯遺跡とがまん淵遺跡から、合計7点出土しているが、その形態にバリエーションがある。佐藤宏之氏は中期旧石器時代新段階で斜軸尖頭器状剝片の主要剝離の方向と石器の軸が一致し、剝片の両側縁が平行するようになると指摘し、斜軸尖頭器（剝片）が中期旧石器時代をとおして変化することを指摘している。おそらく、南曾峯遺跡とがまん淵遺跡の斜軸尖頭器に見られる相違も斜軸尖頭器剝片の通時的な変化の一端を示していると考えられる。

南曾峯遺跡の斜軸尖頭器剝片（第314図1）は主要剝離面の方向と石器の軸は一致しないが、両側縁が平行しており、佐藤氏の指摘する縦長化の方向の様相を示しているのではないかと考える。一方、南曾峯遺跡に後出すると考えたがまん淵遺跡の斜軸尖頭器には細身のものと平面形が菱形状をなす二つの斜軸尖頭器が認められる。菱形を呈するものはやや小型で主要剝離面の方向と石器の軸はずれ、全体として斜軸尖頭器剝片の形態をもっているが、打面の幅が広く、長さも短く、それまでの斜軸尖頭器剝片とはやや異なる印象を抱かせる。

後期旧石器時代前半期に編年される立ヶ花表遺跡の剝片の置き方を変えるとがまん淵遺跡の斜軸尖頭器剝片と良く似た形状となり、立ヶ花表遺跡の剝片と共に特徴を備えていることがわかる。接合関係から立ヶ花表遺跡の剝片は1類に分類した円盤状の石核から剝離されたことがわかっている。立ヶ花表遺跡後期旧石器時代前半期の遺跡であり、単線的に連続するとは考えられないが、菱形状を呈する斜軸尖頭器は後期前半期の円盤状石核から剝離される剝片と形態的類似性を強めると同時に、斜軸尖頭器剝片がもつ固有性を移行期の初期段階で失うのではなかろうか。

がまん淵遺跡における細身の斜軸尖頭器剝片と菱形状の斜軸尖頭器剝片の共存関係は斜軸尖頭器がもっていた統合的機能のうち刃器的用法はより特殊化した細身の斜軸尖頭器剝片・基部加工縦長剝片、削器・搔器的用法は菱形を呈する斜軸尖頭器や側縁加工石器・尖頭器状石器へと分化したことを示しているのではないかと考える。

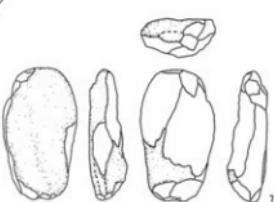
(3) 基部加工剝片の出現

基部加工剝片には細身の斜軸尖頭器剝片を素材とするものと、短寸な両側縁平行剝片を素材とする二者がある。細身な素材をした例は全体として柳葉状の形態をなし、鋭い縁辺（刃部？）が石器の長軸と平行するが、短寸な両側縁平行剝片を素材としたものは鋭い縁辺が石器の軸と直交あるいは斜行し、両者は異なる機能を背景とした形態であると考えられる。前者を基部加工縦長剝片、後者を基部加工剝片と呼称したい。

浜津ヶ池遺跡



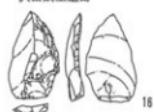
牛出古窓遺跡



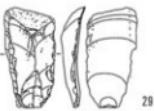
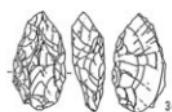
立ヶ花表遺跡



沢田鍋土遺跡

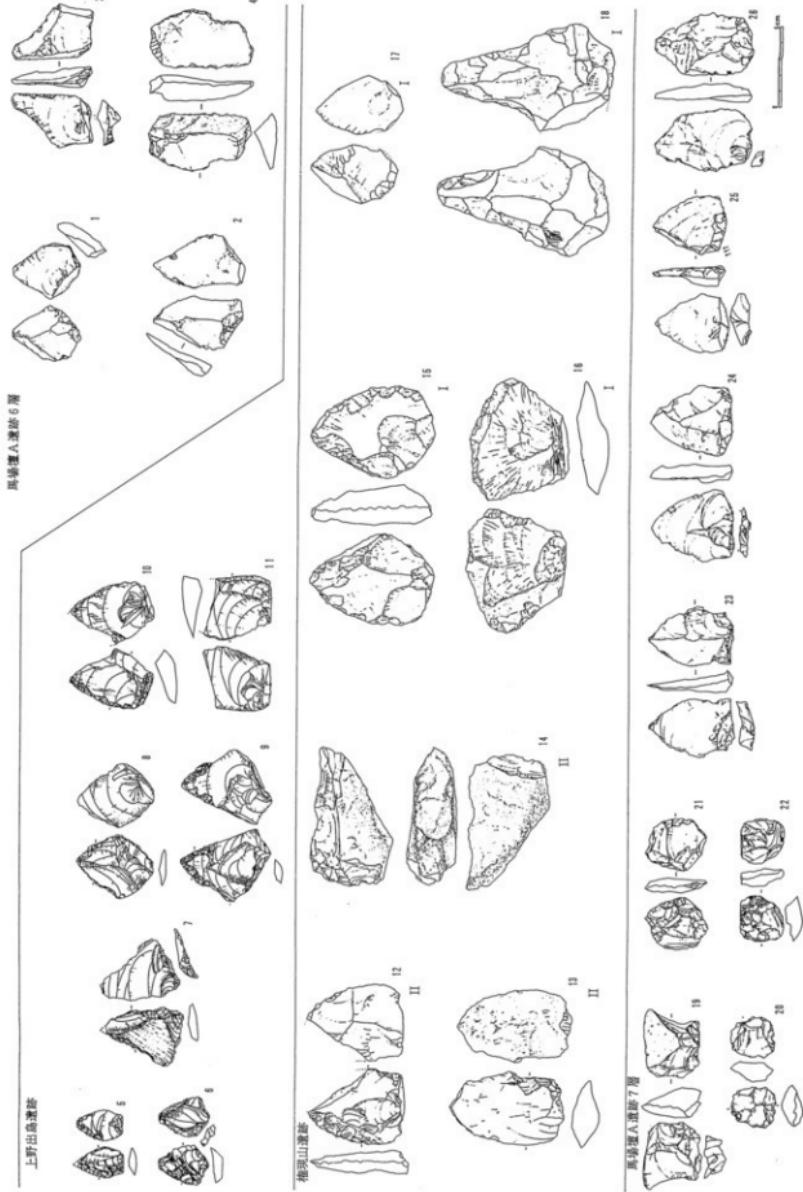


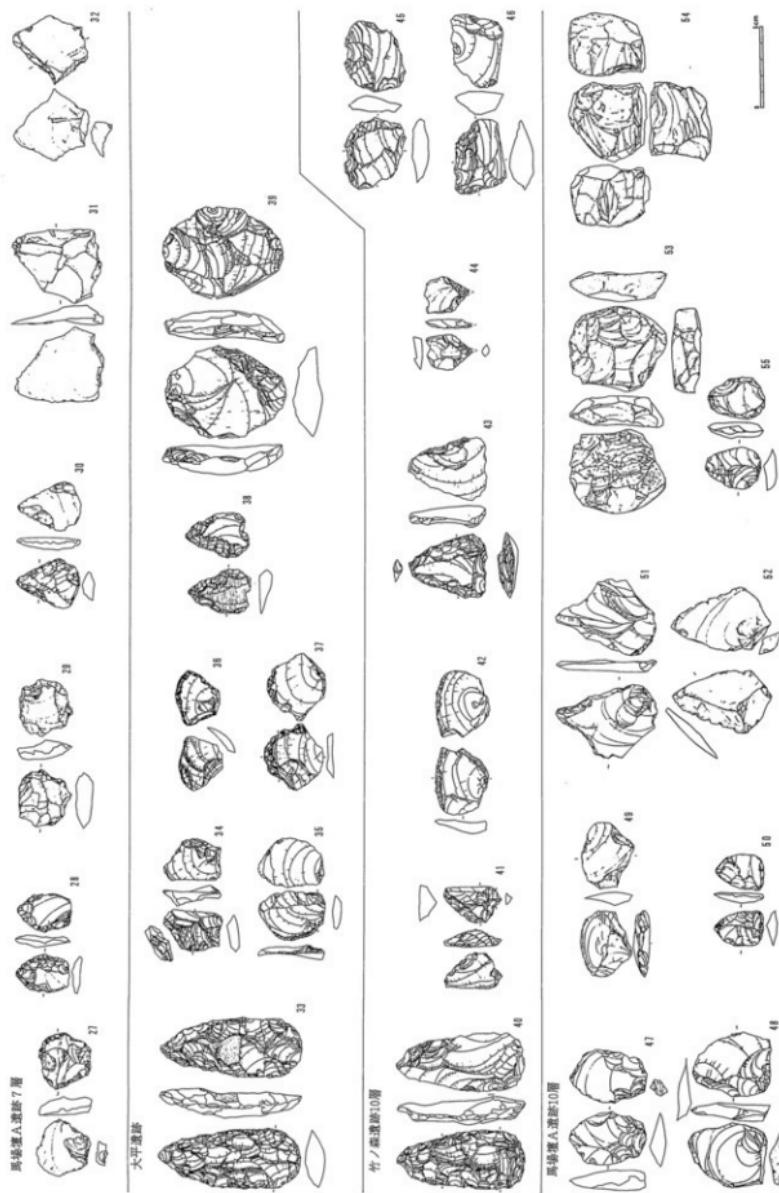
がまん洞遺跡



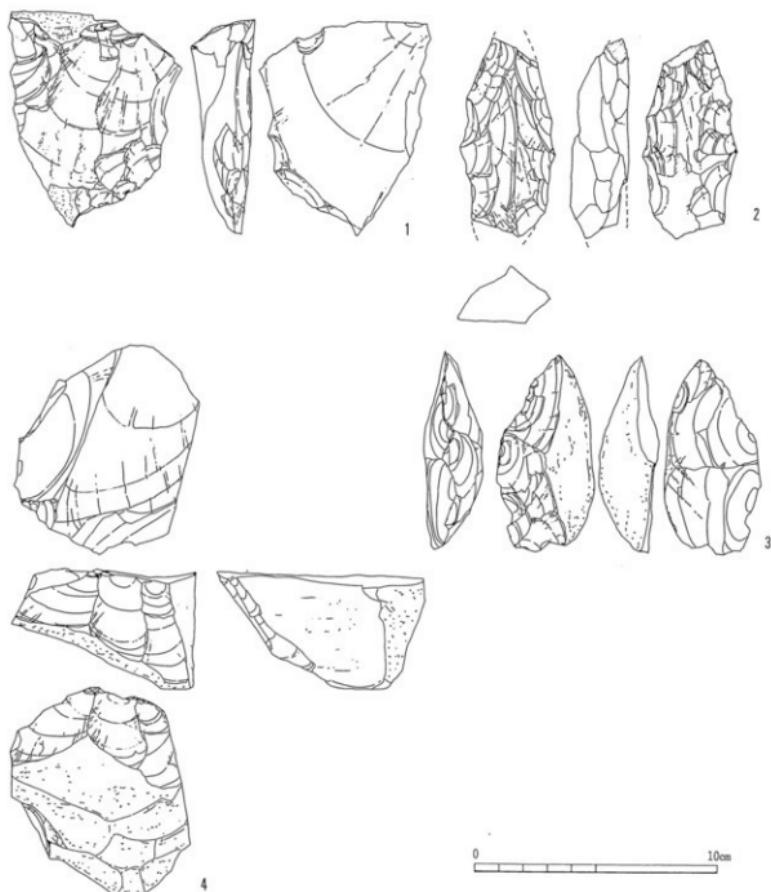
1 mm

第312図 高丘丘陵石器群A変遷





第313図 中期旧石器時代～後期移行期の石器群



第314図 南曾峯遺跡出土の石器

がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡（第312図17・25・26）に認められる基部加工縦長剝片と立ヶ花表遺跡（第312図8）や浜津ヶ池遺跡（第312図1）に認められる初期ナイフ形石器は、両者とも石器の長軸と鋭い縁辺が平行するように配慮されること、縦長の剥片を素材とし、平坦な剥離による基部調整が主であることなど、機能的にも形態的にも類似性が高いといえよう。おそらく、こうした基部加工を伴う縦刃形の石器は移行期の初期に出現し、後期旧石器時代前半期にまで受け継がれていく要素であろう。

また、一侧縁加工石器とした類（第312図24）は、石器の軸と鋭い縁辺が平行関係にあり、側縁加工を石器の形態を整えるためのものと考えれば、基部加工縦長剝片と同様な機能的背景を持っているとされよう。側縁加工石器は沢田鍋土遺跡（第312図16）にも伴い、さらに後期旧石器時代前半期の初期ナイフ形石器の類型のひとつである側縁加工のナイフ形石器へと受け継がれていくのではないだろうか。

(4) 素刃石器・台形様石器

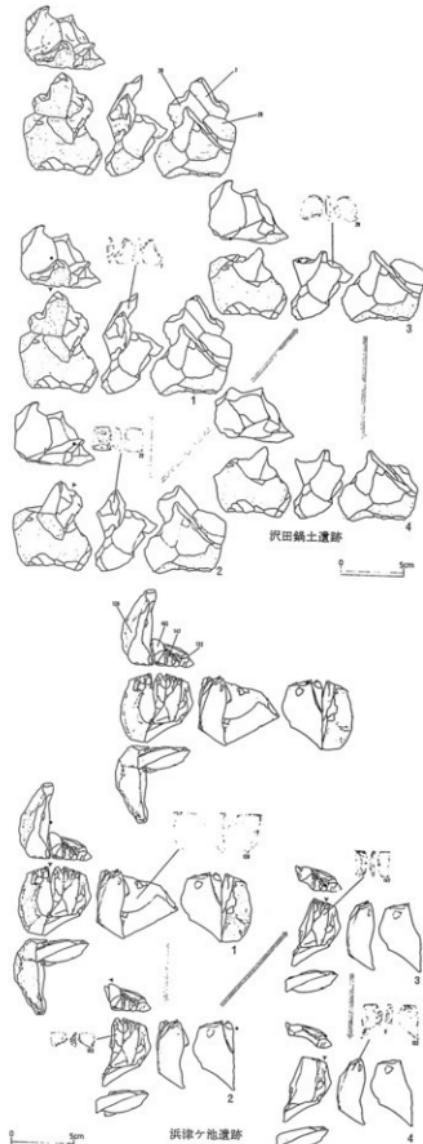
貝殻状剥片を素材とする横刃形の石器（素刃石器）は中期旧石器時代をとおして存在し、後期旧石器時代前半期の石器群の構造的要素となる台形様石器に受け継がれていくとされている。高丘丘陵の石器群の変遷をとおしても、この指摘は裏付けられる。

がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡には側縁あるいは基部を加工した横刃形の石器・素刃石器（第312図20・21・27）が伴う。がまん淵遺跡では明瞭でない基部加工は沢田鍋土遺跡で顕在化し定型的な石器形態として定着した感がある。鋭い縁辺とそれを挟む側縁部分調整剝離が行われる石器形態は台形様石器のそれと基本的に一致し、両者は類似した機能をもっていたことをうかがわせる。

しかしながら、がまん淵遺跡や沢田鍋土遺跡に出現した横刃形の基部なし側縁加工の石器だけが、台形様石器に結び付くのではないだろう。台形様石器の鋭い縁辺は必ずしも、石器の軸に直交せず、尖頭状のものや、斜行するものがある。がまん淵遺跡や沢田鍋土遺跡に認められる短寸の剥片の基部を加工した石器（基部加工剥片・第312図18・28）との機能的類似性を考えることができ、立ヶ花表遺跡では特に基部加工を持たない横刃型石器（台形様石器第312図10～15）と荒い基部加工を伴い刃部が尖頭状を呈する台形様石器（第312図9）が共存している。沢田鍋土遺跡から立ヶ花表遺跡へ移行する間に、素刃石器と基部加工剥片のもつ機能は融合分離し、改めて台形様石器として出現するのではないだろうか。

(5) 縦長剥片剝離技術

縦長剥片は南曾峯遺跡から認められるが、高丘丘陵の後期旧石器時代前半期において縦長剥片が石器群の主体を占めることはない。また、後期旧石器時代前半期の新しい段階まで疎皮剥片剝離を伴う石刃技法から剝離され



第315図 沢田鍋土遺跡(上)浜津ヶ池遺跡(下)石核接合資料

たと確証できるものはないし、そうした石刃核も出土していない。

縦長剝片剝離技術を考えるうえで、浜津ヶ池遺跡の接合資料（第315図上段）は注目されよう。この石核では母岩が盤状に荒割りされ、盤状の分厚い剝片の側面（小口）を剝片剝離作業面として縦長剝片が剝離されている。未調整の打面が固定され、複数回の縦長剝片が連続的に剝離されるが、打面の周囲を打点が移動し、剝片剝離作業面のなす稜の角度を保持しながら、縦長剝片を剝離する手法とは明らかに異なる。

一方、沢田鍋土遺跡には打面と剝片剝離作業面を交互に入れ替えながら、短寸の両側縦平行剝片を剝離した石核の接合資料（第315図下段）がある。これは選択された母岩が偏平なもので、偏平な側面（小口）を剝片剝離作業面としている。

これら二つの石核に共通するのは、幅の狭い剝片剝離作業面を用意する点にある。この方法であれば、剝片が縦に長くなるとも、横方向に剝離が広がることはできず、縦長剝片が剝離される。典型的な剝片の背面は中央に棱をもたず、横断面は凹面状を呈している。

一方、がまん淵遺跡第310図3類（9）などの石核をみると縦長剝片は多面体石核による剝片剝離行程の初期段階で生じていることがわかる。母岩の表皮を強く剝離すると打面が用意される。この打面を利用する初期段階の剝離はあたかも石刃核の打面側からの側面調整と同様な剝片剝離過程となり、礫表面の形状や先行する剝離面が剝片剝離作業面に適当な角度の稜を形成した時には、短寸の縦長剝片や縦長剝片（両側縦平行剝片）が剝離できるからである。

こうした例などを介在させれば、打面が固定され、打点が打面の周囲をめぐる石刃技法は容易に成立すると思えるのだが、こうした傾向を高丘丘陵の石器群に見ることはできない。

扁平な石核を利用した縦長剝片剝離は沢田鍋土遺跡の両側縦平行剝片・短寸の縦長剝片剝離にその萌芽を見せ、浜津ヶ池遺跡段階まで、同一の技法が継続し、その過程で縦長化したと考えられよう。しかしながら、縦長剝片はこの技法からのみ剝離されたのではなく、立方体をなす石核の初期過程でも剝離された。後期前半期の縦長剝片剝離は技法として確立していたのではなく、複数の剝片剝離行程の過程に埋め込まれていたのであろう。

縦長剝片の連続的剝離の確立は中期・移行期と後期旧石器時代を分別する重要な要素である。高丘丘陵の石器群にのみ限れば、それは後期旧石器時代前半期段階でも確立していない。ただし、南関東武藏野台遺跡のX層段階では断面三角形の縦長剝片が連続剝離された例がある。この例が剝片剝離作業面に生じた稜を利用したものであれば石刃技法につながる、あるいは粗型の石刃技法と評価しておかねばならない。打点の移動は剝片剝離作業面の稜を保持する形で行われているが、荒割りした礫の小口面を利用している点が気にかかる。いまだ、技法として確立したものではないと考えておきたい。

（6）横広剝片剝離技術

他方、縦長剝片と対置関係におかれる横広剝片剝離技法は中期・移行期を経由し、後期旧石器時代前半期まで継続している。1類から4類に分類した石核はいずれも原則的には横広剝片を剝離したものである。いずれも石核調整は認められない。打面の固定や打点の移動が観察の視点として重視されてきているが、高丘丘陵の石核ではそうした要素の変化を通時的にとらえることはできない。

むしろ、打面の固定や打点の移動の様相は石核として選択された母岩の形状に大きく左右されているとすべきではないかと思われる。たとえば、角柱状の石核素材では打面が横方向にのびているため、打点が横方向に移動し、複数回の剝片剝離がなされる。立方体の石核素材では打面が横方向に狭いため、一打面からの剝片剝離数は前者よりも少なく、打面転移が頻繁に行われる。やや薄い盤状の石核素材では周囲の側面全体が打面となり、結果として剝離痕はすべて石核の中心に向かう。また厚い扁平な石核素材では上

面あるいは下面のどちらか一方が打面として選択され、打点が周囲を巡るように剥片剝離が行われる。こうした事例は単に打面の固定や打点の移動法の技術的侧面と評価することはできない。

最も、重視しなければならないのは石核調整が認められない点である。これは資料数が少ないため、未発見の調整石核が存在している可能性も否定できないが、今後の大きな課題である。

石核調整の問題で若干注意しておきたいのは、母岩を荒削している可能性があることである。母岩を荒削りすることは大きさの調整とともに石核素材の形態を整える効果を生む。浜津ヶ池遺跡例では荒削りされた盤状剥片が石核素材として利用され、一つは縦長剥片剝離、他方は横広剥片剝離の石核とされ、盤状素材の小口は縦長剥片剝離の剥片剝離作業面として利用されている。

(7) 小結

がまん淵遺跡をはじめとする高丘丘陵石器群は中期旧石器時代新段階から後期旧石器時代前半期に編年される。南曾峯遺跡は中期新段階、がまん淵遺跡は移行期の前半段階、沢田鍋土遺跡は移行期の後半段階、立ヶ花表遺跡は武藏野台地関東ロームX層あるいはIX層段階相当、牛出古窯遺跡は武藏野台地関東ローム層IX層段階相当、浜津ヶ池遺跡、安源寺遺跡は武藏野台地関東ロームVII層段階相当と考えられよう。

高丘丘陵石器群の中期新段階から後期前半期までとおして概観すると、石器群は中期旧石器時代と移行期、移行期と後期旧石器時代前半期との間で石器群の様相が変化し、区分されうることは明らかである。ただし、その変化は急激なものではなく、先行する石器群の中に新しい様相が出現し、新しい様相が支配的になると同時にさらに新しい様相が出現するという過程を踏む。

移行期には中期石器時代を代表する斜軸尖頭器、周辺加工の尖頭器状石器が序々に消え、基部加工縦長剥片や基部加工剥片、基部加工を伴う素刃石器の定型化が求められる。またがまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡の石器群は移行期の所産と考えられるが両者の石器群は若干異なる様相をみせる。両石器群に認められる差異は基本的に中期旧石器の様相が減少していくという移行期の傾向を示しているものと考えらる。移行期は基部加工の顕在化と両側縁平行剥片剝離によって特徴づけられよう。移行期一後期旧石器時代前半期は台形様石器の出現をメルクマールとするが、立ヶ花表遺跡段階のあり方は単に台形様石器の出現という表現のみではとらえきれない一面をもつてよい。しかし、使用される石材は一変し、沢田鍋土遺跡でわざかに見られた黒曜石が支配的になる。この傾向は後期旧石器時代前半期に共通する。

縦長剥片はがまん淵遺跡以後の石器群の中に認められるが、組成に占める割合はほぼ一定で、特に後期旧石器時代前半期に増加する傾向は認められない。また、剥片剝離作業面の稜を利用して、連続的に縦長剥片を剝離する縦長剝片剝離技法は認められず、立方体石核の剥片剝離行程初期段階に生じる縦長剝片や扁平な石核の小口を利用する剥片剝離によって得られていたものと思われる。

4 まとめ

すでに、述べてきたように、高丘丘陵の中期旧石器時代から後期旧石器時代前半期の石器群は通時区分されるが、各々の石器群は先行する石器群の様相を残しつつ変化しており、急激に石器群の系統が入れ替わるという状況は観察されない。しかし、だからといって高丘丘陵の石器群が孤立的な自律変化を遂げていたということではない。変化の要因を限定された生態学的環境との相互作用にのみ求めることはできない。生態学的な環境とは別に、人間が作り出す情報環境といった人工的環境も希薄であるといえ存在していたと予想されるからである。

特定の石器群が一つの製作技術によってのみ支えられているのではなく、表層的には相反するとさえ思

える製作技術が併存し石器群を支えていることを佐藤宏之氏は端的に示し、ともすれば製作技術と強く結び付けた特定の器種の変遷を記述することで石器群の変遷を考察する危険性を指摘し、石器群を構成する器種や器種組成、製作技術を分離することなく統一的に理解していく方向性を示し、石器群の変化を単に技術的な側面からのみ説明するのではなく、外環境との相互作用による説明へと転化した。

佐藤氏はこうした分析をするにあたり、石器群の構造という概念を用いている。構造を深層と表層と呼ぶべき階層性に分割し、深層には外環境への適応戦略を、表層には技術と機能を背景とした器種としての石器群を配置する。表層に位置する石器群は深層の適応戦略にコントロールされながら、弁別される要素（器種と製作技術）を有機的に関連させた構造が石器群のあり方だとしていると筆者は理解している。したがって、表層的な器種組成率や形態の変化が、即ち石器群の本質的な変質には結び付かず、発露された適応戦略の一パリエーションと評価される。後期旧石器時代前半期における縦長剝片・ナイフ形石器と横広剝片・台形様石器の両極構造という佐藤氏の表現は、適応戦略が選択した機能的な対置関係のことであると理解できる。

編年表はA石器群からB石器群が成立するという発生論的な記述が要求され、それが入れ子状に器種レベルや製作技術の記述にまで遡及しなければならない。佐藤氏の石器構造という概念は石器群レベルの発生論から、器種レベルに展開するときに、従来の分析と大きな違いをみせる。すなわち、具体的な器種そのものが系譜関係におかれのではなく、適応戦略に選択された機能区分が次世代に系譜的に連なると考えるのである。したがって、具体的な石器の見かけ上の類似性は石器の形態と製作技術が直線的な系譜関係、石器が石器を産むといった関係で結ばれていることを示すわけではない。場合によってはみかけ上の類似性にも関わらず、大きく構造が変化している可能性も考慮しなければならない。

我々はこうした石器群のあり方（構造）に対する仮説の検証を個々の石器の分析から始めなければならない。したがって、石器の形態分類はまず機能のレベルで分類され、さらに地域差や時間差のレベルで細分されるのが理想的であろう。

石器の機能は（1）切断、（2）切削、（3）穿孔、（4）刺突、（5）研磨に大別される。具体的に石器の機能を明らかにするためには使用痕観察が必要であるが、ここに大別した機能は刃部の形態（機能部）とその運動によって定まる。例えば、切断は鋭い縁辺（対象の硬度との相対的な関係を考慮する必要はあるが）が前後に運動することが原則的である。切削は刃部の方向と対象が直交するように運動する。したがって、刃部には強度が要求され、その形態はおのずと決定される（どのように加工されるかは別問題）。このように、石器の形態からある程度の機能を推測することができる。

がまん淵遺跡の基部加工縦長剝片石器は切断ないし刺突の機能をもつ縦刃形石器、基部加工剝片石器は切断機能をもつ横刃形石器、一側縁加工石器は切断機能をもつ縦刃形石器、素刃石器は切断機能をもつ横刃形石器、尖頭器状石器は切削あるいは刺突機能が推測される。

このような視点から見れば、移行期の石器群は切断という同一機能をもちながら縦刃形石器と横刃形石器の二形態に区分される。一方これらの石器と表裏一体の関係をなす製作技術は重要な背景とはなるが、適応戦略の機能区分とはやや問題の側面を異にし、素材の供給と加工、消費という物質生活の過程という構造内部の相互作用に還元されていくものである。

横刃形石器と縦刃形石器は同機能をもつが、対象や手の動きを加えた実際の使用方法は異なっていたことは明らかである。縦刃形石器と横刃形石器の違いは運動方向の伝え方にある。縦刃形は前後に、横刃形は左右に手を動かさなければならない。したがって、その握りかたに相違が生じる。縦刃形は掌と指を使うバトンを握るような形、横刃形は親指と人差し指でつまむ形で使用されたであろう。あるいは基部加工が定着する感のある移行期以後は着柄も考慮にいれる必要があるかもしれない。

中期段階における斜軸尖頭器と小型のスクレイバーは機能区分と保持の仕方が密接に関連しているように思える。すなわち、剥片双極構造は単に機能的な対置関係を表象するばかりではなく人類の身体的な能力を表象している可能性も否定できない。

一方、移行期を経て後期旧石器時代前半期に確立する横刃形と縦刃形石器を明確に区分する石器群のあり方はより機能的な要素を強く反映したものと思われ、中期旧石器時代の石器群のあり方と様相を異にしていると考える。安斉正人氏が指摘するように、後期旧石器時代の指標となる縦長剥片の連続的剝離は、世界各地でその前身である中期旧石器時代の剝離技術の中から、独自に成立した可能性があるとされる。特に、レバノンのポカー・タクチ遺跡において、マーカスらによって研究された層位的事実から、明らかにされたルバロア技法の豪容と石刃技法の成立は印象的である。そして、日本列島を含めた極東アジアでも、事情は同じであるといち早く指摘したのは安斉氏らであった。

高丘丘陵における石器群の変遷過程から、安斉正人氏や佐藤宏之氏らが指摘するように、中期旧石器時代新段階の石器群を母胎として、中期・後期旧石器時代移行期の石器群が成立し、中期・後期旧石器時代移行期の石器群を母胎として、後期旧石器時代前半期の石器群が成立したらしいことが理解される。

しかし、中期・後期旧石器時代移行期から後期旧石器時代前半期へは縦長剥片への志向性や両側縁が平行な縦長剥片の連続的な剝離は認められるものの、稜付剥片を伴う明確な石刃技法の成立をみることはできない。当地域では稜付剥片を伴う石刃技法が成立するのは後期旧石器時代後半期初頭に位置づけられる飯山市太子林遺跡の段階である。

もちろん、石刃技法の定義やそのバリエーションの捉え方にも関わる問題であり、軽々しく論じることはできないのであるが、木村英明氏が指摘したマリタ遺跡の石刃技法、稻田孝司氏が指摘した水洞溝技法は、いずれも扁平な母岩を用い、剥片剝離作業面に形成される稜を保存することで連続的に縦長剥片を剝離している。基本的な原理は稜付剥片を伴う石刃技法と同じである。

また、先ほど述べたレバノンのポカー・タクチ遺跡から発見された石刃石核は、剥片剝離の初期段階が明らかではないけれども、同様な原理で打点が打面の周囲を移動している。筆者は石刃技法の成立には間接打法の成立と剝離作業面に生じた一定角度を持つ稜を利用して縦長剥片が剝離できることに気づくことが必要だと考えている。その意味でルバロア技法は石核調整が剥片剝離作業面に一定の角度を用意するために行われており、その延長線上に石刃技法は成立するのだと考える。

がまん淵遺跡の石核などから、もう一步進めば石刃技法へと転化しそうな状況があることはすでに述べた。しかし、実際には縦長剥片は台形様石器を伴う浜津ヶ池遺跡で認められた盤状剥片の狭い側面を用いる技法と同様な剥片剝離技術で剝離されていたと思われ、中期・後期旧石器時代移行期の沢田鍋土遺跡の両側縁平行剥片を剝離した石核と原理的には連なる。中期・後期旧石器時代移行期の剥片剝離技術と後期旧石器時代前半期の剥片剝離技術の大きな原理的差異を認めることはできず、高丘丘陵の石器群は明確な石刃技法とは異なる伝統的な技法で縦長剥片を剝離していたものと思われる。

しかし、関東地方の後期旧石器時代前半期の初頭段階で、浜津ヶ池遺跡で復元された方法とは異なる縦長剥片の剝離技法が知られている。武藏野台遺跡Xb層出土例である。半裁疊の小口を利用し、断面三角形の小型石刃を連続的に剝離している。剝離作業面の稜を利用した縦長剥片剝離である。一方、多摩蘭坂遺跡では断面凹状の剥片が、前後に接合しており、浜津ヶ池遺跡例と同様な剝離技法が予想される。田村隆氏は後期旧石器時代前半期においては、明確な石刃技法に必要な要素は存在しているが、統合していかなかったと指摘する。後期旧石器時代前半期には明確な石刃技法が存在しないと考えるべきであろうか。そして、縦長剥片の剝離技法が独立した技法ではなく、様々な技法の剥片剝離行程の中で縦長剥片剝離が供給されていたと考えるべきであろうか。

ところで、素材剥片剝離技法と石器の機能的な形態のあり方とを直接的に結びつけることはできない。確かに石器形態と素材剥片剝離や調整剝離の技法は表裏一体をなすのであるが、形態は第一義的に機能に制約されるものである。例え石器の加工技術が稚拙で完全に希望する石器形態が製作出来なくとも、石器の形態は機能を満たすものでなければならない。少なくとも石器はその条件を満たしていなければならぬ。ただし、実際には前期旧石器時代の優美なアシュリアンハンドアックスの例をみれば明らかのように、人類はある意味で石の加工方法の極限を前期の段階で知っている。したがって、剝片剝離技術はどうすれば最も効果的に石器形態が作れるのかという点が中期以降の剝片剝離技術の観察の視座となるのである。素材剥片剝離の技法はカール・ボランニー氏が指摘する社会における物質の社会化過程の問題として、原材の入手の段階から検討しなければならない事柄だといえよう。素材剥片の剝離方法は石器素材提供のバリエーションに関連する事柄であり、石器の機能的形態とはやや視点が異なる。石刃技法の成立は様々な機能形態への素材提供が一元化されたことを示しており、佐藤氏が指摘する剝片選択から脱却し、素材剥片剝離と調整剝離が有機的に連鎖した手順直視型の石器製作へと移行したことを示しているのである。その意味では縦刃形石器である初期ナイフ形石器と横刃形石器である台形様石器が作り出す二極構造という現象は統一的な素材剥片が提供されていない状況を示していると考えることができよう。

様々な剝片剝離過程の中で生じた剝片の中から、それぞれの石器に似合う素材剥片を選択し調整加工を加えるのであれば、特定の形態の石器は特定の形態の剝片素材に結びついているかのように見えるはずである。高丘丘陵石器群の石核にはいくつかの類型があるが、いずれも石核調整を伴っていない。石核調整が行われていないとすれば、残された石核の多様なあり方は剝片剝離が行われる以前の母岩段階の形状が大きく関与することになる。移行期から後期旧石器時代前半期における素材剥片剝離は一定の技法に収斂せずに、石器製作、素材剥片の選択に大きく依存していたのであろう。

長野県の旧石器時代研究はようやく移行期を視野にいれた比較研究が可能になったところであり、高丘丘陵に見た石器群のあり方は極めて限られた資料から推測された姿にすぎない。しかし、日本列島でも数少ない移行期の遺跡から後期へと連続的な石器群が得られたことは大きいと思われる。長野県の旧石器時代研究も人類史をも射程に入れた議論が可能になったと同時に大きな課題を背負ったことになろう。

引用・参考文献

- 安斎正人 1988 「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行 一前・中期／後期旧石器時代過渡期の研究ー」『先史考古学研究』1
- 大竹幸恵 1989 「原村弓振日向遺跡の石器群」『第2回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨』
- 大野憲司 1984 「七曲台における旧石器時代遺跡群調査」『七曲台遺跡群』
- 岡村道雄他 1972 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 岩田市その3」
- 岡村道雄 1986 「宮城県の「前期旧石器」とその編年」『馬場塙A遺跡 I』
- 岡村道雄 1990 「日本旧石器時代史」
- 奥村吉信 1987 「石刃技法の展開」『太平台思窓』6
- 鎌田俊昭 1987 「宮城県における旧石器時代前・中期の諸問題」『旧石器考古学』34
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-3
- 佐藤宏之 1990 「後期旧石器時代石器群構造の発生と成立」『法政考古学』15
- 佐藤宏之 1992 「日本旧石器文化の構造と進化」
- 田村 隆 1989 「二項的モードの推移と巡回—東北日本におけるナイフ形石器群成立期の様相ー」『先史考古学研究』2
- 東京都埋蔵文化財センター調査研究部 1987 「多摩ニュータウンNo.471-B遺跡の調査外報」『月刊文化財』291
- 東北歴史館・石器文化談話会 1986 「馬場塙A遺跡 I —前期旧石器の研究ー」

- 東北歴史館・石器文化研究会 1988 「馬場塙A遺跡II ー前期旧石器時代の研究ー」
- 東北歴史館・石器文化研究会 1989 「馬場塙A遺跡III ー前期旧石器時代の研究ー」
- 戸田正勝 1989 「北関東前期旧石器の諸問題」『太平台史密』8
- 中野市教育委員会 1955 「沢田鍋土遺跡発掘調査報告書」
- 中野市教育委員会 1996 「中野市埋蔵文化財発掘調査報告書 浜津ヶ池遺跡」
- 野尻湖考古研究グループ 1993 「仲町遺跡第6回陸上発掘の考古学的成果」『野尻湖博物館研究報告』第1号
- 藤村新一他 1990 「福島県白河郡東村に所在する上野出島遺跡発見の前期旧石器時代の石器群の報告」
『福島考古』31
- 藤村新一他 1993 「福島市竹ノ森における前期旧石器時代の石器群」『福島考古』34
- 柳田俊雄 1995 「阿武隈川流域における中期旧石器時代の研究」『郡山女子大学起用』31
- Anthony E. Marks & Phillip Volkman 1987 「Technological variability and change seen through core reconstruction」『The human uses of flint and chert』

第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器

1 奥信濃の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年研究の現状

本報告書で取り上げたがまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡では弥生後期から古墳出現期前後の土器資料が出土した。土器の様相はそれぞれの遺跡で異なり、本遺跡を取り巻く奥信濃の当該時期の細かな土器編年が必要となっている。先に、近接する中野市七瀬遺跡において赤塙氏が箱清水式から御屋敷式にかけての編年案を示した(赤塙1994)。その後も古墳出現期前後の遺跡が調査されており、七瀬遺跡に後続する資料も提示されてきた。

当該期の土器型式の認識は、1957年桐原健氏が飯山市柳町遺跡の報告の中で柳町式を設定したことに始まる。箱清水式とした柳町5・6号住居を切る4号住居に2・3号住居の資料を加えて柳町式とし、箱清水式に後続する弥生時代の土器型式とした(桐原1957・1959)。後年、桐原氏は柳町5・6号住居の資料を御屋敷式とし、柳町式は古墳時代の土器であると回想している(桐原1993)。しかし現在では柳町式の型式名は一般には使われていない(笛沢1988)。その後笛沢浩氏は御屋敷式を設定し(笛沢1976)、これを弥生時代後期終末期の様相としたが、後に御屋敷式土器を古墳時代の土器の中で説明している(笛沢1988)。

その後追加された資料により宇賀神氏・青木氏らにより弥生時代終末から古墳時代前期の土器編年が行われている(宇賀神1988b・1993、青木1989・1993・1996、青木・宇賀神1992)。また、上木戸遺跡(宇賀神1988a)、鶴前遺跡(白居1994b)、七瀬遺跡(赤塙1994)などの当該期の集落跡の発掘調査により、東海系、北陸系土器などの外来系土器の流入が問題とされ、他地域の編年との対比によるそれぞれの遺跡での編年案も示されている。

弥生時代後期では箱清水式土器文化圏の中でも更に小地域毎の土器様相の違いが指摘され(笛沢1986)、中野市、飯山市の遺跡を中心とした奥信濃の弥生時代後期の土器の様相は善光寺平南部のものと轍を異にした一つの小地域圏を形成している。近年、奥信濃地域では本報告書で取り上げたがまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の他にこれまで実態が不明であった弥生時代後期末から古墳時代前期の遺跡の調査例が増加してきている。中野市内では七瀬遺跡(赤塙他1994)、西条・岩船遺跡群(綿田1991)、安源寺遺跡前方後方形周溝墓(中野市教育委員会1995)、牛出遺跡(未報告)、周辺市町村では小布施町大道上遺跡(未報告)、飯山市柳町遺跡(飯山市教育委員会1995)、同上野遺跡(飯山市教育委員会1990)などがある。

このような資料の中から赤塙仁氏(赤塙1994)、中島庄一氏(中島1996)、望月静雄氏(望月1995)がそれぞれ奥信濃における弥生時代から古墳時代への変換期の編年案を提出している。これらの成果を踏まえて本報告書で取り上げた3遺跡に編年的位置を与えてみたい。

2 土器の分類

がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の当該期の資料について七瀬遺跡の分類を基本に、甕形土器、壺形土器、広口短頸壺形土器、小型土器、高杯、器台、鉢形土器、有孔鉢形土器、内湾口縁鉢形土器、蓋形土器に器種分類をした。それぞれの器種は、胸部から口縁部の形状、器面の調整により細分しアルファベット大文字を付し、さらにその口縁部形態によりさらに細分し算用数字を付す。

なお、器面調整を以下のように分類し、表記した。

ハケA：板状の工具による櫛齒状の細い条線。(ハケと表記)

ハケB：板状の工具による条線でハケAより条線の間隔が広く、条線も太い。一見タキ調整に見える

ものもある。

ナデA：指などで撫でるもので、器面が綺麗に仕上げられるもの。(ナデと表記)

ナデB：撫でた部分が窪み、ナデの単位が明瞭に見られ、その単位内には纖維束をひいたような条線が認められるもの。

ナデC：指で撫でた凹凸が明瞭に見られるもの。粘土を搔き取ったように見えるものもある。

ナデD：工具を用いて撫でたと思われ、浅い条線が認められる。条線はハケBのように明瞭には認められない。

ミガキ：工具を用いて磨いたと思われるもので、幅3mm～5mmの磨き痕跡が認められる。

タタキ：板状工具の平坦面で叩いたと思われる痕跡で、平行タタキ目が認められる。

變形土器（第316図）

[變A類] 箱清水式の變形土器もしくはその系譜を引いているもので、頸部が「く」の字に屈曲するものと穢やかに湾曲するものがある。頸部には備描簾状文、口縁部から胴部上半にかけて備描波状文が施される。口縁部破片が多いため、台付甕も本類に含めて扱う。口縁端部形態により以下の4類に細分する。

A 1類 口縁端部を丸くおさめる單純口縁。

A 2類 口縁端部を面取るもの。面取り部分に備描波状文が施されるものが多い。

A 3類 口縁端部が受口状になるもの。口縁端部の備描波状文は頸部から連続するものと、受け口部分に稜を持ち頸部からの波状文とは別の文様帶を意識させるものがある。

A 4類 折り返し口縁のもの。折り返し部に備描波状文が認められる。

[變B類] 羽状の斜走直線文が施されるもの。本類は出土点数は少なく、北信地方では弥生中期もしくは後期前半の吉田式に認められる施文方法であるが、東信地方においては御巻敷期併行期までは認められたため当該期のものである可能性を残して分類項目に入れた。

[變C類] 備描波状文が施文されるが箱清水式の甕の形態に系譜をたどれないもの。

[變D類] 有段口縁を持ち、北陸地方に系譜を求められるもの。

D 1類 口縁部に掘凹線文もしくは刷毛状工具による疑似掘凹線文が施されるもの。

D 2類 ヨコナデ調整のみで擬凹線文もしくは疑似擬凹線文を欠くもの。

[變E類] 口縁が「く」の字に屈曲している甕のうち、外面にハケ調整の認められるものを一括する。頸部が短いものが多く口縁端部の形状により細分する。

E 1類 口縁端部を面取るもの。

E 2類 口縁部はやや外反し、口縁端部を丸くおさめるもの。

E 3類 ヨコナデにより口縁端部がわずかに丸く肥大するもの。

E 4類 口縁端部が厚く肥大するもの。

E 5類 口縁が内済するもの。

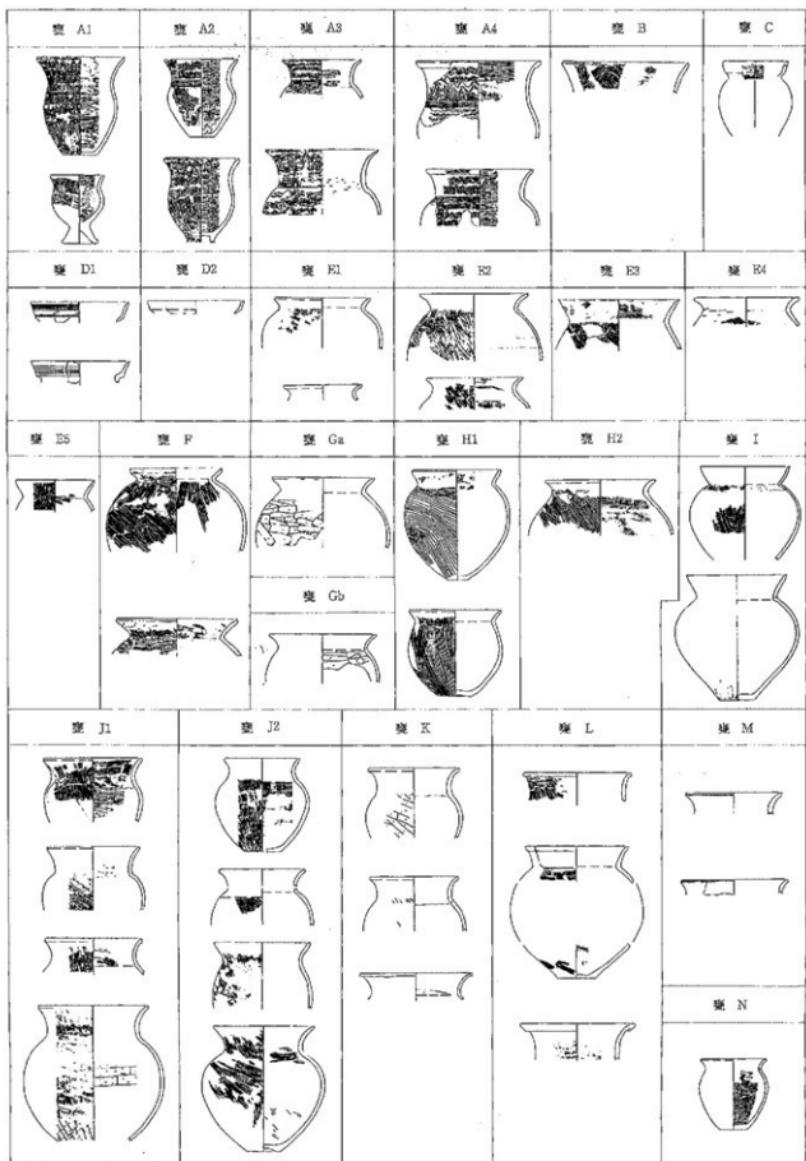
[變F類] 口縁が「く」の字に屈曲している甕のうち、外面にくの字のハケ調整を施したもので、口縁部は直線かわずかに内済し、口縁端部を面取るもの。面取り部分にはナデ調整による細沈線が認められるものがある。

[變G類] 口縁が「く」の字に屈曲している甕のうち、外面がケズリ調整によるもの。ケズリ調整の違いにより細分する。

G a類 観利な工具で削ったもの。

G b類 粘土をきれいにそぎ落とすのではなく、撫でつけるもしくは搔き取ったと思われるもの。

[變H類] 口縁が「く」の字に屈曲し、タタキまたはタタキに類似する板状の工具による粗いハケ調整



第316図 弦生時代後期から古墳時代前期の土器分類(1)

(ハケB) のもの。口縁端部の形状により細分する。

H 1類 口縁端部を面取るもの。

H 2類 口縁端部を丸くおさめるもの。

[窓I類] 口縁部が「く」の字に屈曲しわざかに内湾する。口縁端部はつまみあげて先ほそりになる。外面にはハケメ調整が見られ、器壁が薄い。

[窓J類] 頭部から緩やかに外反、もしくは伸長してから外反する口縁部で、器面外面にハケ調整を施したもの。口縁端部形態により2細分する。

J 1類 口縁端部を面取るもの。

J 2類 口縁端部を丸くおさめるもの。

[窓K類] 頭部から緩やかに外反もしくは伸長してから外反する口縁部で、口縁端部を面取る。器面外面にケズリ調整もしくはナデB・ナデD調整が施される。

[窓L類] 頭部から緩やかに外反もしくは伸長してから外反する折り返し口縁のもの。器面外面はハケ調整である。

[窓M類] 口縁部破片しか確認できないが、外反した口縁端部の面取られた部分には、ナデもしくは浅いハケ調整による細沈線が認められる。色調が白色味を帯びており、他の多くのものと区別される。

[窓N類] 器面外面がナデ調整によるもの。

壺形土器（第317図）

[壺A類] 箱清水式もしくはその系譜上にある壺形土器で、胴下半部に稜をもち、頭部から胴上部に横描T字文もしくは横描直線文を施す。T字文にはボタン状の貼り付けが見られ、器面外面は縦のミガキ調整で、ほとんどが胴上半以上の外面から口縁部内面にかけて赤彩される。口縁部端部の形態により以下の3類に細分する。なお七瀬遺跡では壺A類の折り返し口縁のものが出土しているが、本報告書で取りあげた遺跡では見られない。

A 1類 口縁端部を丸くおさめるもの。

A 2類 口縁端部を面取るもの。端部をややつまみあげるものとそうでないものの2種がある。

口縁端部には横描波状文もしくは簾状文が施されるものが多い。

A 3類 口縁端部が受け口状になるもの。受け口状に立ち上がった部分に横描波状文が施される例がある。

[壺B類] 胴下半に稜を持つ器形の特徴から箱清水式の系譜上にある壺形土器と言えるが、横描T字文や赤彩が見られないなどA類にある要素が欠落し、A類とは異なる要素を持つものを一括する。

B 1類 胴下半に稜を持つ球胴形の器形で、肩部には横描T字文、その他の部分にはハケ調整が施される。全体の器形を確認できるのは1個体であるが、頭部は「く」の字に屈曲し口縁は外反し口縁端部を丸くおさめる。

B 2類 器形はB 1類に準じるが、横描T字文が見られない。器面はハケもしくはナデ調整を施す。

B 3類 胴下半の稜が不明瞭な球胴形で、横描T字文が見られず器面はミガキ調整を施す。

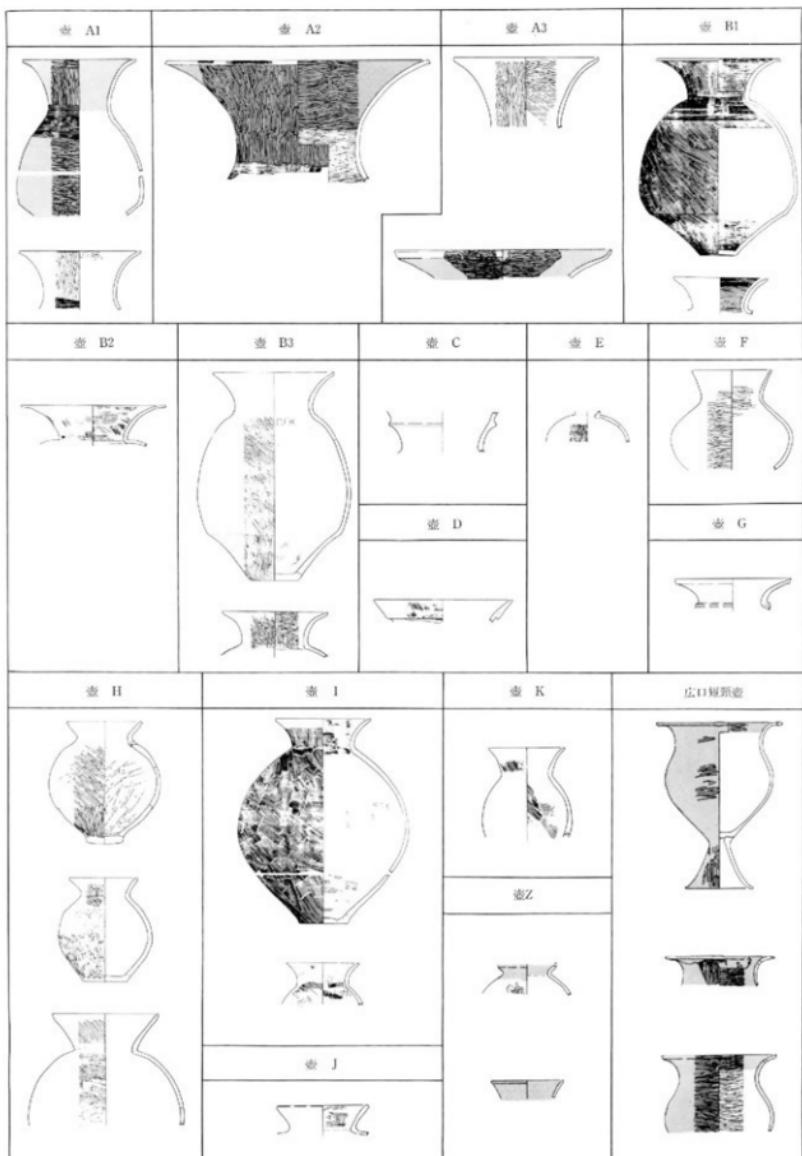
[壺C類] 口縁部に段を持つもの。1点確認されたのみである。

[壺D類] 幅広の折り返し口縁のもの。1点確認されたのみである。

[壺E類] 口縁部が内湾する小型の内湾口類壺。

[壺F類] 横方向のミガキ調整が施されもので、1点確認されたのみである。

[壺G類] 頭部が「く」の字に屈曲し、口縁端部が面取りされ、頭部には突帶が貼りつけられる。器面は丁寧なナデ調整で胴部は球胴形になると推定される。1点確認されたのみである。



第317図 茎生時代後期から古墳時代前期の土器分類(2)

【壺II類】 頸部は緩やかに「く」の字に曲がり、胸部は球胴形を呈する。器面外面は粗雑なミガキ調整が施され、全体に雄で厚ぼったい感じを受ける。

【壺I類】 頸部は緩やかに「く」の字に曲がり、口縁端部を丸くおさめる。胸部は球胴形を呈し、器面外面は細かなハケ調整が施される。

【壺J類】 頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を面取る。本類は口縁部のみが確認されているが、器面外面はナデ調整を施し、内面にはハケメ調整が施されている。

【壺K類】 頸部は緩やかに「く」の字に曲がり、胸部は球胴形を呈する。器面外面はハケメ調整の後粗雑なナデ調整を施す。

【壺Z類】 A～K類に分類されない赤色塗彩された壺形土器を一括した。

広口短頸壺形土器(第317図) 口縁部が短く外反し、赤色塗彩される。形態的には壺形土器に共通点を持つ。

台付きのもの、頸部に文様帶を持つもの、口縁部に2孔1対の小穴を有するものなどがある。

小型土器(第318図) 小型の壺形土器、壺形土器を一括し、大きさと器形により細別した。

【小型土器A類】 最大径が11cm～14cmの相対的に大型のもののうち、「く」の字に口縁が屈曲し肩が張らない器形のもの。器面が摩滅しているものが多く、器面調整は不明なものが多い。

【小型土器B類】 最大径が13cm～14cmの相対的に大型のもののうち、「く」の字に口縁が屈曲し肩が張る器形のもの。赤彩されたものがある。

【小型土器C類】 最大径が6cm～11cmの相対的に小型のもののうち、頸部のくびれが明瞭で、口縁が「く」の字に屈曲するもの。器面調整はケズリ・ミガキ・ナデとさまざまで、さらに細分が可能である。

【小型土器D類】 最大径が6cm～11cmの相対的に小型のもののうち、頸部のくびれが不明瞭であるもの。器面調整はケズリによるものが多い。

高杯(第318図) 主に杯部の形態により以下のよう A類～F類に分類し、杯部が不明な脚部のみの資料については1～7に分類した。

【高杯A類】 杯部中位に稜を有し、口縁部が外反する有稜高杯。杯部器面は横方向のミガキで赤色塗彩がされており、箱清水式に多く見られる形態である。杯部と脚の接合部にヘラ状工具の刺突を持つ突帯がめぐるものがある。完形の資料は無いが高杯脚1がA類の脚になる。

【高杯B類】 杯部口縁が内湾しながら緩やかに立ち上がるもの。杯部の直径が20cmを越える大形のものが多く、脚部は正三角形に近いプロポーションで緩やかに外湾する。口縁部をわずかにつまみあげるものとそうでないものがある。赤色塗彩されるものが多い。杯部の形状により以下の2類に細分する。

B1類 杯底部付近にわずかな稜を持つもの。

B2類 杯底部に稜を持たないもの。

【高杯C類】 杯部下半部に稜を有し、外反しながら伸長する口縁のもの。完形のものが無く脚部の形態は不明である。

【高杯D類】 杯底部に稜を有し杯部口縁が内湾しながら立ち上がるもの。1点出土したのみで、内面の一部に赤色塗彩が認められる。

【高杯E類】 杯底部に稜を有し内湾しながら立ち上がり、口縁内面端部の内そぎ面には横ナデによる細沈線がみられる。脚部端部はわずかに内湾する。

【高杯F類】 杯部の直径が15cm前後で杯部口縁が内湾しながら緩やかに立ち上がる。脚部はわずかに内湾する。口唇部形態では高杯Bと類似するが、杯部体部に稜を持たず高杯Bに比べ小形である。

【高杯脚1】 高杯Aの脚部と考えられるもので、伸長した脚部で底部がわずかに外反する。ほとんどすべ

小型土器A	小型土器B	小型土器C	小型土器D		
高杯A	高杯B		高杯C	高杯D	
高杯E	高杯F	器台A	器台B	器台C	器台D
鉢形土器A	鉢形土器B	鉢形土器C	有孔鉢形土器	内溝口鉢	蓋形土器
その他					

第318図 弥生時代後期から古墳時代前期の土器分類(3)

てが赤色されており、三角形の透かしを持つものが少數ある。

【高杯脚2】 脚部底径が脚高より大きく、底部が外反して開いているもの。高杯Bの脚部に多い。

【高杯脚3】 脚部底径が脚高より大きく、端部が直線的に収束するもの。

【高杯脚4】 脚部底径が脚高より大きく、内湾して収束するもの。多くは高杯Eの脚部と考えられる。

【高杯脚5】 類例が少なく全体の形状が不明なものを括した。柱状の細長い脚部で赤色塗装されるもの。脚高が低く大きく横に開くものなどがある。

器台(第318図) 器台は脚部が口径を凌駕する小型器台のみで、口縁の形態により以下のようにA~Cに分類した。

【器台A類】 口縁部は内湾しながら口縁端部を丸くおさめる。

【器台B類】 口縁部は直線的で口縁端部外縁にゆるい稜を持つ。

【器台C類】 口縁端部をつまみ上げ、縁を有するもの。

鉢形土器(第318図) 口縁部形態、器面調整により以下のA~Cに分類した。

【鉢形土器A類】 平底・造凸形の形態で、ミカギ調整を基本とする。箱清水式土器の系譜上に認められるもので、赤色塗装が認められるもの。口縁に突起を持つものがある。

【鉢形土器B類】 形態的には鉢形土器Aに類似するが、赤色塗装が認められないもの。

【鉢形土器C】 有段口縁を有するもの。

有孔鉢形土器(第318図) 鉢形土器A・Bの底部に穿孔したもの。出土数が少なくて細分は行わない。

内湾口縁鉢(第318図) 注ぎ口を有するものののみ確認され、注ぎ口を持たないものは確認されなかった。出土数が少な

第15表 器種分類別口縁部破片数

() 内は頸部または肩部破片数

器種名	がまん面	鉢底新土	牛出吉縁		牛出吉縁		牛出吉縁		牛出吉縁		牛出吉縁	
			SB03	SB04	SB05	SB06	SB07	SB08	SB09	SB10		
遺物名	ISD01-SQ01	粘土質										
甕A 1	183	1					1		2			2
甕A 2	109	3				7						
甕A 3	13					2						
甕A 4	48	1	1	1	1	1	1	1	1			4
甕B	(6)	3										
甕C	-											
甕D 1	-	7										
甕D 2	-	1										
甕E 1	-	8										
甕E 2	-	4										
甕E 3	-	6										
甕E 4	-	1										
甕E 5	-	1										
甕F	-	3										
甕G a	-	2										
甕G b	-	3					1					
甕H 1	-	3										
甕H 2	-	1										
甕I	-		3									
甕J 1	2		2				1	1	1	1	7	
甕J 2	9	3	4	1					1	1	4	
甕K	5			1	1							
甕L	4										1	
甕M	1		1				1					
甕N	-						1					
甕A 1	76										5	
甕A 2	56										1	
甕A 3	60								1	1		
甕A	(2)	1									(1)	
甕B	-									1		
甕B 2	-	1			2	2						
甕B 3	-	17			2							
甕C	-	1			1	3						
甕D	-	1										
甕E	-	1										
甕F	-	1										
甕G	-	1										
甕H	-	1			2							
甕I	-	3				1						
甕J	-	3					1	1	1	1		
甕K	1	3	1									
甕Z	1	3	1									
広に延び頸	14	2				1	?					
小底土器A	-	3										
小底土器B	-					1	1					
小底土器C	-	1	1	1	1	1	2					
小底土器D	1	1	1	1	1	1	1					
高杯A	73											
高杯B	4 (120)	3	7	11	14	14	5	6	13	15		
高杯C	-	6										
高杯D	-	1										
高杯E	-	2			1					1	2	
高杯F	-						(1)	1		1-(0)		
甕A	-						2					
甕B	-		1			1	1		2			
鉢形土器A	3					1	1					
鉢形土器B	1						1					
鉢形土器C	2											
鉢形土器A	-											
鉢形土器B	-											
鉢形土器C	-											
鉢形土器D	-											
内湾口縁鉢	2	1				2						
内湾口縁鉢	1								3			
内湾口縁鉢	2											
ミニマニ土器	2											

く細分は行わない。

壺形土器 出土数が少なく、全体の形態を確認できるものが少ないため、細分は行わない。

3 がまん淵・沢田鍋土・牛出古窯遺跡の土器群の様相

前項の器種分類に従って各遺跡の器種別の口縁部の破片数を第15表に示した。小破片も点数に加えており、提示した数値がそのまま各器種の個体数を反映しているわけではない。以下に器種ごとに各遺跡の概要を記述しまとめとしたい。

壺形土器 がまん淵遺跡は横描波状文が施されるA類が主体となり、B類・C類がわずかに見られる。C類（第70図53）は小破片で全体の器形は不明であるが、七瀬遺跡などに類例があり、北陸地方の有段口縁の甕の影響を受けて成立した器形であると思われる。

沢田鍋土遺跡の壺形土器の種類は多様で、特にE類・J類が多くA類は希である。H類の口縁部が確認できるものはすべてタクキを模倣したと思われるハケB調整であるが、腹部破片ではタクキ調整のものも数点出土している。また、口縁部は出土していないがS字状口縁甕の脚部と思われるもの（第110図109）が出土した。

牛出古窯遺跡はJ類を主体とし、A類も比較的多く見られる。沢田鍋土遺跡に見られるB類～H類がなく、I類が牛出古窯遺跡のみに見られる。また、A類・I類などに5mm前後の薄い器壁のものがあり、他の2遺跡の壺形土器と比較して全体的に器壁が薄い印象を受ける。

前項の分類では破片資料が多いため、器形を細分類の基準にはできなかったが、各遺跡の壺形土器A類を比較すると、がまん淵遺跡では頸部が緩やかに湾曲し口縁部へと続く器形を示すのに対し（第69図39～49）、牛出古窯遺跡では横描筆状文を境に頸部が屈曲する器形を示す（第256図13・14）。沢田鍋土遺跡では両者の中間形態を示すものが認められ（第106図21・24・27）、壺形土器A類の時間的変遷が予想される。すなわち、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の順に新しくなるものと推定される。また、沢田鍋土遺跡では頸部で屈曲する器形もあり（第106図20）、遺跡の継続期間が牛出古窯遺跡と一部重複する可能性がある（第319図）。

また、各遺跡の主体となる壺形土器を見ると、がまん淵遺跡はA類、沢田鍋土遺跡はE類とJ類、牛出古窯遺跡はJ類である。各遺跡の主体となる土器は地元で製作された土器と考えられ、先述した遺跡の前後関係を勘案すると、在地の壺形土器はA類からE類を介在して窯J類へと変化したと理解することができる。

壺形土器 がまん淵遺跡はF類の1点を除きすべてA類である。沢田鍋土遺跡は壺形土器の出土点数が少ないものの種類は多様である。壺形土器に比べ出土数が少ないのは粘土採掘跡という遺跡の性格によるものと思われる。牛出古窯遺跡ではA類・B類・E類・H類・I類が見られる。A1類の5点は同一個体の可能性が高く、A類の個体数は少ないものと思われる。また、A類は破片資料が多く全体の器形を確認できるものはない。それに対しB類は完形のものや器形が復元できる個体が相対的に多い。

なお、壺A類では、がまん淵遺跡のもの（第75図1）と比べ、沢田鍋土遺跡（第106図1）と牛出古窯遺跡（第270図1）のものは球形化の傾向があり、器形の変化が認められる。

小型土器 がまん淵遺跡と沢田鍋土遺跡では出土点数が少なく、牛出古窯遺跡に出土例が多い。特にC類・D類とした小型のものは器形と器面調整が個々に異なっており、分類枠の再検討を要する。ちなみに、器台は牛出古窯遺跡のみに出土している。

高杯 がまん淵遺跡ではA類とB類が見られ、特にA類が主体を占める。B類の120点は小破片のため点数が突出しており、実際の個体数とはかけ離れた数値となっている。また、鉢形土器A類との識別ができ

青木 (1996年)	新潟 シンボ羅年 (1993年)	赤塙 七瀬羅年 (1993年)	千野 (1992年)	宇賀神 (1993年)	遺跡の継続期間
1期以前			IV-3		
1期	1		V-1		がまん瀬遺跡
2期		1段階	V-2		沢田鍋土遺跡
3期	2 3 4	2段階	V-3 V-4	I期	牛出古墳遺跡
4期	5 6	3段階	V-5	II期	
5期	7 8			III期	
6期	9				
6期以後					

第319図 各遺跡の編年的位置付け（青木1996原図を改変）

す、120点の中には鉢形土器A類の口縁部も含まれており、確実に高杯B類と認識できるものは4点のみで、個体数はA類に比べて少ない。

沢田鍋土遺跡ではB類・C類・D類が見られ、特にC類の個体数が多い。口縁部は確認できなかったが、A類と思われる脚部（第111図153）が1点出土している。また、壺形土器と同様に他の2遺跡に比べ高杯の個体数が極めて少ない。

牛出古墳遺跡はB類・E類・F類が見られる。口縁部破片ではB類とF類の識別ができるが、すべてB類として数えており、高杯B類の数値にはF類の口縁部数が含まれている。また、B類は小破片が多く実際の個体数とはかけ離れた数値となっている。F類と思われる脚部が数点見られること、E類の口縁部破片は同一個体の可能性が高いことから、正確な個体数は把握できないが、B類・F類が多数で、E類は小数であったと思われる。完形に復元されたB類では、器形がほとんど同じものの、赤色塗彩したもの（第262図3）には三角形の透かし、赤色塗彩されないもの（第260図11）には円形の透かしがあり、前者には古い伝統が認められる。なお、B類とした破片の約2割は赤色塗彩されたものである。

これらの土器群を外来系土器と在地系土器⁽¹¹⁾の関係で捕らえると、がまん瀬遺跡では壺形土器C類、鉢形土器C類（第71図103）などに北陸地方の影響が認められるものの、その点数は僅かである。沢田鍋土遺跡では北陸地方の影響が認められる壺形土器D類（第107図33~38図）・壺形土器G類（第106図4）と、東海地方の影響が認められる壺形土器F類（第108図64~66）・高杯D類（第111図149）と、畿内地方の影

響が認められる壺形土器H類（第109図75～79）など、各地の土器が混在した状況を示し、外来系土器が多数認められる。牛出古窯遺跡では高杯丘類（第250図10・11）・F類（第270図8）、壺形土器E類（第267図3）などに東海地方の影響が見られるものの、がまん窯遺跡と沢田鍋土遺跡で見られた北陸地方の直接的な影響はほとんど認められない。

がまん窯遺跡と牛出古窯遺跡は集落跡、沢田鍋土遺跡は粘土探査跡と遺跡の性格が異なり、前二者に比べ後者は遺跡の継続期間が長いと推定され、遺跡を単位としての比較には慎重であらねばならないが、以上の3遺跡の対比により、赤塙氏の七瀬遺跡での分析結果（赤塙1994）と大枠で一致するものの、細部で齟齬を生じるという結果を得た。すなわち、北陸系土器が流入した後に東海系土器が流入するという大きな流れは認められるものの、七瀬遺跡の七瀬第二段階では外来系土器が3割以上を占めるのに対し、型式学的に同段階に比定されるがまん窯遺跡では外来系土器はほとんど認められない。この齟齬が七瀬遺跡とがまん窯遺跡の集落の性格の違いによるものなのか、微妙な時間的差によるものなのか、現段階では説明できない。

当埋蔵文化財センターでは牛出古窯遺跡に後続すると思われる牛出遺跡の発掘調査を行い、現在その整理作業を進めている。土器編年などの細部にわたる検討は牛出遺跡の整理を待って行い、「上信越自動車道堀文化財発掘調査報告書14—中野市その3・豊田村」（平成9年度刊行）に掲載する予定である。

註

- 箱清水式土器以外にその出自を求める土器群を外東系土器とし、箱清水式土器及び外東系土器の影響を受けながら箱清水式の伝統の中から成立したと考えられる土器群を本地系土器とする。

参考文献

- 桐原 健 1957 「北信濃長峰丘陵傍町遺跡調査概報」『信濃』III 9-12
 桐原 健 1959 「北信濃長峰丘陵弥生式遺跡」『考古学雑誌』45-1
 笹沢 浩 1976 「弥生時代」『上木内郡説歴史稿』
 笹沢 浩 1977 「弥生土器—中部高地」『考古学ジャーナル』133・134
 笹沢 浩 1986 「箱清水式土器の分布圏と小地域」『歴史手帳』2
 宇賀神誠司 1988 a 「在来系土器群の構造」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2・上木戸遺跡』長野県埋蔵文化財センター
 宇賀神誠司 1988 b 「長野県における古墳時代前期の地盤的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2 効長野県埋蔵文化財センター
 笹沢 浩 1988 「2.時代と縄文 4古代の土器」『長野県史・考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物』
 青木一男 1989 「土器に見る森井算塚古墳出土の前後—千曲川中流域の研究と今後の課題—」
 『長野県埋蔵文化財センター紀要』3
 長野市教育委員会 1990 「小沼備荒ババパス関係遺跡発掘調査報告書II 上野遺跡・大倉原遺跡」
 織田政実 1991 「西条・岩船遺跡」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器、第3分冊』
 青木一男・宇賀神誠司 1992 「4世紀を中心とした土器縄年表」『科野における古墳山廬期の現状と課題』長野県考古学会
 千野 浩 1992 「磐光寺平南郷（長野市域）における弥生墓葬の現状」『長野県考古学会30周年記念大会資料集
 「中部高地における弥生墓葬の現状」長野県考古学会
 青木一男 1993 「土器標記複数の業績」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会
 赤塙 仁 1994 「第7節 弥生時代後期から古墳時代初期の土器標機」『栗林・七瀬遺跡』鶴長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書19
 宇賀神誠司 1993 「4世紀を中心とした土器縄年表」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会
 白居宣之 1994 a 「4.周辺の文化」「赤い土器の国」長野県埋蔵文化財センター
 白居宣之 1994 b 「弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物」「輪郭遺跡」鶴長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書17
 長野市教育委員会 1995 「柳町遺跡」
 桐原 健 1995 「6 四都・柳町遺跡の開発」『柳町遺跡』板山市教育委員会
 中野市教育委員会 1995 「安曇野遺跡発掘調査報告書」
 宮澤雄一 1995 「9小字」「須ヶケ原遺跡」板山市教育委員会
 青木一男 1996 「第1節 北平1号墳の開発」『大黒山古墳群・北平1号墳』鶴長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20
 中島庄一 1996 「2遺物」「西条・岩船遺跡群発掘調査概報」中野市教育委員会

第3節 高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について

1 器種分類

奈良・平安時代の土器を次のように分類した。

1 無成 須恵器、土師器。

2 用途 須恵器-杯、壺、碗、皿、盤、高杯、鉢、頬、平瓶、横瓶、広口壺、壺蓋、短頬壺、長頬壺、双耳壺、凸付四耳壺、壺、碗。

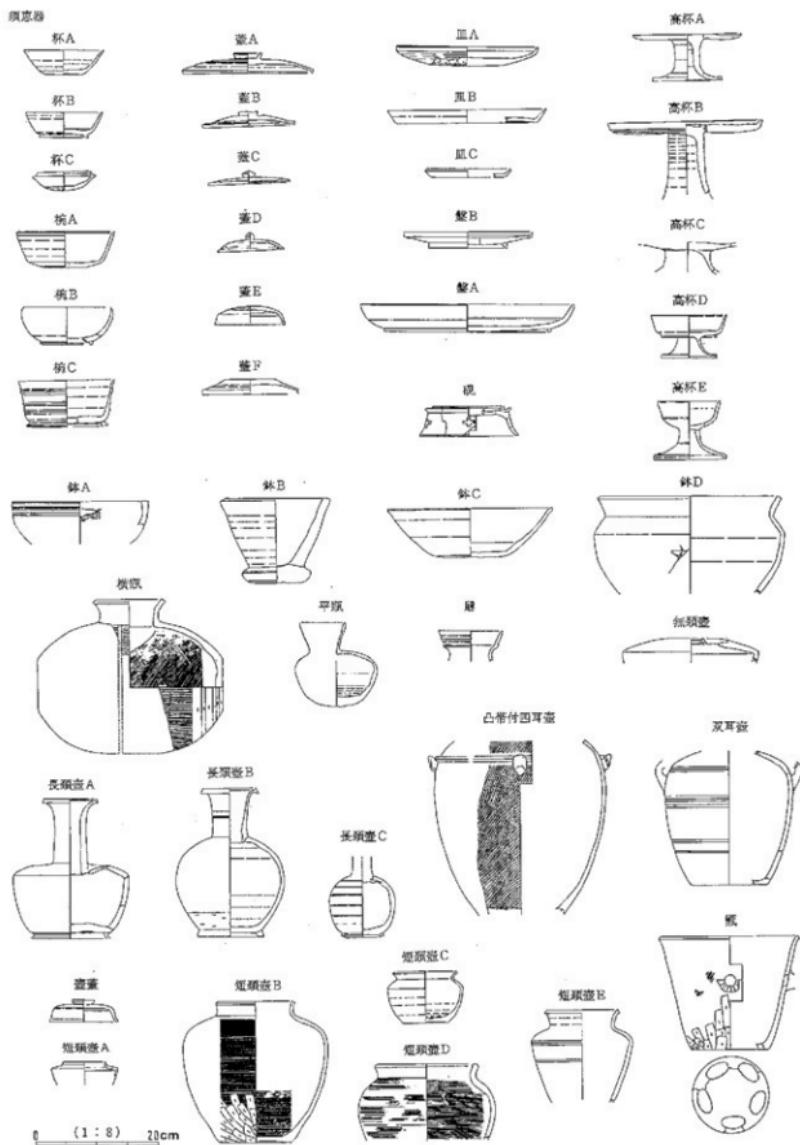
土師器-杯、碗、鉢、小型壺、球腹壺、長頬壺、羽釜。

3 器種 差をアルファベットで記入。

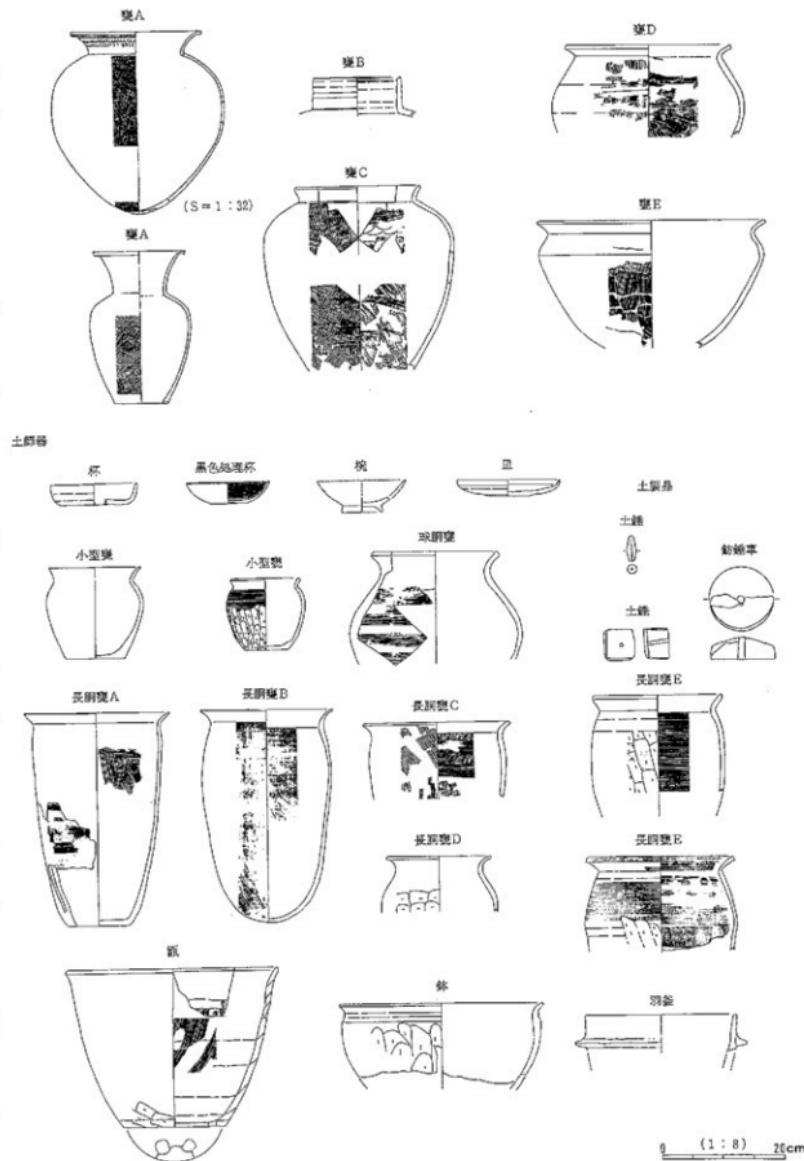
分類については先学諸氏の分類を踏まえおこない、名称の違いもあるため主な分類との比較を表に現した(第16表)。第320図・第321図とともに各器種の説明を行う。

第16表 須恵器の器種名比較表

本報告書	松本尚弓その1 (小平1990)	上島是吉助年譜 & 美濃御宿古窯址群 (吉田1991)	美濃御宿古窯址群 (吉田1991)	尾張県立歴史博物館 (池ヶ谷1992)	尾張県立歴史博物館 (吉田1992)	陶邑 (中村1981b)	平城京 (奈文新1991)
杯A (箱型)	杯A	杯A1	無合杯身	杯B	杯A	杯	杯A
杯A (逆合形)	杯A	杯A2	無合杯身	杯A	杯	杯	杯A
杯B	杯B	萬合杯A・B	有合杯身	杯C	杯B	壺	杯B
杯C				杯H			
碗A	碗A		無合碗		碗C		碗A
碗B	碗B	萬合碗B	有合碗	碗B	碗B?		碗B?
碗C					碗B?		碗L
皿A			皿	皿A		皿	皿A
皿B	皿A		皿	皿A	皿C	皿	皿C
皿C				皿D	皿C?		
盤A		盤	有合盤身	皿B	皿B	盤	
盤B		盤	有合盤	皿D	盤	盤	皿B
鉢A				鉢A	鉢A?		鉢A?
鉢B				鉢C	鉢A		鉢F
鉢C				鉢D	鉢C		
鉢D	鉢A			鉢B	鉢D		鉢D
高杯A			有蓋-無蓋添	高蓋		高杯	高杯
高杯B					高杯A?		
高杯C	高杯			盤C			
高杯D							
高杯E	高杯			高杯			
盤A	壺蓋					壺蓋	
盤B	杯蓋B			蓋B	壺A	杯蓋	杯B蓋
盤C				蓋E		杯蓋	
盤D	杯蓋A			蓋A		杯蓋	
盤E				蓋A			
盤F				蓋C			
匙	匙			匙			
横瓶	横瓶			横瓶			横瓶
平瓶	平瓶			平瓶	平瓶		平瓶子
長頬壺A	長頬壺B		合付長頬壺	長頬壺	原B?		長頬壺
長頬壺B	長頬壺A		合付長頬壺	長頬壺	原L・原C?	長頬壺	壺L
長頬壺C	水瓶		細頬瓶	水瓶	原H	長頬壺	水瓶
無頬壺							
短頬壺A	短頬壺B		短頬壺	壺C	合子A?	小型壺	壺A
短頬壺B	短頬壺A		短頬壺	壺A	壺A、壺B	短頬壺	壺C
短頬壺C	短頬壺D		短頬壺			短頬壺	
短頬壺D	鉢A		広口壺		鉢D?	鉢・壺	鉢Q
短頬壺E	短頬壺D		広口壺			短頬壺	
双耳壺			双耳瓶	双耳瓶	双耳瓶		壺N
雙A	雙B		双耳瓶	双耳瓶	双耳瓶	雙	雙A
雙B							雙C
雙C	雙C						雙B
雙D	雙D						雙E
雙E	雙E						



第320図 奈良・平安時代の器種分類(1)



第321図 奈良・平安時代の器種分類(2)

(I) 須恵器

- 杯 A 無台のもの。
 B 蓋Bとセットになる有台のもの。
 C 蓋Eとセットになり、丸底で杯身中央部に稜があるもの。

- 蓋 A リング形のツマミを有した蓋（椀蓋）。
 B 宝珠形、擬宝珠形のツマミを有し、口縁端部が断面三角形を呈する蓋。（杯Bの蓋）
 C 宝珠形、擬宝珠形のツマミを有し、口縁端部の折りが無いかほんの僅かである蓋。
 D 口縁部に返しを有する蓋。ツマミは小さな宝珠形のものがみられる。
 F ツマミのない台形を呈する蓋。
 E 合わせ杯蓋（杯Cとセットの蓋）。杯の形状を裏返したもの。

- 椀 A 無台で、口縁部を内湾させた椀。
 B 有台で、外傾度が大きい椀。灰釉椀を模倣品したもの。
 C 椭身に稜線や段がつく椀。佐波理椀を模倣品したもの。

- 皿 A 丸底の円盤状で、口縁部を直立させたもの。
 B 底部平らな円盤状で、口縁部を直立させたもの。
 C 底部平らな円盤状で、口縁部を直立させ、口唇部を面取りしたもの。

- 盤 A 高台を有する杯Bを大型化したもの。
 B 皿Bに高台をつけたもの。

- 高杯 A 皿Aに長脚をつけたもの。
 B 大型な皿Cに長脚をつけたもの。
 C 身の浅い杯Aに短脚をつけたもの。
 D 杯Bに短脚をつけたもの。
 E 深身の杯Aに短脚をつけたもの。

- 鉢 A 体部が丸みを帯びるボール鉢状のもの。
 B 通称播鉢。底部が分厚い円盤状で底部に数個の穿孔しない孔がみられもの。体部内面ザラザラしている特徴を持つ。
 C 体部は逆台形で、口縁部が緩やかに開く浅鉢状のもの。
 D 広口で頸部がくびれ、頸部下に最大径があるもの。口径に対し器高が低い。

壺・平瓶・横瓶

- 無頸壺 口頭部の無い長頸壺Aの形態のもの。

- 長頸壺A 肩部イカリ肩で、体部との境目が「く」の字状になる長頸のもの。
 B 体部球形か卵型に膨らむ長頸のもの。
 C 頸部が細く、体部や頸部に数状の凹線がみられる小型の長頸のもの。

壺蓋 短頸壺Bとセットになる蓋。

- 短頸壺A 口頭部直立し、肩部はイカリ肩で体部との境目は「く」の字状を呈する小型短頸のもの。
 B 口頭部が直立する短頸のもの。壺蓋とセットとなる。
 C 口頭部が短く外反し、頸部でつぼまり、肩部がイカリ肩となる短頸のもの。
 D 広口で頸部「く」の字状に屈曲し、体部の最大径と口径が大きさの近い短頸のもの。
 E 短頸壺Cに形態類似するがこれより口頭部が長く外反し、体部が長い短頸のもの。

双耳壺 壺体部に耳状の把手が2ヶ所つくもの。

凸帯付四耳壺 体部上半に凸帯が巡り、その突帯に耳状の突起が4ヶ所つくもの。耳状の突起には孔が開けられているものが多い。体部にはタタキ目が残るものが多い。

瓶 底部に横円形あるいは円形の孔が数個みられる。

- 甕**
- A 口頸部の長い甕。口縁部がラッパ状に開くもの。頸部に有文のものと無文のものがある。
 - B 口頸部が直立する甕。
 - C 口頸部が短く、口縁部が大きく外反し、頸部が「く」の字状に屈曲する甕。口径は体部径より小さい。
 - D 口頸部が外反し、口径の大きい広口の甕で、口頸部が「S」字状になる。体部最大径が体部中央にある。
 - E 広口の甕Dに口頸部は類似し、体部は外傾が強い、洩鉢状で、器高が低い。体部最大径が体部上半にある。

硯

(2) 土師器

土師器には未処理と、黒色処理^(注1)のものがみられる。黒色処理にも両面と内黒がみられる。

杯 須恵器杯Aに形態が類似し、無台のものをいう。

椀 高台付き逆台形の甕で、灰釉椀に形態が類似。

鉢 ロクロ整形で、体部にタタキ目やヘラ削りのあるもの。口縁端部調整には、1)面取りやつまみ上げ調整のもの（北陸系）、2)回転ナデ調整のもの（北信系）の2通りがある。

小型甕 小型の甕で非ロクロ整形のものとロクロ整形のものがある。

球胴甕 脚部が球形の甕で、古墳期の影響を残すもの。

長胴甕A 非ロクロの平底と思われる長胴の甕（脚部ハケ調整^(注2)である）^(注3)。

B 非ロクロの砲弾形の長胴の甕（脚部ヘラ削り調整^(注4)である）^(注5)。

C 非ロクロの底部欠損のもので底部形態が明確でない長胴の甕。胴部調整は外面タタキ内面ハケ目調整である^(注6)。

D いわゆる武藏型甕で、頸部下が横位ヘラ削り調整で胴下半部ヘラ削り調整する、器面を薄くした長胴甕。底部は小さな平底^(注7)。

E いわゆる北信甕で、形態は砲弾形であり、ロクロを利用している。外面胴下半部がヘラ削りやタタキ目調整され、内面や外面カキ目調整^(注8)や回転ナデ調整^(注9)されたもの^(注10)。

口縁端部調整には、1)面取りや摘み上げ調整（北陸系）、2)回転ナデ（北信系）調整の2通りの調整がみられる。

羽釜 口縁部下に鋸状の羽が一周巡る釜。

本報告書では奈良平安時代の土器について、以上の分類によって記述した。

註

(1) 黒色処理とは黒色土器とも呼ばれる土師器の表面に炭素を吸着させたもの。

(2) ハケ調整とは梗状の小口などを利用して器面の凸凹を取り器面を平らにしたり高くしたりする調整。主に甕、瓶の整形に用いられる。

(3) 直井氏の分類（直井 1996）では、甕D（甲斐型の甕）にあたる。

(4) ヘラ削り調整とは回転を利用せず器面をヘラで削る調整。別名手持ちヘラ削り、静止ヘラ削りともいう。

(5) 直井氏の分類の甕A（北信型の甕）と甕B（東信型の甕）の中間形態にあたり、これらの甕の7世紀末から8世紀前半期の形態

である。

- (6) 宜井氏の分類にはない。
- (7) 宜井氏の分類では窯B（東信型の窯）にあたる。
- (8) カキ目調整とは回転を利用して板状の小口などで器面を平らにする調整。細い条線がつき装飾的効果もある。
- (9) 回転ナデ調整ナデは回転を利用して行う調整で、別名クロナデ調整ともいう。
- (10) 宜井氏の分類では窯A（北信型の窯）にあたる。

2 高丘丘陵古窯址群の須恵器編年

(1) 高丘丘陵古窯址群を中心とした須恵器研究略史

1964年に大川清・金井汲次氏によって（大川清・金井汲次1964）茶臼峯古窯址と大久保古窯址について発掘報告がされた。これが高丘丘陵古窯址群最初の報告である。これらの窯跡の年代は8世紀の前半から9世紀の中葉の間に比定された。その後高丘丘陵古窯址群は相次いで報告された。1967年には長野県考古学会で安源寺の窯跡（長野県考古学会1967）、1971年に金井汲次氏・金井正彦氏らによって立ヶ花表山（金井汲次1971・1973）、次いで1973年に茶臼峯7号窯（金井正彦1973）などが報告された。

また1974年笹沢浩氏・原田勝美氏によって茶臼峯9号窯と茶臼峯6号窯（笹沢浩・原田勝美1974）が報告された。その報文では、茶臼峯9号窯は器種の組み合わせから陶邑TK217に相当するとして、7世紀前葉後半から中葉の時期とした。また大川氏らによって紹介された茶臼峯6号窯は、返りを有する蓋と返りを有さない蓋杯の併存は畿内藤原宮時代の須恵器に一般的にみられるとして、7世紀末葉頃のものとした。さらに、普光寺平の須恵器生産は聖高原東麓古窯址群の松ノ山古窯址（6世紀前半）によって開窯され、7世紀中葉まで、不明な時期はあるが、茶臼峯9号窯以降断絶することなく須恵器生産が続けられたとした。また、長野県下の窯跡群の編年を行い、茶臼峯9号窯、6号窯が7世紀代に操業され、8世紀代は磐山東南麓支群1号窯、聖高原東麓古窯址群向原古窯址、小県郡依田窯古窯址群、岡谷市鬼戸窯跡群と共に大久保3号窯が操業され、そして遅れて松本市田溝池1号窯が開窯されたとした。高丘丘陵古窯址群は長野県古窯址操業年代の決定に大きく関与する重要な窯跡であることを指摘した。

1987年、服部啓史氏は、東国8世紀前半における須恵器窯跡群における様相を窯跡数、操業期間、群形成の差から3類型に分類した（服部1987）。その中で高丘丘陵古窯址群はB類型（須恵器窯が數基から10基以上、多くは数十基になるもので長期間操業がみられるもの）に分類できるとして、B類型の窯跡群を「いずれも8世紀初頭、遅れても前半のいずれかの時期に開始され、ほぼ8世紀代を通して活動が続き、9世紀初頭に転換に向かえるものである。」とし、東国という広い視野から高丘丘陵古窯址群の性格を指摘した。

長野県考古学会による信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相のシンポジウムで、佐藤信之氏は北信地方の様相を発表している（佐藤1987）。土器のプロポーションの変化、製作技法に注目し、編年的配列をし、奈良時代を四期に分類している。その中で高丘丘陵古窯址群の茶臼峯9号窯を古墳時代終末期に位置付けている⁽¹¹⁾。

笹沢氏は1979年に世界陶磁全集（笹沢1979）で中部高地の須恵器について、1、移入期の須恵器（5世紀末～6世紀初頭）、2、生産開始の須恵器（6世紀前葉）、3、生産発展期の須恵器（7世紀中葉）、4須恵器生産の隆盛と衰退（9世紀～10世紀代）の4期に区分し、高丘丘陵古窯址群は3～4期に操業していたとしている。また1987年長野県考古学会のシンポジウムで笹沢氏は信濃における奈良時代を中心に県下を6地域に区分した土器編年を発表している（笹沢1987）。その中で高丘丘陵古窯址群の茶臼峯7号窯、7号窯は北信地域古墳時代V期新段階とした⁽¹²⁾。翌年に笹沢氏は長野県史（笹沢1988a）で奈良時代から平

安時代までの須恵器や土師器縄年を行い、茶臼峯9号窯は古墳時代V期古段階とし、茶臼峯6号窯・7号窯を古墳時代V期新段階としている。この中で、佐沢氏は高丘丘陵古窯址群の操業開始に触れ、古墳時代V期に仏教が伝来し、寺院の建立に伴い、多量の瓦が必要となった結果、須恵器工人が瓦の生産に従事するようになる。長野県内における寺院建立の開始は古墳時代V期後半で、高丘丘陵古窯址群においても瓦の生産と共に須恵器生産も開始されたとした。また佐沢氏は「須恵器窯の分布（佐沢1988b）」の中で「古墳時代末期から奈良時代前半期における須恵器生産地の新たなる出現は、これら地域が律令体制に組み込まれたものと思われる。」とし、高丘丘陵古窯址群の操業開始を政治的側面から評価している。

1995年花岡弘氏・西山克己氏は6～7世紀の土器様相の中で須恵器生産について触れている（花岡・西山1995）。須恵器の時期設定を陶麿年（田辺1971）と飛鳥藤原編年（西山1978）によるものとし、茶臼峯9号窯（善光寺平後期5期、7世紀前半）、茶臼峯6号窯（善光寺平後期6期、7世紀後半）と位置づけを行っている。また飛鳥藤原IからIV期の須恵器が生産遺跡の中で混在するのは「…ある期間の生産活動は考えられるものの、この形式の幅が示すほどの時間幅ではなく、短期間における器種のバラエティーによるものと考えられる。」とした。つまり飛鳥藤原I期からIV期にみられる蓋や杯のいろいろな形態が今まで消費遺跡で混在しているのは、一つの窯で色々なバリエーションのある杯や蓋をこの時期に短期間に生産していたのだとしている。（註3）

1994年清水山古窯跡の発掘報告が出され（中野市教育委員会1994a）、長野県埋蔵文化財センターが調査した窯の北西側にあたる3号窯と1号窯の灰原の遺物が掲載された。これら清水山古窯跡の遺物は8世紀前半とした。次いで1994年にはがまん渕1号窯の報告書が発行された（中野市教育委員会1994b）。がまん渕1号窯の遺物は7世紀末と縦年付けられた。

このように1960年代から1970年代前半までの間に高丘丘陵古窯址群の多くの窯が発掘調査されたり、土取りなどによって破壊されたものが多いが、全容が公表されたものは少ない。研究史を概観すると茶臼峯9号窯はほぼ7世紀前葉後半から中葉期、茶臼峯6号窯、がまん渕1号窯は7世紀末葉（中野市教委、1994b）、清水山古窯跡（中野市教委、1994a）が8世紀前半という年代が与えられている。しかし清水山古窯跡以降の窯編年は漠然と窯跡が存在すると記されているものの、今まで明確な報告例がない。高丘丘陵古窯址群では糸切り技法の登場が平安時代（8世紀終末）という認識で扱われてきた。その結果高丘丘陵古窯址群では8世紀中葉から8世紀終末までの資料が不明瞭となってしまっている。この地域では8世紀中葉から末葉まで須恵器生産が中断するのであろうか。以下既出資料も含めて紹介し、編年的検討を加える。

註

(1) I期（8世紀初頭）は杯底部ヘラオシ（ヘラ切り）が一般的でケズリを施したものもみられ、蓋はかえりを持つものも僅かに存在するとした。窯跡として豊野町山ノ神1号窯を位置付けていた。II期（8世紀前半）は杯底部ヘラオシ痕を明瞭に残し杯Bは大型で器高の高いものが出現し、蓋は口縁端部が下に向かって屈曲するようになるとし、替山古窯址群、大田原古窯址群がこの期に創業されるとし、上日向3号窯をあげている。III期（8世紀後半）は杯底部が平坦で底部の大きな瘤型のものとなり、糸切りが出現する。杯Bも底部が平坦となる。蓋は器高が高くなり、天井部の済曲が明顯となる。また、口縁端部がくらぼし状になるとしている。一方、土師器はクロクロ使用杯・甕が出現する。IV期（8世紀末～9世紀初頭）はヘラ切り技法がほとんどなくなり糸切り技法が主体となる。杯Bは法盡にバラエティーがみられるようになるとしている。III・IV期の窯の指摘はない。

(2) 奈良時代I期は豊野町山ノ神1号窯、II期は更城市上日向3号窯、平安時代I期は奉幸村前高山西1号窯であるとした。東信地域平安時代I期が北御牧村八重原1号窯が記載される、諏訪地域、上伊那地域では窯の記載はなく、下伊那地域ではII期に宮洞3号窯の記載があげられている。

(3) 同時期のものとして佐久市石附1号窯は佐久平後期6期（7世紀中頃）、石附7号窯は（佐久平後期7期、7世紀終末から8世紀初

頭)としている。

(2) 高丘丘陵古窯址群の概略

1 安源寺第1号窯 (第330図34)	8 がまん街1号窯 (第330図29)
所在地 中野市安源寺宮裏584	所在地 中野市草間
調査主体 中野市教育委員会	調査主体 中野市教育委員会
調査年度 1965年	調査年度 1993年
窯体構造 企長10m前後のトンネル式無段登窯	窯体構造 地下式無段登窯
出土遺物 土器標小形仏像状鏡、須恵器 (同心円文) 瓢A、長頸壺、杯A (圓軸ヘラ切り)、蓋B、把手	出土遺物 須恵器杯A (圓軸ヘラ切り丸底)、蓋D、甌、横瓶、長頸壺、短頸壺、甌A
文献 文獻 中野市教 1967	文献 文獻 中野市教 1994b、1995
2 黒林西原窯址群	9 西山窯跡 (第330図30)
所在地 中野市黒林西原92	所在地 中野市草間
調査主体 中野市教育委員会	調査主体 中野市教育委員会
調査年度 1979年	調査年度 1978
窯体構造 不明	窯体構造 未報告
出土遺物 須恵器杯A (圓軸糸切り)、杯B、蓋B、甌破片、甌口盤	出土遺物 未報告
文献 文獻 1980、県史刊行会 1983	文献 金井文 1978
3 立ヶ花表山1号窯 (第330図1)	10 林畔窯跡
所在地 中野市立ヶ花	所在地 中野市草間秋坪、中原
調査主体 中野市教育委員会	調査 未調査
調査年度 1970年	所蔵者 高丘小学校
窯体構造 半地下式平窯	文献 なし
出土遺物 土器標長頸壺、須恵器甌破片	11 東池田窯跡
文献 金井 1971、1973	所在地 中野市草間東池田
4 立ヶ花表山2号窯 (第330図2)	調査 未調査
所在地 中野市立ヶ花	所蔵者 中野市教育委員会
調査主体 中野市教育委員会	文献 なし
調査年度 1970年	12 収下窯跡
窯体構造 半地下式登り窯 (天井ドーム形)	所在地 中野市草間五里原
文献 金井 1971、1973、中野市教 1995	調査 未調査
5・6 立ヶ花表山3号・4号窯 (第330図3・4)	所蔵者 中野市緑地公園課
所在地 中野市立ヶ花	窯体構造 地下式無段登り窯4基
調査主体 中野市教育委員会	文献 なし
調査年度 1989	13 上の山1号窯 (第330図33)
窯体構造 半地下式無段登り窯	所在地 中野市草間上の山1889-2
出土遺物 須恵器杯A (圓軸糸切り)、杯B、高杯D、蓋B、長頸壺B、短頸蓋B、短頸蓋D、凸帶付四耳甌、甌A。土器標皿A、小型甌D、長鋸甌B	調査主体 中野市教育委員会
文献 中野市教 1995 (立ヶ花窯跡と記載)	調査年度 1981
7 中原窯跡	窯体構造 半地下式登り窯
所在地 中野市草間平野中原	出土遺物 須恵器杯A (圓軸糸切り)、杯B、蓋B、甌D、甌A、甌B
調査主体 中野市教育委員会	文献 金井文 1981、中野市教 1996
調査年度 1994年	14 大久保1号窯 (第330図19)
窯体構造 未報告	所在地 中野市草間大久保1067
出土遺物 1995年度報告遺物: 須恵器杯A (圓軸糸切り)、杯B、蓋B、長頸壺、凸帶付四耳甌、短頸蓋B、短頸蓋D、甌A。土器標小型甌D、短頸蓋	調査主体 中野市教育委員会
文献 長野県教 1953、中野市教 1995	調査年度 1984
	窯体構造 半地下式無段登り窯
	出土遺物 須恵器杯A (圓軸ヘラ切り)、杯B、蓋B、甌A、甌B、甌C
	文献 大川・金井 1964、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995
	15 大久保2号窯 (第330図18)
	所在地 中野市草間大久保1070-1

調査主体	中野市教育委員会	文献	大川・金井 1964、田川 1976、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995
調査年度	1964	21	茶臼峯 4号窯 (第330図20)
窯体構造	半地下式無段巻り窯	所在地	中野市草間茶臼峯1064-1
出土遺物	須恵器蓋A、杯B、高杯F	調査主体	中野市教育委員会
文献	大川・金井 1964、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995	調査年度	1963
16	大久保3号窯 (第330図16)	窯体構造	トンネル式無段巻り窯?
所在地	中野市草間大久保1144-1イ	出土遺物	須恵器數点 (茶臼峯6号窯遺物に類似)
調査主体	中野市教育委員会	文献	大川・金井 1964、田川 1976、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995
調査年度	1964	22	茶臼峯 5号窯 (第330図26)
窯体構造	半地下式無段巻り窯	所在地	中野市草間茶臼峯1064-1
出土遺物	須恵器杯A (圓軸ヘラ切り平底)、蓋B、甕A、	調査主体	中野市教育委員会
文献	大川・金井 1964、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995	調査年度	1964
17	大久保4号窯	窯体構造	半地下式無段巻り窯
所在地	中野市草間大久保1144-1イ	出土遺物	須恵器杯B (圓軸糸切り、ヘラ搖き「土」)、蓋B、長 甕蓋B、短甕蓋C、把手杯臺、甕A。
調査主体	中野市教育委員会	土器質給鉢草卓土製品。	
調査年度	1964	文献	大川・金井 1964、田川 1976、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995
窯体構造	半地下式無段巻り窯	23	茶臼峯 6号窯 (第330図25)
出土遺物	須恵器杯A (圓軸ヘラ切り平底)、蓋B、甕A、甕C、 短甕蓋C	所在地	中野市草間茶臼峯1060-1
文献	大川・金井 1964、中野市史編纂室 1981、中野市教 1995	調査主体	中野市教育委員会
18	茶臼峯1号窯 (第330図21)	調査年度	1964
所在地	中野市草間茶臼峯1063-1	窯体構造	須恵器杯A (圓軸ヘラ切り丸底)、杯B、蓋D、蓋A、 蓋B、高杯E、長甕蓋、甕蓋、甕A、甕C、平瓶。
調査主体	中野市教育委員会	文献	大川・金井 1964、田川 1976、中野市史編纂室 1981、 長野県史刊行会 1982、中野市教 1995
調査年度	1963	24	茶臼峯 7号窯 (第330図24)
窯体構造	半地下式無段巻り窯	所在地	中野市草間茶臼峯1063-13
出土遺物	須恵器杯B (圓軸糸切り)、短甕蓋D、高台付き蓋底部	調査主体	中野市教育委員会
文献	大川・金井 1964、田川 1976、中野市史編纂室 1981	調査年度	1971
19	茶臼峯2号窯 (第330図22)	窯体構造	須恵器 杯A (圓軸ヘラ切り丸底)、蓋D、蓋B、短甕 蓋C、甕A。
所在地	中野市草間茶臼峯1063-1	文献	金井正 1973、中野市教 1996
調査主体	中野市教育委員会	25	茶臼峯 8号窯
調査年度	1963	詳細不明	表操
窯体構造	半地下式無段巻り窯	文献	中野市教 1995
出土遺物	須恵器杯B (圓軸糸切り)、甕A、	26	茶臼峯 9号窯
文献	大川・金井 1964、田川 1976、中野市史編纂室 1981	調査不明	
20	茶臼峯3号窯 (第330図23)	出土遺物	須恵器蓋E、蓋D、平瓶、甕、高杯E、甕A
所在地	中野市草間茶臼峯1063-1	文献	中野市史編纂室 1981、長野県史刊行会 1982
調査主体	中野市教育委員会		
調査年度	1963		
窯体構造	半地下式無段巻り窯		
出土遺物	須恵器杯A (圓軸糸切り)、杯B、蓋B		

(3) 長野県内の窯跡出土の杯と蓋について

奈良時代から平安時代にかけての窯跡遺物における須恵器型式編年の指標は、(1)形態、文様の外見、(2)製作技法、(3)形態の種類の組み合わせ (田辺1971) である。杯と蓋は多く窯から出土し、量も多いので、検討材料として妥当である。そこで高丘丘陵古墳群の杯と蓋を編年的に検討する。

杯A・杯Bの形態と法量を窯跡ごとに図に示した(第332~335図)。図では底部の中心を0とし、右半分

のシルエットを示した。杯Bでは高台の付け根から測ったので中心部では、縦軸がマイナス値となるものも多い。蓋と杯の組み合わせなどの編年指標は陶邑古窯址群の須恵器編年(田辺1971)、平城編年(西1987)を用いることとする。

茶臼峯9号窯(第322図)ではTK217型式の蓋Eがみられ、蓋Dも存在し、杯A、杯Bの存在はない。この様な組み合わせを笠沢氏等(笠沢1988)は7世紀中葉の様相とし、高丘丘陵古窯址群最古の窯として紹介している。(11)

TK46型式期の蓋Dは茶臼峯6号窯、8号窯⁽¹²⁾、がまん渕1号窯、石附1号窯、同2号窯、同3号窯にみられ、そのうち茶臼峯6号窯では深身丸底の杯A1(第336図4)、がまん渕1号窯では丸底の杯A1が大小みられる(第336図5・6、第332図1)。陶邑でみられるような杯Bはみられない。

TK48型式期の退化型蓋Dは長野市笛山東南麓1号窯、更埴市向山古窯、豊野町山の神1号窯にみられるが、高丘丘陵古窯址群にはない。これらに伴う杯Aの形態⁽¹³⁾は深身のものは底部が丸みを持ち(杯A1)、浅いものは回転ヘラ切り⁽¹⁴⁾痕を残し底径の大きな箱型(杯A2)となっている(第333図1~4)。また、笛山東南麓1号窯、山の神1号窯では杯B⁽¹⁵⁾(第335図1・3)が出土している。豊野町山の神1号窯では蓋A、蓋Bも混在している。

次のMT21型式期では、蓋Dが姿を消し蓋Bとセットの杯Bが出土する。沢田鍋土1号窯、2号窯、1号灰原はこれらの杯蓋セットを持つ。沢田鍋土2号窯は杯A底部に丸みがあり(杯A1)(第332図3)、口縁部は外反している。沢田鍋土1号窯の杯A(第332図4)は身の浅い平底箱型(杯A2)である。杯Bは1号窯も2号窯(第334図3)も丸底の杯腰部に高台を付けた外傾のつよいもの(杯B2)がみられる。また杯A底部の腰部⁽¹⁶⁾が屈曲する丸底(杯A1)のものが立ヶ花表山2号窯(第332図2)と、県内の更埴市上日向3号窯、松本市田溝池1号窯(第335図5・6)でみられる。立ヶ花表山2号窯の杯Bは杯身底部が丸く垂れ下がるもの(杯B1)である。

清水山1号窯では、杯Aは杯A1と杯A2の形態が混在している(第332図6)。笛山東南麓1号窯、立ヶ花表山2号窯に類似する形態の杯A1などがあり、大きさも形態もあまり一定しない。杯Bは箱型の浅身もの(杯B2)と、腰部に丸みのある底部の垂れ下がるもの(杯B1)がみられる(第334図6)。蓋は、蓋Aが少數であり大半が蓋Bの偏平なもの(蓋B1⁽¹⁷⁾)とやや天井部の高いものの(蓋B2⁽¹⁸⁾)である。

清水山2号窯、同3号窯、池田端2号窯、同3号窯(第332図7~9)の杯Aは、清水山1号窯のように口径が大きなものが多いが、後者より若干底径が小さくなり平底のもの(杯A2)が多くみられる。これらの窯の蓋は大半が蓋B2である。

大久保3号窯(第332図12)、池田端1号窯(第332図11)では、底径が小さく平底で外傾する杯A3がみられる。

牛出1号窯(第332図13)、2号灰原、3号灰原では、杯Aは回転糸切り技法⁽¹⁹⁾の杯Aであり、大久保3号窯や池田端1号窯のヘラ切り技法の杯A3形態に類似する。しかし後者より底径が小さいものが多く、外傾が強い(杯A4)。杯B(第334図12・13)は杯B3で杯身の浅いものと深いものの2種類のやや安定した法量差がみられる。蓋は大半が蓋B3⁽²⁰⁾である。回転糸切り技法が導入されるとほとんどの蓋BはB3形態となる。

また、高丘丘陵古窯址群の中原窯跡、上の山1号窯、立ヶ花表山3・4号窯、茶臼峯5号窯は牛出古窯(第332図13、第334図12・13)よりも杯A4(第332図15~17)や杯B3(第334図14~16)の法量や形態が安定する。その他、県内の窯跡では御牧村八重原1号窯、坂田市宮洞1号窯、坂田市御殿田1号窯の杯Aの法量が安定し(第333図6~10)、杯B(第335図6~8)では法量分化が明確になる。

池田端6号窯(第332図18)、同7号窯では杯Aの大きさがほぼ一定であり、底径も小型化し、杯A4の形

態も安定する。底径の小型化した杯A4を多く出土する窯跡としては、豊科町菖蒲平1号窯、牛札村前高山西1号窯、豊科町中ノ沢8号窯、四賀村ムジナカワ1号窯(第333図11~15)などがみられる。これらの窯跡では杯Bは、地城により形態差がみられ法量も窯跡ごとに若干異なる(第335図9~12)。中ノ沢8号窯の杯Bは他の窯跡の箱型(杯B3)よりも腰部が丸みを帯びるものと、ムジナカワ1号窯の杯Bに類似する逆台形(杯B4)が出土している。杯B4は灰釉陶器の碗の形態に類似する。

以上のように、杯Aは丸底(杯A1)から平底(杯A2)へ、底径の大きなもの(杯A2)から底径の小さなものの(杯A3・杯A4)へという変化をたどることができる。大久保3号窯と池田端1号窯の杯Aのうち浅身ものは底径が大きい(杯A2)が、深身のものは底径が小さく(杯A3)、牛出古窯の杯Aに形態が類似する。大久保3号窯、池田端1号窯では底部切り離しがヘラ切り技法であり、牛出古窯では糸切り技法である。杯Aの深身のものでは底部がヘラ切り技法(杯A3)と糸切り技法(杯A4)のいずれかを用いるかに関わらず、底径と形態に大きな違いがみられないものもある。

一方牛出古窯遺跡の2号住居址と15号住居址において、回転ヘラ切り技法と静止糸切り技法^[48]と回転糸切り技法の杯の混在がみられる。三種の技法の使用段階では併存していたものと思われる。しかし高丘丘陵古窯址群ではヘラ切り技法と糸切り技法の同一窯での混在はみられない。したがってヘラ切り技法の断絶と糸切り技法の採用との間に時間的間隔は存在せず、窯の操業は継続していた可能性が強い。

以上のように高丘丘陵古窯址群における生産は、技法においても形態においても断絶無く続いているといふことができる。

註

- (1) 佐久市石附7号窯も蓋Eと蓋Dが共伴している(佐久市教、1980)。
- (2) 茶臼峯7号窯は蓋Dがあると掲載されているが(長野県史刊行会1982)、中野市教育委員会に残されている資料(中野市教、1995)と報告書(金井正彦1973)には蓋Dの掲載がなく、曖昧なため掲載を避けた。
- (3) 杯Aの分類基準は、形態を直視し、底部切り離し技法を取り混ぜて分類をした。

杯A1 底部は丸底かやや丸底で、深身で外傾する形態。底部切り離しは回転ヘラ切り技法で、底部調整が回転ヘラ削り、ヘラ削り、板ヘラナナゲ調整のものなどがある。

杯A2 底径が大きく、平底であり、外傾度が少ない浅身の箱型形態。底部切り離しは回転ヘラ切り技法が多く、静止糸切り技法、回転糸切り技法のもののが若干みられる場合がある。底部ヘラ切り未調整かナナゲ調整、板ヘラナナゲ調整である。

杯A3 平底で外傾する逆台形の形態。底部切り離しは回転ヘラ切り技法である。杯A4に類似する形態であるが、4より底径が大きいものが多い。

杯A4 平底で外傾が強い逆台形の形態である。底部切り離しは、回転糸切り技法である。

(4) 回転ヘラ切りあるいはヘラ切り技法とはクロクからヘラを差し込んで回転を利用して切り離す技法。

(5) 杯Bの分類基準は形態を直視し、底部切り離し技法を取り合わせた分類をした。

杯B1 高台が杯底部外周付近に付き、高台が底部外周につけられ、杯底部が懸れ下がり、中には高台下まで懸れ下がるもの。底部は回転ヘラ削り技法で、回転ヘラ削り調整が行われているものが主である。

杯B2 高台が杯底部の内側につくもの。杯底部は平底で箱型形態である。杯底径が杯A3よりも大きく、高台は杯B1に比べ底部外周より内側につく。杯底部が回転ヘラ切り技法で、回転ヘラ削り調整が行われているものが主である。

杯B3 箱型の杯身に高台をつけたもの。底部回転糸切り技法で、底部未調整か回転ヘラ削り調整が行われている。杯底径が杯B2よりも小さく、したがって高台径も小さいものが多い。

杯B4 逆台形の杯身に高台をつけたもの。底径は小さい。底部は回転糸切り技法で、未調整のもの、回転ヘラ削り調整のものなどがある。(灰釉陶に形態類似)

(6) 杯腰部とは底部と杯身の境目の凸がる部分

(7) 蓋Bは4通りの形態に分類される。

蓋B 1 口縁が短く断面三角形で、天井部が偏平。

蓋B 2 蓋B 1より天井部が高く、口縁断面三角形の蓋。口縁の折り目の痕は若干不明瞭。

蓋B 3 口縁が長く、折り目の痕が明瞭であり、天井部との境目に沈み込みがみられる蓋。

蓋B 4 天井部が非常に高く球形であり、口縁部はB 3形態である（土器柄窓跡の蓋にみられる）。

(8) 回転糸切り技法とはロクロの回転を利用して糸で切り離す技法。

(9) 静止糸切り技法とは回転を利用せずロクロ挽きした糸などを糸で切り離す技法。

(4) 高丘丘陵古窯址群の編年

本報告書の各遺跡から出土した須恵器の形態や製作技術は順に変化しているが、本遺跡群だけではそれらを汎日本的に編年するデータがない。そこで他の編年基準をもつ窯跡と対比することにより高丘丘陵古窯址群の編年基準を求めた。対比する窯跡群は陶邑古窯址群（第331図12）、猿投古窯址群（第331図13）、美濃須衛古窯址群（第331図14）、湖西古窯址群（第331図15）（斎藤他1994）である。陶邑古窯址群では田辺編年（田辺1971）と中村編年（中村1994）があり若干の相違がみられる^[4]。從来佐沢氏等（佐沢1988a、佐沢・原田1974）が行った高丘丘陵古窯址群の編年基準は田辺編年を用いており、ここでも田辺編年と平城編年（西1987）を基本とし、また他の基準とする窯跡もそれぞれの編年段階をそのまま用いることとする。

前項の杯蓋の検討結果に加え、県内既出資料も編年的に再検討してみたい。ただ、從来知られている資料には、出土状況が明確でないものが多く、また、高丘丘陵古窯址群の既出資料には、同一窯と報告されているものの中に別の窯からの混入品が存在する可能性もある。

長野県での最古の窯跡は聖高原東麓古窯址群（第331図3）の松の山窯跡である。出土した窯跡遺物は頬、杯、蓋E、短頭壺、甕Aである。陶邑古窯址群TK47型式の窯跡資料と遺物の様相が一致しておりこの時期の窯である。その後長野県内での窯跡は高丘丘陵古窯址群の茶臼峯9号窯（佐沢・原田1974）の操業開始までの間の窯跡は県内では今のところ発見されていない。

第1期（第332図）

杯C、蓋Eを併伴する窯をこの期とした。この窯跡群の中で最古の窯跡群と思われる茶臼峯9号窯では杯C、蓋Eがみられ、蓋Dの存在が認められる。そのほか古墳時代の様相を残す頬、平瓶、杯身が深い高杯E、内面に同心円文の当て具痕の残る長頭の甕Aがみられる（第1表）。

茶臼峯9号窯でみられるような蓋Dは陶邑古窯址群ではTK217型式が初源である。TK217型式では蓋Dと蓋E、杯Cセットがみられ、後続型式のTK46型式の段階では蓋Eと杯Cのセットは消滅しており、TK217型式期と茶臼峯9号窯は同時期と思われる。中村編年では第II型式第6小期（蓋E）と第III型式第1小期（蓋D）にあたる^[4]。これらの様相から茶臼峯9号窯は蓋Eと蓋Dが併存する時期7世紀前葉から中葉の窯跡と思われる。

磐山古窯址群の中にはこの時期の窯跡が存在することが記載されている（牛込町教委1992）。しかし、県内佐久市石附7号窯（佐久市教委、1980）は蓋Eと蓋Dと蓋B 1が混在して出土しておりこの時期より後続段階の時期と思われる。

第2期（第332図）

蓋Dを出土した窯跡をこの期とした。この期は2段階に区分することができる。

第1段階 この段階に相当する高丘丘陵古窯址群の窯は茶臼峯6号窯（中野市史編1981、中野市教委

第17表 長野県内古跡出土器物の時期別比較表

地質区分	清丘丘陵古海岸帯	豊山古海岸帯	豊山古海岸帯	豊田古海岸 帯群	御牧ヶ原 ・八重原 古海岸 帯群	大口沢古 海岸 帯群	芥子坊主 ・浅野瀬古 海岸 帯群	大矢沢古 海岸 帯群	田辺海岸 ・中村海岸 帯群	御牧ヶ原 古海岸 帯群	御牧ヶ原 古海岸 帯群
第1期	水口堀9号縫	○			松ノ山古 縫				III前		
第2期	茶口堀5・7・8号縫、 がまん丸11号縫	○		石壁1・ 2・3号 縫				III - TK 2.79式 式	II-6・III -1	III-2断	II後
第1段階									III-TK46 式	III-2	III-3段
第2段階									III-TK48 式	III-3~IV -1	
第3期	坂田堀1・2号縫、 第1段階	坂田堀1・2号縫、 立ヶ花表山2号縫、 宏源寺縫	坂田堀1号縫、 山の神1号縫	1号縫、豊雲町 山の神1号縫				III-TM 2.5型式	IV-1	III-3	IV-1前 IV-1~2
第3期	清水山1号縫、 第2段階 大久保2号縫							(TM)6	IV-1	III-4	IV-1後
第3期	坂田渓2・5号縫、清 火			坂田渓山 ノ神3号 縫				宮洞3号縫		IV-2	IV-2 ~V-1
第3期	久板1号縫									IV-3	III-4
第4段階	大久保3号縫、 施田堀1号縫	—								—	IV-1
第4期	牛出吉輪1号縫									IV-4	IV-2
第1段階								宮洞1号縫			
第4期	水口堀5号縫、立ヶ 花表山1号縫、森 中野古縫、上の山 古縫							大矢沢1号 縫			
第5期	水口堀6・7号縫	前高山西1号縫			八重原1 号縫		雪富1 中の丸8 号縫	ムジナカ 土器洞1号 縫	IV-TM 83	IV-4	IV-3段 VI-1

第13表 長野県内露頭剖面年表

1995)、同8号窯(古段階)(中野市教委、1995)、がまん測1号窯(中野市教委、1994b、1995)である。杯C、蓋Eが姿を消し、宝珠形ツマミを持つ蓋Dが主流となる。杯Aは小型の杯A1⁽⁴³⁾がみられるようになる。この時期にも古墳期の様相を残す頬、平瓶が存在するが、がまん測1号窯では頬はみられない。茶臼塗6号窯や8号窯よりもがまん測1号窯は後出する可能性もある。その他に内面に同心円文の當て具痕の残る蓋Aが見られる。皿Aや杯Bなども新たな器種として加わる。

佐久市石附1号、2号、3号窯(佐久市教委1980)がこの段階のものと思われる。

第2段階 第1段階の特徴に加え、口縁を折り曲げた口縁端部断面三角形の蓋B1が新たに登場する。高丘丘陵古窯址群にはこの段階の痕跡は発見されていない。しかし千曲川対岸の長野市巣山東南麓支群1号窯では、蓋の口縁部の内側に短い返りのような凸帯を巡らせており退化型蓋Dがみられる。更埴市向山古窯址(上水内郡刊1976)と豊野町山の神1号窯(岩野・桐原1965)、佐久市石附7号窯(佐久市教委1980)では蓋B1の口縁端部断面が三角形のものがみられ、この段階では退化型蓋Dと口縁断面が三角形の蓋B1が並存する。また蓋Bとセットになる杯Bが登場する。杯Bは底部回転ヘラ削り調整⁽⁴⁴⁾で高台は低く杯外周に取り付けられ、杯底部が高台よりも垂れ下がるもの(杯B2)が多くみられる。前段階からある頬、内面同心円文のみられる蓋A、高杯E、平瓶がみられ、新たに高杯A、B、C、長頸蓋、広口蓋、短頸蓋等の器種が加わる。

蓋D、蓋Bの混在の様相から第2期は陶邑窯(第III期)TK48型式相当である。蓋D主流の高丘丘陵古窯址群第2期第1段階が中村陶邑編年第II型式第2段階に、蓋D、蓋Bの併存する第2段階陶邑第III型式第3段階と第IV型式第1段階に相当すると思われる。⁽⁴⁵⁾

第3期

杯Aがヘラ切り技法で切り離され、平底化していく要業の多い窯跡をこの期とした。前時期の古墳時代副葬品である頬や平瓶、そして蓋Dが消滅し、杯Bとセットとなる蓋Bが主流となる。杯Aも第2期よりも口径が大きく、杯身が浅くなり平底にちかい形態杯A2へと変化し、その変化にともなって外傾度が増し底径が小型化し、箱型から逆台形杯A3へと変化する。蓋Aの内面當て具痕は、同心円文が消滅し、當て具痕が擦り消されたり無文化する。

この第3期は杯Aの形態変化で4段階に区分した。

第1段階(第322・323図) 丸みの残る底部で外傾が強い杯A1と、やや平らな底部で口径と底径に差の少ない箱型杯A2の出土量が多い窯跡をこの段階とした。窯跡としては沢田鍋土1号窯、2号窯、1号灰原、立ヶ花表山2号窯(第322図2~5)(中野市史編1981、中野市教委1995)があげられる。

杯Aは第2期より口径の大きいものが多くなり、杯Bも身が浅いものが多くなり、口径も大きくなる。杯B底部の回転ヘラ削り調整は行われるが、底部は厚みを持ったまま高台が底部外周に取り付けられ、高台よりも底部が下がる杯B1が多い。高台は、低く断面の小さいものが多い。蓋Dは消滅し、蓋B口縁断面三角形部分は前段階と同じで屈曲が少なく、天井部偏平な形態の蓋B(蓋B1)(沢田鍋土1号窯、立ヶ花表山2号窯)や天井部が高く口縁部の屈曲が明瞭でない蓋B(蓋B2)(沢田鍋土1号灰原)の混在してみられる。ツマミも小さな宝珠形のものは消滅し、偏平なもの、擬宝珠形のものが主となる。このように、この段階では、杯Aや杯Bや蓋Bなどに形態や大きさが多様である。

高杯は脚が長いものと、短いものが混在する。この他に前段階までみられなかった皿A、盤A、盤B、高杯C、金屬器模倣品等の器種が増えている。美濃須恵古窯址群⁽⁴⁶⁾の影響を受けたと思われる皿B、盤A、高杯C(沢田鍋土1号灰原)(第323図)もみられ、器種の多様化が窺える。沢田鍋土窯跡、立ヶ花表山2号窯の杯、盤、皿類(第322・323図)は静岡県湖西遺跡群(東笠子第44地点)⁽⁴⁷⁾、8世紀初頭の美濃須恵窯の第IV期第1小期前半⁽⁴⁸⁾などのものと類似する。また屋代遺跡群第四水田対応層の遺物(8世紀

初頭) (長野県埋文1996) にも類似する。

その他の特徴としては、平瓶にかかる横瓶の発達、駁の消滅と長頸壺の発達、壺内面の当て具痕である同心円文の消失がみられる。通称摺り鉢等の鉢類、各種の壺類、各種の甕類等も多様に製作されている。

また、円面鏡(沢田鍋土1号灰原)の存在やヘラ描き記号の他に、ヘラ描き文字が(沢田鍋土1号窯の「井」印、1号灰原「大」印)みられるようになることは、国郡など律令機構との関わりを窺わせるようにも思われる。

第2段階(第324・325図) 杯Aは、杯A2類の中でも浅い平底のものと若干丸みのある底部のもので、口径と底径に差の少ない箱型にちかいものが多く伴出する窓跡(第324・325図、第332図6)をこの段階とした。清水山1号窯、同1号灰原⁽¹⁰⁾がこの段階の窓と思われる。

この段階では陶邑古窯址群(KM16)にみられような蓋Aや椀Cのセットがみられる。椀Cのなかには佐波理碗の形態(巽1985)と同類のもの(第173図98・99)が清水山1号灰原でみられる。また蓋Bは杯Bの大きさに従ってセットで作られるようになる。蓋Bのツマミの形態、天井部の高さは前段階のものと変わらない(蓋B1・蓋B2)。杯Bは前段階同様底部外周に高台を取り付けたもの(杯B2)が多いが、前段階よりも底部の回転ヘラ削りが丁寧に行われ、底の器厚が薄くなる傾向がみられる。前段階以上に器種が多く、大きさが多様であり、この古窯址群における須恵器生産の最盛期を窺わせる。

このような様相を持つ清水山1号窯、同1号灰原は、杯A・杯B・皿・盤・高杯などにヘラ描き文字「井」や「高井」が付され、無頸壺には「佐秋郡」のヘラ描きが付されている。清水山1号窯は美濃須衛窯老洞1号窯の「美濃國」刻印(岐阜市教委1981)と同様、郡名のヘラ描きなど官當窯的性格を帯びている。

このようにこの段階の特徴は前段階以上に器種(盤・杯・皿・高杯・碗・鉢類・長頸壺・横瓶・短頸壺・甕類と金属器模倣品の柄・壺)の増加と大きさの多様化があげられる。須恵器生産が一挙に増加した様相は、老洞1号窯の美濃須衛第IV期第1小期後半(8世紀前半)の様相に類似する。

第3段階(第325図下段～第326図) この段階は浅身の杯A2が減少し、外傾する逆台形ちかい形態の深身平底となる杯A3を伴出する窓跡をこの段階とする(第332図7～9)。この段階の窓としては池田端2号窯、同5号窯、清水山2号窯、同3号窯、大久保1号窯(中野市史編1981)がみられる。

杯B2は杯A3の外傾度が増したと同様外傾度が増し、高台より底部が激しく垂れ下がりはみ出すものはなくなる(第334図7～10)。この段階で高丘丘陵古窯址群では、杯Bの高台断面形が前段階までと同様に方形を呈するものが多いが、中には断面三角形になるものが多く加わるのが特徴である。

前段階よりも焼成される器種は若干少なくなり、甕壺類の大きさの違いも少なくなりはじめる。器種は杯A、杯B、高杯A、皿、長頸壺A、横瓶、甕類、円面鏡などがみられる。甕Aの底部が平底風になる。前段階の金属器指向傾向が薄らぎ、この段階ではヘラ描き文字・記号が減少する。

また池田端2号窯では布目瓦も生産され、瓦陶兼用窯である。高丘丘陵古窯址群では布目瓦が焼かれている窓は池田端2号窯、4号窯、7号窯でしか確認されていない⁽¹¹⁾。

清水山3号窯にはツマミの無い蓋Fがみられる。この形態の蓋は湖西窯址群(資藤・後藤1994)に多くみられる。東笠子44地点VII号窯(8世紀中頃)灰原、同36地点VI号窯(9世紀初頭)、同24地点窓跡(9世紀前半)などにみられる。東笠子44地点以外の同36地点と同24地点の遺物は回転糸切り技法の杯が出土している。蓋Fは湖西窯址群では湖西第VI期(9世紀初頭)の指標となっている。また北陸地方の石川県戸津9号窯、同10号窯、同11号窯(9世紀後半、望月1992)、富山県上末釜谷3号窯、同4号窯(9～10世紀)

(富山県埋文1989)においても蓋Fは出土する。清水山3号窯の蓋Fはヘラ切り技法を持つ窓跡の出土品であり、東笠子VII号窯の出土遺物に技法的に近似する。ヘラ切り技法を持つ窓出土の蓋Fの類例を待ちたい。

第4段階（第327図上段） 杯Aが、平底、逆台形（杯A3）の形態となり、大きさも安定する窯跡をこの段階とする（第332図11・12）。大久保3号窯（中野市史編1981）池田端1号窯がこの段階の窯跡と思われる。第3期の中でもこの段階になると高丘丘陵古窯址群では須恵器生産遺跡の数が急激に減少する段階である。

杯Aは平底が主流であり、回転ヘラ切り面が残りやや凸面を残すもの（底部未調整）や回転ヘラ削り調整し底部を平らにしているものもみられる。深身の底径は若干小さくなり、外傾度が増し逆台形（杯A3）となる。大きさも安定し身がやや深めのものが多くなり、杯身のクロク痕の凹凸が顕著に残るようになる。この段階から横瓶が急減し、円面鏡も高丘丘陵古窯址群では生産されなくなる。^{〔註1〕}

以上のように高丘丘陵古窯址群第3期前葉は蓋Dが消滅し杯B・蓋Bのセットが主の様相である、陶邑古窯址群TM21型式段階の様相と一致する^{〔註2〕}。高丘丘陵古窯址群第3期前葉から中頃では窯の数が爆発的に増大する。器種の爆発的増加、大きさの多様化がみられる。そして仏具、金属器の模倣品、硯等の主には官公庁用・寺用と思われる器種の増加がみられる。しかし第3期終末頃になると、ヘラ切り技法から糸切り技法へと生産技術交代期と思われる窯跡数の急減と器種の減少がみられる。

第4期

須恵器生産に回転糸切り技法が導入され、杯A（杯A4）の底部径が6cm以上のものが多く生産される窯跡の一群をこの期とする。牛出1号窯、1号灰原、3号灰原、茶臼峯1号窯、3号窯、5号窯 立ヶ花表山3・4号古窯（中野市教委1995）、中原古窯址（中野市教委1995）、上の山古窯址（中野市教委1995）である。北信地方のその他の窯は轡山古窯址群牛札村平出上の山古窯址（牛札村1992）などがこの期の窯跡と思われる。

この期から杯底部の切り離しが回転糸切りが主流となり、器種の形態変化がみられる。第4期の窯跡で、杯Aの大きさと形態が整わないものが多い窯跡を第1段階、杯Aの大きさと形態が整ったものが多い窯跡を第2段階とした。

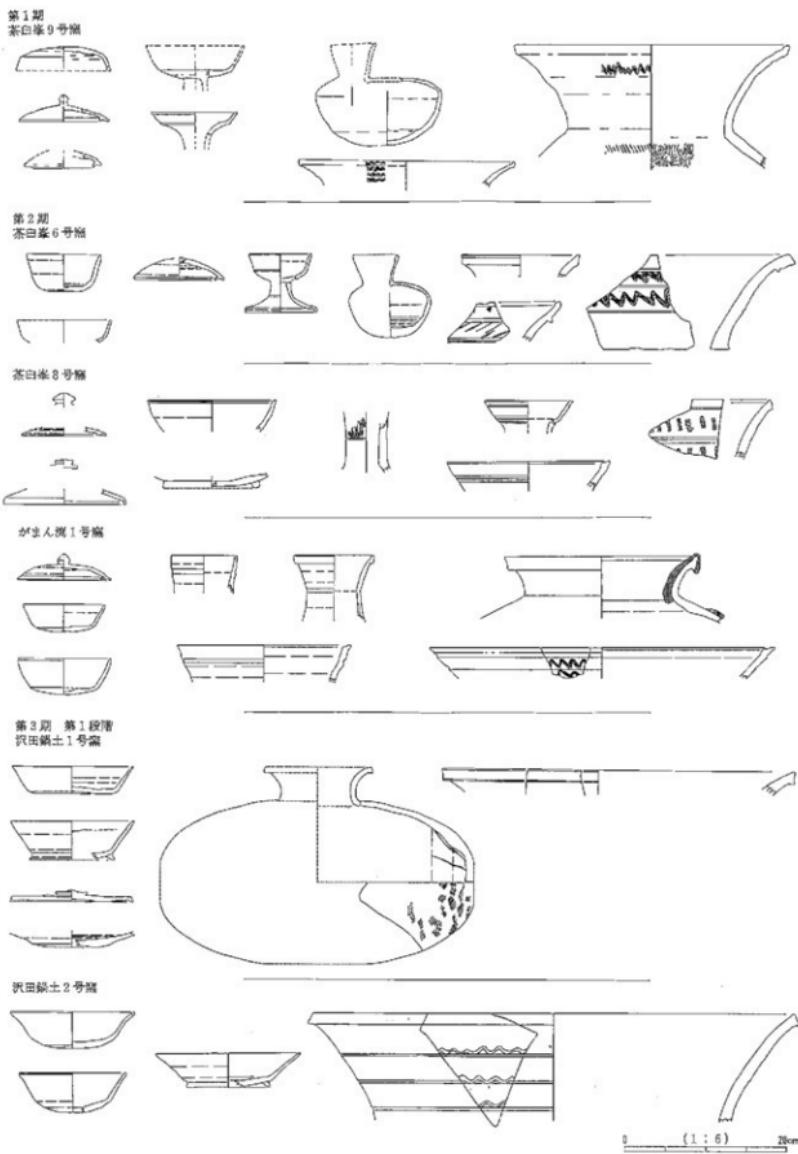
第1段階（第327図中段） 牛出1号窯、同1号灰原、同3号灰原がこの段階のものと思われる。これらの窯跡の杯A4は第2段階のものに比べると大きさが安定していない。また形態も若干バラツキがみられる（第332図13、第277図1～33、第278図1～4）。

金属器や磁器を模倣した三（獸）足壺（牛出古窯3号灰原）や信州特有の凸帯付四耳壺、透かしのある高杯D（牛出3号灰原）など全段階になかった器種が増加する。またヘラ描き文字「大」（牛出1号窯、3号灰原）、や記号「ヰ」「×」（牛出1号窯、3号灰原）が、この段階から再びみられるようになる。

牛出3号灰原出土の獸足形鉗の例は、尾北の篠岡81号窯（愛知県教委1983）（猿投窯第IV期第1小期）美濃須衛窯稻田山13号窯（各務原市1981）（第IV期第3小期）、静岡東笠子43号窯（斎藤・後藤1995）などにみられ、8世紀中葉から9世紀とされるものである。

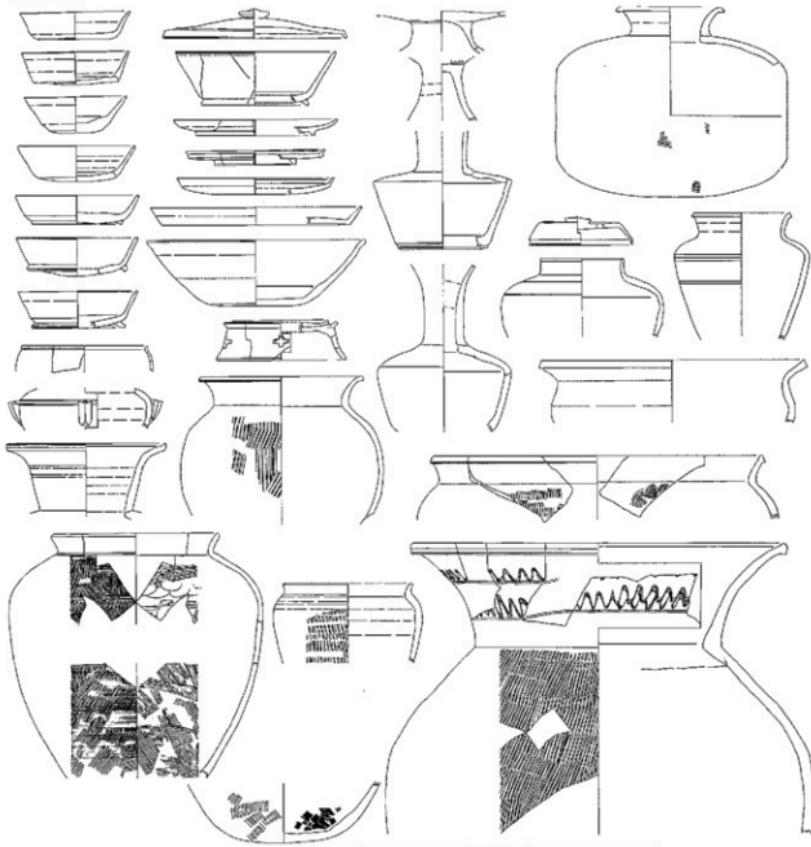
第4期に多い凸帯付四耳壺の初現は、8世紀初頭の老洞2号窯（岐阜市教1981）、稻田山（須衛21～25号）窯跡群（岐阜市教委1981）、そして中野市沢田鍋土1号灰原（第123図137）にみられる。小型で体部球形である。この形態は8世紀初頭の平城京出土（平城京左京二条十三坊）須恵器釜（巽1985）に耳部分が付いた形態と思われる。しかしその後姿を消し、8世紀の中葉より9世紀にかけて、大型化した胴部の長い凸帯付四耳壺が長野県を中心（笛沢1986）に山梨県（出月1994）などで多く発見される。8世紀中葉から9世紀にかけての凸帯付四耳壺出土の生産遺跡としては、佐久市八重原1号窯（坂詰1982）、同8号窯（坂詰1963）、牛札村前高山北2号窯（笛沢1986）、同西1号窯（笛沢1988a）、中野市立ヶ花表山3・4号窯（中野市教委1995）、中原窯跡（中野市教委1995）、牛出古窯3号灰原、池田端6号窯、同7号窯、新潟県佐渡地方小泊窯跡群（坂井他1992）である。長野県北部と佐渡地方を中心に短期間生産された器種と思われる。

脚に透かしのある高杯（第278図14）は、古墳期にその初現はあるがその後姿を消し、8世紀中頃から10

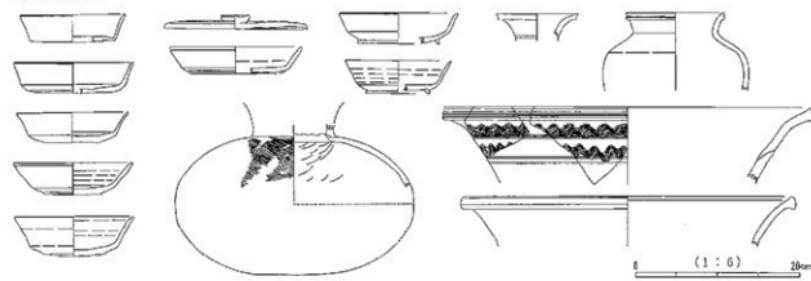


第322図 高丘丘陵古墳群出土遺物(1)

沢田鉢土 1号灰原

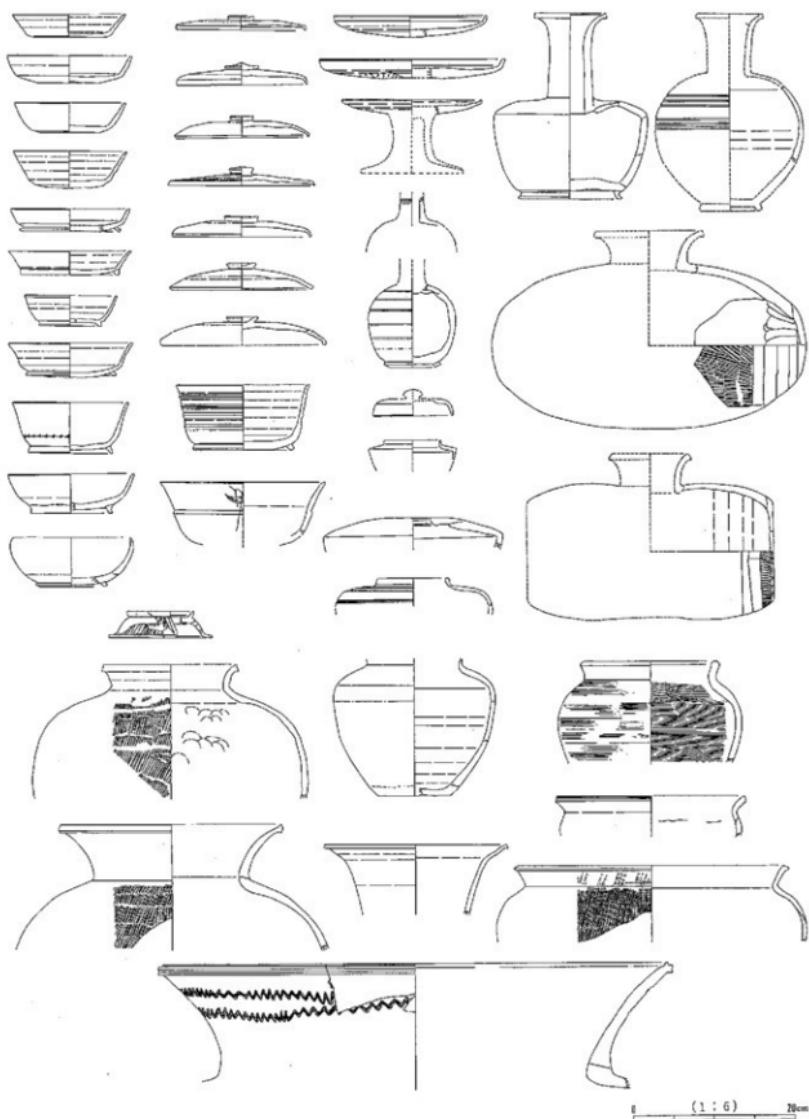


立ヶ花表山 2号窯



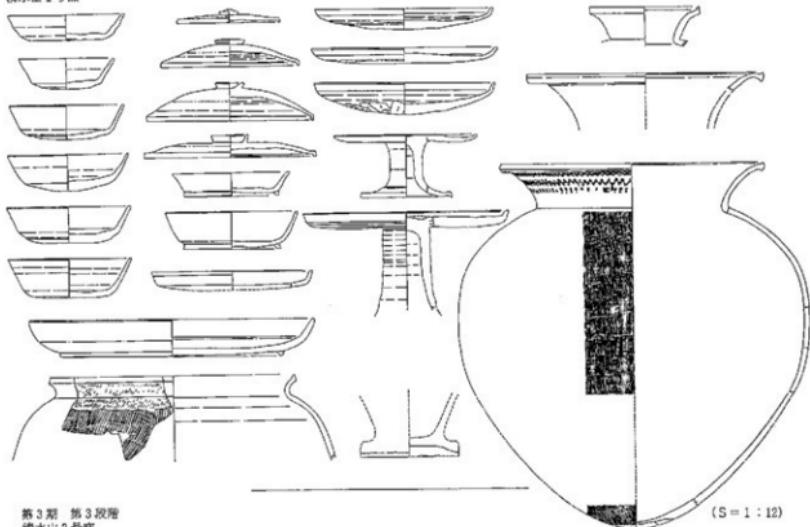
第323図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(2)

第3期 第2段階
清水山1号灰原

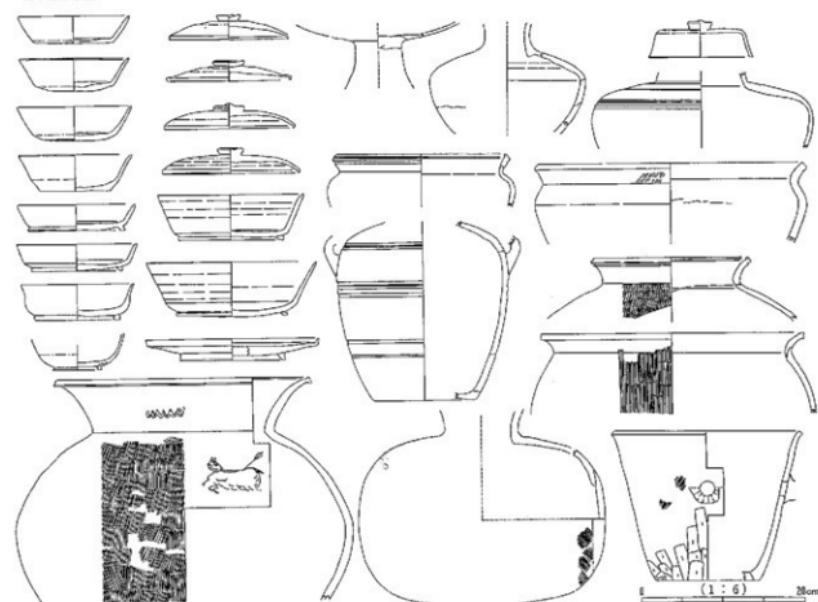


第324図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(3)

清水山1号窯

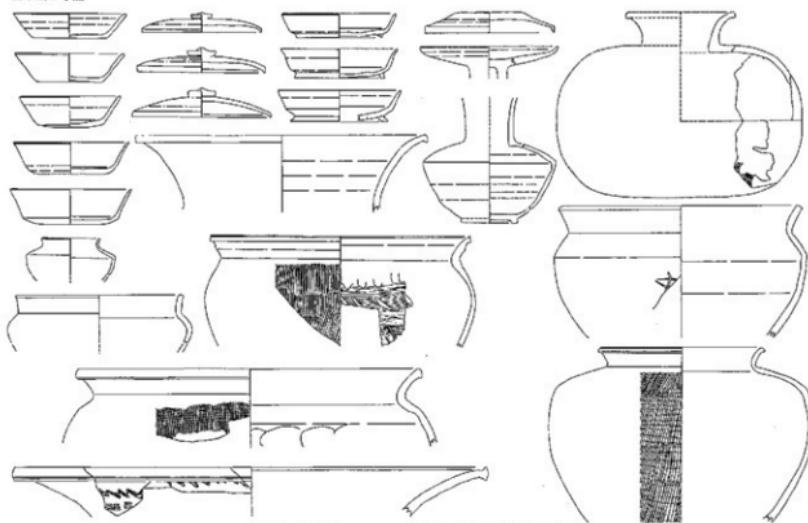


第3期 第3段階
清水山2号窯

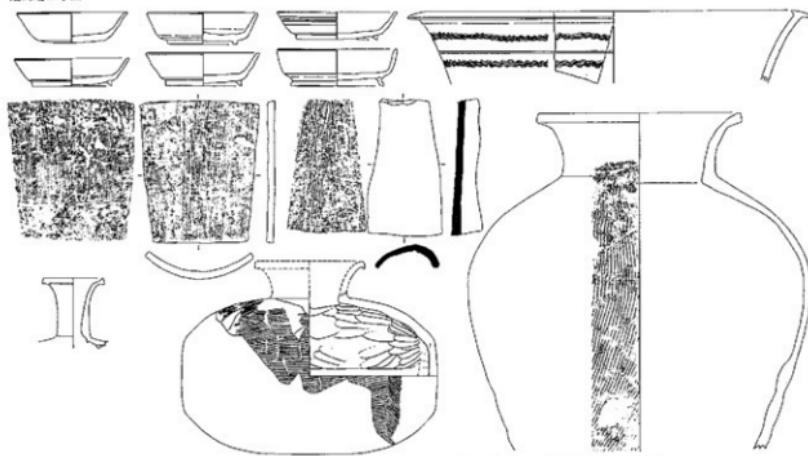


第325図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(4)

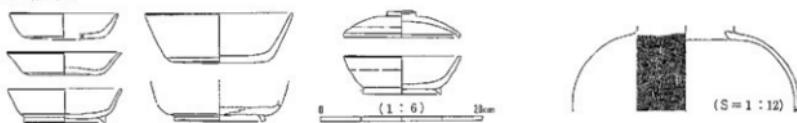
清水山3号窯



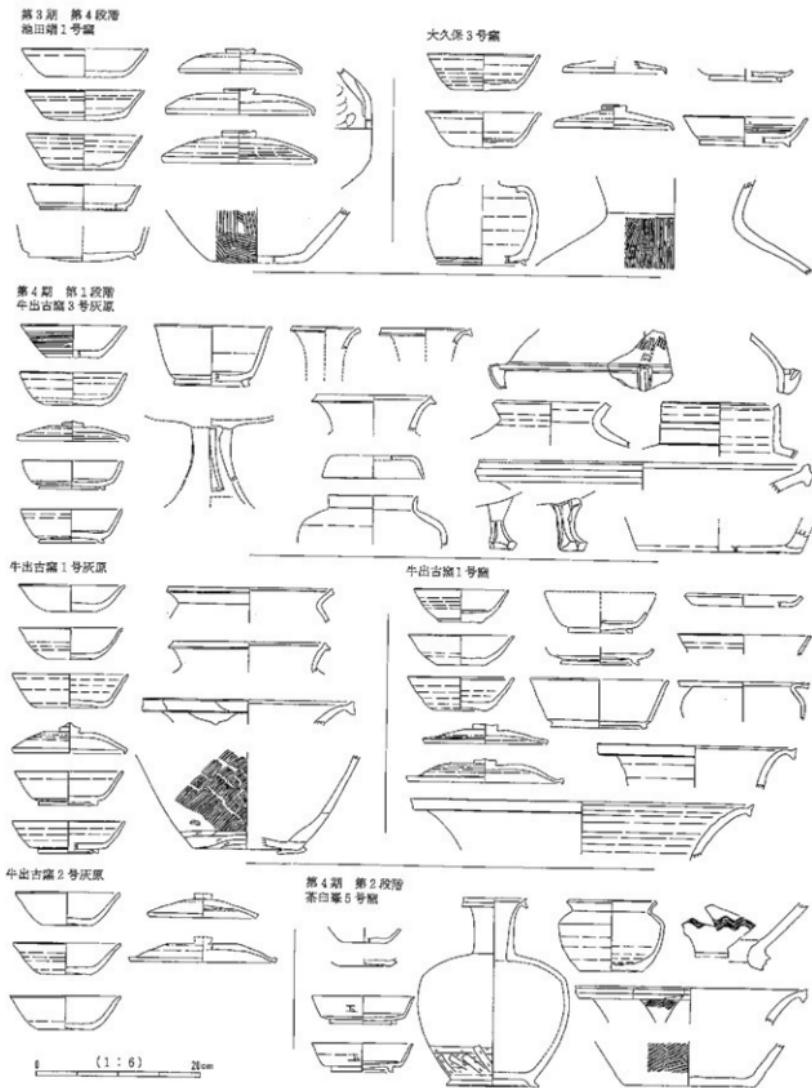
池田塚2号窯



池田塚5号窯

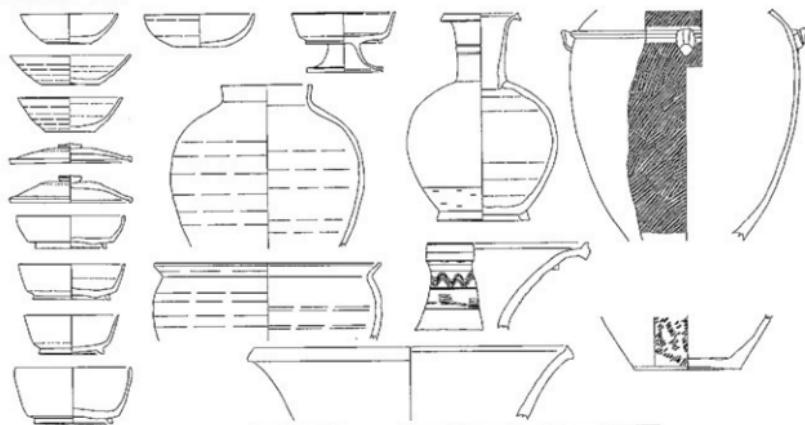


第326図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(5)

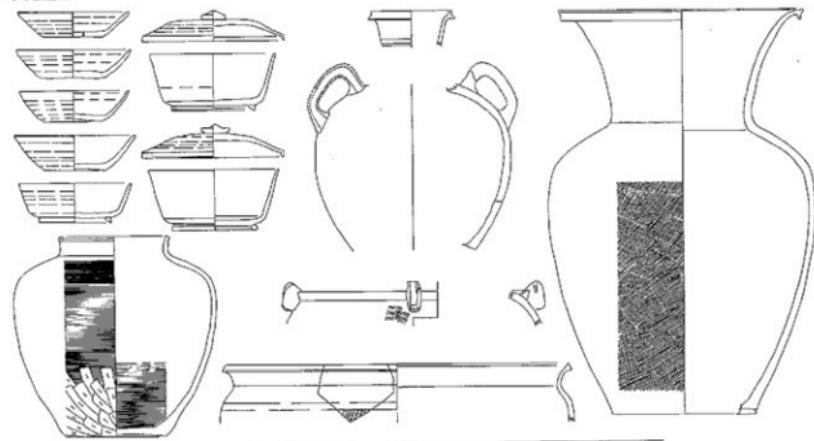


第327図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(6)

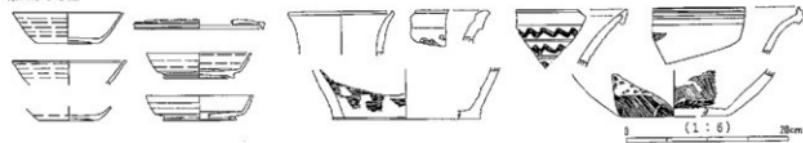
立ヶ花塚山3・4号墳



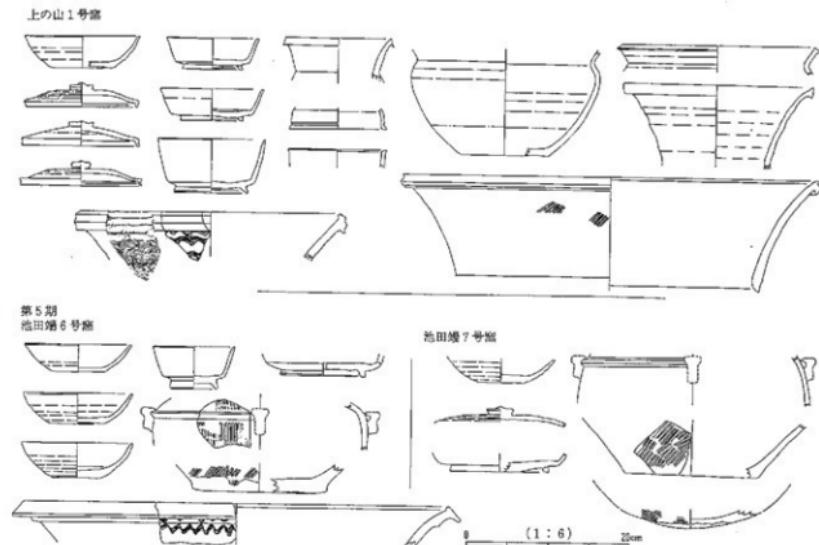
中原古窯跡



茶臼塚3号墳



第328図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(7)



第329図 高丘丘陵古窯址群出土遺物(8)

世紀までの美濃須衛窯の影響⁽¹¹³⁾を受け中野市牛出古窯址3号灰原で再出現している。

第2段階（第327図下段～第329図上段）この段階の高丘丘陵古窯址群の杯A 4は、回転糸切り未調整か糸切り後ナデ調整⁽¹¹⁴⁾のものが多くみられるが、同時期の窯と思われる千曲川対岸の牟礼村平出上の山1号窯（牟礼村教委1992）では、回転糸切り後底部をヘラ削り⁽¹¹⁵⁾しているものが多く混在する。

また、この前段階同様杯Bは底部糸切りが未調整のもの、底部外周へラ削りするもの、底部回転へラ削りするものなどがみられる。高台は杯底部の内側に取り付けられている。そして前段階同様蓋Bは口縁の折り目が明瞭で、天井部との境目が沈み込むものもあり、天井部の回転へラ削りされた部分が平らとなるもの（蓋B 3）が多くなる。

牛出古窯址の住居内で発見された高杯Dの生産遺跡として現在確認できるのは、中野市立ヶ花表山3・4号窯（第336図140）のみである。高杯Dの類例は、長野市田牧居窯遺跡24号溝検出面（長野市教委1993b）、更埴市上ノ田遺跡15号溝（更埴市教委1983）で知られるのみである。

この段階の長頸壺は口縁端部が摘み上げられたような形態が多くなる（第337図83）。長頸壺Aは消滅し、体部が球形にちかい形態の長頸壺Bとなる。長頸壺の製作技法のわかる牟礼村平出上の山1号窯、立ヶ花表山3・4号窯群の長頸壺は二段構成の製作技法（第181図1）である⁽¹¹⁶⁾。また壺Aは概ね平底となる。

杯の様相などから（第333図7～12）長野県内では塩尻市菖蒲沢窯跡（塩尻市教委1991）、北御牧村八重原1号窯（坂脇1982）、飯田市宮前1号窯（達那1963）、飯田市御殿田1号窯（下伊那歴研1981）、豊科町菖蒲平1号窯（筆沢1988a）、飯田市土器窯跡（筆沢1988a）が同時期の窯と思われる。

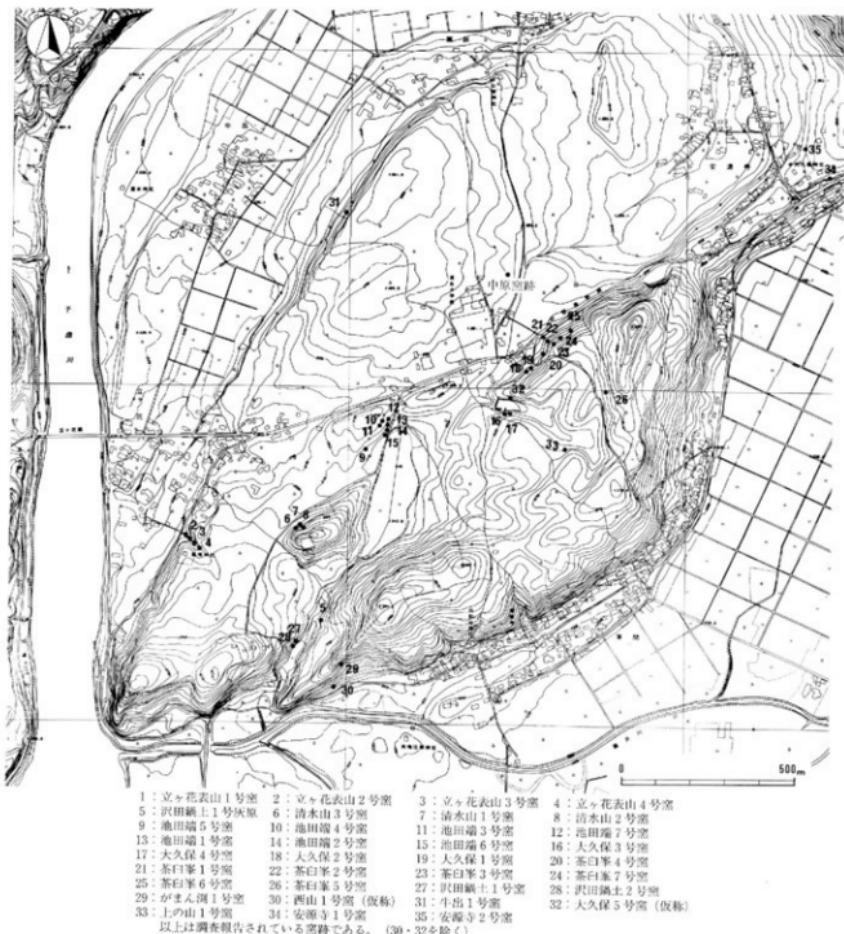
第5期

この期の杯Aは、回転糸切り技法による切り離しで底部径が6cm以下で法量が一定のものが多くみられる

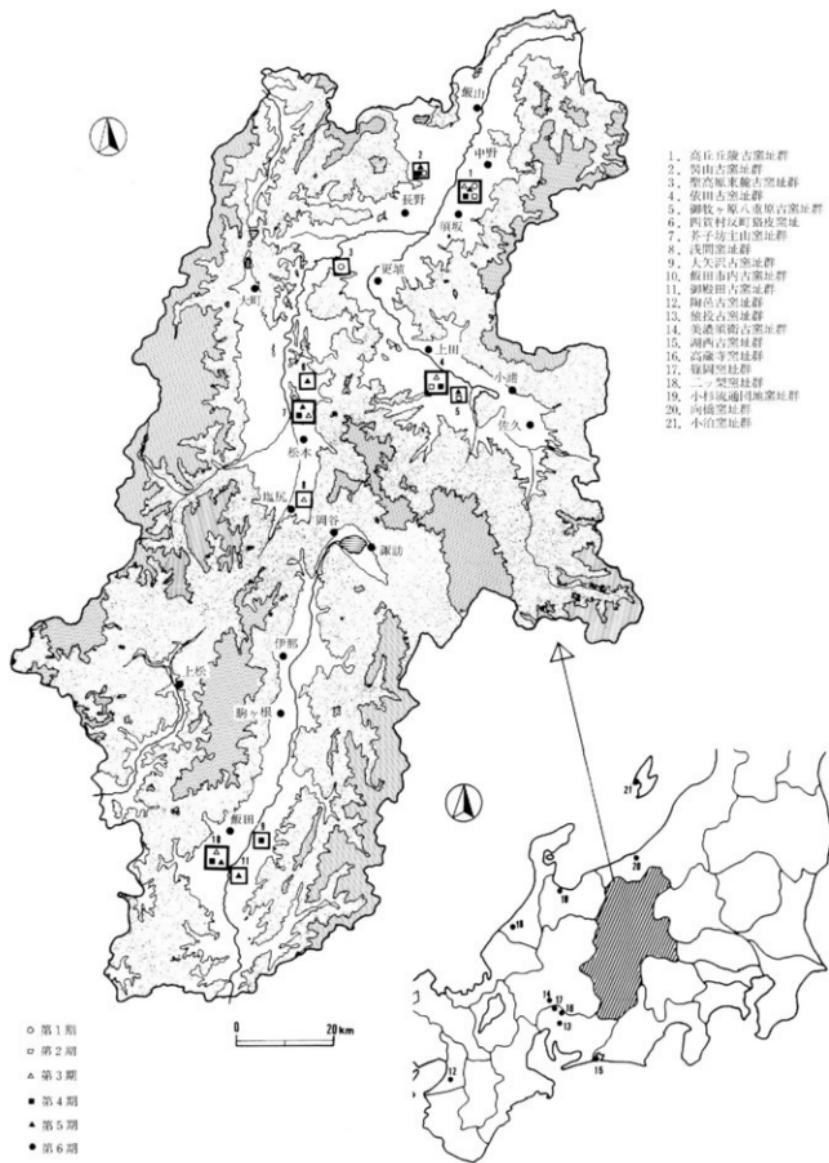
窯跡である。池田端 6 号窯、7 号窯がこの期の窯跡と思われる。

杯 A は回転糸切り離し技法で未調整である。杯 A (杯 A 4) の底部は前段階よりも更に小さくなり (底径 6 cm 以下) 外傾度が増し、器高が低く、法量が一定化してくる。杯側面のクロコ痕は鮮明となる⁽²¹⁷⁾。杯 B は回転糸切り技法で外周へラ削りである。高台径は縮小傾向にある。

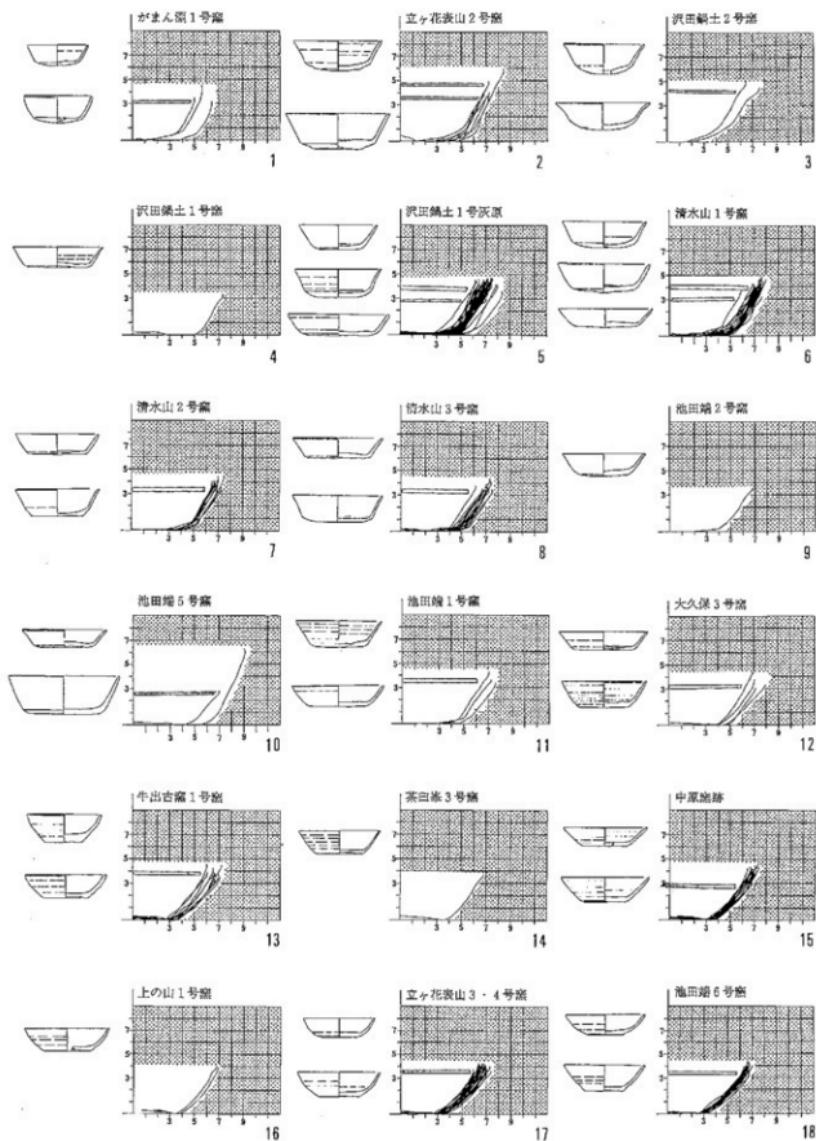
この時期の北信地方の窯は池田端 6 号窯、同 7 号窯 (第332図18、第334図17) のほか鶴山古窯址群の牛札村前高山西 1 号窯 (第333図13、第335図10) などがあげられるが、窯跡数も減少し、杯類が須恵器生産のほとんどを占めるようになる。杯 B は法量分化が明確化する。甕 A は前段階同様の平底である⁽²¹⁸⁾。



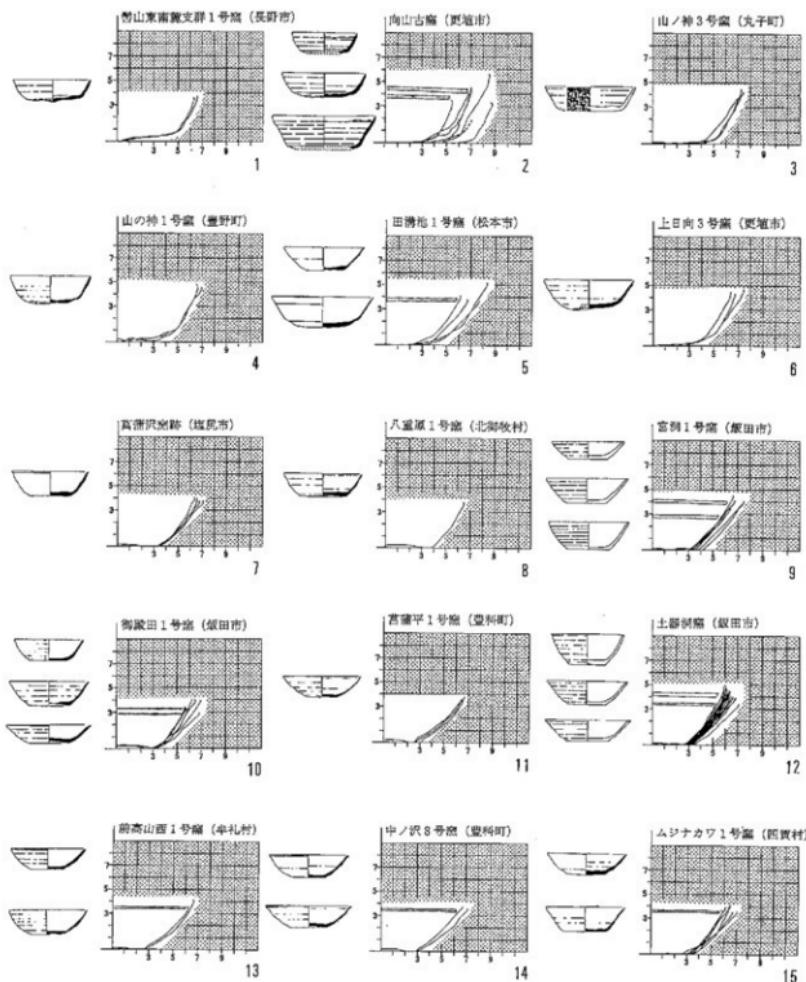
第330図 高丘丘陵古窯址群窯跡分布図



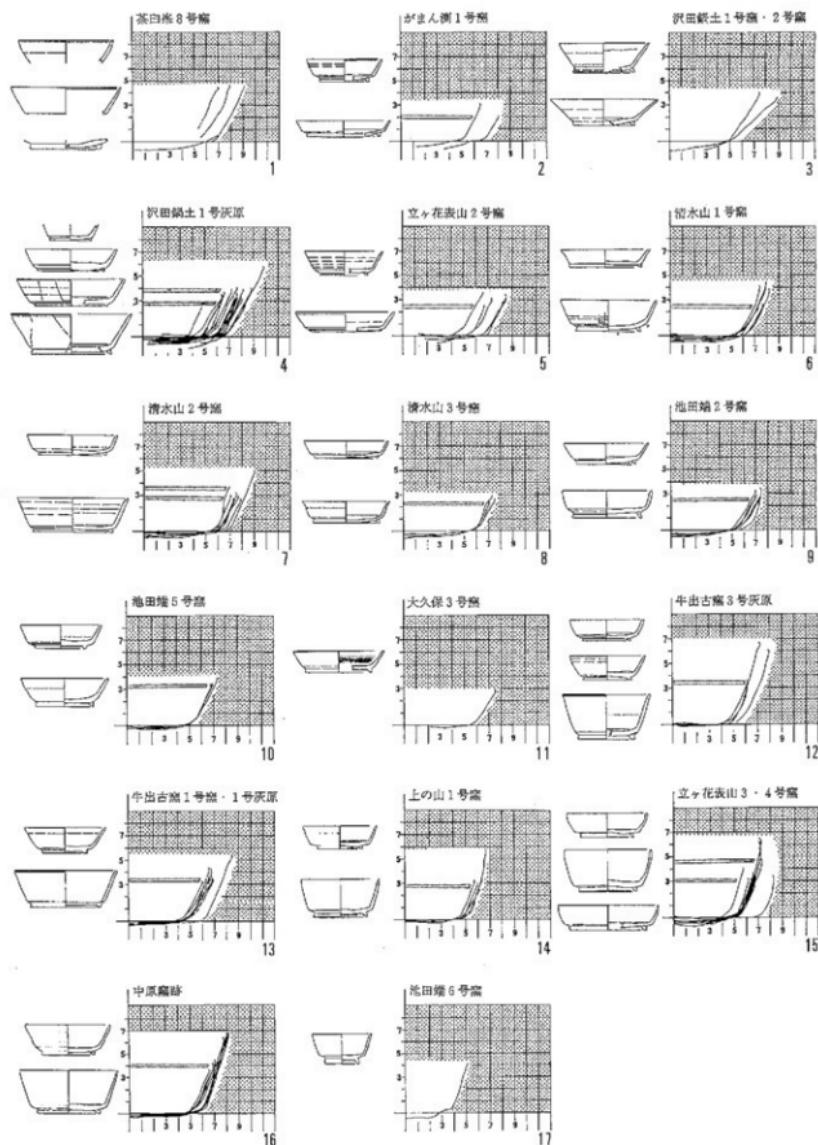
第331図 主な須恵器窯の分布



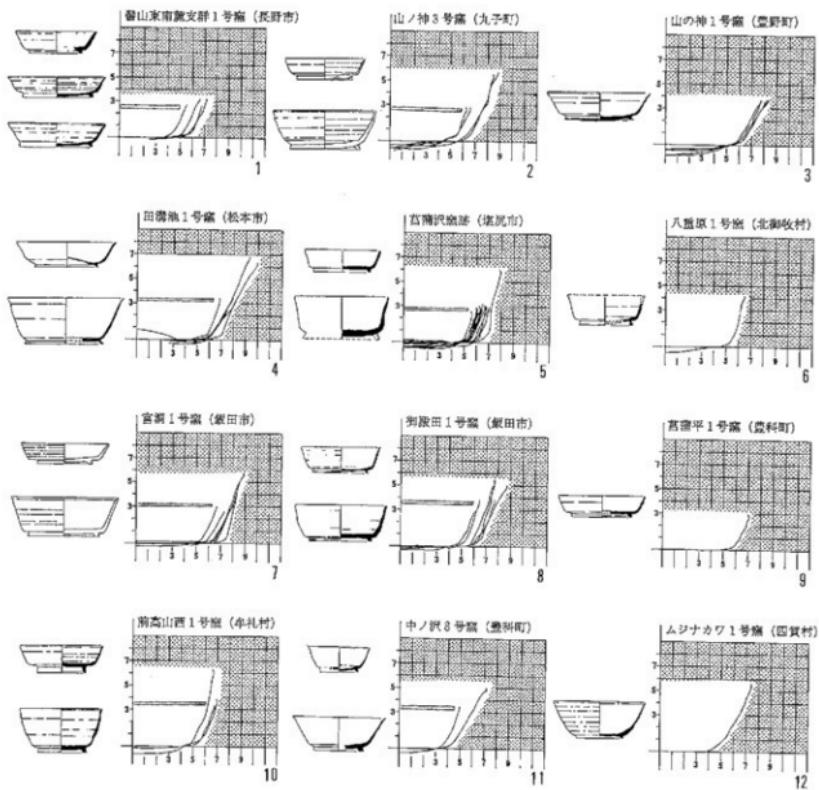
第332図 須恵器壺A形態と法量変化(1) (高丘丘陵古窯址群)



第333図 須恵器環A形態と法量変化(2) (県内古窯址)



第334図 須恵器環B形態と法量変化(1) (高丘丘陵古窯址群)



第335図 須恵器環B形態と法量変化(2) (県内古窯址)

北信地方では須恵器生産の衰えもあり、底部糸切り技法による生産を細々と続けていたものと思われる。そして北信地方では須恵器に代わる土師器が主流となる。つまりロクロ挽きの黒色処理した土師杯が登場しはじめ、甕、壺類の須恵器生産が減り、長胴甕や小型甕、鉢類といった土師器が大半をしめるようになる。

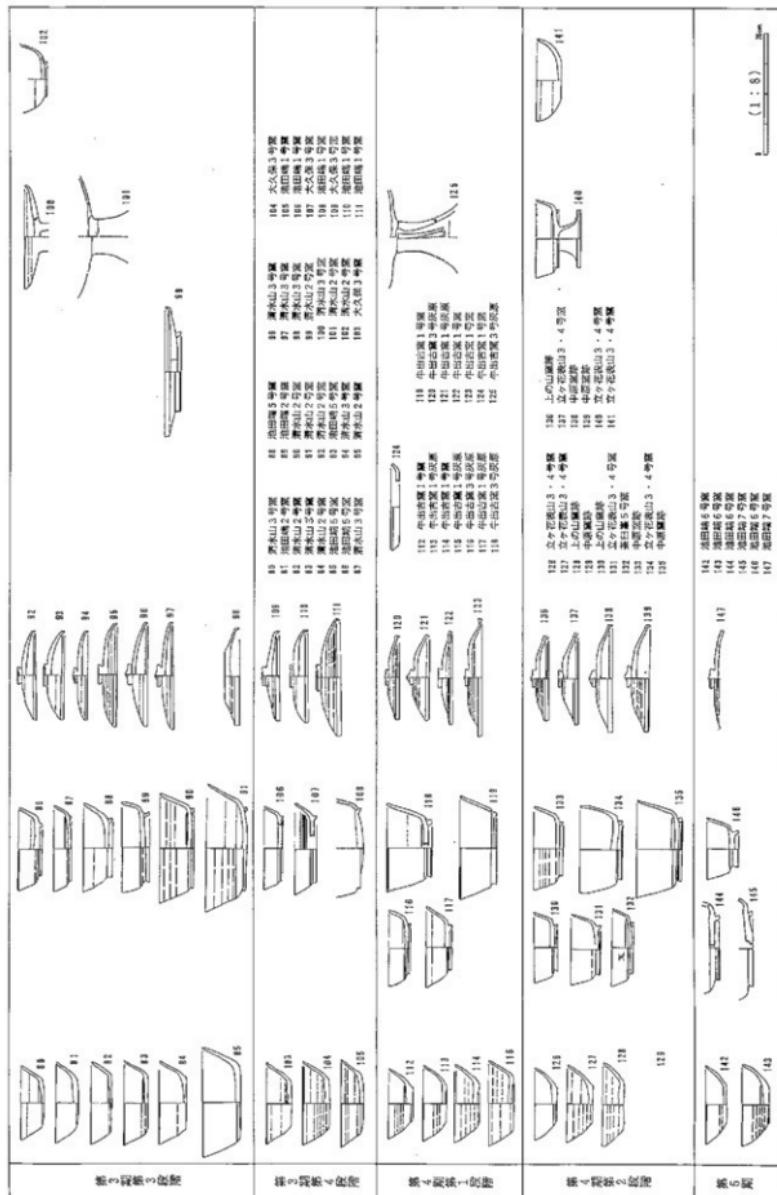
杯の様相から長野県内の同時期と思われる窯跡は豊科町中の沢8号窯(塩沢1988a)、四賀村ムジナカワ1号窯(塩沢1988a) (第333図14・15、第335図12)などがみられる。

第6期

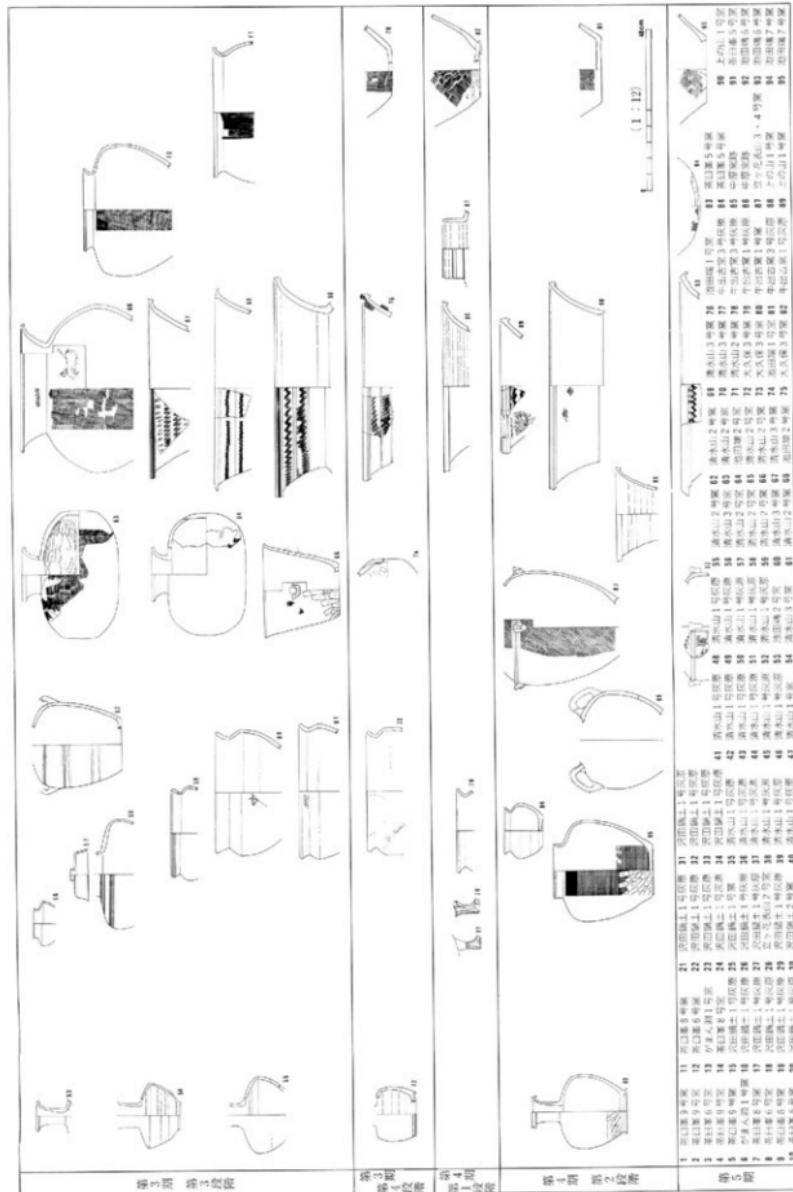
北信地方では現在この時期以降の窯が発見されておらず、この時期から全く須恵器生産が衰退してしまう。猿投窯跡群では灰陶陶器の本格的な生産が始まり、須恵器窯の需要が無くなってきた時期と思われる。

この様に高丘丘陵古窯址群では地点(支群)を変えながら、7世紀中葉から間断無く9世紀前葉まで約

	杯A	杯B	杯C	蓋	皿A	指輪	皿B	盤	高杯	鉢	桶
第1期											
第2期											
第3期											
第4期											
第5期											
第6期											
第7期											
第8期											
第9期											
第10期											
第11期											
第12期											
第13期											
第14期											
第15期											
第16期											
第17期											
第18期											
第19期											
第20期											
第21期											
第22期											
第23期											
第24期											
第25期											
第26期											
第27期											
第28期											
第29期											
第30期											
第31期											
第32期											
第33期											
第34期											
第35期											
第36期											
第37期											
第38期											
第39期											
第40期											
第41期											
第42期											
第43期											
第44期											
第45期											
第46期											
第47期											
第48期											
第49期											
第50期											
第51期											
第52期					</						



第33図 高丘丘陵古窯址群変遷図(1)



第337図 高丘丘陵古窯北部須恵器生産図(2)

一世紀半続いていたものと思われる¹⁰⁹⁾。高丘丘陵古窯址群は律令体制の浸透期に発達し律令体制の衰退と共に消えた生産地といえる。また、東信濃の須恵器生産は、古墳時代末葉に高丘丘陵古窯址群など千曲川水系において生産を本格化する。そして千曲川対岸の磐山古窯址群と上流の北佐久郡御牧上古窯址群などもほぼ同時に操業を開始し、徐々に中・南信地方に生産地を拡大するが、律令体制の衰退と灰釉陶器の生産拡大により、須恵器生産は9世紀前半期には役割を終えたものと思われる。

註

- (1) 田辯氏は型式について「ある時間的空間的な規定を持つ一群の土器を一型式としてとらえる。」「櫛年作業の中へ、製作技法、形態、組み合わせの三つの視点で特徴をとらえる具体的方法を挿み型式櫛年の前提である各型式規定を果たそうとするものである。」と述べている。中村氏は、田辯氏の型式規定について「…特定の施名を持って型式名とし、それらの施のみでなく他のすべての同一型式遺物までに及ぶとする発想があり（中略）各期に細かな型式規定がされている。」とし、中村氏の型式に対する考え方は「…型式は杯盤を中心とする形態の変化と修復の組み合わせによって区分されるものであり、段階は型式を構成する各時期にみる細かな形態変化を示す。型式・段階はともに直機たる施跡の検討によって得た時間的推移を前提に設定した施別区分であり、単に工人差によって生じる形の差や手法の差は区分対象とはせず、同一段階に属するとみられる同一部種については、類形という語を用いて分類を行っている。」として、田辯氏との違いを述べている。TK217型式の蓋と杯の共伴を中村氏はII型式第6小期と兼III型式第1小期に分類している。
- (2) 猿投縄年では岩崎17号窯古窯段（猿投窯第三期第2小期古）で蓋Eと蓋Dが伴い、美濃須須窯（第三期）では須窯65号窯が蓋Eと蓋Dが伴う。
- (3) 都城の土器集成では杯G。
- (4) 美濃須須第三期後半期の各務原市郡加5号窯の様相に近似する。猿投窯では第三期第2小期後半が相当する。猿投窯では従来の器種蓋E、蓋Dと器高の高い丸底の杯A、新たな器種蓋Bが登場する。蓋の返りは後半になると退化したものとなり、この期には長野県では蓋Eは消失するという相違がみられる。
- (5) 回転ヘラ削り調整とは回転を利用してヘラで削る調整である。
- (6) 斎藤1995参考。
- (7) 後藤1995参考。
- (8) 斎藤・後藤1995参考。須窯9号窯。
- (9) 大久保2号窯もこの段階と思われる（中野市史編、1981）
- (10) がまん測痕跡の灰原と思われる中に布目瓦が混入している（中野市歴、1995）。この布目瓦は池田端2号窯の布目瓦に類似する特徴を持っており、がまん測痕跡に持ち込まれたものと思われる。
- (11) この時期猿投窯では第四期第1小期の時期よりヘラ切り技法は残るもの糸切り技法が普遍化してくる（猿投窯第四期第1小期）。その後灰釉陶器の生産が開始される。鳴海32号窯（猿投窯第四期第2小期）では逆台形の杯に高台が付けられたような高台付杯がみられ、美濃須須窯（第四期第2小期）では杯Aに大皿品がみられなくなり底部が平底となり、身が直線的に立ち上がる塔型となり高丘丘陵古窯址との相違がみられる。
- (12) 中村櫛年では梅邑第IV型式第1段階から第2段階（8世紀前半）にあたる。
- (13) 高杯の脚に長方形の通孔を入れるものは美濃須須古窯址群の西田山古窯址に多く、8世紀の中頃以後10世紀までみられる。
- (14) ナデ調整とは回転を利用せず器面を指、布、皮などで擦り、凸凹をなくす調整技法である。ナデ調整の中でも板ヘラ（板状工具）ナデ調整のように工具底をはっきり残すものがある。板状の小口（板状工具）などを利用し、器面を平らにする。ハケ目のようにみえるがハケ目よりも器面に対してかなり小口を窓かせる角度で整形しており、ナデのような効果をもたらしている。主に杯A底部の調整に用いられており、ヘラ切りによる凸凹を1~2回のナデで平にする効果があったものと思われる。清水山窯跡で多くみられた。
- (15) ヘラ削り調整は面板を利用せずヘラで器面を削り、薄く調整したり、器面の凸凹を調整する技法である。

(16) 8世紀中葉の埴投では前説跡から糸切り技法が普遍化し、注量分化の多様性がみられなくなり、長頸壺の三段構成のもの他に二段構成のものが出現する（岩崎25号窯、埴投第IV期第1小期）。鳴海32号窯（埴投窯第IV期第2小期）では原始灰陶のようなものもみられるようになる。しかし美濃須衛窯では糸切り技法は例外的であり、最後まで糸切り技法が一般的である。稻田山窯12、13号窯（美濃須衛窯第IV期第3小期後半9世紀初頭）では杯類を中心とする量産化に伴う技術的退化・粗雑化が認められる。各部位の様式化や装飾過多が盛行している。

(17) 回転数が上がったためと思われる。

(18) この時期である埴投窯第IV期第4小期（岩崎45号窯）9世紀初頭の埴投窯の特徴は三（歌）足壺などがなくなり、杯類が主体となり、杯Bは高台が少し高くなる。杯壺の量も減り、長頸壺は二段構成のものが主となり、灰陶陶器の生産が始まる。また美濃須衛窯では底部へラ切り技法を踏襲し独自の様相を作り上げている。

(19) 現在報告されている高丘丘陵古窯跡群は約45基であるが、金井坂次氏によると高丘丘陵古窯跡群は100基以上（破壊されたものを含めて）存在していたものと思われるというご教示を頂いている。

3 奈良時代のヘラ書き資料について

清水山1号窯、1号灰原に多くみられるヘラ書き「井」印は「高井」と記す資料の存在により「高井郡」の井を省略して記したものと思われる。郡を明らかにして須恵器を官序や寺院に納める必要があったものと思われる。

ではこれらの「井」の字はどんな筆順で記されたものであろうか。現在の「井」の字は、二本の横棒を上そして下、次に縦棒を左そして右の順番に引く。これらのヘラ書き記号の筆順の観察結果は第6章の出土遺物図版の「井」の字の部分に記した。

なお「井」印の資料は1号窯、1号灰原のみでなく2号窯、3号窯からも出土しているが出土層位からも1号窯の製品の可能性があり分析の中に含めた。

筆順は以下のように分類される。

1パターン：現在と同じ横縦二本ずつを引くもの（1号窯-41、42、43、80、81、82、85、86、87、89、90、91、92、94、95、97、101、102、103、104、111、112、113、114、130、131、133、134、135、137、138、139、140、141、142、144、159、160、161、162、163、165、166、167、168、169、171。2号窯-60、62、64、67、70、71、73。3号窯-55。1号灰原-63、93、94、95、96。1号窯-128「高井」）

2aパターン：横縦横縦を交互に引くもの（1号窯-41、170、172。2号窯-63）

2bパターン：縦横横縦を交互に引くもの（3号窯-68。1号灰原-101）

3aパターン：縦横横縦に引くもの（1号窯-100、173）

3bパターン：横縦縦横に引くもの（1号窯-129「高井」）

どちらが経縫か横縫かはっきりしない場合があり、2aと2b又は3aと3bの区別は明確ではなく、3パターンの筆順に大別される。ほとんどの「井」の字は現在と同じ筆順1パターンである。

次に1パターンの筆跡についてみると大きく2タイプに分けられる。1類は湾曲線や非平行線でヘラで描かれた文字のもの（第338図1～7、23）、2類が二本の直線的なヘラの線で描かれているもの（第338図8～18、25）である。1類の23は、長い平行線を引いた後、短い平行線を書く前に描き損じた線を消さずに残したものと思われる。2類の25は短い平行線のヘラの纖維が二重線となったものである。

筆跡1類と器種の関係はどうであろうか（第338図参照）。2の沈線内には織維束がはっきり認められる。このような織維束がはっきりするものに「高井」の文字がある（第149図128）。しかし「高井」はヘラというよりも細い織維束を束ねたような工具で描かれている。1と2は1号窯の皿Aの底部へラ削りのものに多くみられる。3はリング状のツマミを持つ蓋Aにみられ（第172図63・64、第148図103）、後から描かれ

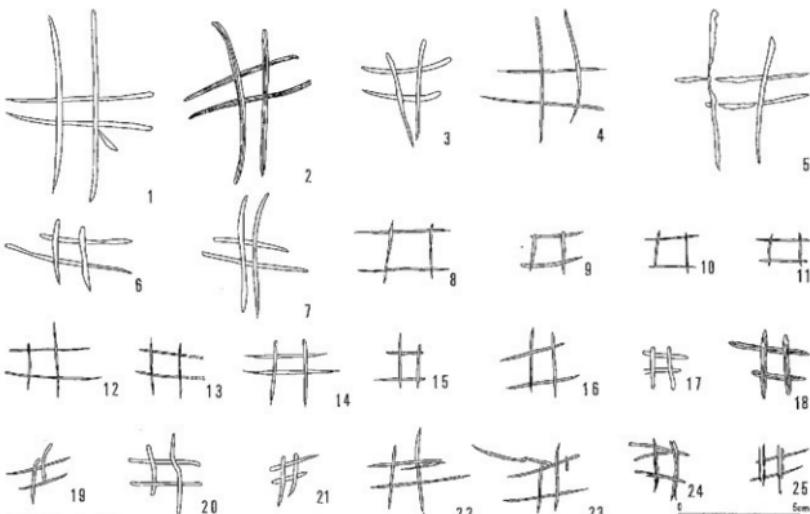
た二本線が短く“抜く”部分が狭まっている。4は1号窯の蓋Bに多くみられる。5は1号窯の杯A底部にみられる。6は杯B(第172図95・96)にみられるもので、後から描かれる二本線が短く平行な線である。7は1号窯の蓋A(第148図102)にみられ、2の筆跡にも類似する。

筆跡2類の8は回転ヘラ削りされた1号窯の皿Aにみられる。また1号窯の蓋B(第148図94)や盤B(第150図144)に類似するものがみられる。9は8や10の形態に類似するが、工具がやや太めである。10は2号窯の杯B(第159図61・66・70・73)底部中央にみられる。11も10に類似し、始めの二本線の間隔が狭い。13は2号窯の杯B(第159図)に多くみられる。8に類似する12、14、16は高杯A(第151図)にみられる。12は始めの二本が長く、14は工具がやや太めであり、始めの二本線の間隔が狭く、16は四本線がほぼ同じ長さである。15は8に類似するが後の二本線の間隔が狭くなってしまっており、1号窯蓋C(第147図80)と1号窯杯B(第148図112・113)にみられる。17は工具が太く1号窯の杯A(第146図42)にみられる。18は1号窯の蓋Bにみられ、2に類似する工具が使われたものと思われる。19は1号灰原の碗Cにみられ、1号窯の杯Bにも類似するものがある(第148図114)。

次に筆順2・3パターンの器種との対応関係を見ると、筆順2bパターンである20は3号窯蓋底部、筆順2aパターンである21は1・2号窯高杯B(第148・152図)に記されている。22は筆順3a又は3bパターンで1号窯の蓋B(第148図)と「高井」とヘラ描きされた皿A(第149図)にみられる形態である。

その他の24は12と類似する高杯A(第151図170)にみられる。25は2号窯の杯B(第159図60)で、13のヘラが割れた状態で描かれたものと思われる。

このように特徴の似ているヘラ描き記号は同一器種に施される傾向がみられる。また、皿Aは底部を回転ヘラ削りする技法とヘラ削りする技法の2種類があり、底部調整の差が「井」印の筆跡の差と一致する。



筆迹I類 1. SY01-142 2. SY01-138 3. SW01-63 4. SY01-89 5. SY01-43 6. SW01-95 7. SY01-102
 筆迹II類 8. SY01-134 9. SY01-95 10. SY02-70 11. SY02-71 12. SY01-169 13. SY02-64 14. SY01-171
 15. SY01-80 16. SY01-168 17. SY01-42 18. SY01-97 23. SY01-159 25. SY02-60
 筆迹III類 19. SW01-101 20. SY03-68 21. SY02-63 22. SY01-100 24. SY01-170

第338図 清水山窯跡「井」印のヘラ描きの分類

高杯Aは器の形態に個体差がなく、ヘラ描きも同一人物によるものと考えられるほど均一である。蓋Aではつまみのリング形態の違いによって3と7というようにヘラ描き筆跡が異っている。また器種が異なるもので同類の筆跡がみられるものがある。1パターン2類の筆跡に複数の器種にわたるものが多いが、同一人物によるものか判断しにくい。

筆跡と筆順から「井」印を分類し、1号窯の須恵器製作に関わった工人数を推定できる。筆順で5分類され、筆順パターンでは2種類の筆跡が確認されることから、最低6人の人が存在することになる。その他にも若干の筆跡の相違がみられ、個々の筆跡鑑定は無理であるが1つの窯には少なくとも6人以上の職人が須恵器の製作に携わっていることが理解された。

4 窯跡の構造について

(1) 窯体の規模 第19表に窯跡の全長と焼成部の最大幅を示した。全長は前庭部を含めた長さを示す。焼成部の残存状況は窯によって異なっており、必ずしも本来の窯体の規模を示してはいないが、概して、古い段階の窯が大きいという傾向は認められる。その中で清水山窯跡が突出して大きいことが伺われる。同時期の窯跡は全貌がつかめるものが少なく判断はできないが、10mを越えるものは他には見られないことから、清水山窯跡は他と区別される窯の性格を考慮しなければならない。

(2) 窯体の構造 本報告書で取り上げた窯跡は池田端4号窯を除いてすべて半地下式の登り窯である。牛出1号窯では見られなかったものの、登り窯の多くは焼成部に舟底状ピットを有する。また、清水山2号窯・池田端2号旧窯では焼成部に段が認められ、他の窯跡と異なった構造を示す。これらの窯の前庭部には溝が認められ、清水山2号窯では溝の上に甕の破片が伏せられていた。池田端5号窯にも同様な溝が認められ、いずれも3期3段階の窯である。この他に池田端6号・7号窯の前庭部に溝が認められ、7号窯の溝は平瓦で覆われていた。これらの溝の機能は不明であるが、清水山2号窯・池田端2号窯では最終焼成時には溝はすでに床下に埋没しており機能していなかったことが確認された。

清水山1~3号窯では燃焼部壁又は焼成部壁に石を用いており、他の窯跡と異なった構造を示す。清水山窯跡の地山には窯体内に用いられた石と同じものが含まれており、他の窯跡の地山には石が見られなかつたことから、壁面に石を用いる構造は地山に利用できる石を含むか否かの立地条件に左右されたものと思われる。窯壁に石を用いる例は中野市茶臼峯6号窯(大川・金井1964)、上水内郡牛込村前高山北2号窯(上水内郡誌刊行会1976)、塩尻市葛蒲沢窯跡(塩尻市教育委員会1991)などに見られる。

第19表 高丘丘陵古窯跡群の窯の規模

時期区分	窯跡名	造構全長(m)	焼成部幅(m)	焼成部傾斜角度	備考
2期1段階	茶臼峯6号窯	8.5	1.7	22°	トンネル式無段登窯
"	茶臼峯7号窯	8.2	1.2	32°	半地下式無段登窯
"	がまん窯1号窯	4.2	1.25	15°	トンネル式?
3期1段階	池田端1号窯	8.32	不明	25°	不明
3期1段階	安原寺1号窯	7.6	1.45	23°	トンネル式無段登窯
3期2段階	清水山1号窯	14.10	1.46	28.5°	半地下式無段登窯
3期3段階	清水山2号窯	10.80	1.36	28°	半地下式有段登窯
"	清水山3号窯	11.68	1.36	27°	半地下式無段 旧窯体は幅1.6m
"	池田端2号窯	8.12	1.12	24°	半地下式有段登窯 旧窯体は幅1.3m
3期4段階	大久保1号窯	3	1	10°	半地下式無段登窯
3期	大久保4号窯	4.6	1.5	25°	半地下式無段登窯
4期1段階	牛古窯1号窯	7.50	0.95	27°	半地下式無段登窯
4期2段階	茶臼峯5号窯	6	1.2	29°	半地下式無段登窯
5期	池田端6号窯	7.50	1.10	29°	半地下式無段登窯
"	池田端7号窯	4.90	(0.8)	29°	半地下式無段登窯

るには至らなかったが、遺存状況の良好な清水山1号窯と牛出1号窯の窯跡を第339図に示した。網掛けで示した部分が骨組みの痕跡で、斜線はガラス質になった壁面を示し、1・3では複数の壁面が観察される。空洞の直径は2~4cmのものが多く、細いものは1.3cm、太いものは4.5cmのものがある。また、池田窯2号窯では窯壁の裏側に直径3~4cmの直立した炭化材が5ヶ所確認された。これらは地山に埋め込まれた骨組み材と思われ、その間隔は狭い所で40cmである。これに対し、清水山1号の窯跡資料(第339図1・2)では骨組み材の縦の間隔は約20cm、横方向は約10cmを測り、骨組みの間隔が狭く強固な構造であったと推定される。窯体の規模と遺存状況も考慮しなければならないが、清水山1号窯は窯溝が他の窯に比べ多く出土しており(第20表)、他の窯よりも重厚につくられていた可能性が高い。なお、窯溝の総重量には焼台として用いられたものも含まれている。

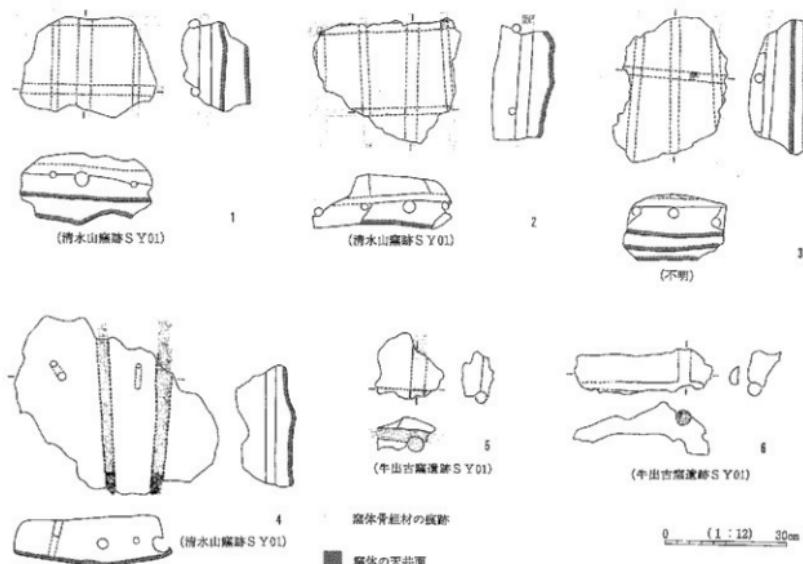
5 高丘丘陵古窯址群の須恵器生産

(1) 各窯跡の器種組成

各遺構の器種組成を第21表に、杯A・杯B・杯蓋の組成率を第340図に示した。数値は遺構内から出土し

第20表 窯跡の出土量

遺跡名	遺構名	窯溝 総重量 (焼台を含む) (kg)	焼台数 (窯溝を含む個数)
沢田燒土遺跡	1号灰原	530	353
池田端窯跡	1号窯	10	1
"	2号窯	113	0
"	6号窯	118	5
"	7号窯	125	0
"	1・2号灰原	80	2
清水山窯跡	1号窯	940	34
"	2号窯	340	18
"	3号窯	355	3
"	灰原	158	99
牛出古窯跡	1号窯	284	35
"	1~3号灰原	188	140



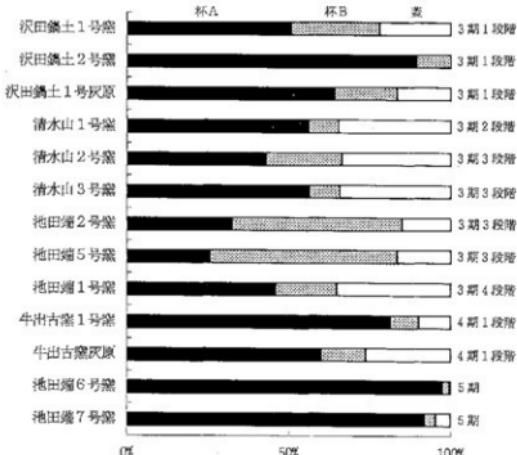
第339図 骨組材の痕跡を残す窯体

た須恵器の口縁部（杯は底部）の残存率を累積加算したものである。すなわち、器種ごとに分類した口縁部（底部）破片について、分母を32としてその残存率を測定し、分子の合計を32で割った数値である。これらの数値の小数点以下を切り上げた整数が各遺構の最小限に見積もった個体数であり、実際に遺跡に残された個体数とは異なるものの、これらの数値は遺跡に残された各器種の構成比を示すと考えられる。しかしながら、焼跡により実際の須恵器生産数と遺跡に残された数との比率がいずれの焼跡においても一定であるとは限らず、また、同一焼跡内で焼かれた須恵器でも器種によって破損率が異なることは予想され、ここに示された器種構成比

が各窯で生産された製品全体の器種構成比とは必ずしも一致しないことは承知しておかなければならない。

同様の理由から、数量の差も生産量を反映するものとは必ずしもいえない。また、沢田鍋土遺跡、牛出古窯遺跡の灰原では壺・甕の計測ができなかったので数値を示していない。

まず、清水山1号窯の器種構成が特異であることから伺われる。他の焼跡では杯A・杯B・杯蓋・壺・甕を主体としており、その他の器種は極少数、もしくは無



第340図 焼窯杯・蓋の組成率

第21表 須恵器の遺構別機種組成

遺構名	時期	杯A (底部)	杯B (底部)	杯蓋	壺	甕	茶杯	盤	皿	櫛瓶	桶A	桶B	桶C	鉢	円筒 碗
池田端1号窯	3期4段階	6.88	2.81	5.28	0	0	0	0	0	+	0	0	0	0	0
池田端2号窯	3期3段階	8.00	12.97	3.72	0.16	0.91	0	0	0	+	0	0	0	0	0
池田端5号窯	3期5段階	2.13	4.78	1.38	0	+	0	0	0	0	0	0	0	0	0
池田端6号窯	5期	54.78	1.22	0.19	0.19	0.41	0	0	0	0	0	0	0	0	0
池田端7号窯	5期	6.09	0.22	0.31	+	0.06	0	0	0	0	0	0	0	0	0
池田端2号灰原	3期・5期	36.91	14.97	12.72	1.50	3.56	0	0	0.50	0	0	0	0	0	+
清水山1号窯	3期2段階	87.94	14.28	54.45	0.94	2.22	15.61	1.75	21.38	0.50	0	0	0	0	0
清水山2号窯	3期3段階	37.33	20.31	29.28	1.31	8.70	+	0.06	0	1.03	0	0.05	0	0.22	0
清水山3号窯	3期3段階	49.25	8.06	30.06	0.63	5.59	0.19	0	0	+	0	0	0	0.12	0
清水山灰原	3期	41.81	21.81	63.74	18.88	15.94	0.47	0	3.69	4.72	0	0.75	1.53	0	0.39
沢田鍋土1号窯	3期1段階	0.41	0.22	0.18	0.23	0.03	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沢田鍋土2号窯	3期1段階	1.34	0.16	0	0	0.03	0	0	0	0	0	0	0	0	0
沢田鍋土1号灰原	3期1段階	217.34	65.53	56.56	*	*	*	*	0.81	0.96	*	*	0	0	0.68
牛出古窯1号窯	4期1段階	48.78	5.25	5.97	0.47	0.94	0	0	+	0	0	0	0	0	0
牛出古窯灰原	4期1段階	14.22	3.25	6.28	*	*	+	0	0	0	0	0	0	0	0
牛出古窯住居跡 (SB14を除く)	4期	30.66	17.72	36.78	6.50	2.63	0.34	0	+	0	1.06	0	0	0	0

*は存在するか計測していないもの、+は測定破片が確認されるもの、数値は残存率の累積加算値

いが、清水山1号窯では高杯・整・皿などが多く認められる。また、皿に3種類の法量が認められること、口径35cm前後の大型の盤が見られることなど他の窯跡では見られない特徴である。

次に、杯と杯蓋の比率を比較すると、清水山1号・3号窯では杯蓋に比べ杯Bが極端に少ない。清水山2号窯においても杯Bが杯蓋よりも少ない。杯Bよりも蓋の方が極端に多い窯は他の窯跡群には見られず、この組成比は特異である。この数値が生産数を反映したものと仮定すると、杯蓋は杯Bのみとセットになるとは考え難く、杯Aとセットになる場合もあり得る。清水山1号が窯の構造と器種組成で他の窯と区別され、2号・3号窯とともに蓋が杯Bよりも多い事実は、清水山窯跡の須恵器生産が他の窯跡とは異なった需給関係の下で行われたことを示していると考えられよう。

また、池田端2号窯・5号窯では杯Bが杯Aよりも多く、かつ、杯Bの高台が断面三角形であるという他の窯跡とは異なる特徴を持っている。特に、池田端2号窯の杯Bは側面に板状工具による浅い条線がつく特徴的な器面調整である。ちなみに、三角形の高台は沢田端土1号・2号にもわずかに見られる。

時期別に器種組成を見ると、杯では新しい段階ほど杯Bが少なくなり杯Aの割合が増加し、5期の池田端6号・7号窯では杯Bが殆ど見られなくなる。また、3期の窯では少数ではあるが横瓶、円面鏡が見られるものの、4期以降には見られなくなる。また、皿、高杯などは4期までは見られるものの、5期には今のところ確認されない。集落跡での器種組成の変遷は善光寺平では今のところ明確にされてはいないが、松本平の集落跡の器種組成とを見ると(小平1990)、4期・5期以降の時期にも円面鏡、横瓶、皿、高杯が須恵器の器種組成の中に含まれている。資料となる窯跡数が少ないと今後の資料の蓄積が必要であるが、4期もしくは5期において器種構成に変化が見られ、高丘丘陵窯址群の生産体制に何らかの変化があったものと予想される。さらに、立ヶ花表山3号・同4号、中原窯跡などの公表された資料を見る限りにおいて、その画期は4期1段階と4期2段階の間にあると予想される。今回の調査報告では1期と2期の窯跡は無いが、これまでの報告された資料を見る限り、2期1段階と3期1段階の間にも器種組成において変化が認められ、高丘丘陵古窯址群では確認されていない2期2段階の器種組成を千曲川の対岸の善光寺平の窯跡群の器種組成で代用すると、その画期は2期1段階と2期2段階の間となる。高丘丘陵窯址群では器種組成において2つの画期があり、松本平の集落跡の器種組成の変遷と対比すると、2期における画期は集落跡とパラレルな変化であり、4期における画期は集落跡の変遷とは異なる変化である、という仮説を提示しておきたい。今後、高丘丘陵古窯址群の主な供給先と思われる善光寺平の集落跡での器種組成変化を明らかにしなければならないが、後者の画期の背景には小県郡から筑摩郡への国府の移転が関わっていたのではないかと考えている。通説では信濃の国府は9世紀後半までに筑摩郡に移転したとされるが、高丘丘陵古窯址群の器種組成における画期はさらに古く8世紀末から9世紀前半の時期にあたる。仮説の上に成り立つ推定であり、今後須恵器研究が進む中で再度検討したい。

(2) 奈良時代前半の須恵器生産について

本報告書で報告した窯跡は奈良時代前半期のものが多い。ここでは、特に特徴的な清水山1号窯と池田端2号窯を取り上げ、奈良時代前半期の須恵器及び瓦生産について考えてみたい。

清水山1号窯は窯の構造と出土遺物とが他の窯跡に比べ特異である。窯の構造については前項のとおり規模が際立って大きく、出土遺物では高杯、皿A、盤Aなど他の窯跡では殆ど見られない器種が多数出土した。また、盤A・高杯Bなどの特殊な器種は官衙・寺院などの出土が予想されるが、管見に触れる限り清水山1号窯で焼かれたと思われるものは善光寺平では今のところ出土例を見ない。また、多量に出土した「井」のヘラ描きの中には「高井」と記されたものが2点出土していることから、清水山1号窯から出土した「井」は高井郡を示す蓋然性が高い。さらに、筆跡の分類から最低6人の工人の手によるものと推定され、「井」の書き順は様々で、誤った書き順のものも見られる。このことから、これらの記号を書き

た工人は文字を書く知識がなかったと推定される。2点の「高井」のヘラ描きも筆跡と工具が異なっておりそれぞれ別工人によるものと判断され、「たかい」とは読めるものの、字体は稚拙で、当該期には見られない文字であり⁽⁶⁾、文字を知らない工人が「高井」の文字を真似て写したものと思われる。郡名を略して一文字で示す場合、先頭の文字を使用することが多いが、文字を知らない工人に「高」と書かせるよりも画数の少ない「井」の文字を選択したと考えると、「井」が高井郡を示すとする仮説と矛盾しない。

ヘラ描きについては、①各窯ごとに供用された記号とする窯印説、②窯の共同使用関係によって生じる工人の仕訣や職別に共するための記号とする説、③発注者の要請による記号とする説、④有蓋器種のセット関係を明らかにするなど製作技術に関連させる説、などにまとめられている(中村1977)。清水山1号窯の事例を上記の仮説と比較検討すると、沢田鍋土・茶臼峯などの窯跡で「×」・「-」などのヘラ描きは見られるものの、清水山1号窯のように多量にしかも全器種に及ぶ例はなく、また他の窯跡からも「井」印が出土することから①説は否定される。次に、同一窯内において複数の工人により、しかも一種類の記号が描かれていることから②説は否定される。さらに、有蓋器種以外のすべての器種に「井」印が認められることから④説も否定される。すなわち清水山1号窯の「井」印は、発注者の要請により高井郡を示すために配された記号であると理解できる。

以上のことから導き出される仮説は、郡名が記された須恵器は郡以上の組織すなわち国単位の組織での使用が予定されたもので、その発注者もしくは生産主体者は郡を統括するものであり、清水山1号窯は官窯の性格であったと考えられる。近接する清水山2号・3号窯も規模、主軸方向などから同じ生産主体者の窯であったと予想される。

池田端2号窯は須恵器窯の後瓦窯に転用された窯である。同窯で焼かれた須恵器から瓦を焼いた年代は8世紀の第2四半期と推定される。現在のところ信濃國分寺および國分尼寺出土の瓦の中には池田端2号窯の瓦は見られないようである⁽⁷⁾。国分寺の建立年代は明らかではないが、「國分寺建立の詔」が天平13年(741年)であり、本窯跡の操業はこの国分寺建立の詔が発せられた前後の時期に当たる。ちなみに、国分寺出土の瓦や國分寺の瓦を焼いたとされる土井ノ入窯跡・國分寺瓦窯などの瓦に比べ全般的にやや小さい印象を受けるが、統計的な比較は行っていないので客観的データを示すことはできない。池田端2号窯の瓦は平瓦のみで軒瓦が出土していないため、消費地遺跡出土の瓦との対比は難しいが、縄目のタキ、布目の細かさ、狭縫部の帶状の圧痕などの特徴から、須板市左順寺遺跡出土の平瓦(神津1932、興津1969、閔1995)に類似する⁽⁸⁾。牛出古窯遺跡、がまん窯遺跡などでも池田端2号窯の平瓦と類似したものが出土しているが、これらは窯の芯材に用いられるなど二次的な転用である。左順寺遺跡では礎石などの建物跡は確認されているが、多量の瓦が出土したと報告されており、寺院跡である蓋然性が高い⁽⁹⁾。左順寺遺跡の瓦が池田端窯跡で焼かれたものとすると、左順寺遺跡は8世紀前半に寺院が存在したことになる。この寺院に関する資料がないためその性格に言及するのは難しいが、文献にも見られない寺院であることから豪族の私寺である可能性が高く、その瓦を焼いた池田端2号窯は官窯ではなかったと位置付けたい。

以上のように清水山1号と池田端2号窯は若干の時期差はあるものの、この2つの窯跡の存在は近接した地区に官窯と非官窯が併存していたことを示していると理解できる。このように、地理的に区分される窯址群内に須恵器生産における二重構造の存在を仮説として提示しておきたい。しかしながら、高丘丘陵古窯跡群において官窯と非官窯を区別することが、当時の須恵器生産体制の中で妥当な区分であるか否かは明確にされていない。消費地遺跡における須恵器生産地の究明と、各窯跡における縦年研究とが現段階の須恵器研究の課題である。高丘丘陵さらには信濃の須恵器生産体制の解明にはこの基礎的な研究の蓄積が必要であり、いくらかでも今後の研究に本報告が役立つことを期待する。

(3) 「佐久郡」銘の無頸壺について

清水山窯跡1号灰原から「佐久郡」とヘラ描きされた無頸壺が出土した（第173図107・巻頭図版）。この文字は焼成前に刻まれたもので、前述の「高井」と比べ筆順も正しく字体も達筆であり、文字を書き慣れた人によるものと思われる。これまでのところ、佐久の郡名は『三代実録』の貞觀八年（886年）二月二日の条に記されたのが初見とされている。伴出する須恵器から無頸壺の年代は8世紀前半と推定され、佐久の郡名を記した文字資料としては最古のものであり、「久」の字が用いられた例はなく、古くは「佐久郡」と記されていたことを伺わせる。この無頸壺は希な器種で他に例を知らない。なお、清水山窯跡が所在する地域は高井郡と考えられており、佐久郡との間には埴科郡と小県郡があり、千曲川を約80km上流に遡ったところに佐久郡が所在する。

さて、この「佐久郡」の郡名を記した須恵器が何故清水山窯跡に出土したかを考えなければならない。上記の「高井」の例のごとく佐久郡からの発注により高丘丘陵で須恵器を焼いたとするには疑問が残る。すなわち、文字資料は灰原から出土したものであり、出土位置と類似する胎土のものがあることから1号窯で焼かれた可能性は高いものの、無頸壺は窯跡内から1点も出土せず、「佐久郡」銘の須恵器が清水山窯跡で焼かれたものであるとは断定できない。さらに、佐久郡内には同時期の須恵器窯が存在すると言われており、高丘丘陵で佐久郡と記された須恵器を焼く必然性が認められない。なお、蛍光X線分析による16の元素の定量分析を行った結果では、佐久郡銘の須恵器は清水山窯跡の領域内に入っている、管見に触れる限りこの器種の他地域での出土例は見られず、高丘丘陵以外の地域よりもたらされた可能性を示すデータも無い。現段階ではこれ以上の資料批判はできず、今後の同器種の出土例の増加を待って検討していく必要があろう。

須恵器生産の研究は、集落跡出土の須恵器の産地同定を進めることにより、さらにその実体が明らかになると思われるが、現在のところ、窯址群単位の須恵器の識別ができる段階にはきていない。今後、各窯址群ごとの基礎データの蓄積と検討が必要であり、型式学的検討と胎土分析が産地同定の方法として欠かせないものとなろう。高丘丘陵古窯址群においても蛍光X線分析による16の元素の定量分析により、南安曇郡豊科町上ノ山窯跡と埴科郡坂城町土井ノ入窯跡との比較を行った結果、土井ノ入窯跡は高丘丘陵古窯址群の領域内に入ってしまい区別できなかったものの、豊科町上ノ山窯跡は高丘丘陵古窯址群の領域とは区別され、胎土分析による産地の識別の可能性を示唆している。この分析の詳しい報告は平成9年度刊行の『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告14—中野市その3・豊田村』に掲載する。なお、この分析にあたり豊科町教育委員会・同町東山遺跡調査会・須坂市教育委員会・上田市立信濃国分寺資料館より資料提供のご協力を頂いた。

註

- 1 和田 素氏のご教示による。
- 2 信濃国分寺資料館学芸員倉沢正幸氏のご教示による。池田端2号窯の平瓦は狭縫部に幅約9cmの帯状の圧痕が特徴的であり、他と区別される。
- 3 池田端2号窯、左願寺遺跡、土井ノ入窯跡、信濃国分寺瓦窯出土の瓦の蛍光X線分析による16の元素の定量分析を行った結果、池田端2号と左願寺遺跡を他の2遺跡から分離できるデータは得られず、左岸寺遺跡と池田端2号窯の瓦が、同一のものであるとは特定できなかった。なお、以下の胎土分析は鶴バレオ・ラボの藤根久氏に委託し、分析結果の報告は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告14—中野市その3・豊田村』(平成9年度刊行)に掲載する。
- 4 左願寺遺跡は層状地上の平坦な地形に立地し、遺跡内から多量の須恵器・土師器が出土したと伝えられている。また、確認はしていないが、遺跡地に隣接した果樹園より仏像が出土したとの伝承がある。

引用・参考文献

- 愛知県教育委員会 1957 「愛知県後投山西南麓古窯址群」
- 愛知県教育委員会 1958 「愛知県後投山西南麓古窯址群」
- 愛知県教育委員会 1959 「愛知県後投山西南麓古窯址群」
- 愛知県教育委員会 1961 「愛知県後投山西南麓古窯址群」
- 青木和明 1987 洪水のまとめ—平安時代の土器様相について— 『三輪遺跡(2)』長野市の埋蔵文化財第20集 長野市教育委員会
- 岩野見司 桐原健 1965 長野県上水内郡豊野町山の神窯跡の調査 『長野県考古学会誌』第2号
- 上田市立信濃國分寺資料館 1986 図録「信濃出土の土器に書かれた文字」
- 大川清 宮下真澄 1966 長野県小県郡依田の窯跡 『信濃』18-12
- 大川清 金井辰次 1964 長野県中野市草間窯跡遺跡 『信濃』16-11
- 美津正則 1969 「須坂市北小河原左原寺の古瓦」「高井」10
- 上水内郡刊行会 1976 『上水内郡誌』歴史編
- 名寄原市教育委員会 1981 『稻田山古窯跡群発掘調査報告書』
- 名寄原市教育委員会 1984 『美濃須古窯跡資料調査報告書』
- 岐阜市教育委員会 1981 『老浜古窯跡群発掘調査報告書』
- 金井辰次 1969 長野県中野市草間窯跡遺跡 『日本考古学会年報』17号
- 金井辰次 1971 表山古窯址 『長野県考古学会誌』10
- 金井辰次 1973 中野市立ヶ花表山古窯跡調査 『高井』24
- 金井辰次 1982 草間古窯跡群 『長野県史』考古史料編(二)
- 金井正彦 1973 中野市草間窯跡七号窯址調査 『高井』25
- 金井文司 1978 中野市安曇寺・草間出土の弥生遺物について 『高井』42
- 金井文司 1981 「上の山第1号窯」「立ヶ花城跡緊急発掘調査報告書」中野市教育委員会中部電力株式会社長野支店
- 河西清光 1966 松本市田端中の沢古窯址の調査 『信濃』17-9
- 河西清光 1982 田端・山田窯跡群 『長野県史』考古史料編(三)
- 北野博司 1993 横瓶あれこれ 『北陸古代研究』第3号
- 北野博司 1996 古代北陸の煮炊具 『古代の土器研究—律令的土器模式の西・東4 煮炊具—』古代の土器研究研究会
- 桐原健 1988 須恵器窯跡 『長野県史』考古史料編(四)
- 更埴市教育委員会 1983 「上の田遺跡」「横浜遺跡群I」
- 更埴市教育委員会 1986 「五輪堂遺跡III」
- 更埴市教育委員会 1987 「馬口遺跡II」
- 神津 錦 1932 「左頬寺の古瓦」「信濃」I 1-8
- 古代の土器研究会編 1994 「古代の土器3部編の土器集成」
- 小平和夫 1990 「第3章第5節古代の土器」中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4「一松本市内その1-越前塚」
- 後藤健一 1984 「静岡県湖西市青平窯跡・新古窯跡発掘調査報告書昭和58年度」湖西市教育委員会発行
- 後藤健一 1989 湖西古窯跡群出土の須恵器と甕 『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 後藤健一 1990 「吉美中村遺跡」追記
- 後藤健一 1992 7. 参考となる古窯址 『静西一宮工農園地方遺跡発掘報告書平成3年度』湖西市文化財調査報告第29集
- 後藤健一 1994 瓶式の統焉 『地域と考古学』向坂鏡二選歴記念論集
- 後藤健一 1995 日本海東部第3章 主要窯跡と須恵器 『須恵器集成図録第3巻東日本編I』雄山閣出版
- 小林眞寿 1993 所謂「北信型の甕」について 『宮の上遺跡II』坂城町教育委員会

- 小森俊寛 1992 「概説」 『古代の土器研究I都城の土器集』 古代の土器研究会
- 斎藤孝正 1994 『古代の土器研究—律令的土器模式の西・東3施釉陶器—』 古代の土器研究会
- 斎藤孝正 1987 律令制成立期の様相 『名古屋大学文学部研究論集86(史学)』
- 斎藤孝正 1995 I東海四部第3章窯跡と出土遺物『須恵器集成図録』第3巻東日本編1
- 斎藤孝正 後藤健一編 1995 『須恵器集成図録』第3巻東日本編1
- 坂井秀弥 1988a 「律令期の須恵器系縛—越後西南部における二つの系縛をめぐってー」 『歴史学と考古学』高井健三郎先生著寿記念論集
- 坂井秀弥 1988b 越後佐波の古代土器—8~10世紀を中心にして—『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告書 石川考古学研究会 北陸古代土器
- 坂井秀弥 1989a 越後・佐波における古代手工業生産の展開 『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工业生産史研究会
- 坂井秀弥 1989b 北陸型土器系民窯の製作技術『新潟県考古学総括年報』3 新潟県考古学総括会
- 坂井秀弥 1991 越後魚沼地方の郡萬系須恵器 『北陸古代研究』創刊号
- 坂井秀弥 1998 長野県飯山市平安郡佐渡赤須恵器・越後糸土器 『北陸古代土器研究』3
- 坂井秀弥 1994 古代北日本の土器と生產 『北陸古代研究』4
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 佐渡の須恵器 『新潟考古』第2号
- 坂井秀弥・山本謙・田中暉 1992 新潟県八幡林遺跡出土土器と長岡市須恵器窯跡資料—壹老紀年名資料と北陸・東海系須恵器—『北陸古代研究』第2号
- 坂城町教育委員会 1993 『宮の上遺跡II』7号住
- 坂詰秀一 1966 信濃における古窯跡の諸問題(1) 『立正考古』25
- 坂詰秀一 1963 北佐久郡八重原の製陶所跡 『信濃考古学会誌』1~1
- 坂詰秀一 1963 八重原第八号製陶所発掘調査報告 『信濃』1、2~5
- 坂詰秀一 1963 北佐久郡八重原第八号窯址の発掘調査 『信濃』1、3~7
- 坂詰秀一 1963 北佐久郡の考古学的調査
- 佐久市教育委員会 1980 『佐久市石附遺跡発掘調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1991 『石附塚群III』
- 佐沢治 1976 「第四様式期の生活」「第五様式期の生活」「上水内郡族」歴史編
- 佐沢治 1979 東海・中部地方・北陸の須恵器・中部高池 『世界陶磁全集』2 日本古代
- 佐沢治 1982 松ノ山窯跡 『長野県史』考古史料編(二)
- 佐沢治 1986 凸帯文四耳壺 『長野県考古学会誌』51
- 佐沢治 1987 信濃における奈良時代を中心とした土器叢年 『長野県考古学会誌』55、56号
- 佐沢治 1988a 古代の土器 『長野県史』考古史料編(四)
- 佐沢治 1988b 須恵器窯の分布 『長野県史』考古史料編(四)
- 佐沢治 原田勝美 1974 長野県下出土の須恵器(上)、(下) 『信濃』26~9、26~11
- 佐藤信之 1987 北信地方の様相 『長野県考古学会誌』55、56
- 塩尻市教育委員会 1991 『富澤佐跡発掘調査報告書』
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃史料』第一卷(上・下)
- 信濃史料刊行会 1956 『信濃考古総論』(上・下)
- 下伊那歴史考古学研究所 1979 『信濃土器窯窯跡』
- 下伊那歴史考古学研究所 1981 『信濃御殿田』
- 延野藤麻呂 1969 長野県松本市西田地区田博地における須恵器窯跡の調査 『信濃』21~12

- 遠藤真周 1963 桐林宮洞須恵器発掘報告『伊那』1963年-12号
- 遠藤真周 遠藤麻呂昌 1980 信濃における窯跡出土の須恵器とその編年の目安 『朝臣洞窯跡』下伊那研究所
- 遠藤麻呂昌 1981 第3章第2節 遺物 「勝沢新町遺跡」『湯谷古窯跡 長札山古墳群 勝沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集
長野市教育委員会長野市遺跡調査会
- 城ヶ谷和広 1984 「7・8世紀における須恵器生産に関する一考察」『考古学雑誌』70-2
- 間 孝一 1996 「須坂市左顎寺遺跡について」『高井』113
- 高橋一敏 1990 『静岡県湖西市青森中村遺跡平成元年度』湖西市文化財調査報告書第25集
- 田川幸生 1976 茶臼塚遺跡 『日本考古学年報』27
- 糸原一郎 1965 陶磁No235(原始・古代欄)『日本の美術』12 至文堂
- 田辺昭三 1992 「都城の土器集成」刊行によせて 『古代の土器 4 都城の土器集成』 古代土器研究会編
- 田辺昭三 1966 『海呂古窯址群I』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1971 『須恵器大成』
- 堀 駿 1998 十二遺跡における土器様相 『十二遺跡』御代田町教育委員会
- 堀 駿 1989 前田遺跡出土遺物について 『前田遺跡』
- 鶴間正昭 1996 小山窯(多摩ニュータウンNo342遺跡1号窯)の成立をめぐって 『東京都埋蔵文化財センター研究論集XV』東京都
埋蔵文化財センター
- 出越茂和 1995 『北陸第3章窯跡と出土遺物「須恵器集成図録」第3巻東日本1』
- 出月洋文 1994 平安時代須恵器の流派の一例相—山梨県における「凸管付き四耳壺」を中心に— 『山梨考古学論集III』山梨考古学
協会発行
- 寺島俊郎 1991 茅毛坂遺跡群C地区 5分析(1)古墳時代末から平安時代の遺物 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—
佐久市内そ2-1』
- 戸倉町教育委員会 1993 『三島平遺跡II』15号住
- 鳥羽英雄 1996 『第二章第二節 各水田対応層出土土器』 『長野県深山遺跡群出土木簡』 長野県埋蔵文化財センター
- 直井雅尚 1996 信濃における奈良平安時代の土器器型について 『鉢と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
- 中島庄一 1994 第Ⅲ章茶葉木遺跡第6節5遺物「土部放底壺構の土器」『長野県中野市内—茶葉木遺跡・七帳遺跡』長野県埋蔵文化財セン
ター発掘調査報告書19
- 中嶋豊晴 河西清光 1965 松本市田溝古窯址の調査 『信濃』16-4
- 中村浩 1977 須恵器生産に関する一試考—和泉陶邑窯における陶工組織について— 『考古学雑誌』63-1
- 中村浩 1980 『須恵器』考古学ライブラリー5 ニューサイエンス社
- 中村浩 1981a 須恵器生産の諸問題—地方窯業成立に関する一試考— 『考古学雑誌』67-1
- 中村浩 1981b 『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察—』柏書房
- 中村浩 1985 『古代窯業史の研究』柏書房
- 中村浩道 1993 『平城京と須恵器』 『季刊考古学』第42号
- 中村浩編 1994 『須恵器集成図録』第1巻近畿編
- 中野市教育委員会 1967 『安源寺』
- 中野市教育委員会 1979 『安源寺II』安源寺遺跡第三次発掘調査報告書
- 中野市史稿編纂室 1981 『中野市史』歴史編
- 中野市教育委員会 1981 『立ヶ花城跡等緊急発掘調査報告書』
- 中野市教育委員会 1994a 『清水山古窯跡発掘調査報告書』
- 中野市教育委員会 1994b 『がまん測遺跡』

第9章 調査の成果と課題

- 中野市教育委員会 1995 「長野県中野市安曇寺遺跡（中野市西部ディーサービスセンター建設地内）発掘調査報告書」
- 長野県考古学会 1967 「中野市安曇寺遺跡」（海戸・安曇寺）
- 長野県史刊行会 1982 「長野県史」 考古資料編
- 長野県埋蔵文化財センター 1994 「栗林遺跡 七瀬遺跡」
- 長野市教育委員会 長野市歴史調査会 1978 「塙崎遺跡群」 長野市の埋蔵文化財第4集
- 長野市教育委員会、長野市歴史調査会 1980 「四ヶ瀬遺跡・御間遺跡・塙崎遺跡」 長野市の埋蔵文化財第9集
- 長野市教育委員会、長野市歴史調査会 1986 「浅川層状地遺跡群」 一牟礼バイパスB・C・D地点
- 長野市教育委員会 長野市歴史調査会 1987 「殿屋敷遺跡」「塙崎遺跡群V」「殿屋敷遺跡」 長野市の埋蔵文化財第35集
- 長野市歴史調査会 1989 「石川条理遺跡（4）」 長野市の埋蔵文化財第34集
- 長野市教育委員会 1989 「塙ノ井遺跡群II」 第35集
- 長野市教育委員会 1990 「崖地遺跡II」 長野市の埋蔵文化財第36集
- 長野市教育委員会 1991a 「塙崎遺跡群（6）石川条理遺跡（5）」 長野市の埋蔵文化財第39集
- 長野市教育委員会 1991b 「松原遺跡」 長野市の埋蔵文化財第40集
- 長野市教育委員会 1991c 「田中洋遺跡II」 長野市の埋蔵文化財第42集
- 長野市教育委員会 1992 「二ツ宮遺跡・本郷遺跡・柳田遺跡・櫛谷遺跡」 長野市の埋蔵文化財第47集
- 長野市教育委員会 1993a 「松原遺跡II」 長野市の埋蔵文化財第51集
- 長野市教育委員会 1993b 「田牧居遺跡」 長野市の埋蔵文化財第52集
- 長野市教育委員会 1993c 「駒沢新町II」 長野市の埋蔵文化財第53集
- 西 弘海 1978 「VB土器の時期区分と変遷化式」「飛鳥・藤原官発掘調査報告」 II 奈良国立文化財研究所
- 西 弘海 1987 「土器様式の成立とその背景」 真麻社
- 服部啓史 1986 豊科町上ノ山・高富平廻縄群について「信濃守吉」97
- 服部啓史 1987 東国における奈良時代前半の須恵器生産とその意義「信濃」39-7
- 花岡弘 西山克己 1995 信州の6世紀・7世紀の土器様相「東国土器研究」第4号
- 原 明芳 1994 信濃の施釉陶器「古代の土器研究—律令の土器様式の西・東3 施釉陶器」 古代の土器研究会
- 広瀬和雄 1986 中世への胎動「岩波講座日本考古学」6 変化と開拓
- 福島邦男 1986 御牧原合地・八重原合地に於ける縄糸研究の推移「長野県考古学会誌」51
- 丸子町跡刊行会 1992 奈良・平安時代「丸子町跡」歴史編上 歴史資料編
- 水口由起子 1991 武藏國における中世成立期の煮灰小考「埼玉奇古学論集」創立10周年記念論文集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 牟礼町教育委員会 1992 「平出上ノ山遺跡」1号窯、2号窯「平出遺跡群発掘調査報告書」
- 矢口忠良 1988 更埴市桑原地区太田東向山古窯出土の須恵器「信濃」20-7
- 山田真一 1994 長野県における古窯跡研究—研究の視点とその推移—「中部窯地の考古学」IV 長野県考古学会
- 吉田恵二 1982 「絵喜式」所載の土器陶器「考古学論考」小林行雄博士古希記念論文集 平凡社
- 吉田恵二 1986 須恵器以降の窯業生産「岩波講座日本の考古学」3 生産と流通
- 米山一政・堺崎稔他 1978 「更級・埴科地方誌」第二卷
- 更地史料 1996 第3編古代 第3章奈良・平安時代のくらし「更地市史」
- 望月史跡編纂室 1994 第2編古代 第5節御牧原・八重原の須恵器生産「望月町誌」
- 渡辺博人 1988 「英濃須恵器の須恵器生産—飛鳥・白鳥の時代を中心として—」「古代文化」40-6

遺物観察表

遺物観察表凡例

1. 遺物の器機分類の基準は第9章に記述した。
2. 弥生時代後期・古墳時代前期遺物観察表の色調・胎土質の記号は以下の通りである。

色調	A : 棕色～赤褐色	B : 棕色～褐色	C : 増褐色～墨褐色	D : 深褐色
----	------------	-----------	-------------	---------
3. 胎土
 - 1 : 石英・長石など直徑1mm以上の大粒の鉱物を多量に含み、鉄分が凝固した褐色の粒が見られる。
 - 2 : 石英・長石など直徑1mm以下の中粒の鉱物を多量に含み、鉄分が凝固した褐色粒が見られる。特に雲母が多く見られるものを②とした。
 - 3 : 石英・長石などの鉱物粒の他に、鉄分が凝固した褐色の粒子が多量に含まれるもの。
 - 4 : 石英・長石など直徑1mm以下の中粒の鉱物を多量に含み、褐色の粒子は見られない。特に雲母が多く見られるものを④とした。
 - 5 : 石英・長石など直徑1mm以上の大粒の鉱物を多量に含み、褐色の粒子は見られない。
- 6 : 鉱物粒があり含まれず、洗浄された胎土。

3. 須恵・平安時代の器高基・土師器観察表では、器底率の数字は32分の1の倍数を示し、2は2/32を示す。また、焼きひずみが激しいものは、できるだけ焼きひずみを修正し、本表の形状を標準化して測定した。なお、杯B・蓋の器高A・Bは以下のように測定し、他の器種はいずれかの側に器高の数値を記載した。

杯B : 器高Aは高台を除いた杯部のみの数値。器底Bは高台を含めた数値。

蓋 : 器高Aはつまみ部を除いた数値。器高Bはつまみ部を含めた数値。

4. 整理Noは遺物に実色で記述しており、実測図番号と一致する。

旧石器時代遺物観察表

がまん遺跡旧石器時代石器観察表

記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No
FL07 №1		碎片	安山岩b	IV.	0.8	1.4	0.3	0.5		
GE20 №3		剥片	安山岩	IV. クラック	-2.8	3	0.9	7.6		
GF18 №1		剥片	安山岩	IV. クラック	1.7	2.5	0.8	2.7		
GF19 №1		碎片	安山岩?	IV. クラック	1.7	2.3	1.4	7		
GF19 №2		剥片		IV. クラック	2.3	1.7	0.9	3.8		
GF19 №3		剥片	黒曜石	IV. クラック	1.7	1.6	0.3	0.6		
GF20 №1		碎片	安山岩	IV. クラック	1	1.4	0.6	0.9		
GF20 №2		剥片	メノウ	IV. クラック	2	1.2	0.4	0.8		
GF20 №3		剥片	真岩	IV. クラック	1.9	1.6	0.6	1.1	折れ	
GF20 №4	第43図-5	長片	真岩	IV. クラック	3	2.9	0.9	3.8		3214
GF20 №5		碎片	安山岩	IV. クラック	1.5	1.2	0.5	0.8		
GF20 №6		剥片	真岩	IV.	1.5	2.1	0.4	1.2	自然面有り	
GG18 №1		剥片		IV. クラック	1.2	1.5	0.8	1.5		
GG19 №1		剥片(?)		IV. クラック	1.9	4.3	1.6	7.3		
GG19 №2	第43図-3	基盤上着脱片	真岩	IV. クラック	5.3	2.55	1.25	19.6		3242
GG19 №3		剥片	真岩	IV. クラック	1.5	1.4	0.6	1		
GG19 №4		剥片	安山岩	IV. クラック	3	3.1	1	11.9		
GG19 №5		剥片	メノウ	IV. クラック	0.8	1.6	0.4	0.4		
GG20 №1		剥片	安山岩	IV. クラック	1.9	1.8	0.6	2		
GG20 №2		剥片	?	IV.	1.1	0.9	0.2	0.2		
GG20 №3		碎片	真岩	IV.	1.2	0.8	0.3	0.3		
GG20 №4		剥片	真岩	IV.	2.4	2	0.6	1.8		
GG20 №5		碎片	安山岩b	IV. クラック	0.4	0.7	0.2	0.1		
GH18 №1		剥片	チャート	IV. クラック	1.5	2	0.7	1.7	自然面有り	
GH18 №2		剥片	黒曜石	IV. クラック	4.3	1.7	1.6	9.2		
GH19 №1		剥片	珪質真岩	IV. クラック	1	1.7	0.2	0.4		
GH19 №2		剥片	チャート	IV. クラック	1	0.9	0.1	0.3		
GH19 №3		剥片	珪質真岩	IV. クラック	1.1	1	0.2	0.2		
G17 №1		剥片	メノウ	IV. クラック	2.9	3	1.3	9.9	自然面有り	
G17 №2		剥片	メノウ	IV. クラック	1.3	2	0.3	0.5		
G19 №1		碎片	安山岩b	IV. クラック	0.6	0.8	0.1	0.1		
G19 №2		碎片	安山岩b	IV. クラック	0.6	1.4	0.2	0.3		
LE 04 №1	第46図-34	剥片	真岩	IV. クラック	5.5	4.9	1.2	27.9	接着資料	3208

がまん洞遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石 材	層 位	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	備 考	整理No.
LE04 No.2	第45図-26	刮片	安山岩	IV. クラック	6.7	5.4	2.3	63.2	自然面有り	3231
LE04 No.3	第44図-20	碎片	安山岩	III.	3.4	5.6	1.2	20.2		3232
LE04 No.3		刮片	安山岩	III.	2.2	2	0.5	1.4		3232
LE04 No.3		刮片	安山岩	III.	1.2	3	1.1	4.5		3232
LE04 No.4		刮片	安山岩b	III.	1.3	1.7	0.4	6.7		
LE04 No.5	第49図-51	刮片	安山岩	IV. クラック	3.55	4.05	2.3	30.2		3233
LE04 No.6		刮片	頁岩	IV. クラック	2.6	1.6	0.8	2.3		
LE04 No.7		刮片	頁岩	III.	-0.9	1.8	0.9	1.2	折れ	
LE04 No.8		刮片	頁岩	III.	4.8	4.4	1.3	13.8	節理面有り	
LE04 No.9		刮片	頁岩	III.	0.6	0.9	0.3	0.1		
LE04 No.10		碎片	頁岩	IV. クラック	1.3	1.4	0.4	0.5		
LE04 No.11		刮片	安山岩b	IV. クラック	1.3	1.7	0.4	0.8		
LE05 No.2		碎片	黒曜石	III.	0.6	0.7	0.12	0.1	2個有り	
LE05 No.2		碎片	黒曜石	III.	0.8	0.8	0.12	0.1		
LE05 No.3		刮片	黒曜石	IV.	1.1	1.6	0.3	0.6		
LE05 No.1		碎片	頁岩	IV.	0.7	0.9	0.4	0.2		
LF03 No.1		刮片	黒曜石	IV. クラック	1.9	1.5	0.7	1.4		
LF03 No.2	第44図-21	刮片	安山岩	IV. クラック	4.15	6.8	1.5	40		3234
LF03 No.3		刮片	安山岩c	IV. クラック	3.5	2.4	1	9.9	礫片?	
LF03 No.4		刮片	頁岩	IV. クラック	2.7	2.8	0.7	3.7		
LF03 No.5		刮片	?	IV. クラック	1.55	2.7	0.42	2.1		
LF03 No.6		碎片	黒曜石	IV.	0.7	0.9	0.2	0.1		
LF03 No.7		碎片	頁岩	IV.	1.1	0.7	0.2	0.2		
LF03 No.8		刮片	頁岩	IV.	1.8	1.8	0.5	1.5		
LF03 No.9		刮片?	安山岩c	IV. クラック	1	1.2	0.26	0.3	礫片か?	
LF03 No.10	第47図-42	刮片	頁岩	IV. クラック	4.3	2.8	1.2	8.1	接合資料3	3212
LF03 No.11		碎片	頁岩	IV. クラック	1.3	1.2	0.3	0.4		
LF03 No.12		刮片	黒曜石	IV. クラック	2.2	1.3	0.7	1.6		
LF03 No.13		刮片	頁岩	IV. クラック	2.5	2	1.1	3.3		
LF04 No.1	第45図-28	刮片	安山岩	IV.	6	3.8	2.1	29.2		3235
LF04 No.1	第43図-11	刮片	頁岩	IV.	4.4	3.3	0.95	11.1		3217
LF04 No.2	第48図-50	石核	頁岩	IV.	6.5	7.9	3.2	139.5		3202
LF04 No.3		碎片	安山岩	IV.	1.6	1.9	0.3	0.9		
LF04 No.4		刮片	頁岩	IV.	2.3	3.4	0.5	1.9		
LF04 No.4		刮片	頁岩	IV.	-3.5	-2.7	1.5	11.6	節理面有り 折れ	
LF04 No.5	第46図-38	刮片	頁岩	IV.	5.7	2.9	3.3	43.2	接合資料2	3210
LF04 No.6	第48図-49	刮片	頁岩	IV.	6	5.3	2	65.2		3204
LF04 No.7		刮片	頁岩	IV.	-1.6	2.7	0.7	3.2	折れ	
LF04 No.10		刮片	頁岩	IV.	-1.8	5	1.6	9.2	折れ	
LF04 No.11	第43図-2	器物加工痕跡	頁岩	IV. クラック	5.7	4.8	1.4	23.4	節理面有り	3216
LF04 No.12		碎片	頁岩	IV.	1.9	0.9	0.3	0.5	2個有り	
LF04 No.12	第48図-47	石核	頁岩	IV.	4	5.5	2.25	42.5		3215
LF04 No.13		碎片	安山岩b	IV. クラック	1.1	0.8	0.3	0.3		
LF04 No.14	第45図-27	刮片	安山岩	IV.	5.9	5.5	2.5	51.5	自然面有り	3236
LF04 No.14		刮片	頁岩	IV.	2.2	3.1	1.2	3.4	風化の度合いから旧石器でない	
LF04 No.15		刮片	黒曜石	IV. クラック	0.7	0.9	0.1	0.1		
LF04 No.16		刮片	安山岩	III.	2	2.8	0.8	3.8		
LF04 No.17		刮片	頁岩	IV.	3.9	2	0.9	4.2		
LF04 No.18	第44図-19	刮片	頁岩	IV. クラック	6.2	4.75	2.1	50.3		3209
LF04 No.19		刮片	安山岩	IV. クラック	3.4	4.3	0.9	10.8	自然面有り	
LF04 No.20	第45図-25	刮片	安山岩	IV. クラック	6	5	2.5	65.6		3237
LF04 No.21		刮片	頁岩	IV. クラック	1.5	1.8	0.3	0.8		
LF04 No.22		碎片	黒曜石	IV. クラック	0.9	0.8	0.4	0.2		
LF04 No.23		刮片	頁岩	IV. クラック	2.4	2.4	0.6	2.7		
LF04 No.24		碎片	頁岩	IV. クラック	1.7	0.6	0.4	0.4		
LF04 No.25	第46図-37	石核	頁岩	IV. クラック	5.5	4.6	2.5	55	接合資料2	3210
LF04 No.26		碎片	安山岩b	III.	1	1.4	0.3	0.4		
LF05 No.1	第44図-14	刮片	頁岩	IV. クラック	4.1	4	1.5	18.1	自然面有り	3248
LF05 No.2		刮片	頁岩	IV. クラック	3.5	2	1.3	5.4		

がまん沼遺跡旧石器時代石器観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No
LF05 No3	第44図-22	剥片	安山岩	IV. クラック	4.9	7.2	1.9	66.4	自然面が打面	3238
LF05 No4		剥片	頁岩	IV. クラック	2.5	3	0.6	2.7		
LF05 No5	第45図-30	剥片	安山岩	IV. クラック	3.8	3	1.3	10.6	LG-5 No13と接合 自然面有り 欠損	3247
LF05 No6	第43図-13	剥片	頁岩	IV.	-2.4	4.5	0.8	7.1	折れ	3219
LF05 No7	第49図-53	石核	頁岩	IV. クラック	3.4	4.1	2.4	24.9		3218
LF05 No8		剥片	黒曜石	III.	1.2	1.1	0.25	0.2		
LF05 No9		剥片	黒曜石							
LF05 No11		剥片	頁岩	IV. クラック	-2.2	-4.2	0.5	5.3	折れ	
LF06 No1		剥片?	黒曜石	IV.	1.3	0.9	0.3	0.6		
LF06 No2		剥片	黒曜石	IV.	1.1	1.7	0.3	0.6		
LF06 No3		剥片	安山岩b	IV.	2.1	1.8	0.6	2.4		
LF06 No4		碎片	安山岩	IV.	1.4	2	0.7	1.7		
LF06 No5	第43図-48	石核	頁岩	IV. クラック	4.5	6.1	4.7	127.3		3201
LG01 No1		剥片	黒曜石	IV. クラック	1.7	1.2	0.4	0.8	自然面有り	
LG02 No2		碎片	安山岩b	IV. クラック	1.2	1.5	0.2	0.4		
LG02 No3		碎片	メノウ	IV. クラック	1.3	0.9	0.3	0.5		
LG02 No4		剥片	安山岩b	IV. クラック	1.6	1.8	0.3	0.7		
LG02 No5		碎片	黒曜石	IV. クラック	1.4	0.7	0.4	0.3		
LG03 No1		剥片	黒曜石	IV. クラック	1.7	1.6	0.6	1.4		
LG03 No2	第45図-29	剥片	安山岩	IV. クラック	3.7	4.6	0.8	12.2		3244
LG03 No3		剥片	頁岩	IV.	2	2.2	0.8	2.5		
LG03 No4		碎片	安山岩	IV. クラック	0.9	1.1	0.3	0.4		
LG03 No5		碎片	安山岩	IV. クラック	1.6	1.7	0.8	1.7		
LG03 No6		碎片?	流紋岩?	IV. クラック	1.9	2.3	0.7	3		
LG03 No7	第43図-10	碎片	頁岩	IV. クラック	2.2	2.6	1.1	9		3220
LG03 No8		碎片	安山岩	IV. クラック	1.4	1.1	0.4	0.7		
LG03 No9		剥片	頁岩	IV. クラック	1.6	1.9	0.8	1.8		
LG03 No11		碎片	黒曜石	IV. クラック	0.7	1.1	0.2	0.2		
LG03 No12		剥片	頁岩	IV. クラック	3.6	2.1	1.4	8.2	自然面有り	
LG03 No13		剥片	黒曜石	IV. クラック	1.3	1	0.3	0.4		
LG03 No14		碎片	頁岩	IV.	0.6	1	0.3	0.2		
LG03 No15		碎片	頁岩	IV. クラック	1.5	0.7	0.4	0.4		
LG03 No16	第43図-7	剥片	頁岩	IV.	3.3	2.7	1	6.7		3221
LG03 No17		剥片	黒曜石	IV. クラック	1.4	1.3	0.5	0.4		
LG03 No18		剥片	黒曜石	IV. クラック	1.5	1.7	0.8	1.6		
LG03 No19		碎片	安山岩	IV.	1	1.9	0.7	1.2		
LG03 No20	第44図-23	剥片	安山岩	IV.	3.9	5.25	1.25	22.6	自然面打面	3239
LG03 No21		剥片	黒曜石	IV.	1.2	1.2	0.6	0.4		
LG04-1括	第48図-46	石核	頁岩	III.	3.6	6.8	3.5	95.8	自然面有り	3203
LG04-1括	第45図-24	剥片	安山岩	III.	-3.5	4.8	1.4	19.9	折れ	3241
LG04-1括		剥片	頁岩	III.	2.3	3.1	1.2	3.4		
LG04-1括	第47図-44	剥片	頁岩	IV. クラック	5.2	6.2	2.1	39.9	接合資料4	3205
LG04 No1	第44図-18	スクレーパー	頁岩	IV.	4.5	6.7	2.45	46	自然面有り	3222
LG04 No2		剥片	頁岩	IV.	-3.2	-1.5	1.4	3.8	折れ	
LG04 No3		剥片	安山岩	IV. クラック	1.5	2	0.6	1.7		
LG04 No4		碎片	頁岩	IV. クラック	1	1.7	0.3	0.5		
LG04 No5		剥片	珪質頁岩	IV.	0.8	1.2	0.4	0.3		
LG04 No6		碎片	安山岩	IV. クラック	1.3	1.8	0.4	1		
LG04 No7		剥片	頁岩	IV.	1.7	2.1	0.8	2		
LG04 No8		碎片	安山岩	IV. クラック	1.9	1.3	0.9	2.3		
LG04 No9		碎片	安山岩	IV. クラック	1.1	1.3	1.5	0.7		
LG04 No10		碎片	安山岩	IV. クラック	-1.3	1.7	0.4	1.1	折れ	
LG04 No12		碎片	安山岩	IV. クラック	1.1	1.7	0.6	1		
LG04 No14		剥片	頁岩b	IV. クラック	0.7	1.1	0.3	0.3		
LG04 No15		剥片	頁岩b	IV. クラック	4.7	3.5	1.3	19.8		
LG04 No16	第44図-17	剥片	頁岩	IV. クラック	2.8	4.7	1.1	10.1		3223
LG04 No17		剥片	頁岩	IV.	2.3	2.3	0.8	2.5		
LG04 No18		剥片	頁岩	IV.	2	2.8	0.4	1.8		
LG04 No19	第45図-32	剥片	チャート	IV.	2	1.3	0.6	1.8		3246

かまん湖流域旧石器時代石器類表

社番号	又版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さmm	重量g	備考	整理番号
LG04 No20		刮片	頁岩	IV.	1.4	2.1	0.5	1		
LG04 No21		刮片	メノウ	IV.	2.2	1.1	0.4	0.9	自然面有り	
LG04 No22		刮片	安山岩	IV.	2.1	3.4	1.2	6		
LG04 No23		刮片	頁岩	IV.	3.4	3.4	0.6	4.7	折れ	
LG04 No24		刮片	頁岩	IV. クラック	1.8	3.9	0.5	3		
LG04 No25		刮片	安山岩	IV.	2.5	1.5	0.6	2.4		
LG04 No26		刮片	頁岩	IV.	-2.2	-1.7	0.7	2.5	折れ	
LG04 No27		碎片	安山岩	IV. クラック	1.6	1.2	0.5	0.9		
LG04 No28	第43区-8	碎片	安山岩	IV.	3.9	3	1	22.7		
LG04 No29	第43区-54	石核	頁岩	IV. クラック	3.5	3.65	1.2	12.1		3224
LG04 No30		刮片	安山岩	IV.	4.65	6.35	3.2	80.5	自然面有り	3240
LG04 No31		碎片	頁岩	IV.	1.8	2	0.6	1.6		
LG04 No32		碎片	安山岩	IV. クラック	1.1	1.7	0.4	0.8		
LG04 No33	第47区-41	刮片	頁岩	IV.	1.2	1.7	0.4	0.8		
LG04 No34	第49区-52	石核	安山岩	IV.	6.6	2.9	1.1	4.9	接着資料3 自然面有り	3212
LG04 No35		刮片	頁岩	IV.	6.2	5.55	6	220	自然面有り	3207
LG04 No36		碎片	安山岩	IV. クラック	2	3.2	1	4.2		
LG04 No37		碎片	頁岩	IV.	1.4	0.8	0.4	0.4		
LG04 No38	第44区-15	刮片	頁岩	IV. クラック	0.9	1.8	0.3	0.5		
LG04 No39		刮片	頁岩	IV.	5.1	4.75	1.4	14.3		3226
LG04 No40	第43区-9	刮片	安山岩	IV.	3.7	2.7	1.1	9.6	自然面有り	
LG04 No41	第44区-16	刮片	頁岩	IV.	4.2	4.2	1.2	14.8		3225
LG04 No42		碎片	安山岩	IV.	5	7.25	2.5	54.9		3206
LG04 No43		碎片	安山岩	IV.	1	1.2	0.5	0.6		
LG04 No44		刮片	頁岩	IV. クラック	1	1.1	0.4	0.4		
LG04 No45		刮片	チャート	IV. クラック	2.8	2.2	0.8	2.8		
LG04 No46		砾片	安山岩	IV.	0.9	1.5	0.6	0.7		
LG04 No47	第45区-31	砾片	安山岩	IV.	3	3.5	1.4	10.3	自然面有り	
LG04 No48		刮片	安山岩	IV.	3.9	3.4	0.9	11.6		3245
LG04 No49		碎片	安山岩	IV.	1.6	2	0.7	1.7		
LG04 No50		碎片	安山岩	IV. クラック	1.3	0.9	0.5	0.6		
LG04 No51		碎片	頁岩	IV.	1.4	0.9	0.5	0.4		
LG05 No1		刮片	頁岩	IV.	0.6	1	0.3	0.2		
LG05 No3		碎片	安山岩	IV.	-1.1	1.3	0.7	0.7	折れ	
LG05 No4		刮片	安山岩	IV.	-1.5	2.4	0.8	2.3		
LG05 No4		碎片	安山岩	IV.	1.3	2	0.7	1.6		
LG05 No5		碎片	安山岩	IV.	1.6	1.8	0.5	1.6		
LG05 No6		刮片	安山岩	IV.	1.9	2	0.7	2.4		
LG05 No6		刮片	安山岩	IV.	1.9	2.7	0.8	3.6		
LG05 No7		チャート	IV. クラック	2	1.9	0.6	1.9	自然面有り		
LG05 No8		碎片	安山岩	IV.	-1.3	-1.8	0.5	1	折れ	
LG05 No9	第43区-1	へら形石器	?	IV.	8.3	4.2	1.6	47.1		3227
LG05 No10		碎片	黒曜石	IV. クラック	0.9	0.6	0.1	0.1		
LG05 No11		碎片	安山岩	IV. クラック	0.9	1.1	0.3	0.3		
LG05 No12		石核	安山岩	IV.	3.8	3.5	2.2	24.6		3243
LG05 No13		刮片	安山岩	IV. クラック				LPS 455と混合	自然面有り 欠損	3247
LG05 No14		碎片	頁岩	IV.	1	1.4	0.3	0.4		
LG05 No15		碎片	安山岩	IV.	0.9	0.9	0.3	0.3		
LG05 No16		砾片	頁岩	IV. クラック	1.6	1.5	0.3	0.7		
LG05 No17		砾片	頁岩	IV. クラック	-1.2	-1.9	0.5	0.9	折れ	
LG05 No18		碎片	安山岩	IV.	1	1.5	0.4	0.4		
LG05 No19		碎片	安山岩	IV. クラック	1.1	1.1	0.5	0.4		
LG05 No20		碎片	安山岩	IV.	2	2.2	0.6	1.8		
LG05 No21		碎片	頁岩	IV.	0.9	1.6	0.3	0.3		
LG05 No22	第43区-4	砾片	頁岩	IV.	6.1	5.8	1.9	34.3		3228
LG05 No23		碎片	安山岩	IV. クラック	1.7	1.4	0.3	0.9		
LG05 No24		碎片	安山岩	IV.	1.1	1.1	0.4	0.5		
LG05 No1		碎片	安山岩	IV. クラック	-1.7	1.1	0.7	1.3		
LG05 No1		砾片	黒曜石	IV. クラック	1	1.6	0.4	0.6		

がまん渓遺跡旧石器時代石器觀察表

器配番号	図版番号	器種名	石 材	層 位	長さcm	幅 cm	厚さcm	重 量g	備 考	整理No
LG06 No2		碎片	黒曜石	IV. クラック	1.1	0.6	0.2	0.1		
LG06 No3		碎片	黒曜石	IV. クラック	1.3	0.8	0.2	0.2		
LG06 No4		碎片	安山岩 b	IV. クラック	0.9	2.2	0.2	0.4		
LG06 No5		碎片	安山岩 b	IV. クラック	1	1.6	0.2	0.4		
LG06 No6		裂片	安山岩 b		5.6	5	1	26.7		
LG07 Na1		碎片	黒曜石	IV.	0.6	0.5	0.1	0.1		
LG07 Na3		碎片	安山岩 b	IV.	0.6	1.1	0.1	0.1		
LH02 Na1		裂片	黒曜石	IV. クラック	0.9	1.5	0.6	0.7		
LH02 Na2		碎片	安山岩	IV. クラック	1.2	2	0.9	2.4		
LH02 Na3		碎片	黒曜石	IV. クラック	1	0.6	0.1	0.1		
LH03 Na1		碎片	黒曜石	IV. クラック	0.8	1.2	0.3	0.3		
LH03 Na2		碎片	安山岩 b	IV. クラック	1	1.3	0.3	0.4		
LH03 Na3		碎片	黒曜石	IV. クラック	0.8	1.1	0.2	0.1		
LH03 Na4		碎片	黒曜石	IV.	1.1	0.8	0.2	0.2		
LH03 Na5		剥片	安山岩	IV. クラック	2.6	3.8	1.8	13.9		
LH04 Na1	第47図-45	剥片	頁岩	IV.	4.4	3.8	1.3	13	接合資料4	3205
LH04 Na2		碎片	安山岩		-0.8	-1.4	0.4	0.3	折れ	
LH04 Na3		剥片	メノワ		1.1	1.3	0.3	0.4		
LH05 Na1	第43図-5	剥片	頁岩	IV.	-4.6	2.8	1.05	10.3	欠損(ガジリ)	3229
LH06 Na1		剥片	頁岩	IV.	1.7	1.3	0.2	0.5		
プロック 1		剥片	頁岩	IV.	6.1	3.3	1.2	17.2		
SA01 Na4	第50図-53	周縁加工済み石器	安山岩	覆土	2.8	3.8	0.9	9.3		3254
SB04 Na1		剥片	安山岩	覆土	2.2	2.7	1.3	7.6		
SB04 Na12		剥片	安山岩	覆土	3.5	2.6	0.9	6.7		
SD01 Na4	第50図-55	斜軸尖頭器	頁岩	覆土	4.7	6.1	1.3	32.3		3256
SD01 Na74		剥片	頁岩	覆土	6.1	2.7	1.7	20.4		
SD01 Na77	第50図-58	一側削二石器	頁岩	覆土	8.8	4.3	2.0	55.3		3037
SD01 Na81	第50図-59	尖頭器状石器	安山岩	覆土	8.2	4.2	2.6	75.4		3166
SD01 Na103	第50図-60	素刃石器	頁岩	覆土	4.2	5.5	1.8	35.5		3251
SD01 Na172		剥片	頁岩	覆土	2.9	6	0.9	12.7		
SD01 Na177		鉢形核?	黒曜石	覆土	2.5	2.2	1.6	8.4		3098
SK01 Na4	第50図-68	剥片	頁岩	覆土	2.4	6.2	1	12.2		3213
SK01 Na6		剥片	頁岩	覆土	3	4.1	1	10.1		
SK01 Na4		剥片	頁岩	覆土	2.6	2.7	0.6	3.8		
SK03 Na4		剥片	頁岩	覆土	4.1	7.3	3.6	54.2		3211
SQ01	第50図-66	剥片	頁岩	覆土	4.2	5.7	1.8	34.5		3257
SQ01		剥片	安山岩	覆土	4.5	2.6	12.4			
SQ01		剥片	黒曜石	覆土	3.7	1.5	1.3	5.1		3249
SQ01 Na25		剥片	頁岩	覆土	4.4	6.3	1.1	28.9		
SQ01 Na36		剥片	安山岩	覆土	5.5	3.5	1.7	21.1		
SQ01 Na40	第50図-52	基部加工剥片	頁岩	覆土	3.5	3.5	1.1	10.2		3253
SQ01 Na40		剥片	黒曜石	覆土	5.4	1.3	0.8	3.4		3250
SQ01 Na58		剥片	頁岩	覆土	5.1	4	1.3	24.2		
SQ01 Na83	第50図-57	剥片	頁岩	覆土	4.3	5.5	1.5	31.1		3258
SQ01 Na84		剥片	安山岩	覆土	3.7	9	0.9	7.6		
SQ01 Na85	第50図-51	斜軸尖頭器	頁岩	覆土	4.6	5.6	1	24.1		3252
SQ01 Na107		剥片	頁岩	覆土	4.7	2	0.7	6.4		
SX01 Na13		剥片	頁岩	覆土	3.3	6.8	2.1	54.2		
SX01 Na5		剥片	安山岩	覆土	4	2.9	1	11.5		
SX01 Na6		剥片	安山岩	覆土	4	5	0.9	14.9		
SX01 Na9	第47図-40	剥片	頁岩	覆土	-	3.1	1.3	14.4	接合資料3、測定時の折れ	3212
検出品Na5		剥片	安山岩	覆土	2.5	4.2	0.8	5.4		
検出品Na28	第50図-54	斜軸尖頭器	頁岩		4.9	3.9	1.1	16.1		3255
検出品Na29		剥片	頁岩		5	4.9	2.7	64.7		
檢出品Na32	第43図-12	剥片	頁岩		4	3.4	1.5	17.2		3230

沢田鍋土遺跡旧石器時代観察表

注記番号	図版番号	器種名	石材	層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理番号
L-3 No11	第81図-1	細石刃	黒曜石	V層	2.75	1	0.3	0.5		3416
L-2 No2	第81図-2	細石刃	黒曜石	V層	3	0.7	0.5	0.5		3402
L-3 No24	第81図-3	細石刃	黒曜石	V層	2.5	0.7	0.3	0.3	自然面有り	3429
L-3 No1	第81図-4	細石刃	珪質頁岩	V層	1.85	0.9	0.25	0.3		3406
L-2 No5	第81図-5	細石刃	黒曜石	V層	—	0.6	0.5	—	欠損	3405
L-3 No3	第81図-6	細石刃	黒曜石	V層	1.95	0.75	0.3	0.3	自然面有り	3446
L-3 No28	第81図-7	細石刃	黒曜石	V層	1.85	0.7	0.35	0.4	ガシリ有り	3433
L-3 No30	第81図-8	細石刃	黒曜石	V層	2.1	1.05	0.3	0.6	自然面有り 使用痕	3435
L-8 No1	第81図-9	細石刃	黒曜石	V層	1.4	0.7	0.2	0.1	欠損、被熱?	3444
L-2 No4	第81図-10	細石刃	黒曜石	V層	1.6	0.6	0.2	0.2		3404
L-3 No36	第81図-11	二次加工製片	チャート	不明	2.4	1.45	0.7	2.4	出土地点不明	3441
I-3 No35	第81図-12	[スクリーパー]	頁岩	V層	4.8	4.25	1.4	27.8	自然面有り L-3 No19と接合	3440
L-3 No3	第81図-13	[スクリーパー]	頁岩	V層	8.1	5.5	2.3	98.3	自然面有り L-3 No35と接合	3424
L-9 No19	第81図-14	[スクリーパー]	頁岩	V層	—	—	—	—		3424
L-3 No5	第82図-5	[スクリーパー]	頁岩	V層	7.7	5.5	1.85	74.2	自然面有り	3420
L-3 No32	第82図-16	[スクリーパー]	珪質頁岩?	V層	10.3	2.8	1.7	23.2		3437
I-3 No4	第82図-17	[スクリーパー]	頁岩	V層	7.7	4.6	1.65	50.8		3409
S D05	第82図-18	[スクリーパー]	珪質頁岩	薄覆土	7.55	2.6	1.3	26.7	調査区段セクション	3453
S D05 溝	第82図-19	[スクリーパー]	溝吻土	V層	8.7	6.25	2.5	161.3	自然面有り	3452
表 换	第83図-20	[スクリーパー]	表土	11.5	4.45	2.25	98.2	自然面有り ブロック1付近表層	3455	
S D05	第83図-21	[スクリーパー]	頁岩	礫覆土	11.9	4.7	1.9	73.7		3454
L-8 No3	第83図-22	剥片	頁岩	V層	2.9	3.7	1.95	10.9		3447
L-3 No20	第83図-23	剥片	頁岩	V層	2.85	4.5	1.8	19.5	自然面有り	3425
L-8 No3	第83図-24	剥片	頁岩	V層	2.6	2.9	1.2	5.8	自然面有り	3447
L-3 No8	第83図-25	剥片	頁岩	V層	4.3	1.7	1.5	6.6	自然面有り	3413
L-3 No16	第83図-26	剥片	珪質頁岩	V層	5.5	1.4	0.75	3.3		3421
L-8 No5	第83図-27	剥片	頁岩?	V層	3.15	1.5	0.9	3.2		3449
I-3 No29	第83図-28	剥片	安山岩	V層	1.55	2.4	0.5	1.4		3434
L-8 No4	第83図-29	剥片	安山岩	V層	1.95	2.8	0.6	2.2		3468
L-3 No6	第84図-30	剥片	黒曜石	V層	2.65	3.4	1	5.4	ガシリ有り 自然面を打削する	3411
L-3 No3	第84図-31	剥片	黒曜石	V層	3.55	2.4	0.9	4.3		3408
L-2 No1	第84図-32	剥片	黒曜石	V層	7.8	1.8	0.8	1.3		3401
L-3 No10	第84図-33	剥片	黒曜石	V層	2.15	1.6	0.5	1		3415
L-3 No12	第84図-34	剥片	黒曜石	V層	3.1	2.6	0.7	3.6		3417
L-3 No5	第84図-35	剥片	黒曜石	V層	2.9	1.7	0.7	1.7		3410
L-8 No7	第84図-36	剥片	珪質頁岩	V層	—	1.9	0.9	1.7		3451
L-3 No9	第84図-37	剥片	黒曜石	V層	2.4	1.1	1.1	5.2		3414
L-3 No2	第84図-38	剥片	黒曜石	V層	—	2.5	0.7	1.7		3407
L-3 No25	第84図-39	剥片	黒曜石	V層	1.5	1.8	0.35	0.5	欠損	3430
I-3 No23	第84図-40	剥片	黒曜石	V層	1.5	1.3	0.55	0.6		3428
L-2 No3	41	剥片	黒曜石	V層	1.25	1.5	0.3	0.4		3403
L-3 No7	42	剥片	頁岩	V層	1.8	2.1	0.35	1.1	自然面有り	3412
L-3 No13	43	細石刃?	黒曜石	V層	—	0.8	0.2	—	欠損	
I-3 No14	44	剥片	頁岩	V層	2.1	1.65	0.7	1.6		3419
L-3 No16	45	剥片	珪質頁岩	V層	2.3	1.9	0.55	2		3421
L-3 No17	46	剥片	黒曜石	V層	1.9	1.7	0.5	1.3	欠損 被熱?	
L-3 No18	47	剥片	珪質頁岩?	V層	0.5	0.9	0.15	0.1		
I-3 No21	48	剥片	黒曜石	V層	1.1	1.3	0.5	0.6		
L-3 No22	49	細石刃?	黒曜石	V層	—	0.4	0.1	0.1	欠損	
L-3 No26	50	剥片	珪質頁岩	V層	1.3	0.4	0.2	0.1		
L-3 No27	51	剥片	黒曜石	V層	1.4	0.9	0.2	0.2		3432
L-3 No33	52	剥片	安山岩	V層	0.8	1.7	0.3	0.3		
L-3 No33	53	剥片	安山岩	V層	0.9	1.3	0.2	0.2		
L-3 No34	54	剥片	—	V層	1.8	3.1	0.6	2.3	自然面有り	
L-8 No2	55	剥片	安山岩	V層	1.3	2.2	0.3	0.7		
L-8 No5	56	剥片	安山岩	V層	2	3.3	0.7	6		

牛出古窯跡旧石器時代石器觀察表

ブロック名	記注番号	図版番号	器種名	石材	層	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No
ブロック1	SQ05 №1	第244図-1	磨製石斧未開口	焼紋岩	IV層	10.9	6.05	3.7	256.0		3041
ブロック1	SQ05 №2		剥片	黒曜石	IV層	1.6	2.6	1.4	4.6		
ブロック1	SQ05 №3	第245図-5	剥片	黒曜石	IV層	3.8	3.5	1.8	19.4	自然面打面	3037
ブロック1	SQ05 №4		剥片	焼紋岩	IV層	5.2	2.7	0.9	11.5		
ブロック1	SQ05 №5		礫	花崗岩	IV層	3.6	3.1	1.4	18.4	SQ05 №12 と接合	
ブロック1	SQ05 №6		礫	IV層	15.8	11.1	9.2	250.0			
ブロック1	SQ05 №7	第245図-6	剥片	安山岩	IV層	3.3	4	1	12.5		3039
ブロック1	SQ05 №8	第244図-2	石核	砂岩	IV層	6.95	7.2	3.2	148.1		3035
ブロック1	SQ05 №9		砾石?	チャート	IV層	3.5	4.8	3	68.8		
ブロック1	SQ05 №11		剥片	焼紋岩	IV層	3.1	2.1	0.9	2.5		
ブロック1	SQ05 №12		礫	花崗岩	IV層	1.2	7.5	4.5	438.5	SQ05 №5 と接合	
ブロック1	SQ05 №12		剥片	焼紋岩	IV層	1	1.1	0.4	0.4		
ブロック1	SQ05 №13-14	第244図-3	石核	焼紋岩	IV層	5.4	4.8	2.5	50	N=13.14.2個接合	3034
ブロック1	SQ05 №16		剥片	焼紋岩	IV層	1.3	1.2	0.4	0.7		
ブロック1	SQ05 №17		礫	IV層	5.2	6.1	1.6	50.7			
ブロック1	SQ05 №18	第245図-8	剥片	安山岩	IV層	1.75	3.5	0.6	3	自然面有り	3040
ブロック1	SQ05 №19		礫	IV層	19.4	11.7	10.3	240.0			
ブロック1	SQ05 №20	第245図-4	石核	めのう	IV層	3.7	4.7	4.2	73		3035
ブロック1	SQ05 №21	第245図-7	二次加工剣	黒曜石	IV層	2.1	3.05	0.8	3.5		3038
ブロック1	SQ05 №22		剥片	チャート	IV層	1.9	1	0.6	1.4	自然面有り	
ブロック1	SQ05 №24		石核	チャート	IV層	3.6	2.8	2.2	23.4	残核	
ブロック1	SQ05 №25		剥片?	チャート	IV層	3.7	2.4	1.7	15.4	自然面有り	
ブロック1	SQ05 №24		礫	IV層	18.2	9.3	5.3	830			
ブロック2	SQ06 №3		剥片	凝灰岩	I層	4.5	3.1	1.3	12	自然面有り	
ブロック2	SQ06 №4		剥片	安山岩	I層	3.9	2.9	1.3	9.8		
ブロック2	SQ06 №5		石核	チャート	IV層	5.5	4.9	3	89.9	自然面有り 接合資料1.	
ブロック2	SQ06 №6		剥片	チャート	IV層	3.9	5.1	2.6	41.1	自然面有り 接合資料1.	
ブロック2	SQ06 №7		剥片	珪質頁岩	IV層	2.1	2	0.6	3		
ブロック2	SQ06 №8		剥片	珪質頁岩	IV層	2.1	2.4	0.6	2.2		
ブロック2	SQ06 №9		剥片	チャート	IV層	-	0.5	0.3	0.1		
ブロック2	SQ06 №10		剥片	チャート	IV層	1.9	1.2	0.4	0.7		
ブロック2	SQ06 №11		底片	チャート	IV層	2.8	1.9	1.8	9.8		
ブロック2	SQ06 №12		剥片	チャート	IV層	0.6	0.9	0.3	0.1		
ブロック2	SQ06 №13		剥片	チャート	IV層	2.5	3.8	1.4	7.6	自然面有り 接合資料1.	
ブロック2	SQ06 №14		剥片	チャート	IV層	1.9	2	0.4	1.6		
ブロック2	SQ06 №15		剥片	チャート	IV層	1.8	2.1	0.5	1.8		
ブロック2	SQ06 №16		剥片	チャート	IV層	2.7	2.3	1	2.3		
ブロック2	SQ06 №17		剥片	珪質頁岩	IV層	2.1	2.6	0.5	2.7	自然面有り	
ブロック2	SQ06 №18		剥片	チャート	IV層	2.7	2.4	1	4.4		
ブロック2	SQ07 №82		礫	IV層	8.3	5.8	4.2	210			
ブロック2	SQ07 №83		礫	安山岩	IV層	8.6	5.7	4.7	310		
ブロック3	SQ07 №84	第247図-28	石核	焼紋岩	IV層	5.05	8.2	4.5	128.2		3033
ブロック3	SQ07 №85		剥片	焼紋岩	IV層	2.6	1.9	1	3.9		
ブロック3	SQ07 №86	第247図-27	剥片	焼紋岩	IV層	2.7	5.2	1.5	11.8		3043
ブロック3	SQ07 №87		礫	花崗岩	IV層	8.8	5.3	4.8	250		
ブロック4	SQ07 №23		剥片	黒曜石	IV層	1.2	2.3	0.8	1.1	ガジリ痕	
ブロック4	SQ07 №24		砂片	焼紋岩	IV層	1.6	1'	0.1	0.3		
ブロック4	SQ07 №24		砂片	焼紋岩	IV層	0.6	1.2	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 №25	第246図-15	石核	黒曜石	IV層	2.3	2.5	1	3.9	自然面有り	3045
ブロック4	SQ07 №26		砂片	黒曜石	IV層	0.8	1..	0.3	0.2		
ブロック4	SQ07 №27	第247図-23	剥片	黒曜石	IV層	3.85	3.2	0.5	5.3		3056
ブロック4	SQ07 №28		剥片	黒曜石	IV層	2.2	2.2	1.3	5.1	折れ、自然面有り	
ブロック4	SQ07 №28		剥片	焼紋岩	IV層	2.1	0.9	0.3	0.6	研磨面有り、磨製刃片の欠損痕	
ブロック4	SQ07 №29	第245図-21	石核	黒曜石	IV層	1.9	3.3	1.1	5		3049
ブロック4	SQ07 №30	第245図-2	スクレーパー	黒曜石	IV層	3.2	3.3	1.4	9.6	自然面が打面	3048
ブロック4	SQ07 №39		砂片	黒曜石	IV層	0.8	1'	0.5	0.3		
ブロック4	SQ07 №30		砂片	黒曜石	IV層	1	0.7	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 №33		礫	IV層	12.8	11.2	8.5	2.00			
ブロック4	SQ07 №34		礫	IV層	23.5	15	12.1	3700			

牛出古窯遺跡旧石器時代石器類叢表

ブロック名	記号	図版番号	器種名	石材	層	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理No.
ブロック4	SQ07 No36		碎片	蛇紋岩	IV層	1	0.9	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No37		碎片	蛇紋岩	IV層	1	0.6	0.3	0.2	研磨面有り	
ブロック4	SQ07 No40		剝片	黒曜石	IV層	1.4	0.7	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No41		碎片	蛇紋岩	IV層	1	0.9	0.1	0.1	新磨面有り	
ブロック4	SQ07 No42		剝片	黒曜石	IV層	2.9	2.7	0.7	3.6	自然面有り	
ブロック4	SQ07 No43		剝片	黒曜石	IV層	1.8	1.8	0.7	1.6		
ブロック4	SQ07 No44		剝片	蛇紋岩	IV層	0.7	1.3	0.2	0.3	新磨面有り	
ブロック4	SQ07 No45	第246図-15	剝片	黒曜石	IV層	2.4	2.4	1	4.6	自然面有り	3053
ブロック4	SQ07 No46	第247図-22	剝片	馬尾岩	IV層	3.15	3.6	1.1	7.5	自然面有り	3054
ブロック4	SQ07 No47		碎片	黒曜石	IV層	1	1	0.3	0.2		
ブロック4	SQ07 No48		剝片	黒曜石	IV層	2.6	1.4	0.4	1.2		
ブロック4	SQ07 No49		碎片	蛇紋岩	IV層	1.1	1	0.3	0.4		
ブロック4	SQ07 No50		碎片	黒曜石	IV層	0.4	1	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No50		碎片	黒曜石	IV層	0.5	0.7	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No51		剝片	黒曜石	IV層	2	1.2	0.4	0.6		
ブロック4	SQ07 No52		石核	黒曜石	IV層	2.6	2.5	1.6	6.1	自然面有り	
ブロック4	SQ07 No53	第246図-13	黒曜石の丸い片	黒曜石	IV層	1.8	2.2	0.45	1.2		3051
ブロック4	SQ07 No54		剝片	蛇紋岩	IV層	1.4	2.2	0.7	1.7		
ブロック4	SQ07 No55		剝片	蛇紋岩	IV層	2	2.2	0.3	1.4	研磨面有り、磨製石斧の欠損片?	
ブロック4	SQ07 No56		碎片	黒曜石	IV層	1	0.8	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 No56		碎片	黒曜石	IV層	0.5	0.8	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No57		剝片	蛇紋岩	IV層	1.8	4.2	0.6	5.5	研磨面有り、磨製石斧の欠損片?	
ブロック4	SQ07 No58		碎片	黒曜石	IV層	0.9	0.8	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 No59		石核	黒曜石	IV層	2.2	1.9	1	2.8	折れ、残核	
ブロック4	SQ07 No60	第246図-20	石核	黒曜石	IV層	2.5	2.4	1.1	7	自然面有り	3047
ブロック4	SQ07 No61		碎片	黒曜石	IV層	0.9	0.7	0.4	0.2		
ブロック4	SQ07 No62		剝片	鐵石英	IV層	1.1	1.9	0.6	1.1		
ブロック4	SQ07 No63		剝片	蛇紋岩	IV層	3.8	1.5	0.6	4.1	研磨面有り、磨製石斧の欠損片?	
ブロック4	SQ07 No64		碎片	黒曜石	IV層	0.9	0.6	0.9	0.8	破壊?	
ブロック4	SQ07 No66		碎片	蛇紋岩	IV層	0.7	0.4	0.2	0.1	2点	
ブロック4	SQ07 No68		碎片	黒曜石	IV層	1.7	0.3	0.3	0.1		
ブロック4	SQ07 No69		碎片	黒曜石	IV層	0.9	0.6	0.9	0.1		
ブロック4	SQ07 No70	第246図-17	石核	黒曜石	IV層	3.35	2.25	1.5	9.1	自然面有り	3046
ブロック4	SQ07 No71		碎片	黒曜石	IV層	1.1	0.9	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No72	第246図-11	台形様石器	黒曜石	IV層	3.1	1.95	0.6	2.4		3057
ブロック4	SQ07 No73		剝片	鐵石英	IV層	2.2	1.5	0.4	1.4		
ブロック4	SQ07 No74		碎片	黒曜石	IV層	1	0.7	0.1	0.1		
ブロック4	SQ07 No75		碎片	蛇紋岩	IV層	0.9	0.6	0.4	0.2		
ブロック4	SQ07 No76		碎片	黒曜石	I層	1.6	1.3	0.2	0.6		
ブロック4	SQ07 No77		剝片	蛇紋岩	IV層	3.8	2	0.5	4.2	研磨面有り、磨製石斧の欠損片?	
ブロック4	SQ07 No77		碎片	蛇紋岩	IV層	0.7	0.4	0.2	0.1		
ブロック4	SQ07 No78		碎片	蛇紋岩	IV層	1.4	0.6	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No79		碎片	蛇紋岩	IV層	1.7	0.6	0.3	0.3		
ブロック4	SQ07 No80		剝片	蛇紋岩	IV層	2.8	1.1	0.3	0.9	研磨面有り、磨製石斧の欠損片?	
ブロック4	SQ07 No81	第247図-24	剝片	黒曜石	IV層	1.7	2.9	0.5	2.3		3050
ブロック4	SQ07 No87		穂	安山岩	IV層	8.2	4.4	3.3	150		
ブロック4	SQ07 No88		剝片	黒曜石	IV層	1.6	2.6	0.5	1.2		
ブロック4	SQ07 No89		剝片	黒曜石	IV層	3.2	1.6	0.5	1.3		
ブロック4	SQ07 No90	第246図-14	石核	黒曜石	IV層	3.15	4.05	0.8	8.1	剝片兼材	3055
ブロック4	SQ07 No91	第246図-18	石核	黒曜石	IV層	2.9	2.4	0.9	4.9	自然面有り、折れ、ガジリ	3052
ブロック4	SQ07 No92		剝片	黒曜石	IV層	1.5	2.6	0.7	2.1		
ブロック4	SQ07 No94	第247図-25	剝片	黒曜石	IV層	2.45	4.1	0.6	3.6	ガジリ痕	3059
ブロック4	SQ07 No95		剝片	黒曜石	IV層	3.2	2.8	1.5	13.5		
ブロック5	SQ07 No1		剝片	流紋岩	IV層	1.7	1	0.5	0.8		
ブロック5	SQ07 No2		剝片	蛇紋岩	IV層	2.9	2	1.1	7	折れ	
ブロック5	SQ07 No3		剝片	安山岩	IV層	2.3	2.7	0.9	5.4		
ブロック5	SQ07 No4		剝片	蛇紋岩	IV層	1.8	1	0.8	0.9	自然面有り	
ブロック5	SQ07 No4		碎片	流紋岩	IV層	0.6	1.2	0.3	0.1	同種	
ブロック5	SQ07 No4		碎片	流紋岩	IV層	0.5	0.8	0.3	0.1	同種	

牛出古窯遺跡旧石器時代石器観察表

ブロック番号	石器番号	区分番号	基種名	石材	層	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	整理番号
ブロック5	SQ07 №5		礫	安山岩	IV層	14	11.7	13.5	2100		
ブロック5	SQ07 №6		剥片	流紋岩	IV層	1.6	1.5	0.7	1.1		
ブロック5	SQ07 №7		剥片	鈍石英	IV層	1.2	2.2	0.4	0.9		
ブロック5	SQ07 №8		剥片	鈍石英	IV層	2.7	2.9	1.9	8.5		
ブロック5	SQ07 №9		剥片	鈍石英	IV層	3.9	4.2	1.4	20.5		
ブロック5	SQ07 №10		剥片	鈍石英	IV層	2.6	1.3	0.9	2.5	折れ	
ブロック5	SQ07 №11		剥片	鈍石英	IV層	3.5	5.9	2.6	44.7		
ブロック5	SQ07 №12	第247区-25	剥片	安山岩	IV層	2.4	4.45	0.5	5.4	自然面有り	3044
ブロック5	SQ07 №13		剥片	黒曜石	IV層	1.7	4.8	1.3	10.6	折れ	
ブロック5	SQ07 №14		剥片	鈍石英	IV層	1.3	3.2	0.8	2.2		
ブロック5	SQ07 №15		剥片	鈍石英	IV層	2.8	2.3	0.5	2.9		
ブロック5	SQ07 №16	第246区-9	磨製石斧	鈍敲打	II層	5.85	2.4	1.65	19.6		3042
ブロック5	SQ07 №17		石核	チャート	IV層	6	4.6	4.2	134	自然面有り、河床疊	
ブロック5	SQ07 №18		剥片	鈍石英	IV層	4	4.7	1.6	31.9	自然面有り	
ブロック5	SQ07 №19	第246区-10	合形燧石器	黒曜石	IV層	2.45	1.6	0.55	1.5		3058
ブロック5	SQ07 №20	第246区-19	石核	チャート	IV層	5.3	4.9	3.4	84.4	自然面有り	3031
ブロック5	SQ07 №21		剥片?	?	IV層	3	2.5	1	2.9		
ブロック5	SQ07 №22		剥片	チャート	IV層	2.9	1.8	0.9	5.2		
ブロック5	SQ07 №23		礫	チャート	IV層	19.9	9.9	11.3	2400		
ブロック5	SQ08 №1		剥片	黒曜石	IV層	1.6	1.5	0.7	1.2		
ブロック5	SQ08 №2		剥片	黒曜石	IV層	1.2	1.8	0.4	0.7		
ブロック5	SQ08 №3		剥片	黒曜石	IV層	1.3	1.9	0.6	0.9		

弥生時代後期・古墳時代前期遺物観察表

がまん湖遺跡弥生時代土器観察表

周囲番号	遺構名	器種分類	口径 cm	高さ cm	器高 cm	外面調整	内部調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考	
第61区-1	SB01	底		6.7	不明	不明	不明	D E	②	(1/1)	1099		
第61区-2	SB01	高脚3	20		赤彩	赤彩	B	2	1/6	1125	壺杯Bか		
第61区-3	SB01	高脚			ハケメ	底、ハケメ→ナデ	C	4	(1/8)	1145			
第61区-4	SB01	鉢C	20		ミガキ	ミガキ	B E	6	1/8	1065	鉢分沈泡あり		
第63区-1	SB02-01	壺A 1?	33.9		赤彩	赤彩	B	2	1/8	1100	壺杯か		
第63区-2	SB04	壺A	18		T字文、赤彩	ハケメ→ナデ	A	4	1/6	1073			
第63区-3	SB04	壺A?	18		ミガキ	ミガキ	D	2	1/4	1074	調に後状文か?		
第63区-4	SB02-04	底	5.9		ミガキ	ミガキ	D E	②	(3/4)	1101			
第63区-5	SB04	底	10		ミガキ	不明	B	2	(1/1)	1075			
第63区-6	SB02-04	底	13.6		ミガキ	ナデ?、ナデ	B	2	3/3	1057	壺底か?		
第63区-7	SB02-04	高脚			赤彩	底、赤彩	C	4	(1/1)	1102			
第63区-8	SB04	合形壺A 1	8.1	5.4	12	横彫波状文、腰状文	不明	D E	2	1/1	1077	缺分多い	
第63区-9	SB05	高脚口縁付	8.7	6	9.6	ミガキ?	ミガキ?	B D	2	1/1	1078		
第63区-10	SB04	鉢	14.3	3.4	6.8	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	C	2	1/2	1072		
第63区-11	SB02-04	鉢	6.2		赤彩、ミガキ	赤彩	B	6	(3/4)	1103			
第63区-12	SB04	有孔鉢	16.2	4	6.7	不明	ミガキ	A	2	1/1	1079	底部穿孔	
第64区-1	SB05	壺F			不明	不明	B D	2		1071			
第64区-2	SB03	壺A			横彫波状文、腰状文(6条)					1069			
第64区-3	SB03	底	6		不明	不明	B	②	(3/4)	1104			
第64区-4	SB03	底	6.1		不明	不明	A D	2	1/1	1068	施成後穿孔か?		
第64区-5	SB03	有孔鉢		2.5	不明	ミガキ?	B D	2	1/1	1070	施成前穿孔		
第65区-1	SB01	ミニチュア	7.8	3.1	3.5	ナデ?	ナデ?	D	2	1/1	1064		
第65区-2	SB01	高脚A			赤彩、ミガキ	底、ハケメ?	B	2	(1/1)	1063	三角孔(4単位)		
第67区-1	SD01	壺F	18.1		ミガキ	ミガキ	B	②	1/4	1043	蓋石多い		
第67区-2	SD01	壺A及BB	24		ミガキ	ナデ?	A D	4	1/2	1066	赤彩無し		
第67区-3	SD01	壺A 2	20		ミガキ、柄彫直線文	ミガキ?	A D	4	1/4	1066	赤彩なし、石英多い		
第67区-4	SD01	壺A 1	23.9		赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ?	B	②	1/8	1116	壺杯か?		
第67区-5	SD01	壺A 1	20		赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/6	1119			

がまん源流説你生時代土器観察表

国原番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外因調整	内因調整	色調	釉土	残存率	整理 番号	備考
第67区-6	壺A 1	19.9				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	4	1/8	1166	石英多い
第67区-7	SD01	壺A 1	14			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	4	1/8	1120	
第67区-8	SD01	壺A 1	22			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	⑦	1/6	1117	
第67区-9	SD01	壺A 2	43.5			赤彩、ミガキ、二字文、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/2	1129	
第67区-10	SD01	壺A 2	21			ミガキ	ミガキ	B	2	1/4	1167	赤彩なし
第67区-11	SD01	壺A 2	15.9			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	②	1/4	1162	
第67区-12	SD01	壺A 2	38			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	⑥	1/8	1055	
第67区-13	SD01	壺A 2	26.7			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/8	1174	
第67区-14	SD01	壺A 2	35.8			赤彩、ミガキ? 口唇被状文	赤彩、ミガキ?	A	2	1/8	1168	
第67区-15	SD01	壺A 2	31			赤彩、ミガキ? 口唇被状文?	赤彩、調整不明	B	2	1/8	1163	石英多い
第67区-16	SD01	壺A 2	27.7			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	②	1/8	1160	
第67区-17	SD01	壺A 2	32.1			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/3	1164	
第67区-18	SD01	壺A 2	27.1			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ?	A	4	1/2	1051	
第68区-19	SD01	壺A 2	32			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/8	1175	
第68区-20	SD01	広口壺張壺	17.6			ナガ、讓狀?	赤彩、ミガキ	B	6	1/10	1197	表面赤彩無し
第68区-21	SD01	壺A 2	34.1			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	E	1/6	1173	石英多い
第68区-22	SD01	壺A 3	19			赤彩、ミガキ、口唇被状文	ミガキ	B	②	1/6	1158	
第68区-23	SD01	壺A 3	31.9			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	4	1/8	1172	石英多い
第68区-24	SD01	壺A 3	28			赤彩、西暦不明、口縁被状文	赤彩、調整不明	B	4	1/6	1170	
第68区-25	SD01	壺A 3	30.1			赤彩、ミガキ、二級被状文	赤彩、ミガキ	A	②	1/8	1171	
第68区-26	SD01	壺A 3	36			赤彩、ミガキ、口唇被状文	赤彩、ミガキ	B	2	1/8	1169	
第68区-27	SD01	壺A 細				二字文、ガラシ状是付(斜)ナデorミガキ	ナデorミガキ	B	②	(1/4)	1145	難抗(9条)
第68区-28	SD01	壺A 細				赤彩、I字文、ボタン状是付	ハケメ、ナデD	B	4	(1/4)	1148	
第68区-29	SD01	壺A 細				ハケメorミガキ	ナデD	A	④	(1/3)	1550	
第68区-30	SD01	壺A 細	7.4			赤彩、ミガキ	ナデ	AB	4	(1/1)	1037	
第68区-31	SD01	壺A 細	5			赤彩、ミガキ、崩下ミガキ	ナデD	A	②	(1/1)	1048	
第68区-32	SD01	広口壺張壺	20.9 11.4 27.7			赤彩		(E)	2	1/2	1096	ミガキ
第69区-33	SD01	壺A 1	29			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	④	1/4	1118	発泡
第69区-34	SD01	広口壺張壺	14.4			赤彩、ミガキ、口唇被状文(8条)	口唇被状付ミガキ		2	1/6	1198	
第69区-35	SD01	広口壺張壺	15.9			赤彩、崩裂小明	赤彩、ミガキ		4	1/8	1139	施成崩穿孔
第69区-36	SD01	広口壺張壺	22.9			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	D	2	1/8	1140	施成崩穿孔
第69区-37	SD01	広口壺張壺	18.2			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	D	4	1/3	1138	施成崩穿孔、尖起
第69区-38	SD01	広口壺張壺	18.9			赤彩、ミガキ	ミガキ	B	4	3/4	1041	施成崩穿孔
第69区-39	SD01	壺A 1	11.2	4.2	10.8	筋指状文一垂状文(7条)	ミガキ	D	②	(1/10)	1039	
第69区-40	SD01	壺A 2	12.3	5.6	15.9	縫状文(10条)→被状文	ミガキ?	A	2	1/4	1045	
第69区-41	SD01	壺A 1	12	3.9	13	縫状文(8条)、被状文	ミガキ	DE	4	1/1	1046	口唇不透明
第69区-42	SD01	壺A 1	2			縫状文(9条)→崩壊状文	ミガキ	A	4	1/6	1057	
第69区-43	SD01	壺A 1	20.7			縫状文、崩壊能状文	不明	AD	②	1/4	1064	
第69区-44	SD01	壺A 1	16			縫状文一被状文(5条)?	ミガキ	A	②	1/4	1008	
第69区-45	SD01	壺A 1	10.8			縫状文一被状文(5条)	ミガキ	AD	②	1/1	1004	
第69区-46	SD01	壺A 2	34.8	12.5	51.8	壺失文(10条)→被状文	ナデD、ミガキ				1038	
第69区-47	SD01	壺A 2	17.6			被状文(8条)→崩壊状文	ミガキ	D	②	1/4	1058	
第69区-48	SD01	壺A 2	13.4			被状文次文、縫状文(5条)	ミガキ?	AD	②	1/1	1047	
第69区-49	SD01	壺A 2	19.6			被状文次文→被状文(5条)?	ミガキ	A	②	1/3	1009	
第70区-50	SD01	壺A 2	14.6	5.6	16.3	縫状文(4条)→被状文・ミガキ	ミガキ	D	④	3/4	1044	
第70区-51	SD01	壺A 4	21.8			崩壊状文(5条)	ハケメ	D	④	1/4	1200	
第70区-52	SD01	壺A 4	20.8			崩壊状文次文→被状文(5条)	ハケメ+ナデ、ミガキ	B	5/6	1035		
第70区-53	SD01	壺C				崩壊状文次文、崩壊状文	ミガキ	A	②		1115	
第70区-54	SD01	壺A	3.6			縫状文・波状文、ミガキ	ミガキ	B	2	(3/4)	1040	
第70区-55	SD01	壺A	5.6			ミガキ	ミガキ	D	4	1/1	1059	
第70区-56	SD01	壺A	5.6			ミガキ	ミガキ	A	④	(1/1)	1060	
第70区-57	SD01	壺B	3.6			崩壊状走直線文	ミガキ	CD	6	(1/1)	1003	
第70区-58	SD01	壺A	5			縫状文、波状文	ミガキ	DE	2	(1/1)	1002	
第70区-59	SD01	台付壺A 1	8.8	5.95	11.4	縫状文、波状文	ミガキ	DE	2	1/1	1001	
第70区-60	SD01	台付壺A 2	12.6			縫状文次文、ミガキ(5条)	ミガキ	DE	2	5/6	1007	
第70区-61	SD01	台付壺				ミガキ	ミガキ	AD	②	(1/1)	1091	附接合痕
第70区-62	SD01	台付壺?				ミガキ	ミガキ	A	②	(1/1)	1021	高杯か
第70区-63	SD01	縫合?				不明	不明	E	②	(1/2)	1050	
第70区-64	SD01	高杯				ミガキ	ミガキ、脚、ハケ	BC	②	(1/1)	1033	
第70区-65	SD01	台付壺	6.8			ミガキ	ミガキ	B	②	(1/2)	1092	
第70区-66	SD01	台付壺	7.1			ミガキ	ミガキ	B	②	(1/1)	1022	
第70区-67	SD01	台付壺	7.6			ハケメ+ミガキ	不明	A	③	(3/4)	1088	
第70区-68	SD01	台付壺	7.7			不明	不明	BD	②	(1/1)	1089	
第70区-69	SD01	台付壺	9.2			ミガキ	ミガキ	D	4	(1/1)	1020	
第70区-70	SD01	台付壺	6.4			不明	不明	E	②	(1/1)	1090	

がまん源流述跡弥生時代土器類彙表

國面番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	高さ cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理 番号	備考	
第70区-7-	SD01	台杯甌	6.85				ミガキ	側底ミガキ	E	(1/1)	1015			
第70区-72	SD01	台付甌?	9.8				ミガキ	ナテD	B	(2)	(1/1)	1087	高杯か?	
第70区-73	SD01	台付甌	7.6				ミガキ	側部部、ナテD	A	(2)	(1/1)	1093		
第70区-74	SD01	高杯A	18.7				赤彩	赤彩	D	2	1/8	1131		
第70区-75	SD01	高杯A?	18									1161		
第70区-76	SD01	高杯A	27.1				赤彩	赤彩		(2)	{1/1}	1049		
第70区-77	SD01	高杯A	21.5				ミガキ	赤彩、ミガキ	B	(2)	1/4	1124	突起	
第70区-78	SD01	高杯A	23.8				赤彩	不明(赤彩?)	B	1	1/6	1122		
第70区-79	SD01	高杯A	24				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/6	1123		
第70区-80	SD01	高杯A	22.3				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/6	1121	突起	
第70区-81	SD01	高杯B	16				赤彩	赤彩、ミガキ	B	(2)	1/8	1135	削形土器か	
第70区-82	SD01	高杯					赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		(2)	(1/1)	1024		
第70区-83	SD01	高杯					赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ		(2)	(1/1)	1013		
第70区-84	SD01	高杯					赤彩	赤彩		(2)	(1/1)	1028		
第70区-85	SD01	高杯					赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	(1/1)	1023		
第70区-86	SD01	高杯	10.9				赤彩	ミガキ	鰐小ア			1017		
第70区-87	SD01	高杯					赤彩	ナテD	B	2		1088	焼成後穿孔	
第70区-88	SD01	高杯					ミガキ?	不明	A	(2)	(1/4)	1032		
第70区-89	SD01	高杯					赤彩	ナテD	B	(2)	(1/1)	1014		
第71区-90	SD01	高杯	11.6				赤彩、ミガキ	鰐、不明	B	(2)	(1/1)	1011		
第71区-91	SD01	高杯	11.7				赤彩?ミガキ	鰐ミガキ、西ナテ	B	(2)	(1/1)	1016		
第71区-92	SD01	高杯	13.9				赤彩、ミガキ	鰐、ハケーナテ	B	(2)	(1/1)	1010		
第71区-93	SD01	高杯					赤彩	赤彩、鰐痕、鰐	A	(2)	(1/1)	1018		
第71区-94	SD01	高杯					赤彩	ミガキ	赤彩、ミガキ	B	(2)	(1/1)	1019	
第71区-95	SD01	高杯					赤彩	不明	2	(1/3)	1031			
第71区-96	SD01	高杯					赤彩、ミガキ	西ナテ	B	(2)	(1/1)	1012	接合部ナテD	
第71区-97	SD01	高杯					赤彩?	赤彩?	B	(2)	(1/1)	1021		
第71区-98	SD01	高杯					赤彩	ミガキ	赤彩、ミガキ	(2)	(1/1)	1026		
第71区-99	SD01	眞形器B	15.4	4.4	6.5		眞形不明、ミガキ?	ミガキ	B	2	1/8	1053		
第71区-100	SD01	体形器A	16.8	6.2	6.5		赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	(2)	1/4	1052	突起	
第71区-101	SD01	体形器A	20	5.6	8.5		赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	2	1/1	1042		
第71区-102	SD01	体形器C					ミガキ	ミガキ	A	6	(1/6)	1177		
第71区-103	SD01	体形器上C					赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	B	5	1/4	1095	石英多い、105に胎土類似	
第71区-104	SD01	広口壺?					赤彩、ミガキ、圓状文	ミガキ	A	2	(1/4)	1133		
第71区-105	SD01	底部	7.2				ミガキ	ミガキ	AD	④	(3/4)	1199	底部穿孔(焼成前)	
第71区-106	SD01	底	5				ナテ	ハケメ	BD	4	(1/1)	1134		
第71区-107	SD01	ミニユア壺					T字文・圓状文・横筋、付赤土		AD	2	1/4	1094	ナテ	
第71区-108	SD01	小型土器D					ケズリ→ナテ	ナテD、ナテ	AD	②	1/2	1137		
第71区-109	SD01	蓋形土器					不明	不明	E	(2)	(1/2)	1027		
第71区-110	SD01	高杯	10.4				ハケーナテ	ナテ	A	2	(1/4)	1034		
第71区-111	SD01	高杯?	14				ナテ	ハケメ	B			1196		
第71区-112	SD01	高杯?	10.8				ナテ	ハケメ→ナテ	A	(2)	1/4	1132	?	
第71区-113	SD01	高杯	8.75				赤彩	赤彩、ミガキ	5	(1/2)	1025	石英多い		
第71区-114	SD01	壺A					赤彩	赤彩、ミガキ	A	4		1153	希接(8又は9条)	
第71区-115	SD01	壺A					T字文、ボタル状貼付	ナテ	A	4				
第71区-116	SD01	壺A					T字文、ボタル状貼付	ハケB	B	4		1151		
第71区-117	SD01	壺A					T字文、ガタク貼付(削切)、唇丸	ナテD	A	④		1157	赤彩	
第71区-118	SD01	壺B					圓狀文?・袋足付、縫隙附走巻筋文	ミガキ	B	2		1159		
第71区-119	SD01	壺B					袋足付・縫隙附走巻筋文、徒立紋	ミガキ	A	2		1186		
第71区-120	SD01	壺B					柄接附走巻筋文	ミガキ	B	④		1192		
第71区-121	SD01	壺B					柄接附走巻筋文	ナテD、ミガキ	BD	2				
第71区-122	SD01	壺B					柄接附走巻筋文	ミガキ	AE	4		1191		
第71区-123	SD01	壺A 3					柄接附走巻筋文	ナテ	A	②	1/7	1202		
第71区-124	SD01	壺A 4					柄接附走巻筋文	ミガキ	D	④	1/8	1203		
第71区-125	SD01	壺B					柄接附走巻筋文	ミガキ	C	④	1/15	1201		
第71区-126	SD01	壺B					柄接附走巻筋文	ミガキ	B	④		1195	歯生中期?	
第71区-127	SD01	壺					口縁付・直線文	ミガキ	D			1190	歯生中期	
第71区-128	SD01	壺					口縁付・R程文		A	4		1182	歯生中期	
第71区-129	SD01	壺					ナテ、口縁付工具による剥落	ナテ	B	2		1184	歯生中期?	
第71区-130	SD01	壺					透弧文、磨擦縁文(RL)	不明	D	4		1184	歯生中期	
第72区-1	SD01	壺A 3	24.1				赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ	2	1/8		1176		
第72区-2	SD01	底	5				赤彩、ミガキ	ハケメ	BD	2	(1/1)	1112		
第72区-3	SD01	壺Z					ミガキ、撫持文	ナテ	A	2	(1/4)	1178		
第72区-4	SD01	底	8.4				八明	ナテD→ナテ	A	4	(1/2)	1114		
第72区-5	SD01	和瓦飾土器	4				ミガキ	ミガキ	A	②	(1/1)	1111		
第72区-6	SD01	底	5.4				ナテ	ナテ	D	4	(1/1)	1110	焼成前底部穿孔	
第72区-7	SD01	台付甌					ミガキ	ミガキ	B	2	(1/1)	1107		

がまん洞遺跡弥生時代土器類表

図版番号	遺物名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第72-8	SQ01	高杯A	25			赤彩、ミガキ?	赤彩、ミガキ	A ②	1/4	1126		
第72-9	SQ01	高杯A	24.6			赤彩	赤彩	B ④	1/4	1127	口縁部突起	
第72-10	SQ01	高杯		5.7		赤彩、ミガキ	異、ナデ	B 2	(1/1)	1108		
第72-11	SQ01	高杯		8.5		赤彩、ミガキ	ナデD	A 4	(1/3)	1113		
第72-12	SQ01	高杯				赤彩	不明	B 4	(1/1)	1109		
第72-13	SQ01	高杯				赤彩、ミガキ	ナデ	B 2	1/1	1130	Z	
第72-14	SQ01	甕E 2	20			口縁ナデ、頭ハケメ	ハケメ	C 4	1/10	1144		
第72-15	SQ01	甕I ?	12.2			ナゲD	ナゲD	B 4	1/5	1141	高杯肩か?	
第72-16	SQ01	甕A ?				ハケメ→拂描被状文(4条)	ミガキ	A 6	1/10	1143		
第72-17	SQ01	甕A				ナゲ	ナゲ	D 4		1150	SD02	
第72-18	SQ01	甕A				丁字文、裏模文、ボタン状點付	ナデD	A 4		1156	SD02	
第72-19	SQ01	甕A				丁字文、ボタン状點付、裏模文	ナデD	A D ②		1155		
第72-20	SQ01	甕A				丁字文、ボタン状點付、裏模	小明	B ②		1152	拂描(7条)	
第72-21	SQ01	甕A 4				拂描被状文	不明	A 2	1/10	1205	石炎多い	
第72-22	SQ01	甕A 4				拂描被状文	ミガキ	B 2	1/10	1204		
第72-23	SQ01	甕B				拂描被斜直線文→重文	ナデD、ミガキ	B ②		1188		
第72-24	SQ01	甕B				拂描被斜直線文	ミガキ	D 6		1187		
第72-25	SQ01	甕B				拂描被斜直線文	不明	A D 2		1185		
第75-1	SX01	甕I	18.5			赤彩、ミガキ、拂描被斜直線文	口縁赤彩、脇部小溝	B C 2	1/2	1083	鉄分粒多い	
第75-2	SX01	甕A				赤彩、ミガキ	不明			1085		
第75-3	SX01	甕I	7.5			ミガキ	ハケメ	A D 2	(1/2)	1084	壺か?	
第75-4	SX01	高杯	14			赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ			1128		
第75-5	SX01	高杯	12.4			赤彩、ミガキ	ハケメ	C 2	(3/4)	1092		
第75-6	SX01	高杯				ミガキ	ナデ	B 4	(1/1)	1081	円孔(3単位)	
第75-7	SX01	高杯				赤彩、ミガキ	脚不明	B 2	(1/1)	1080	石炎多い	

沢田鍾土遺跡古墳時代土師器類表

図版番号	遺物名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第106-1	不明	甕A				ミガキ、赤彩、拂描被斜直線文、裏模文	ナデ	A 4		1267		
第106-2	SX26	甕C				ナデ	不明	B 2	1/4	1126		
第106-3	不明	甕D	23.2			ハケメ→ナデ	ナデ	A 1	1/8	1243		
第106-4	SX45	G	19.4					C 2	(1/1)	1165	1164と同一個体?	
第106-5	SX12	甕J	16.3			ハケメ→ナデ	ナデD	A D 4	1/4	1193	1045と同一個体?	
第106-6	SX12	甕J	15.4			ナデ	ハケメ	B 4	1/4	1045		
第106-7	SX12	甕K	12.5			ナデ(タテ)、口縁ハケメ→ナデ	ハケメ、口縁ナデ	A D 1	1/3	1189		
第106-8	SX24A	甕B3	17.7			ミガキ	ミガキ	A 6	1/6	1098	NO.1110と同一個体	
第106-9	SX36	甕				ミガキ	不明、複合模	B 2	(1/4)	1156		
第106-10	SX12	甕Z				赤彩ミガキ	ナデ又はミガキ			1040		
第106-11	SX12	甕Z	12			ミガキ、赤彩	ミガキ、赤彩	C 2	1/6	1032		
第106-12	SX12	甕Z				ナデ	不明、輪模痕	A D 4	(1/3)	1001		
第106-13	S D12	甕				ナデ	ナデ	D E 2	1/4	1102		
第106-14	小型土器A	11.4	2	9.8		ナデ	不明、複合模	B 2	(1/4)	1091		
第106-15	SX29	小型土器A	9.4			一筋ハケメ→ケズリ、口縁ナデ	不明、拂合模	B 2	1/3	1145		
第106-16	SX29	小型土器A	4.7			不明	ハケメ→ナデ	B 2	1/1	1127		
第106-17	SX29	小型土器C	0.8			ハケメ→ナデ	不明	A	(1/3)	1240		
第106-18	SX06	小發土器	10.8			不明	不明	A 2	1/4	1009		
第106-19	SX13	底付圓筒型	5.8			赤彩	不明	C D 4		1075		
第106-20	SX12	底付圓筒型	5.4			ミガキ→赤彩	ミガキ	C 2		1031		
第106-21	SX05	甕A 2	17.6			拂描被状文、裏模文? 口唇部削除	ナデorミガキ	A 1	1/4	1219	SAWYER A.1.633、輪模痕	
第106-22	不明	甕A				拂描被状文(7本)	ナデ又はミガキ	B 2	(1/5)	1241	厚さ5.5mm~7.5mm	
第106-23	SX12	甕A				拂描被状文	不明	D 4		1072		
第106-24	SX12	甕A				拂描被状文	ミガキ	B 2	(1/3)	1261		
第106-25	SX05	甕A				拂描被状文	ミガキ?	D E 2		1015	二火焼成	
第106-26	SX12	甕A 2	14.8			ミガキ	AD 4			1205		
第106-27	SX12	甕A 2	14.5			拂描被状文	ミガキ	A E 4	1/4	1191		
第106-28	SX12	甕A 2	13.3			拂描被状文、裏模文(5箇)	ナ?	AD 4	1/8	1199	厚さ7.0~8.5mm	
第106-29	SX06	甕A 4	15.2			ナデ→拂描文	ナデ	B 2	1/8	1022		
第106-30	SX16	甕A?				ナデ?	ナデ	B 4		1082		
第106-31	SX13	甕B	21			拂描被斜直線文→口唇部収容	ミガキ	A 2	1/8	1073		
第106-32	SX05	甕B				ナデ→拂描被斜直線文	ハケメ→ミガキ	C D 2	(1/3)	1218		
第106-33	SX12	甕B	24.3			拂描宣模文	ミガキ	C 4	1/8	1202		
第106-34	SX12	甕D 1	16.1			採凹模文	ナデ	D 2	1/30	1046		

沢田鉄土遺跡古墳時代土器類観察表

器番番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外面調整	古面調整	色調	胎土	残存率	整理 番号	備考
第107周-34	SX12	甕D1	14			不明	不明	B	2	1/1	1172	
第107周-35	SX12	甕D1	24.5			掘区線文?	ナデ	A	2	1/8	1252	
第107周-36	SX12	甕D1	16.9			掘区線文	ナデ	D	2	1/10	1059	
第107周-37	SX45	甕D1	14.9			掘区線文	不明	B	6	1/8	1152	胎土、銀分粒有り
第107周-38	SX05	甕D2	15			ナデ	ナガ	AD	4	1/8	1216	
第107周-39	SX12	甕E2	16.5			ハケメ	不明	A	2	1/2	1039	
第107周-40	SX29	甕E	14.2	1.6		二段跳上半不明、一部ナデ	不明	B	1	1/3	1147	
第107周-41	SX04	甕E1	16.1			ハケメ→ナデ	ナデ	A	1	1/2	1008	
第107周-42	SX12	甕E1	17			ハケメ	不明	B	2	3/4	1034	
第107周-43	SX05	甕E1? 7	20			不判	不明	B	5	1/2	1217	時間不明、平安か?
第107周-44	SX49	甕E1	18			ハケメ、口縁ナデ	口縁ナ・基ハケメナデ	A	2	1/2	1150	外面黒色付着物
第107周-45	SX01	甕E2	18			ハケメ→ミガキ	ナデ	D	1	3/4	1004	
第107周-46	SX24	甕E2	20.4			ハケメ	ナデ	AD	2	1/4	1104	
第107周-47	SX24F	甕E2	17.7			口縁ナ・胴浅ハケメ		D	2	1/5	1112	
第106周-48	VTC21	甕E3	19.8			ハケメ、二段階ハケメナデ	コロハリノ・ナデ、断ナデ	AD	4	1/4	1228	
第106周-49	SX12	甕E3	16.8			口縁ナ・基ハケメ	基ハケメ	DE	4	1/3	1178	
第106周-50	SX29B	甕E3	24.6			口縁ハケメ→ナデ、跡ハケメ	口縁ハリ・ミガキ	D	2	1/3	1129	
第106周-51	SX12	甕E3	19.5			ナデ	ハケメ→ナデ	A	2	1/2	1234	
第106周-52	VIB25	甕E2?	16.2			ナデ	ハバノ・口縁ナデ	A	2	1/6	1233	
第106周-53	SX47	甕E4	14.7			口縁ナデ、頭ハケメ	不明	D	4	(1/8)	1166	
第106周-54	SX12	甕E5	12.9			ハケメ	口縁ナ・頭ハケメ	D	4	1/2	1266	
第106周-55	SX12	甕E	15.4			ハケメ→ナデ	ハケメ→ア	B	2	1/4	1176	厚さ4.0~4.5mm
第106周-56	SX12	甕E?	18.2			不明	不明	AB	4	1/4	1190	薄い
第106周-57	SX24	甕E2	11.5			口縁ハケメ、頭ナデ	ナデ	BD	2	2/4	1105	
第106周-58	SX24	甕E2?				ハケメ	ハケメ→ナデ	B	2	2/3	1231	
第106周-59	SX24	甕E3	14.7			ケズリ→ナデ	コロナ・頭ナデ	AD	4	1/4	1108	
第106周-60	SX09	甕E?	18.6			ナデ	不明	E	2	1/8	1024	時期不明
第106周-61	SX09	甕E?	16.1			ナデ	不明	BC	1	1/8	1023	
第106周-62	SX12	甕E?	13.9			ナデ、指痕正直	ナデ	A	2	1/5	1204	
第106周-63	SX23	甕E?	17.9			口縁ナデ	不明	B	1	1/6	1132	
第106周-64	SX24	甕F?	19.3			ハケメナ・ナデ(テナ)	ハナ・ナデ(テナ)	A	2	1/6	1230	
第106周-65	SX24E	甕F	20			ハケメ、口縁ハケメ・ナデ	口縁ハリ・ナデ、断ナデ	A	2	3/4	1159	
第106周-66	SX30	甕F	15			ハケメ、口縁ナデ	ナデ	AD	2	3/4	1153	厚さ3~4mm
第106周-67	SX09	甕G a				ケズリ・網上部ナデ	ナデ	AD	2		1026	氯化物付着
第106周-68	SX05	甕G a	17			口縁ナ・ケズリ	不明	B	2		1013	
第106周-69	SX23	甕G b	16.4			ナデ(ハリ・浅いハケメ)	ナデ	A	2	1/3	1090	
第106周-70	SX34	甕G2	14.6			口縁ナ・頭部ナデ	ナ・頭部おさと直	B	2	1/6	1236	
第106周-71	SX12	甕G2	17.6			口縁ナ・頭ナデ	口縁ナ・ナデ	A	2	1/4	1184	
第106周-72	SX12	甕G?	22			ナデ	ナデ	A	2	1/4	1042	
第106周-73	SX12	甕G2	18			ナデ	口縁ナ・頭部ナデ(ミガキ)	A	2	1/4	1065	
第106周-74	SX20	甕G2	17.8			ナデ	口縁ナ・頭・ケズリ・ナデ	A	2	1/8	1089	
第106周-75	SX12	甕H1	15.4			ハケメB	不明	B	2	1/1	1035	
第106周-76	SX12	甕H2	15.9			タタキ	ナデ	A	1	1/8	1177	
第106周-77	SX12	甕H				タタキ	ナデ	A	4	(1/10)	1263	
第106周-78	SX12H1	甕H1	16.2	3	18.5	ハケメB	ナ・口縁ハケメ	BB	1	1/1	1097	
第106周-79	SX12	甕H				タタキ	ナデ	D	4		1285	
第106周-80	SX12	甕H2	18.2			ハケメB、口縁ナ	ハケメノ・口縁ナ	AD	5	1/4	1043	
第106周-81	SX12	甕J 1	16.3			ハケメ(口唇ナデ)	口唇ナ・ミガキ	BD	4	1/2	1063	
第106周-82	SX12	甕J 1	15.5			ハケメ→ツア	不明	A	2	1/6	1080	
第106周-83	SX12	甕J 2	17.3			ハケメ→ナデ	ナデ	A	2	1/6	1200	
第106周-84	SX30	甕J				ハケメ	不明	AD	2	(1/6)	1152	
第106周-85	SX12	甕J 2	16			口縁ナ・頭ハケメ(又はナデ)	ナデ又はミガキ	A	2	1/3	1170	
第106周-86	SX12	甕J 2	12.6	4.8	15.5	ハケメ、口縁ナ	ハケメB	DE	2	1/1	1038	甕J 1か?
第106周-87	SX12	甕J 2				ハケメ・ナデ	削下部ナ・直	AR	2	1/2	1171	
第106周-88	SX05	甕J 2	20.4			浅いハケメ、口縁ナ	ハケメ→ナデ	A	4	1/5	1214	
第106周-89	SX12	甕J 2	16.1			ハケメ(口縁ナデ)	ハケメ→ナデ	B	5	1/3	1044	
第106周-90	SX05	甕J 2	14.4			ハケメ、コロボウ・ヘビナ	ミガキ	DE	2	1/3	1012	二次焼成
第106周-91	SX12	甕J 2	16			口縁ナ・頭ハケメ	ミガキ	A	2	(1/4)	1264	
第106周-92	SX12	甕J 2	12.9			口縁ナ・頭ハケメ	ナデ	B	2	1/6	1201	
第106周-93	SX12	甕J 2	15.2			口縁ナ・頭ハケメ	ナデ	A	4	1/6	1061	
第106周-94	SX23	甕K	18.5	4		口縁ナ・B	ナデ	D	2	1/6	1098	
第106周-95	SX12	甕K	14.7			ナデ	ミガキ	AE	4	3/4	1168	
第106周-96	SX12	甕K	15.2			口縁ナ・頭部ケズリ	ナデ又はミガキ	DE	4	1/3	1062	
第106周-97	SX12	甕K	14.8			口縁ナ・頭ケズリ→ナデ	ナデ	DE	2	(1/4)	1169	
第106周-98	SX45	甕K	20			ナ・D	ナ・D	B	6	(1/9)	1163	

沢田出土遺跡古墳時代土器部類表

図版番号	遺構名	部類分類	口径 cm	底径 cm	器高 cm	外因調整	内面調整	色調	胎土	残存率	整理番号	備考
第110回-99	SX23	甕L	16.9	6.2		ハケ、口縁ナデ	ハケメ→ナデ	C E	2	1/6	1092	
第110回-100	SX12	甕L	18			ハケメ	口縁ナデ、割不明	A B	2	3/4	1066	
第110回-101	SX12	甕L	17.6			不明	口縁ナデ、口唇部細沈線	A	2	1/6	1174	
第110回-102	SX09	甕M	18			口縁ナデ、口唇部細沈線	口縁ナデ	A	4	1/6	1029	
第110回-103	SX05	甕?	14.3			ナデ、口縁沈線	不明	C	2	1/6	1215	
第110回-104		合付甕	8.6			ハケメ	ハケメ→ナデ	B	2	(1/1)	1260	
第110回-105	SX15	合付甕				ハケメ	不明	E	1		1081	S字口縁變の脚か?
第110回-106	SX12	合付甕				ミガキ	不明	B	2	(1/3)	1065	
第110回-107	SX13	合付甕	7.3			不明	不明	D E	1		1069	
第110回-108	SX12	合付甕	7.6			ハケメ	ハケメ	A E	4		1052	
第110回-109	SX25	合付甕				ハケメ	不明	C	2	(1/1)	1123	S字口縁變?
第110回-110	SX12	合付甕				ミガキ	不明	A	4		1033	
第110回-111		合付甕	11			ミガキ	ミガキ	D E	1	(1/2)	1256	
第110回-112	SX01	底部	6.8			ミガキ	ナデ又はミガキ	A D	4		1078	
第110回-113	SX05	底部	7.2			ミガキ	ミガキ	A D	2		1019	内面に黑色付着物
第110回-114	SX12	底部	7.2			ハケメ、黒色付着物	ナデ	A D	2	(1/2)	1175	
第110回-115	SX24J	底部	5.7			ケズリ→ミガキ	ミガキ	A	4		1120	
第110回-116	SX20	底部	5.7			ハケメ、調下半ケズリ	ナデ	D E	2		1157	
第110回-117	SX12	底部	5.2			ハケメ	ミガキ	A E	4	(1/1)	1056	
第110回-118	SX24G	底部	4			ハケメ	不明	A	1		1117	外、炭化物付着
第110回-119	VWC01	底部	6.2			ハケメ、指圧痕	不明、黒色付着物	A	2	(1/1)	1194	甕
第110回-120	SX12	底部	5.9			ハケメ	不明	B D	2		1037	
第110回-121	SX24F	底部	5.2			ハケメ(底面ハケメ)	ナデ	B	2		1111	
第110回-122	SX12	底部	3			ミガキ	ハケメ→ミガキ	C	4	(1/1)	1047	
第110回-123	SX29	底部	2.5			不明	不明	A D	①	1/1	1135	
第110回-124	SX24	底部				ケズリ→ナデ	ナデ	A	4		1101	
第110回-125	SX12	底部	5.8			ケズリ	ナデ	D E	4	(1/1)	1208	
第110回-126		底部	5.3			ケズリ→ナデ	ナデ	A D	4	(1/3)	1239	
第110回-127	SX12	底部	6			ケズリ	ナデ	D E	4	(3/4)	1203	
第110回-128	SX15	底部	6.3			不明	不明	A	2		1080	
第110回-129	SX12	底部	4.1			ナデ	ナデ	A D	2		1221	
第110回-130	SX01	底部	6			(ハケメ)→ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	D	2		1006	
第110回-131	SX29	底部	5			ハケメ又はタタキ	ハケメ→ナデ	B	2	1/1	1138	甕
第110回-132	SX35	底部	7.2			不明	不明	B	6	(1/1)	1159	
第110回-133	SX19	底部	6			ハケメ	ナデ?	C	2		1087	
第110回-134	SX12	底部	5			ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ	A	2	(1/2)	1196	甕
第110回-135	SX24D	底部	18.2			ナデ	不明	C D	1		1099	甕
第110回-136	SX12	底部	7.3			不明	不明	B	2	(1/2)	1211	
第110回-137		底部	7.1			ナデ	ナデ	C	1	(1/1)	1247	
第110回-138	SX13	底部	3.6			ナデ	ナデ	C D	1		1070	
第110回-139	SX09	底部	6.6					D	4		1028	
第110回-140	SX12	底部	5			ミガキ	不明	B	2		1064	
第110回-141	SX12	底部	4.5			ハケメ→ケズリ	ハケメ→ナデ	E D	1	(1/1)	1181	
第110回-142	SX24E	底部	6			ハケメ→粗いミガキ	ハケメ→ナデ	A	6		1110	NJ.10回と肩輪付? 甕
第110回-143	SX12	高杯B	17.4					C	4	(3/4)	1030	
第110回-144	SX35	高杯C	14.4			ミガキ	ミガキ	B	2	(1/8)	1259	
第110回-145	不明	高杯C	24			ミガキ	ミガキ	D	6	(1/2)	1258	胎土、褐色の斑点がみられる
第110回-146	SX30	高杯C	22.6			ミガキ	ミガキ	A B	2	1/4	1124	
第110回-147	不明	高杯C				被削削付→ハケメ→ミガキ→ナデ	不明	A	1	(1/1)	1250	
第110回-148	SX30	高杯C				不明	B	6	(1/4)	1150	並ねに褐色の斑点がみられる	
第110回-149	不明	高杯D	14			ミガキ、赤彩?	ミガキ、赤彩	C	4	3/4	1254	
第110回-150	SX29	高杯				赤彩、調整不明	不明	D	2		1130	
第110回-151	SX12	高杯				赤彩	不明	2		(1/1)	1058	
第110回-152	SX12	高杯	18			ミガキ、赤彩	ナデ	4	(1/4)	1054	円孔が不明瞭	
第110回-153	SX23	高杯A?				赤彩、ミガキ	ナデ	C	4		1095	
第110回-154	SX05	高杯?	10			ミガキ	ハケメ→ナデ	B	2		1018	
第110回-155	SX12	特殊土器B	12.5	5	5.4	不明	不明	B	4	1/1	1067	
第110回-156	不明	内側口縁杯				不明	ミガキ	D E	2	(1/1)	1255	

牛出古窯跡調査古墳時代土器類叢表

叢番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	高さ cm	外面調査	内部調査	色調	出土 地	現存率	整理 番号	備考
第250回-1	SB03	壺H	17.4	—	—	ケズリ?→ミガキ	ナデD	B	2	1/1	1036	
第250回-2	SB03	壺A	—	—	—	赤彩、ミガキ、朱塗直線文	赤彩、ミガキ	B	4	1/1	1126	
第250回-3	SB03	壺B2?	—	6.6	—	ハケメ	ナデ?	AD	2	(1/1)	1145	1049と同一個体か
第250回-4	SB03	壺J 2?	16.9	5.4	21.3	ハケメ、肩下部ナデ	ナデ	D	27	1/2	1037	
第250回-5	SB03	壺J 2?	11.2	—	—	ハケメ、口縁ナデ	ハケメ、口縁、肩ナデ	D	4	1/6	1032	
第250回-6	SB03	小泡土器D	8	—	—	口縁ナデ、肩ケズリ	ナデ?	A	②	1/4	1125	
第250回-7	SB03	小泡土器C	6	—	—	赤彩、ミガキ	CH.赤、ミガキ、調ナデ	B	4イ	1/4	1123	
第250回-8	SB03	底部	—	5.6	—	ケズリ?→ナデ	ナデ	D	②	(C/6)	1038	厚さ4.5~5.0mm
第250回-9	SB03	容器B	9.6	11.2	9.6	ミガキ	赤ミガキ、柄不明	B	2	1/1	1033	3穴
第250回-10	SB03	底杯E	17	—	11.5	ミガキ、口縁ナデ	ミガキ	B	2イ	1/6	1129	輪郭は模倣しているので底
第250回-11	SB03	底杯E	18.5	11.3	—	ミガキ、口縁ナデ	ミガキ、口縁ナデ	A	2	1/6	1132	
第250回-12	SB03	底杯B?	—	—	—	ミガキ?	ミガキ?	B	④	(1/1)	1127	
第250回-13	SB03	高杯	—	13.3	—	ハケメ?→ミガキ	ハケメ?→ナデ	A	4	(1/6)	1128	
第250回-14	SB03	高杯	—	12.8	—	ハケメ?→ミガキ	ナデ?	A	②	(1/3)	1034	
第250回-15	SB03	高杯	—	8.2	—	赤彩、ミガキ	ナデ?	D	④	(1/1)	1031	穴
第250回-15	SB03	高杯	—	6	—	ハケメ?	ハケメ?→ナデ	C	6	1/2	1124	
第250回-16	SB04	壺M	—	—	—	ナデ?、口唇相沿縫	ナデ?	B	4	1/4	1067	
第250回-17	SB04	小形土器3	—	—	—	ナデ?	ナデ?、ナデD	D	4?	1/6	1130	
第250回-18	SD04	小形土器C	7.6	—	—	ナデツク?	ナデ?、ナデD	AD	4	1/2	1068	手づくね?
第250回-19	SB04	壺J 2?	16.9	5.8	21.5	ハケメ	口縁ナデ?、肩ナデ?	D	27	1/1	1063	厚さ4.0~5.5mm、蓋?
第250回-20	SB04	壺J 2?	16.6	—	—	口縁ナデ、頭部ハケメ	ハケメ	D	4?	1/2	1066	
第250回-21	SB04	壺J 1?	19.1	—	—	ナデ?	ナデ?	AD	4?	1/2	1071	
第250回-22	SB04	壺J 1?	13	4.5	17.1	口縁ナデ、肩ハケメ?→ナデ?	口縁ナデ、横ナデ?	D	27	1/1	1065	厚さ5.5~7.0mm
第250回-23	SB04	壺J 1?	14.2	5.1	14.2	口縁ナデ、肩?→ミガキ?→ナデ?	肩?→ナデ?	AD	27	1/2	1064	厚さ3.5~6.5mm
第250回-24	SB04	高杯2	—	—	—	ナデ?	ナデ?、ナデD	B	4イ	(1/1)	1070	4穴
第250回-25	SB04	高杯3	—	—	—	赤彩、ミガキ?	ナデ?	D	4?	1/3	1059	3穴
第250回-26	SB04	高杯3	—	12.7	—	ミガキ	ナデ?	D	4?	—	—	
第250回-27	SB04	壺B3?	—	—	—	ナデ?(又はミガキ?)	ナデ?(又はミガキ?)	D	②?	9/4	1011	NO.1021と同一個体か?
第250回-28	SB05	壺B2?	—	—	—	口縁ハケメ?ナデ?→ナデ?	肩ナデ?、口縁ハケメ?ナデ?	AD	①?	3/4	1008	NO.1022と同一個体か?
第250回-29	SB05	底部	—	—	—	ナデ?	ナデ?	D	27	(1/1)	1021	厚さ4.5~5mm、NO.33と同一個体?
第250回-30	SB05	底部	—	—	—	ケズリ?→ミガキ又はナデ?ナデ?	ナデ?	AD	27	(1/1)	1022	厚さ4.5~5mm、NO.33と同一個体?
第250回-31	SB05	底部	—	—	—	ナデ?	ナデ?	AD	27	(3/4)	1019	厚さ5.0~5.5mm
第250回-32	SB05	底部	—	6.2	—	ケズリ?ナデ?	ナデ?	AD	27	1/2	1010	
第250回-33	SB05	底部	—	6	—	ミガキ、肩上、赤形	口縁、ナデ?	B	3イ	3/4	1028	厚さ6.0~7.0mm
第250回-34	SB05	壺B3	20.3	7.6	35	ミガキ、口縁ナデ?	口縁、ナデ?	NA	②?	1/2	1010	
第250回-35	SB05	壺B3	15.8	—	—	不明	ナデ?	NA	—	—	—	
第250回-36	SB05	壺B3	16.4	—	—	ハケメ	ナデ?	A	4イ	1/4	1012	
第250回-37	SB05	壺B3	16	8.2	—	ハケメ	ナデ?、ナデハケメ?	B	4イ	3/4	1008	厚さ5.5~6.5mm
第250回-38	SB05	壺B3	12.4	5.0	20.5	ケズリ?ミガキ、黒色付着物	ナデ?、口縁ナデ?	A	4イ	1/1	1006	厚さ5.5~8.5mm
第250回-39	SB05	壺H	11.2	7	17.3	ケズリ?ミガキ、黑色付着物	ナデ?、口縁ナデ?	BD	4イ	1/1	1004	
第250回-40	SB05	壺K?	—	—	—	ナデ?	ナデ?、ナデ?	A	27	(1/1)	1024	厚さ4.0~5.0mm
第250回-41	SB05	壺K?	—	—	—	ナデ?	ナデ?、ナデ?	D	4?	1/2	1015	厚さ4.5~5.0mm
第250回-42	SB05	壺A3?	—	—	—	赤彩文?斜文?、二層状次文?	ミガキ?	D	4?	1/2	1016	
第250回-43	SB05	壺A3?	—	—	—	赤彩文?斜文?、二層状次文?	ミガキ?	D	4?	1/2	1017	
第250回-44	SB05	壺A3?	—	—	—	赤彩文?斜文?、二層状次文?	ミガキ?	D	4?	1/2	1018	
第250回-45	SB05	壺I?	—	—	—	ナデ?	ナデ?	AD	4?	1/1	1027	
第250回-46	SB05	壺J?	22.3	—	—	口縁ナデ?、肩ハケメ?	口縁ナデ?、肩ハケメ?	D	27	3/4	1026	
第250回-47	SB05	壺J?	5.8	—	—	ナデ?	ナデ?	BE	27	(1/2)	1023	厚さ4.0~4.5mm
第250回-48	SB05	壺J?	5.6	—	—	ハケメ	ナデ?	AD	27	(1/1)	1020	復元時表面剥落
第250回-49	SB05	底部	—	—	—	ナデ?	—	D	27	(1/2)	1026	石突多い
第250回-50	SB05	底部	—	6.6	—	ハケメ?、ナデ?(又はミガキ?)	ナデ?	AD	27	(1/1)	1014	赤彩文?斜文?、二層状次文?
第250回-51	SB05	壺I?	18.8	5.95	20.9	ナデD、底部ナデD	ナデ?又はミガキ?	AD	4?	(1/1)	1016	赤彩文?斜文?、二層状次文?
第250回-52	SB05	壺I?	15	—	—	ナデ?	ナデ?	DE	27	1/1	1027	
第250回-53	SB05	壺J?	22.3	—	—	口縁ナデ?、肩ハケメ?	口縁ナデ?、肩ハケメ?	NA	27	3/4	1028	
第250回-54	SB05	壺J?	5.8	—	—	ナデ?	ナデ?	BE	27	(1/2)	1023	厚さ4.0~4.5mm
第250回-55	SB05	壺J?	5.6	—	—	ハケメ	ナデ?	AD	27	(1/1)	1020	復元時表面剥落
第250回-56	SB05	底部	—	6.6	—	ハケメ?、ナデ?(又はミガキ?)	ナデ?	D	27	(1/2)	1026	石突多い
第250回-57	SB05	底部	—	18.4	—	赤彩、ミガキ?	ミガキ?	—	—	—	—	
第250回-58	SB05	底部B2?	21.2	—	—	ミガキ?	ミガキ?	AD	2?	1/1	1003	
第250回-59	SB05	器皿C	9.6	—	—	ハケメ?→ミガキ	杯ミガキ?、脚ナデ?	AB	②?	1/1	1069	3穴
第250回-60	SB05	台付捷脚	8.4	—	—	ミガキ?	ミガキ?	DR	27	(1/2)	1005	
第250回-61	SB05	高杯4	8	—	—	ミガキ?	ミガキ?	B	2?	(3/4)	1111	
第250回-62	SB05	小形土器B	5	—	—	赤彩、ミガキ?、黑色付着物	ナデ?、ナデD?	BE	4?	(1/1)	1018	
第250回-63	SB05	有孔鉢?	6.6	6.6	—	ミガキ?	ミガキ?	A	2?	5/6	1017	朱成前南孔
第250回-64	SB05	飾附土器	13.8	4.4	6.2	ケズリ?、ミガキ?	ミガキ?	B	2?	(3/4)	1030	春秋か?
第250回-65	SB05	飾附土器	16.4	3.6	6	ナデ?	ナデ?、接頭底?	AD	4?	3/4	1002	厚さ4.0~5.0mm
第250回-66	SB05	壺B2?	5.2	—	—	ナデ?	ナデ?、接頭底?	D	4?	(1/4)	1111	厚さ4.5~5.0mm
第250回-67	SB05	壺B2?	21	—	—	ハケメ?→ミガキ?	ハケメ?→ミガキ?	A	②?	1/1	1049	1146と同一個体か
第250回-68	SB05	底部(金物)	5.2	—	—	ナデ?、ミガキ?	ナデ?、ナデD?	AD	27	(3/4)	1046	厚さ4.5~5.0mm
第250回-69	SB05	小形土器C	7.9	3	8.8	口縁ナデ?、肩下ケズリ?	二層子?、肩ナデ??	A	2?	1/1	1041	
第250回-70	SB05	壺G6	—	—	—	ナデ?	ナデ?(ケズリ?ナデ?)	AE	4?	(1/2)	1050	厚さ4.5~6.5mm合併に高い
第250回-71	SB05	壺A	7	—	—	試収文?→ミガキ?	ナデ?、ミガキ?	AE	4?	(1/3)	1042	外側黒色付着物
第250回-72	SB05	台付捷脚A1	11	7.4	12.6	ナデ?、肩ナデ?	ナデ?、肩ナデ?	AD	27	1/1	1048	
第250回-73	SB05	台付捷脚	11.4	—	—	ナデ?ツク?、脚ナデ?	脚ナデ?、脚ナデ?	AD	27	(1/3)	1047	

牛出古墳跡古墳時代土器類發表

区原番号	遺構名	器種分類	口径 cm	底径 cm	高さ cm	外観摘要	内面調整	色調	胎土	残存率	整備 参考番号	備考	
第280回-11	SB06	高杯B1	22.2	14.6	14.4	ミガキ、薄ハケメ→ミガキ	秋ミガキ、薄ハケメ CD ④イ	3/4	1045	3穴、厚さ4.5~5.5mm・複数器			
第280回-12	SB06	高杯2	—	16.6	—	赤彩、ミガキ	ナデ A 47	1/3	1051	5.0~6.5mm(胸)、3穴			
第280回-13	SB06	高杯B1	21.2	—	—	赤彩、ミガキ?	赤彩、ミガキ? 47	1/4	1082	厚さ3.5~4.5mm			
第280回-14	SB06	高杯4	—	13.6	—	不明(ナゲorミガキ)	ナデ B 2	1/4	1038	4穴? 又は3穴			
第280回-15	SB06	高杯F	—	—	—	ミガキ	ナデ A 44	(1/1)	1043				
第280回-16	SB06	器台A	9.7	11	7.5	ミガキ	ナデ AD 27	1/1	1040	4穴			
第280回-17	SD06	器台D	—	9.6	—	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ、薄ナデ AE 47	1/2	1039	3穴			
第282回-1	SB07	甕N	11	4.4	12	ナデ	ミガキ、ナゲ、口縁ナデ AD 44	(1/1)	1064	厚さ4.5~5.5mm			
第282回-2	SB07	甕J1	15.2	—	—	ハケメ、口縁ナデ	ナデ、ナゲ AD 24	1/2	1056	複数器有り、厚さ4.0~5.5mm			
第282回-3	SB07	高杯B1	21	16.1	14.7	赤彩、ミガキ	赤彩、薄ハケメ B 24	3/4	1110	三角窓なし、3穴			
第282回-4	SB07	高杯2	—	9.6	—	赤彩、ミガキ	赤彩、薄ナデ B ②7	(1/2)	1055	4穴又は3穴			
第282回-5	SD07	甕Z	11	—	—	不明、口縁に施沈線	不明 BD 2	1/6	1113				
第282回-6	SB07	小形土器D	7.8	3.4	7.6	ケズリ、口縁ナデ	ナゲ、口縁ナデ A 2	1/1	1059	2穴、施成前穿孔			
第284回-1	SB08	甕A4	19.8	—	—	露吹文→波状文	ミガキ BD ②7	1/4	1061				
第284回-2	SB08	甕A1	17.3	—	—	露吹文(7条)→波状文	ミガキ D 47	1/6	1092				
第284回-3	SB08	台付甕	—	—	—	ハケメ	ナデ DE 27	(1/3)	1115				
第284回-4	SB08	高杯B1	19.8	—	—	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ B	1/4	1062				
第284回-5	SB08	高杯F	15	—	—	ミガキ	ミガキ B 24	3/4	1060	3穴			
第284回-6	SB08	器台C	10.5	12.1	10.7	ミガキ(ていねい)	ミガキ、薄ナデ B 24	5/6	1067	3穴			
第284回-7	SB08	器台B	9.2	10.8	7.8	ミガキ	不明 AD 24	1/1	1058	3穴			
第284回-8	SB08	甕	—	—	—	ハケメ→ミガキ	ミガキ、薄ハケメ B ④イ (1/1)	1114					
第254回-9	SB08	二輪	—	—	—	—	—	B 2	1/1	1061	重さ290g、穴直角4cm		
第257回-1	SB09	甕B1	21	6.32	5.6	ハケメ(口縁)、波状文(腹)	ミカナ・モロコシ・ハケメ BD 24	1/1	1073				
第257回-2	SB09	底部(底A)	—	5.5	—	ハケメ→ミガキ、削形	ハケメ AB 27	(1/1)	1074				
第257回-3	SB09	甕E	—	—	—	ミガキ	ナデ AB ④イ (3/4)	1076					
第257回-4	SB09	甕J1	17.9	—	—	ハケメ、ケズリ	ケズリ、ミガキ、ナゲ BD E 3	1/1	1077				
第257回-5	SB09	甕J2	19.2	—	—	ハケメ、口縁ナデ	ハケメ→ナデ D ②7	1/1	1072				
第257回-6	SB09	台付甕	—	10	—	ハケメ	ナゲ(又はミガキ) DE 27	(1/2)	1075	厚さ4.5~6.0mm			
第257回-7	SB09	高杯E	18.4	—	—	ミガキ	ミガキ A 24	1/6	1147				
第257回-8	SB09	高杯2	—	12.6	—	ミガキ	ナゲ(又はミガキ) BD 24	1/1	1078	厚さ4.5~5.5mm			
第257回-9	SB09	器台	—	—	—	ハケメ→ミガキ	ミガキ A ④イ (3/4)	1116	4穴				
第257回-10	SB09	土器裏	—	—	—	赤彩	赤彩	—	1117				
第270回-1	SB10	甕A?	—	—	—	二字文、波状文、ボタン状付	ナデ AD ④イ (1/4)	1133	7条、厚さ4.5~5.5mm				
第270回-2	SB10	甕A3	—	—	—	赤彩、ミガキ、口縁波状文	赤彩、ミガキ B 44	1/1	1121				
第270回-3	SB10	甕A4	17.9	—	—	削形波状文、撇狀文	ミガキ DR ②7	1/3	1097				
第270回-4	SB10	甕A4	20.2	—	—	波状波状文	ミガキ AD 24	1/2	1038				
第270回-5	SB10	甕A4	27.2	9.2	38	撇狀、波状波状文、斜切	ミガキ AD E 47	3/4	1099	復元時土器表面剥落			
第270回-6	SB10	甕J1	16.1	—	—	ハケメ、口縁ナデ	ハケメ→ナデ D 27	1/4	1122	1056に類似			
第270回-7	SB10	甕J2	19.2	—	—	ハケメ→ナデ	ナデ A 54	1/2	1119				
第270回-8	SB10	高杯F	13.8	10	8.7	ミガキ	赤ミガキ、薄ナデ A ②ア	1/6	1096	脚部は別個体か			
第270回-9	SB10	高杯4	—	11.2	—	(ハケメ)→ミガキ	ミガキ、薄ナデ B 24	(1/2)	1096				
第270回-10	SB10	高杯4	—	7.6	—	ミガキ、赤彩、直通なし、穴吹き	ハケメ、納部ナデ B 44	(1/1)	1118	4穴			
第270回-11	SB10	底部	—	4	—	不明	ナデ A 44	(1/2)	1120				
第272回-1	ED14	甕J1	20.4	—	—	口縁ナデ、波ケズリ	口縁ナデ波ケズリ C 24	1/4	1096	厚さ4.5~5.5mm			
第272回-2	ED12	甕J1	21.1	—	—	ハケメ→ナデ	ハケメ→ナデ A 44	1/6	1137				
第272回-3	DS19	甕J1	20.6	—	—	ハケメ、口縁ナデ、色付物	ナデ BD 24	1/4	1107	1056に類似			
第272回-4	ED13	小形土器B	—	—	—	ナデ	ナデ、ナゲ AD 47	1/6	1109	1130と同一個体か			
第272回-5	ED13	底部	—	7.8	—	ミガキ	ミガキ AE 24	(5/6)	1109				
第272回-6	ED15	甕N	13	—	—	ナデ	ナデ A 44	1/4	1140				
第272回-7	EC14	小形土器C	7.6	—	—	指捺压痕、輪輪旋	ナデ A 44	1/4	1139	粗雑なつくり			
第272回-8	ED05	盖形二器	4	—	—	粗いナデ、一部ハケメ	粗いナデ B ②イ (1/2)	1120					
第272回-9	ED14	高杯B2	21.1	—	—	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ B 24	1/3	1101				
第272回-10	DT18	高杯	—	—	—	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ C ④イ (1/2)	1100	厚さ4.5~5.5mm、3穴				
第272回-11	EE04	高杯2	11.8	—	—	赤彩、ミガキ	ハケメ、ナデ BE 24	(1/2)	1103	3穴			
第272回-12	EC14	高杯	—	—	—	赤ミガキ	赤ミガキ B 24	(1/1)	1136	5穴?			
第272回-13	EB14	高杯	—	—	—	ミガキ	ミガキ A ②イ (1/1)	1134	厚さ4.5~5.5mm				
第272回-14	ED14	甕N	—	—	—	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ (1/4)	1141					
第272回-15	EH12	高杯	—	—	—	赤彩、ミガキ	赤彩、ミガキ B 44	(1/2)	1135				
第272回-16	EG08	高杯4	10.6	—	—	ナゲ、波ケズリ	ナゲ、波ケズリ B ②イ (1/1)	1106	3穴				
第272回-17	ED17	高杯	—	—	—	ミガキ	ミガキ B 44	(1/1)	1105	8穴			
第272回-18	ED16	台付甕	9.5	—	—	ハケメ→ミガキ	ハケメ→ミガキ A ④イ (1/1)	1108	2穴				
第272回-19	ED05	甕N	—	—	—	ナゲ、波ケズリ	ナゲ、波ケズリ D 44	—	1143				
第272回-20	IS03	甕B	—	—	—	ハケメ→ナゲ(波ケズリ)	ハケメ→ナゲ(波ケズリ) D 44	—	1142				
第272回-21	IT03	甕B	—	—	—	ナゲ	ナゲ D 44	—	1144				
第272回-22	EC14	甕A	—	—	—	T字文、ボタン状付	ミガキ B ④イ	—	1145				

奈良・平安時代遺物觀察表

沢田鍋土遺跡須恵器・土師器觀察表

図版番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 h(cm)	器高 H(cm)	技術の特徴	ヘラ 焼き	色調	焼成	層位	出典 (年)	種類 番号	備考	
第 15 図-1	SB01	杯A	14.7	9.6	4.8	底部調整不明		灰白	甘く軟質	床面	2	9	254		
第 2 図-2	SB01	杯A	14	—	—	回転ナデ		褐色	甘く軟質	床面、底部P1	8	—	265		
第 2 図-3	SB01	杯A	15.6	—	—	回転ナデ		褐色	やや甘く軟質	包含層	6	—	256		
第 2 図-4	SB01	杯A	—	6.8	—	底部へラ切り未調整		灰白	やや甘く軟質	フク土	10	253			
第 2 図-5	SB01	杯A	17.2	10.2	—	4.25 「井」印、底部へラ切り未調整	—	灰白色	やや甘く軟質	包含層内	1	7	252		
第 2 図-6	SB01	杯A	14	6.2	3.6	底部へラ切り、体部側面へラ焼き	口	灰	良好	—	7	—	251		
第 2 図-7	SB01	杯A	15	11	4.05	底部へラ削り、内面へラ削り		灰	良好	フク土	1.5	5	255		
第 2 図-8	SB01	蓋B	14.9	—	—	回転ナデ		褐色	やや甘く軟質	床面、底部P1	5.5	—	265		
第 2 図-9	SB01	蓋B	19.8	—	—	回転ナデ		灰色	良好	焼出面	1	—	264		
第 2 図-10	SB01	長颈壺	—	—	—	回転ナデ		褐色	良好	包含層	—	—	262		
第 2 図-11	SB01	甕C?	18.9	—	—	回転ナデ		灰白	良好	フク土	5	—	256	口縁部	
第 2 図-12	SB01	土師陶器C	24	—	—	頸部下に外面ハケ		褐色	良好	フク土	2	—	268		
第 2 図-13	SB01	甕A	—	6	—	外面タタキ		灰	良好	床面	11	257	底部		
第 2 図-14	SB01	土師小壺	24	—	—	外面不明、内面回転ナデ		褐色	やや甘く軟質	フク土	6	—	270		
第 2 図-15	SB01	土師良質C	30.1	—	—	内面タタキ、ハケ		褐色	良好	床面、底部フク土	13	—	271		
第 2 図-16	SB01	三瓣足壺C	24	—	—	内面タタキの上側ヨコハケ、外面タタキ		褐色	良好	—	16	—	274		
第 2 図-17	SB02	土師粗質C	22.3	—	—	内面部ヨコハケ、下端タタキ、外端タタキ		褐色	良好	カットモドロ	18	—	275		
第 2 図-18	SB02	土師粗質C	37	—	—	削除タタキ、底部へラ削りタタキ		褐色	良好	フク土	—	—	272		
第 2 図-19	SB02	土師粗質C	—	—	—	内面タタキ		褐色	やや甘く軟質	フク土	—	—	273		
第 118 図-1	SY01	杯A	14.6	9.6	3.4	底部へラ切り後ナデ		灰	良好繊密	S.3.3.3-3.3	0.5	13	204		
第 2 図-20	SY01	蓋B	15	—	0.8	1.4 大津井部回転ナラ削り		灰	良好	—	6	—	232		
第 2 図-21	SY01	杯B	14.8	10.2	4.9	底部瓦軒ニラ削り		灰	良好	—	11	7	205		
第 2 図-22	SY01	蓋B	13.6	—	—	回転ナデ		灰	良好繊密	—	7	—	234		
第 2 図-23	SY01	?	—	—	—	底部へラ削り	非	灰	—	—	—	—	233		
第 2 図-24	SY01	甕A	47.8	—	—	回転ナデ		灰	良好繊密	—	1	—	235		
第 2 図-25	SY01	瓶状	—	—	—	体部外面タタキリケン、体部内面周縁タタキ		灰	良好	—	—	—	231		
第 118 図-2	SY02	甕A	12.8	3	5	底部不規則タタキ(?)本調整		灰	良好	—	7	11	222		
第 2 図-26	SY02	甕A	15	3	4.5	底部へラ切り未調整		灰白	やや甘く軟質	—	0.5	32	201		
第 2 図-27	SY02	杯B	14.7	10	4.4	底部回転ヘラ削り		灰	良好	—	1	5	203		
第 2 図-28	SY02	杯A	58.4	—	—	外腹沙汰後縁横波状文		灰色	やや甘く軟質	埃山面	1	—	200		
第 2 図-29	SY02	杯A	14	—	3	底部へラ切り後板ヘラナデ		灰	良好	C層	1	16	20		
第 2 図-30	SY02	杯A	13.4	9	3.4	底部へラ切り後板ヘラナデ		灰	良好	C層	8	28	—		
第 2 図-31	SY02	杯A	14.2	9.8	3.5	底部不羽跡		灰白	やや甘く軟質	C層底部下部	10	32	1		
第 2 図-32	SY02	杯A	16.6	9.8	3.4	底部不羽跡		灰	良好	A上部後縁横波	9	11	5		
第 2 図-33	SY02	杯A	16.2	6.2	4	底部へラ切り後ナデ		灰	良好	奥好鐵治	砂礫層	2	17	30	
第 2 図-34	SY02	杯A	14.4	6.4	3.9	底部へラ切り後板ヘラナデ		灰白	良好	B層-C層上部	5	17	14		
第 2 図-35	SY02	杯A	12.4	4.4	4.4	底部へラ切り後ナデ		灰	良好	C層	1	19	61		
第 2 図-36	SY02	杯A	15.4	8.6	4.1	底部へラ切り後ナデ		灰白	甘く軟質	A層	3	14	82		
第 2 図-37	SY02	杯A	12.8	2.5	3.6	底部へラ切り後中央部板へナナ		灰白	良好	埃山山頂-4-5層	6	17	18		
第 2 図-38	SY02	杯A	12.8	6.5	4.6	底部へラ切り後板へラナデ		褐色	良好	C層底部下部	4	32	52		
第 2 図-39	SY02	杯A	13	5	4.1	底部へラ切り後板へラナデ		灰白	良好	B層-C層上部	9	5	6		
第 2 図-40	SY02	杯A	12.4	4	4.5	底部へラ切り後ナデ		灰	良好	—	8	—	34		
第 2 図-41	SY02	杯A	12.6	—	4.2	底部不規則タタキ(?)本不明		褐色	甘く軟質	床面、底部P1	3	32	67		
第 2 図-42	SY02	杯A	13.8	9.5	4.5	底部へラ切り後ナデ		灰	良好	C層底部下部	4	12	65		
第 2 図-43	SY02	杯A	13.8	4.4	4.4	底部へラ切り後ナデ		灰	良好	C層	14	21	70		
第 2 図-44	SY02	杯A	14	3.4	4.1	底部へラ切り後ナデ		灰	良好	砂礫層	1	7	25		
第 2 図-45	SY02	杯A	14.4	4	4.4	底部へラ切り後ナデ		灰白	良好	床面	18	17	3		
第 2 図-46	SY02	杯A	14	7.4	4.5	底部へラ切り後ナデ		灰白	やや甘く軟質	床面(化粧面)	10	32	18		
第 2 図-47	SY02	杯A	14.4	8.4	4.1	底部へラ切り後ナデ		灰	良好繊密	C層	13	17	2		
第 2 図-48	SY02	杯A	14.4	6	4.7	底部へラ切り後ナデ		褐色	やや甘く軟質	C層	10	11	53		
第 2 図-49	SY02	杯A	14.8	5	4.6	底部へラ切り		灰白	やや甘く軟質	C層底部下部	10	11	68		
第 2 図-50	SY02	杯A	14.4	6.4	4.4	底部へラ切り後ナデ		灰白	やや甘く軟質	A層	3	8	26	内面一輪 輪郭上付帯	
第 2 図-51	SY02	杯A	14.8	6.2	4.3	底部へラ切り後ナデ		灰白	良好	C層下部	9	18	72		
第 2 図-52	SY02	杯A	15.5	7	—	4.1 底部不規則(へラ底り後ナデ)		灰白	良好	A層	9	6	10		
第 2 図-53	SY02	杯A	12.8	—	—	底部欠損	非	灰	良好繊密	A層上面	3	—	35		
第 2 図-54	SY02	杯A	—	—	—	底部不羽跡	非	灰	良好	床面(化粧面)	7	34			

沢田鍋土遺跡須恵器・土器器観察表

器物番号	道佛名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	技法の特徴	ヘラ 接き	色調	焼成	層位	昭和 年(西暦) 100 (西暦)	層位 番号	備考
第12085-27	SW01	杯A	14				底部欠損	井	灰	良好		2	36	
第12085-28	SW01	杯A	13.8	7.6	4.4		底部へラ切り後板へラナデ	井	暗褐色	良好	北C、砂礫層	2	15	245
第12085-29	SW01	杯A	12.6	6.4	4.8		底部へラ切り後板へラナデ	井	灰	良好	C層以下	12	20	8 露天付着
第12085-30	SW01	杯A	8.4				底部へラ切り後ナデ	井	灰	良好	砂礫層	11	46	
第12085-31	SW01	杯A	6				底部板へラナデ	井	灰	良好	C層上部	8	44	露天付着
第12085-32	SW01	杯A	2.4				底部へラ切り後ナデ	井	灰	良好	C層上部	3	37	
第12085-33	SW01	杯A	9				底部ナデ	井	灰	良好	C層	9	38	
第12085-34	SW01	杯A	6				底部へラ切り	井	灰白	良好	C層下部	9	32	
第12085-35	SW01	杯A					底部へラ切り後ナデ	井	灰	良好	7a層	8	41	
第12085-36	SW01	杯A	4.8				底部へラ切り後ナデ	井	灰白	やや青く微青	C層	16	40	
第12085-37	SW01	杯A	8				底部へラ切り後板へラナデ	井	灰白	やや青く微青	C層	7	206	
第12085-38	SW01	杯A	8.6				底部へラ切り	井	灰	良好	砂礫層	42		
第12085-39	SW01	杯A	14.4	3.8	4.6		底部へラ切り後板へラナデ	井	灰	良好	砂礫層	6	8	11
第12085-40	SW01	杯A					底部板へラナデ	井	灰	良好	5b層	8	45	
第12085-41	SW01	杯A	8				底部ナデ	井	灰	良好	灰原上層	5	207	
第12085-42	SW01	杯A	13.6	8	2.8		底部へラ切り後ナデ	井	灰	良好	C層	8	20	54 露天付着(後 半)、砂礫層
第12085-43	SW01	杯A	13.6				杯と杯重ね焼き	井	灰	良好	7b層、砂礫層	6	209	露天付着(後 半)、砂礫層
第12085-44	SW01	杯A	13				重ね焼き(底部に焼台付焼?)	井	灰	良好	C層下部	32	55	露天付着(後 半)、砂礫層
第12085-45	SW01	杯A	6.8				底部へラ切り後へラ削り(駆射状)	井	灰白	良好	C層	32	50	露天付着(後 半)、砂礫層
第12101-46	SW01	蓋					天井部回転へラ削り大へラ抜きあり	井	灰	やや青く微青	灰原上層(灰)		39	
第12101-47	SW01	蓋B	15.6	2.3	2.8		天井部回転へラ削り	井	暗褐色	良好	7a層	7	103	
第12101-48	SW01	蓋B	15.6	2.5	3		天井部回転へラ削り	井	灰	良好	7a層	18	113	
第12101-49	SW01	蓋B	16	1.5	2.4		天井部回転へラ削り	井	灰	良好	天井部回転(上層)	10	104	
第12101-50	SW01	蓋B	16.8	2.4	3.2		天井部回転へラ削り	井	灰白	やや青く微青	灰原一括	11	105	
第12101-51	SW01	蓋B	16	2	2.5		天井部回転へラ削り	井	灰白	良好	C層	3	108	
第12101-52	SW01	蓋B	17.8	1.7	2.4		天井部回転へラ削り	井	灰白	良好	砂礫層	3	112	
第12101-53	SW01	蓋B					天井部回転へラ削りつまみ縁なし	井	灰白	良好	A層		115	
第12101-54	SW01	杯B	14	10	3.9		底部回転へラ削り	井	暗褐色	良好	7a層	5	12	82
第12101-55	SW01	杯B	14.4	10.5	4.5		底部回転へラ削り	井	灰	良好	砂礫層	4	12	92
第12101-56	SW01	杯B	14.8				底部回転へラ削り	井	灰白	良好	井戸シント(7a層)	5	5	100
第12101-57	SW01	杯B	17	6	3.2	3.2	底部回転へラ削り	井	灰	良好	井戸シント(7a層)	2	15	75 露天(2枚)
第12101-58	SW01	杯B	7				底部回転へラ削り	井	灰	良好	C層下部	18	81	
第12101-59	SW01	杯B	13	8	2.7	3.2	底部回転へラ削り	井	灰	良好	センショウ2層	4	8	76
第12101-60	SW01	杯B	12.8	8.8	3.8	4.1	底部回転へラ削り	井	灰白	良好	7a層	4	9	85 露天付着(後 半)
第12101-61	SW01	杯B	12.8	8	3.4	3.6	底部回転へラ削り	井	灰	良好	C層上部	2	4	99
第12101-62	SW01	杯B	13.4	10	3.8	4	底部回転へラ削り	井	灰	良好	A層上面	1	8	77
第12101-63	SW01	杯B	16.2	12	3.2	3.5	底部回転へラ削り	井	暗褐色	良好	B-1層	2	6	96
第12101-64	SW01	杯B	15	11	3.4	3.5	底部回転へラ削り	井	灰	良好	7a層	5	10	80
第12101-65	SW01	杯B	16.2	10.8	3.5	3.9	底部回転へラ削り	井	灰	良好	砂礫層	4	8	90
第12101-66	SW01	杯B	14.4	11	3.6	4	底部回転へラ削り	井	暗褐色	良好	砂礫層	14	12	95
第12101-67	SW01	杯B	16.2	11.2	3.9	4.6	底部回転へラ削り	井	灰白	やや青く微青	C層	14	14	84
第12101-68	SW01	杯B	15	12	3.7	4	底部回転へラ削り	井	灰	良好	C層下部	6	14	86
第12101-69	SW01	杯B	15.6	11	4.7	4.9	底部目板へラ削り	井	黃褐色	良好	灰原一層(後付) 砂礫層	1	14	88
第12101-70	SW01	杯B	17.6	12	4.1	4.5	底部回転へラ削り	井	灰白	良好	砂礫層	2	5	93
第12101-71	SW01	蓋B	22.4	2.5	3.7		天井部回転へラ削り	井	暗褐色	やや青く微青	井戸D、C層上部	22	102	
第12101-72	SW01	杯B	18				底部欠損(口縁下に凹線あり)	井	灰	良好	砂礫層		9	
第12101-73	SW01	杯B	18.8				底部欠損(口縁下に凹線あり)	井	灰白	良好	セミ-1層(後付)	3	4	91
第12101-74	SW01	杯B	19.5				底部回転へラ削り	井	灰白	良好	C層下部	2	87	
第12101-75	SW01	皿A	20.5	15.6	1.2		回転ナデ	井	灰	良好	7C層	2	155	
第12101-76	SW01	皿A	19.6				口縁部内面回転ナデ、底部不明瞭	井	やや青く微青	砂礫層	3	156		
第12101-77	SW01	皿A	16.8	15	1.6		底部回転へラ削り	井	灰	良好	南東D-C層	3	3	250
第12101-78	SW01	皿A	20.5	14	1.6		底部回転へラ削り	井	赤褐色	やや青く微青	C層	2	3	157
第12101-79	SW01	皿A	19.4	9	2		底部回転へラ削り後回転ナデ	井	灰	良好	C層	11	210	
第12101-80	SW01	皿A	6				底部回転へラ削り	井	灰	良好	5c、D層	30	173	
第12101-81	SW01	皿B	21.8	20	2.7		底部回転へラ削り	井	灰	良好	井戸E	3	3	153
第12101-82	SW01	皿B	25.8	23	2.2		底部回転へラ削り	井	灰	良好	C層、C層下部	7	7	154
第12101-83	SW01	蓋A	17.4	13.8	1.4	1.8	底部回転へラ削り	井	灰	良好	A-C層	4	18	159
第12101-84	SW01	蓋A	20	14.4	2		底部欠損	井	灰	良好	2	4	158	

沢田鉄土遺跡須恵器・土器器觀察表

区画番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	厚さ B(cm)	静溝 B(cm)	技術の特徴	ヘラ 焼き	色調	焼成	層位	測定 寸法 (cm)	測定 寸法 (cm)	整理 番号	備考
												幅 高さ A(cm)	幅 高さ C(cm)		
第121-85	SW01	盤B	17	13.6	1.6	2	底部回転ヘラ削り	—	灰白	良好	北壁上部	5	8	247	
第121-86	SW01	盤B	17	9.8	1.8	—	底部欠損	—	灰	良好	C層	3	4	163	
第121-87	SW01	盤B	18.8	16	1.7	—	底部回転ヘラ削り	—	灰	良好	C層	4	2	161	窓体付差
第121-88	SW01	盤B	18	13.6	2.2	3	底部欠損	—	灰白	やや白(微黄) 磨きA→B→C	3	3	246		
第121-89	SW01	盤B	18	14.6	2.5	—	底部欠損	—	灰	良好	C層	4	4	162	
第121-90	SW01	盤B	16	—	—	—	底部回転ヘラ削り	—	灰	良好	C層	3	160		
第121-91	SW01	盃C	—	—	—	—	杯部外回転ヘラ削り、内・外葉回転ナメ	—	灰	良好	7a層	—	149		
第121-92	SW01	盃C	—	—	—	—	杯部外回転ヘラ削り、内・外葉回転ナメ	—	灰白	やや白(微黄) 灰色シルバ	—	—	161		
第121-93	SW01	盃A	—	—	—	—	器部と杯部結合のための鋸波状欠損あり	—	黄褐色	D	5.5層	—	152	あて有瓶者	
第121-94	SW01	盃C	—	—	—	—	器部と杯部結合のための鋸波状欠損あり	—	灰	やや白(微黄) C層上面	—	148			
第122-85	SW01	盃C?	—	9.6	—	—	樽部外回転ナメ、脚部内面ナメ	—	灰	良好	瓶密	5	165	脚部	
第122-86	SW01	盃?	—	8.8	—	—	回転ナメ	—	暗褐色	—	1号窓	—	146		
第122-87	SW01	盃C	26	19	7.4	—	高輪部回転ヘラ削り、高輪刃直向ヘラナメ、脚部外回転ナメ	—	灰	良好	1号窓下部	13	14	172	
第122-88	SW01	盤B	—	—	—	—	口部斜面豆皿ナメ	—	灰	良好	C層	—	29		
第122-89	SW01	盤B	12	—	—	—	回転ナメ	—	灰	良好(微黄)	瓶密 C層	—	144		
第122-90	SW01	盤B	13	—	—	—	回転ナメ	—	灰	良好(微黄)	瓶密 C層	8	222	口部自然釉	
第122-91	SW01	盤B	12	—	—	—	コ形部回転ナメ、体部外回不規則(タキナ)	—	灰	良好(微黄)	C層	7	146		
第122-92	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面豆皿ナメ、体部外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	B層 C層上面	2	145		
第122-93	SW01	盤B	11.6	—	—	—	口部斜面・内面回転ナメ、体部斜面タキナ	—	灰	良好(微黄)	C層	13	147	自然釉有り	
第122-94	SW01	盤B	14.4	—	—	—	口部斜面外回タキナリケン、内面回転ナメ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	11	223	口頭瓶	
第122-95	SW01	盤B	—	—	—	—	口部斜面外回タキナリケン、内面回転ナメ	—	灰	良好	瓶密	—	218		
第122-96	SW01	盤B	12.2	—	—	—	口部斜面外回タキナリケン、内面回転ナメ	—	灰	良好(微黄)	瓶密 C層	12	211	休部接合部	
第122-97	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナリケン、内面回転ナメ	—	灰	良好(微黄)	砂礫層	—	143	自然釉有り	
第122-98	SW01	盤B	12	—	—	—	外部外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	北壁C層	—	217	口頭瓶自然釉有り	
第122-99	SW01	盤B	13.6	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	215	休部(瓶底)		
第122-100	SW01	盤B	13	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	休部(瓶底)	213	休部(瓶底)		
第122-101	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	216	休部(瓶底)自然釉	
第122-102	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	217	休部(瓶底)自然釉	
第122-103	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	218		
第122-104	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	219		
第122-105	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	220		
第122-106	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	221		
第122-107	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	222		
第122-108	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	223		
第122-109	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	224		
第122-110	SW01	盤B	12	—	—	—	口部斜面外回タキナ、内面外回タキナ	—	灰	良好(微黄)	瓶密	—	225		
第122-111	SW01	長頸壺A	10	—	—	—	—	—	黑褐色	良好(微黄)	瓶密	—	216	休部(瓶底)自然釉	
第122-112	SW01	長頸壺A	12.4	—	—	—	—	—	黑褐色	良好	砂礫層	—	32	137	
第122-113	SW01	長頸壺A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	139	
第122-114	SW01	長頸壺A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	221	口頭部休部	
第122-115	SW01	長頸壺A	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	136		
第122-116	SW01	長頸壺A	13.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	135		
第122-117	SW01	長頸壺A	13.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	133		
第122-118	SW01	長頸壺A	10.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	228		
第122-119	SW01	長頸壺A	10.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	130	自然釉有り	
第122-120	SW01	長頸壺B	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	131	自然釉付着	
第122-121	SW01	長頸壺B	9.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	229	口頭部自然釉有り	
第122-122	SW01	長頸壺A	10.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	226		
第122-123	SW01	長頸壺B	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	132		
第122-124	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	127	瓶底付着	
第122-125	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	128		
第122-126	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	129		
第122-127	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	130		
第122-128	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	131		
第122-129	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	132		
第122-130	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	133		
第122-131	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	134		
第122-132	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	135		
第122-133	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	136		
第122-134	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	137		
第122-135	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	138		
第122-136	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	139		
第122-137	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	140		
第122-138	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	141		
第122-139	SW01	壺A	12.8	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	142		
第122-140	SW01	壺C	19.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	143		
第122-141	SW01	壺C	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	144		
第122-142	SW01	壺D	31.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	145		

沢田鍋土跡須恵器・土師器観察表

説明番号	器種名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径 Max D(cm)	器高 Max H(cm)	技法の特徴	ヘラ 描き	色調	焼成	層位	断面 形状 (%)	断面 形状 (%)	断面 形状 (%)	断面 形状 (%)	備考
第12回-13	SW01	甕D	36					口部一側面削下、底部外周タキスリケシ		灰	良好		2	178			
第12回-14	SW01	甕D	38					外面タキスリケシ、内面削下部ナデ		灰	良好	砂礫層	3	176	断面形状 C層	断面形状 C層	
第12回-15	SW01	甕D	48					外周タキスリケシ、内面みて底あり(厚心D)		灰	良好	砂礫層	2	179			
第12回-16	SW01	甕A	19.4					内・外面部削下部ナデ		灰	良好	排二	8	164			
第12回-17	SW01	甕A	25.2					外面タキスリケシ、内面ヨコナデ		灰	良好	C層、C層上部	3	193			
第12回-18	SW01	甕A	28					圓軸ナデ		灰	良好	砂礫層	10	196			
第12回-19	SW01	甕A	26					圓軸ナデ	升	灰	良好	灰原	10	196			
第12回-20	SW01	甕A	29.5					圓軸ナデ		黑褐色	良好	灰原	7	237			
第12回-21	SW01	甕A	34					外面タキスリケシ、内面ヨコナデ		灰	やや古く軟質	黑色粘土層	2	194			
第12回-22	SW01	甕A	30.8					圓軸ナデ		灰	良好	C層以下部	9	198			
第12回-23	SW01	甕A						口部削下部ナデ、口部内周削下部ナデ、底部外周 タキスリケシ、内面ヨコナデ		灰	良好	砂礫層	1	192			
第12回-24	SW01	甕A	33.5					圓軸ナデ		灰	やや古く軟質	C層、C層下部	4	197			
第12回-25	SW01	甕A	44					口部削下部タキスリケシ、内面ヨコナデで底あり		灰	良好	C層砂礫層	4	183			
第12回-26	SW01	甕A	49.4					口部削タキスリケシ、内面ヨコナデ		黑褐色	良好	砂礫層 泥炭層、下部	5	219	北部自然物		
第12回-27	SW01	甕A	48					口部外削タキスリケシ、内面削下部ナデ		灰	良好	C層以下部	8	182			
第12回-28	SW01	甕A	58.6					口部削下部タキスリケシ、内面削下部ナデ		灰	良好	砂礫層	2	190			
第12回-29	SW01	甕A	50					口部部次級後衛拂波状紋		灰白	やや古く軟質	C層、灰原	5	185			
第12回-30	SW01	甕A	53					口部削後衛拂波状紋上に沈線、内面ヨコナデ		灰	良好	C層砂礫層	8	186			
第12回-31	SW01	甕A	43					口部部拂波状紋上に沈線		灰	良好	C-1層、C-2層、 A層、C層	5	184	自然物有り		
第12回-32	SW01	甕A	45					口部削後衛拂波状紋上に沈線、内面ヨコナデ		灰	良好	砂礫層 泥炭層、下部	10	238			
第12回-33	SW01	甕A	45					口部削後衛拂波状紋上に沈線、内面ヨコナデ		灰	良好	砂礫層	4	187			
第12回-34	SW01	甕A	62					口部削後衛拂波状紋上に沈線、内面削下部ナデ		黑褐色	良好	灰原	1	188			
第12回-35	SW01	甕A	63					口部削後衛拂波状紋上に沈線、内面削下部ナデ		灰	良好	灰原	2	189			
第12回-36	SW01	甕A						口部削後衛拂波状紋上に沈線、内面削下部ナデ		灰	良好	C層以下部	1	191			
第12回-37	SW01	甕						体部外輪ヘラ描きあり	あり	灰	良好	泥炭層、下部	2	248	断面ヘラ描き		
第12回-38	SW01	甕A	3					外而不明瞭、大面ハケ		黄褐色	良好	口部上部、灰原上部	7	189	丸底		
第12回-39	SW01	円筒窯	14	15.5	5			圓軸ナデ十字形透かしあり		灰	良好	砂礫層 泥炭層、下部	4	241	透かし (青白) (青白)		
第12回-40	SW01	円筒窯		14.8				圓軸ナデ後部へ向うより切入み透かしあり		灰	良好	C層以下部					
第12回-41	SW01	円筒窯	10.8					不明瞭(圓軸ナデ?)		灰	やや古く軟質	C層+D、A層	7	239	内窓8.8		
第12回-42	SW01	円筒窯	14					圓軸ナデ		黑褐色	良好	砂礫層	3	243	-8.6		
第12回-43	SW01	円筒窯	12.4					圓軸ナデ		生垣鐵器	良好	砂礫層 泥炭層、下部	8	242	凹口部(0.0)		
第12回-44	SW01	甕?						口部下に印線が残る		黄褐色	やや古く軟質			309			
第12回-45	SW01	甕?						口部下に印線が残る		灰白色	良好			310			
第12回-46	SW01	甕?						口部下に印線が残る		灰	良好			311			
第12回-47	SW01	口沿鋸歯D	17					口部ヨコナデ、底部外輪ヘラ削り、第二部内面ハケ		灰	良好	灰原一括	7	227			
第12回-48	SW01	甕A	13.6	7	4.6			底部ヘラ切り		灰	良好	灰原	7	14	19		
第12回-49	SW01	甕?						天井部斜板ヘラ削り、匡縁が彌る		灰	良好	灰原砂礫層	6	110			
第12回-50	追拂外	甕A						底部ヘラ切り後板ヘラ状工具によるナデ		橙色	やや古く軟質			316			
第12回-51	追拂外	甕A						追拂ヘラ切り後板ヘラ工具によるナデ		橙色	やや古く軟質			314			
第12回-52	追拂外	甕A						底部ヘラ切り後板ヘラ工具によるナデ	-	橙色	D			317			
第12回-53	追拂外	甕A						追拂ヘラ切り後板ヘラ工具によるナデ		橙色				315			
第12回-54	追拂外	甕A						追拂ヘラ切り後板ヘラ工具によるナデ		灰	良好						
第12回-55	追拂外	甕A	14.4	4.6	4			底部ヘラ切り後板ヘラナデ		灰	良好	灰原	2	227			
第12回-56	追拂外	甕A						杯身部圓軸ナデ		黄褐色	良好			297			
第12回-57	追拂外	甕?						杯身部圓軸ヘラ削り		灰	やや古く軟質			318			
第12回-58	追拂外	甕B						天井部2/3圓軸ヘラ削り		灰	良好	砂礫層			296		
第12回-59	追拂外	甕B	15.4			2.85		天井部2/3圓軸ヘラ削り		灰	良好	砂礫層	8	281			
第12回-60	追拂外	甕B						天井部2/3圓軸ヘラ削り		灰	良好	砂礫層			296		
第12回-61	追拂外	土師小型						天井部圓軸ヘラ削り		灰	良好	砂礫層	4	290			
第12回-62	追拂外	土師小型						外面部圓軸ナデ、内面カキ		橙色	良好			298			
第12回-63	追拂外	土師小型						外面部ハケによるカキ		黄褐色	良好			308	断面形状 C層		
第12回-64	追拂外	土師小型						外面部ハケ、内面、底部外面部圓軸ナデ		灰	良好	砂礫層	32	284			
第12回-65	追拂外	土師小型						底部欠損		灰	良好	砂礫層	8	294			
第12回-66	追拂外	瓦原壺A	8.1					圓軸ナデ		灰	良好	砂礫層	9	288			
第12回-67	追拂外	土師小型						外面部圓軸ナデ、内面カキ		橙色	良好			298			
第12回-68	追拂外	土師小型						外面部ハケによるカキ		黄褐色	良好			308	断面形状 C層		
第12回-69	追拂外	土師小型						外面部ハケ、内面、底部外面部圓軸ナデ		灰	良好	砂礫層	13	283			
第12回-70	追拂外	土師小型						底部欠損		黄褐色	良好	砂礫層		287			
第12回-71	追拂外	土師小型						底部内面ハケ後ヨコカギ		黄褐色	良好	砂礫層	6	291			
第12回-72	追拂外	土師小型	19.2					内面ハケ、口部外壁ナデ、底部外壁ハケ		黄褐色	D		2	279			

沢田鍋土遺跡須恵器・土師器観察表

圓版番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器形 (cm)	枝法の特徴	ヘラ 引き	色調	焼成	層位	測定 寸法 (cm)	測定 寸法 (cm)	整理 番号	備考
第129-22	遺構外	土質燒成C24					不切縫		黃褐色	甘く軟質	9	282			
第130-23	遺構外	土質燒成MC					体上部外面不明瞭(ハケ)		黃褐色	甘く軟質	9	285			
第131-24	遺構外	土質燒成S5					外面タタキ、内面ハケ		黄褐色	やや生(軟質)	1	286			
第132-25	SD10	燒成円底					外面タタキリケシ、内面ハケ		黄褐色	甘く軟質	1層	292			
第133-26	遺構外	土質燒成	6.0				外面ハケ		黄褐色	やや生(軟質)		280			

清水山窯跡須恵器鰐類表

圓版番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	枝法の特徴	ヘラ 引き	色調	焼成	層位	測定 寸法 (cm)	測定 寸法 (cm)	整理 番号	備考	
第145-1	SY01	杯A	13.2	8.4	2.8	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	良好、緻密	美口部下層	5	14	175			
第145-2	SY01	杯A	13.5	10	3.05	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	良好	⑤区6層	5	8	177			
第145-3	SY01	杯A	15	9	2.9	底部不明瞭	白色-褐色	良好	セミマット(表面無光)	5	9	133			
第145-4	SY01	杯A	14.3	8.6	3.15	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	甘く軟質	床直	15	32	100			
第145-5	SY01	杯A	14	8.6	3.1	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	良好	床直	8	14	85			
第145-6	SY01	杯A	15.2	10.6	3.2	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	良好、緻密	床直	1	15	87			
第145-7	SY01	杯A	15	11	3.2	底部へラ切り	白色-褐色	良好	8層	7	12	143			
第145-8	SY01	杯A	14.7	8.6	3.4	底部不明瞭(ハラ削り?)	白色-褐色	良好	C層	9	15	809			
第145-9	SY01	杯A	11.8	6.6	3.7	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	良好	EM斜面下	8	26	140			
第145-10	SY01	杯A	14	8	3.6	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	やや生(軟質)	底直(下層下)	8	20	135			
第145-11	SY01	杯A	14.8	8.6	3.7	底部へラ切り後板へナナデ(多方向)	白色-褐色	甘く軟質	底直	25.5	32	99			
第145-12	SY01	杯A	14.2	10	3.5	底部不明瞭(ハラ切り?)	白色-褐色	甘く軟質	リット2	2	11	139			
第145-13	SY01	杯A	14	9	3.4	底部へラ切り後板へナナデ(多方向)	白色-褐色	甘く軟質	床直	4	20	97			
第145-14	SY01	杯A	14.7	9.5	3.6	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	やや生(軟質)	EM斜面下	18	12	137			
第145-15	SY01	杯A	15	10.6	3.5	底部欠損	白色-褐色	良好、緻密	底斜	7	12	123			
第145-16	SY01	杯A	15	10	3.6	底部不明瞭	白色-褐色	良好、緻密	底斜	8	6	142			
第145-17	SY01	杯A	15.6	10	3.6	底部ナナデ	白色-褐色	甘く軟質	C層	7	16	811			
第145-18	SY01	杯A	15.1	9	4.2	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	甘く軟質	EM斜面下	20	32	木葉底			
第145-19	SY01	杯A	16	9.6	3.8	底部へラ切り後へナナデ	白色-褐色	甘く軟質	4層下部	28	18	131			
第145-20	SY01	杯A	15	9.8	3.6	底部へラ切り後へナナデ	白色-褐色	甘く軟質	底直(下層下)	13	30	129			
第145-21	SY01	杯A	14.4	8.6	3.9	底部状工具痕	白色-褐色	甘く軟質	18	32	108				
第145-22	SY01	杯A	14	8.2	4.3	底部へラ切り後ナナデ(板工工具痕)	白色-褐色	甘く軟質	18	32	111				
第145-23	SY01	杯A	13.6	10	4.3	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	甘く軟質	⑤又上層	16	32	91			
第145-24	SY01	杯A	13.7	8.4	3.9	底部へラ切り後ナナデ	白色-褐色	やや生(軟質)	床直	9	10	134			
第145-25	SY01	杯A	15	7	4	底部へラ切り	白色-褐色	やや生(軟質)	6	7	145				
第145-26	SY01	杯A	14.6	8	4	底部ナナデ(板工工具痕)	白色-褐色	甘く軟質	4層下部	30	32	101			
第145-27	SY01	杯A	14.7	7.2	4.2	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	良好、緻密	リット2	3	4	141			
第145-28	SY01	杯A	15	2	4	底部へラ切り後板目痕(一方)	白色-褐色	やや生(軟質)	C層	23	32	812			
第145-29	SY01	杯A	15.2	10.4	4.2	底部へラ切り後板目痕(一方)	白色-褐色	甘く軟質	C層	21	32	816			
第145-30	SY01	杯A	14.2	7.4	4.4	底部不夷歌(板へナナデ?)	白色-褐色	甘く軟質	C層	22	32	814			
第145-31	SY01	杯A	14.7	10.6	4.3	底部へラ切り後板へナナデ	白色-褐色	甘く軟質	4層下部	10	32	94			
第145-32	SY01	杯A	15	8.4	4.6	底部へラ切り後ナナデ	白色-褐色	良好	10	9	138				
第145-33	SY01	杯A	14.9	9.6	4.7	底部へラ切り後へナナデ(一方沟)	白色-褐色	やや生(軟質)	4層下部	26	32	85			
第145-34	SY01	杯A	17.1	9.8	4.5	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	甘く軟質	床直	31	32	88			
第145-35	SY01	杯A	15.4	8.6	4.6	底部不明瞭	白色-褐色	甘く軟質	32	32	106				
第145-36	SY01	杯A	15	8.4	4.7	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	甘く軟質	29	32	126				
第145-37	SY01	杯A	15	10	4.4	底部へラ切り(中央部板状工具痕)	白色-褐色	甘く軟質	底直	9	28	110			
第145-38	SY01	杯A	15.2	10.4	4.4	底部へラ切り後板へナナデ(一方沟)	白色-褐色	甘く軟質	4層下面	15	19	93			
第145-39	SY01	杯A	15	9.8	4.7	底部へラ切り後中央部板目痕	白色-褐色	甘く軟質	C層	24	32	822			
第145-40	SY01	杯A	14	8.4	3.75	底部不夷歌	白色-褐色	甘く軟質	33	31	144				
第145-41	SY01	杯A	15	8.6	4.1	底部へラ切り後板目痕(ナナデ)	井	白色-褐色	やや生(軟質)	4層下部	23	32	102		
第145-42	SY01	杯A				底部へラ切り後板へナナデ	井	白色-褐色	やや生(軟質)	4層下部	32	32	146		
第145-43	SY01	杯A	15.2	8.8	4	底部へラ切り後へナナデ	井	白色-褐色	甘く軟質	9	32	182			
第145-44	SY01	杯A	14.8	9.2	4.5	底部へラ切り後板へナナデ(多方向)	井	白色-褐色	甘く軟質	4層下部	26	32	98		
第145-45	SY01	杯A				底部へラ切り後板へナナデ	井	白色-褐色	甘く軟質	⑤区6層	0	17	90		
第145-46	SY01	杯A				底部へラ切り(中央部板状工具痕)	井	白色-褐色	甘く軟質	C層	31	32	820		
第147-47	SY01	蓋C	12.7		1.8	天津部回転へラ前り	白色-褐色	良好、緻密	リット2	2		195			
第147-48	SY01	蓋C	12.9		2.2	天津部回転へラ前り	白色-褐色	良好	床直上	14		112			
第147-49	SY01	蓋C	13.4		2.1	天津部回転へラ前り	白色-褐色	良好	4層下部	20		62			

清水山廻跡須車器類表

開拓番号	遺物名	種	口徑 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器深 (cm)	技法の特徴	ヘラ 横き	色調	施成	層位	測定範囲 (cm)	測定 (cm)	測定 (cm)	備考
第147回-50	SY01	蓋B	15.2	2.2	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	4層下部	15	11.0	-	-
第147回-51	SY01	蓋B	15.6	2.8	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	4層下部	3	8.8	強体付着	-
第147回-52	SY01	蓋B	15.4	3.3	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	4層下部	3	8.3	-	-
第147回-53	SY01	蓋B	16.4	2.55	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	P.t 2	22	5.9	-	-
第147回-54	SY01	蓋B	16	2.75	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	4層下部	9	8.8	-	-
第147回-55	SY01	蓋B	16.4	2.6	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	-	11	15.3	-	-
第147回-56	SY01	蓋B	16.1	2.5	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	床直	2	12.7	-	-
第147回-57	SY01	蓋B	16.2	2.8	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	床直	5	11.7	-	-
第147回-58	SY01	蓋B	16.4	2.7	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	床直	26	7.4	-	-
第147回-59	SY01	蓋B	16.6	2.5	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	床下	12	11.6	-	-
第147回-60	SY01	蓋B	16.6	2.8	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	4層下部	14	11.3	-	-
第147回-61	SY01	蓋B	17	3.4	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	床直	2	12.1	-	-
第147回-62	SY01	蓋B	16.6	2.6	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	床直	5	11.7	-	-
第147回-63	SY01	蓋B	16.8	2.35	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)下部	5	6.4	-	-
第147回-64	SY01	蓋B	18	3.25	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)下部	3	7.3	-	-
第147回-65	SY01	蓋B	18	3.1	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	P.t 2	13	5.6	-	-
第147回-66	SY01	蓋B	16.2	3.45	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	床下	6	11.5	-	-
第147回-67	SY01	蓋B	15.5	2.7	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)下部	4	8.1	重ね底の痕跡	-
第147回-68	SY01	蓋B	17.6	2.4	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)下部	12	7.0	-	-
第147回-69	SY01	蓋B	16	1.85	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色	良好、縫合	床下	14	7.8	根ね身少しがれ	-
第147回-70	SY01	蓋B	16	2.1	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好、縫合	P.t 2	9	12.0	-	-
第147回-71	SY01	蓋B	16.3	2.15	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	15	6.3	-	-
第147回-72	SY01	蓋B	16.3	2.2	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	10	8.0	-	-
第147回-73	SY01	蓋B	16.4	9.1	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	15	7.5	-	-
第147回-74	SY01	蓋B	17	1.8	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	P.t 2	22	6.5	-	-
第147回-75	SY01	蓋B	17	2	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	4層下部	7	11.8	-	-
第147回-76	SY01	蓋B	16.4	1.7	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	11	7.3	-	-
第147回-77	SY01	蓋B	16.8	2.4	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	17	7.6	-	-
第147回-78	SY01	蓋B	17.8	1.7	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	13	11.4	-	-
第147回-79	SY01	蓋B	17.8	2.35	-	-	天井部回転ヘラ削り	-	褐色-灰色	良好	6.2(?)下部	16	10.0	-	-
第147回-80	SY01	蓋C	13.4	2.1	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	4層下部	16	1.0	-	-
第147回-81	SY01	蓋B	16.4	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	4層下部	16	1.62	-	-
第147回-82	SY01	蓋B	17.2	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	4層下部	6	5.7	-	-
第147回-83	SY01	蓋B	18.2	3.25	-	-	天井部回転ヘラ削り 後ナダ	井	褐色-灰色	付く秋葉	6.2(?)層下部	7	7.1	-	-
第147回-84	SY01	蓋B	18.2	2.95	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)層下部	20	8.4	-	-
第147回-85	SY01	蓋B	15	2.8	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	床直	19	2.61	-	-
第147回-86	SY01	蓋B	15.7	3.1	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層下部	4	1.65	-	-
第147回-87	SY01	蓋B	16	2.5	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層下部	11	1.59	-	-
第147回-88	SY01	蓋B	16.8	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層下部	12	1.62	-	-
第147回-89	SY01	蓋B	16.8	2.2	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層下部	27	1.57	-	-
第147回-90	SY01	蓋B	16.8	2	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層下部	24	8.7	-	-
第147回-91	SY01	蓋B	17.2	2.45	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	4層下部	8	7.7	-	-
第147回-92	SY01	蓋B	17	1.4	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	床直	10	2.54	-	-
第147回-93	SY01	蓋B	17	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	4層下部	14	1.63	-	-
第147回-94	SY01	蓋B	17	1.9	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6	1.58	-	-	
第147回-95	SY01	蓋B	16.8	2	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)層上部	26	7.9	-	-
第147回-96	SY01	蓋B	16.8	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	164	-	-	-
第147回-97	SY01	蓋B	16.8	2.75	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	32	2.55	-	-
第147回-98	SY01	蓋B	16.4	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	13	1.78	-	-
第147回-99	SY01	蓋B	17	-	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	5	2.01	-	-
第147回-100	SY01	蓋B	16.9	2.3	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	13	1.55	-	-
第147回-101	SY01	蓋B	15.5	2.2	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好、縫合	6.2(?)層上部	11	1.50	-	-
第147回-102	SY01	蓋A	21.2	3.4	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	27	6.1	-	-
第147回-103	SY01	蓋A	20.4	4.7	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	17	6.0	-	-
第147回-104	SY01	蓋A	21	2.7	-	-	天井部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	6.2(?)層上部	14	5.8	-	-
第147回-105	SY01	杯B	14.4	11.4	2.3	2.9	底部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	床下	18	18.4	-	-
第147回-106	SY01	杯B	16.2	11.5	2.6	3.1	底部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	床直	9	24.2	-	-
第147回-107	SY01	杯B	18.6	14.1	2.9	3.6	底部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	床直	10	15.5	-	-

湘水山家跡須惠公觀察表

因版番号	遺伝子	器 構	口型 (cm)	底座 (cm) A(cm) B(cm)	技術の特徴	ヘラ 接ぎ	色調	焼成	居位	寸法 (mm)		備 考
										幅	高さ	
第-145-108	SY01	杯B	16	11.4 3.7 4.4	底部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	4層下部-床下?	12	3	
第-145-109	SY01	杯B	15.8	10 4 4.8	底部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	4層下部	9	32	6
第-145-110	SY01	杯B	16.2	11.3 3.9 4.8	底部回転ヘラ削り	井	褐色-灰色	良好	床直	9	8	
第-145-111	SY01	杯B	14.9 5.5	4 4.8	底部回転ヘラ削り	井	灰色-灰色	良好	4層下部	21	22	9
第-145-112	SY01	杯B	11.4		底部回転ヘラ削り	井	灰色-灰色	良好	6層上面	0	24	10
第-145-113	SY01	杯B	16.2	12 3.9 4.6	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良・好	4層下部	17	32	7
第-145-114	SY01	杯B	15.8	10.6 6.4 5.2	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床下?	32	21	1
第-145-115	SY01	皿A	19.5		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床直	16	33	
第-145-116	SY01	皿A	22.2	2.25	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下部	12	32	
第-145-117	SY01	皿A	22	2.1	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下面	13	37	
第-145-118	SY01	皿A	22	2.5	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下面	15	40	
第-145-119	SY01	皿A	21.7	2.5	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好、繊密	6層上面	6	35	
第-145-120	SY01	皿A	22.6	2.5	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床直④層	13	30	
第-145-121	SY01	皿A	19.6		底部回転ヘラ削り	井	灰色-灰色	良好	6層下面	7	12	
第-145-122	SY01	皿A	22.2	2.9	底部ヘラ削り(縱横方向)	井	灰色-灰色	良好	5層上面	11	18	
第-145-123	SY01	皿A	22	2.5	底部ヘラ削り(縦横方向)	井	褐色-褐色	良好	4層下部	9	22	
第-145-124	SY01	皿A	22.6	2.7	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好	6層下面	10	26	
第-145-125	SY01	皿A	22	3.7	底部ヘラ削り(縦横方向)	井	褐色-褐色	良好	6層上面	15	36	
第-145-126	SY01	皿A	21.2		底部ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	5区 6層	8	38	
第-145-127	SY01	皿A	23	3.2	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好	4層下部	15	15	
第-145-128	SY01	皿A	22.7	2	底部ヘラ削り(一方向)	高井	褐色-褐色	良好	床直 4層	23	34	
第-145-129	SY01	皿A	22		底部ヘラ削り	高井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	14	193	
第-145-130	SY01	皿A	19.9	1.6	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	16	25	
第-145-131	SY01	皿A	19.2	2.05	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	4層下面	32	11	
第-145-132	SY01	皿A	20.4	2.1	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	16	39	
第-145-133	SY01	皿A	20	2.1	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	13	31	
第-145-134	SY01	皿A	21.4	2	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直 5層	30	43	
第-145-135	SY01	皿A	20	2.1	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下部-床下	17	28	
第-145-136	SY01	皿A	19.6	2.7	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床直	16	41	
第-145-137	SY01	皿A	21	3.25	底部ヘラ削り(多方向)	井	褐色-褐色	良好	床直	15	27	
第-145-138	SY01	皿A	22.8	3	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好	床下	16	13	
第-145-139	SY01	皿A	22.6	2.25	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下面	17	16	
第-145-140	SY01	皿A	22	2.6	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好	4層下部	3	24	
第-145-141	SY01	皿A	22	2.6	底部ヘラ削り(縦横方向)	井	褐色-褐色	良好	4層下部	24	29	
第-145-142	SY01	皿A	22.2	3.9	底部ヘラ削り(一方向)	井	褐色-褐色	良好	床直	17	20	
第-145-143	SY01	皿C	19.6		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	⑤区 3層	5	53	
第-145-144	SY01	皿A	35	27.2	4.6 底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	4層下面	17	20	218
第-145-145	SY01	皿A	34	24.4	2.6 底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下部	12	11	214
第-145-146	SY01	皿A	34		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	4層下面	9	212	
第-145-147	SY01	皿A	34	26.2	3.8 底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	6層	8	7	215
第-145-148	SY01	皿A	34	26	3.6 底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床下	10	20	210
第-145-149	SY01	高杯A	17.6		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下部	14	171	
第-145-150	SY01	高杯A	18		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	14	188	
第-145-151	SY01	高杯A	17		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床下	12	196	
第-145-152	SY01	高杯A	17.6	1.5	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	4層下面	15	14	
第-145-153	SY01	高杯A	17.8		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	⑤区 3層	14	42	
第-145-154	SY01	高杯A	19	0.95	底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	⑤区 6層	8	19	
第-145-155	SY01	高杯A	18.4		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	11	192	
第-145-156	SY01	高杯A	17		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直	11	178	
第-145-157	SY01	高杯A	18		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	⑤区 3層	12	21	
第-145-158	SY01	高杯A	17		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	4層下面	13	190	
第-145-159	SY01	高杯A	18.5		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床直 9区左	11	169	
第-145-160	SY01	高杯A	17.2		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	6層上面	14	167	
第-145-161	SY01	高杯A	17.3		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	床直、床下	16	206	
第-145-162	SY01	高杯A	18.2		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好、繊密	4層下部	14	184	
第-145-163	SY01	高杯A	18		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床直	13	180	
第-145-164	SY01	高杯A	18		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	床直	7	198	
第-145-165	SY01	高杯A	17.9		底部回転ヘラ削り	井	褐色-褐色	良好	⑤区 6層	4	17	

清水山窯跡須恵器観察表

因版番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器深 (cm)	技術的特徴	ヘラ 焼き	色調	施成	層位	標高 (m)	標高 (m)	標高 (m)	備考
第151區-166	SY01	高杯A	18				底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	未定・④区(4層)	5	186		
第152區-167	SY01	高杯A	18				底部欠損	井	灰褐色	良好	④区床直	4	200		
第153區-168	SY01	高杯A	17.8				底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好、微密	未定・④下層	23	194		
第154區-169	SY01	高杯A	17.8				底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	⑤区 G層		204		
第155區-170	SY01	高杯A	17.6				底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好、微密	未定・④下層	27	208		
第156區-171	SY01	高杯A	17.4				底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	口縁付土器(2層)	18	174		
第157區-172	SY01	高杯B	26.4	2				井	灰褐色		未定・④上層	32	52		
第158區-173	SY01	高杯B	25	2			底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	未定・正斜面	27	44		
第159區-174	SY01	高杯B	25.2	2.1			底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好、微密	未定・正斜面	15	51		
第160區-175	SY01	高杯B	21.6				底部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	⑤区 G層		236		
第161區-176	SY01	碗D(丸い脚)	12				盃形回転ヘラ削り、底盤つめ形列あり	井	灰褐色	良好	梵口付近	11	545		
第162區-177	SY01	碗E	10.9				口頭部ナデ	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	3	291		
第163區-178	SY01	碗E	14				口頭部ナデ	井	灰褐色	良好、微密	P i t 2	7	187		
第164區-179	SY01	碗E	13.6				口頭部ナデ	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	6	189		
第165區-180	SY01	碗D	27.5				口頭部ナデ(タスキシテ、側面兩タク)、内底面有輪底	井	灰褐色	良好	梵口付近	3	47		
第166區-181	SY01	碗D	30.2				口頭部タスキシテ、側面付タク	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	4	46		
第167區-182	SY01	碗D	33.9				口頭部タスキシテ、側面付タク、内底面有輪底	井	灰褐色	良好	梵口付近	6	48		
第168區-183	SY01	碗A	28.8				口頭部コロナ?	井	灰褐色	良好、微密	P i t 2	7	55		
第169區-184	SY01	碗A	44.5				口頭部横形脱状放	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	1	45		
第170區-185	SY01	碗A	48.2				口頭部沈縫後廻捲波状紋	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	2	227		
第171區-186	SY01	碗A	45.4				口頭部横捲波状紋 楽曲一ツ紋	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	3	224		
第172區-187	SY01	碗A	45.6				口頭部横捲波状紋 楽曲一ツ紋	井	灰褐色	良好、微密	P i t 2	1	226		
第173區-188	SY01	碗A	54.8				口頭部横捲波状紋 楽曲一ツ紋	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	3	225		
第174區-189	SY01	碗A	52.4				口頭部横捲波状紋	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	4	229	未定・北斜面	
第175區-190	SY01	碗A	63.8				口頭部横捲波状紋 楽曲一ツ紋	井	灰褐色	良好、微密	梵口付近	8	230	未定・北斜面	
第176區-1	SY02	杯A	13.4	8.4	3.3		底部ヘラ切り後ナデ	井	灰褐色	C層		28	29	237	
第177區-2	SY02	杯A	16	10	3		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	C層	9	17	244		
第178區-3	SY02	杯A	13.6	9.5	3.4		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	B層	5	13.5	578	
第179區-4	SY02	杯A	13.8	9.5	3.4		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	C層	10	14	250	
第180區-5	SY02	杯A	13.8	9.2	3.4		底部不明瞭	井	灰褐色	良好	C層	17	2	239	
第181區-6	SY02	杯A	14	8.5	3.5		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	C層	20	31	158	
第182區-7	SY02	杯A	13	8	3.9		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	C層	3	32	241	
第183區-8	SY02	杯A	13	9	3.7		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	C層	19	28	242	
第184區-9	SY02	杯A	13	9.6	3.8		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	C層	7	16	247	
第185區-10	SY02	杯A	13.8	9.4	3.8		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	複数床直	16.5	21	579	
第186區-11	SY02	杯A	14	9.5	3.7		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	C層	9	12	251	
第187區-12	SY02	杯A	13.8	5.1	4.3		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	B層	14	13	576	火葬(内側)
第188區-13	SY02	杯A	12.8	8.8	4		底部不明瞭	井	灰褐色	良好	C層	2	9	577	
第189區-14	SY02	杯A	13.2	9	3.9		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	B層	17.5	32	574	
第190區-15	SY02	杯A	13	7.8	4.2		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	4	14	252		
第191區-16	SY02	杯A	13.4	6.4	4.2		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	7	9	249		
第192區-17	SY02	杯A	14	6.0	4.4		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	10		257		
第193區-18	SY02	杯A	14	7.4	4.2		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	20	32	238		
第194區-19	SY02	杯A	14	8.2	4.5		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	2	13	253		
第195區-20	SY02	杯A	15	8	4.4		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	B層	15	6	248	
第196區-21	SY02	杯A	14	8.6	4.5		底部不明瞭	井	灰褐色	良好	C層	10	20	240	
第197區-22	SY02	杯A	15.2	8	3.7		底部ヘラ切り後板ヘナナデ	井	灰褐色	良好	B層	16	16	246	
第198區-23	SY02	杯A	15.8	6.2	4.6		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	C層	16	1	258	
第199區-24	SY02	杯A	15.4	8	4.4		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	C層	8	19	243	
第200區-25	SY02	杯A	13.4	7.2	4.8		底部不明瞭	井	灰褐色	良好	C層	12	12	580	
第201區-26	SY02	杯A	13.8	9.2	4.8		底部ヘラ切り	井	灰褐色	良好	B層	9	15	575	
第202區-27	SY02	杯A	13.8	7.8	4.1		底部不明瞭	井	灰褐色	良好	C層	1	30	552	
第203區-28	SY02	杯A	13	5.5	4.8		底部不明瞭	井	灰褐色	良好	C層	6	17	553	
第204區-29	SY02	蓋B	16		1.6		天井部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	複数床直	4	277		
第205區-30	SY02	蓋B	15.8		1.7		天井部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	複数床直	6	586		
第206區-31	SY02	蓋B	15.2		2.5		天井部互転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	C層	11	602		
第207區-32	SY02	蓋B	15		2.4		天井部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	C層	10	266		
第208區-33	SY02	蓋B	15.8		2.3		天井部回転ヘラ削り	井	灰褐色	良好	C層	3	595		

清水山廬跡須恵器觀察表

文庫番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 A(cm)	器高 B(cm)	性状の特徴	ヘラ 幅	色調	施成	部位	寸法 横幅 縦幅 厚さ (cm) (cm) (cm)	整理 番号	備考	
第158回-34	SY02	盃B	16.8	2.3			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好、緻密	C層	9	262		
第2回-35	SY02	盃B	14.4	3	1		天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好、緻密	B層		594		
第2回-36	SY02	盃B	15.6	2.9			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層	8	276		
第2回-37	SY02	盃B	15.6	2.8			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層	18	265		
第2回-38	SY02	盃B	15.4	3			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層	6	585		
第2回-39	SY02	盃B	16	2.3			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層	2	294		
第2回-40	SY02	盃B	16.4	2.6			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層	11	596		
第2回-41	SY02	盃B	16.4	2.8			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	B層	5	273		
第2回-42	SY02	盃B	16	2.9			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	甘く歓賞	C層	2	272		
第2回-43	SY02	盃B	17	5.1			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	甘く歓賞	C層	2	274		
第2回-44	SY02	盃B	17	2.9			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	やや古く歓賞	焼成部底直	22	259		
第2回-45	SY02	盃B	16	3.2			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好、緻密	C層	13.5	599		
第2回-46	SY02	盃B	16.2	3.2			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	B層	12	268		
第2回-47	SY02	盃B	20.4	1.9			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	焼成部底直	14	598		
第2回-48	SY02	盃B	17.8	2			天井部回転へラ削り		褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	4	263		
第298回-49	SY02	杯B	14.6	11.0	3.4		底部回転へラ削り		褐色-茶色	やや古く歓賞		17	14	281	
第2回-50	SY02	杯B	14.8	11.2	3.4		底部回転へラ削り		褐色-茶色	良好		13	19	280	
第2回-51	SY02	杯B	15.6	12	2.8	3.2	底部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	焼成部底直	23	32	547	
第2回-52	SY02	杯B	15.2				底部欠損		褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	9	254		
第2回-53	SY02	杯B	15	11	3.6		底部へラ切り		褐色-茶色	良好	C層	17	15	554	
第2回-54	SY02	杯B	15.6	13	3	3.5	底部欠損		褐色-茶色	良好、緻密	A・B層	12	12	313	
第2回-55	SY02	杯B	14	10.8	3.5		底部瓦転へラ削り		褐色-茶色	良好	B層	11	19	545	
第2回-56	SY02	杯B	15	10.2	3.1	3.6	底部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層	8	265		
第2回-57	SY02	杯B	16				底部欠損		褐色-茶色	甘く歓賞	C層				
第2回-58	SY02	杯B	13.8	1.	3.9		底部へラ切り		褐色-茶色	良好、緻密	焼成部底直	17	19	282	
第2回-59	SY02	杯B	18	13	5.6		底部回転へラ削り		褐色-茶色	良好	C層				
第2回-60	SY02	杯B		11.6			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	良好	C層	16	279	
第2回-61	SY02	杯B		10.9			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞	A・B層	12	12	314
第2回-62	SY02	杯B		7.6			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞		10	561	
第2回-63	SY02	杯B		11.2			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	良好		14	556	
第2回-64	SY02	杯B		10.2			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	良好		10	550	
第2回-65	SY02	杯B		7			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞		6	557	
第2回-66	SY02	杯B		10			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞	B層	21	562	
第2回-67	SY02	杯B		8.2			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	11	18	558
第2回-68	SY02	杯B		10.8			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞		7	559	
第2回-69	SY02	杯B		8.5			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞	B層	5	560	
第2回-70	SY02	杯B		11			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	21	555	脚部分
第2回-71	SY02	杯B		5.8			底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞		12	563	
第2回-72	SY02	碗C	15.2				体部外、外面回転ナデ		褐色-茶色	良好、緻密	焼成部底直	9	283		
第2回-73	SY02	碗C	20.8	13.4	6.2	6.6	底部回転へラ削り		井	褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	2	14	546
第2回-74	SY02	盃B	21	12.8	1.7	2.6	底部瓦転へラ削り		褐色-茶色	やや古く歓賞		13	12	573	
第2回-75	SY02	交杯					底部の残存		褐色-茶色	良好			5	562	
第150回-76	SY02	楕円	12.1				口頸部基ナダ(瓶方式)		褐色-茶色	良好、緻密		15	570		
第2回-77	SY02	楕原	11.9				口頸部ヨコナナ		褐色-茶色	良好、緻密	C層	18	321	板?	
第2回-78	SY02	楕原					体部外、外面タキナ、体割内一面ハケ		褐色-茶色	良好、緻密			856		
第2回-79	SY02	楕原					体割内タキナ、被割部内斜面ノボリ、斜面ノラフ		褐色-茶色	良好、緻密			855		
第2回-80	SY02	長颈壺A					肩部ナナデ(板式工具窓)依上部ナナ		褐色-茶色	良好			854		
第2回-81	SY02	長颈壺A	14.6				底部破缺へラ削り、下部斜面削りへラ削り		褐色-茶色	良好、緻密	C層	9	312		
第2回-82	SY02	耳耳壺	12				外唇タキナリケシ、平行沈割2条あり		褐色-茶色	良好、緻密	C層	10	319		
第2回-83	SY02	盃C	13				下部外、外唇へラ削り、底部欠損		褐色-茶色	良好			320		
第2回-84	SY02	盃C	12.8	4.3			天井部瓦転へラ削り		褐色-茶色	良好、緻密	C層	11	572		
第2回-85	SY02	彌形壺B	29.3				肩部筋状の沈線が2~3条あり		褐色-茶色	良好、緻密	C層		315	日清紡大蔵屋	
第2回-86	SY02	彌形壺C	21				口頸部ヨコナナ		褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	5	308		
第2回-87	SY02	彌形壺C	20.6				口頸部~体部ヨコナナ		褐色-茶色	やや古く歓賞	焼成部底直		564		
第2回-88	SY02	彌形壺C	18.6				二層部タキナリケシ、体部外側タキナ		褐色-茶色	良好、緻密	A層	5	301		
第2回-89	SY02	彌形壺C	19				二層部瓦転ナナ、体部外側タキナリケシ		褐色-茶色	良好、緻密	B層	8.5	566		
第151回-90	SY02	盃B	21.2				口頸部ヨコナナ		褐色-茶色	やや古く歓賞	C層	3	309		
第2回-91	SY02	盃B	32.4				口頸部~体部ヨコナナ、外側タキナリケシ		褐色-茶色	良好、緻密	C層	5	299		

清水山窯跡須恵器觀察表

箇所番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 A(cm)	基高 B(cm)	枝状の特徴	ヘラ 結き	色調	焼成	着位	出 露 面 積 m ²	積 量 kg	備 考
第16区-02	SYC2	甕D	21.7				口部タクシスリケシ 体部外面タキ	灰色-灰白	良好	C層	4	293		
第2区-93	SYO2	甕D	28.5				口部部ヨコナア 体部外面タキ	灰色-灰白	やや青(軟質)	C層	5	289		
第2区-94	SYO2	甕D	32				口部部タクシスリケシ 体部外面タキ	灰白-白色	やや青(軟質)	C層	2	284		
第2区-95	SYO2	甕D	31.5				口部部タクシスリケシ 体部外面タキ	灰白-白色	良好、緻密	C層	2	288		
第2区-96	SYO2	甕D	44.8				口部部体部附着タクシスリケシ 体部内面粗面	灰白-白色	良好	焼成窓底直	5	297		
第2区-97	SYO2	甕D	31.4				二頭部タクシスリケシ 体部外面タキ	灰白-白色	やや青(軟質)	C層	2	311	丸底	
第2区-98	SYO2	甕D	32				口部部-体部外面タクシスリケシ 内面ヨコナ	灰色-灰白	やや青(軟質)	B層	5	290	丸底	
第2区-99	SYO2	甕D	34				口部部一部外部タクシスリケシ	灰白-白色	良好	焼成窓底直	5	303	丸底	
第2区-100	SYO2	甕D	36				口部部-体部外面タキスリケシ 体部内面粗面	灰色-灰白	やや青(軟質)	C層	4	294		
第2区-101	SYO2 M.S.W.	瓶	19.2	12.4			口部部タクシスリケシ 体部外面タキ	灰色-灰白	良好、緻密	C層	15	776		
第15区-102	SYO2	甕A	30.5				口部部タクシスリケシ 体部外面タキ	灰色-灰白	良好、緻密	A層	11	323		
第2区-103	SYO2	甕把手					把手部タキタヒヘラ削り後ナダ	赤褐色	良好、緻密	C層		316		
第2区-104	SYO2	甕A	61.8				口部部柄結波状紋、肩倉一つ紋	灰白-白色	良好	C層	7	285		
第2区-105	SYO2	甕A底部	10.8				大底外面タキ、底部内面ナナデ	灰色-灰白	良好	C層		322		
第2区-106	SYO2	甕A底部	10.8				大底外面タキ、底部内面ナナデ	灰色-灰白	やや青(軟質)	C層		323		
第2区-107	SYO2	甕A底部	10				大底外面タキ、底部内面ナナデ	灰色-灰白	やや青(軟質)	C層		324		
第2区-108	SYO2	甕A	55				口部部横縦状波状紋、体部外面タキ	灰色-灰白	良好	B層	7	326		
第16区-1	SYO3	灰A	14.9	10.6	3.1		底部ヘラ切り	灰色-灰白	良好	C層	17	18	347	
第2区-2	SYO3	灰A	14	8.8	3.5		底部部ヘラ切り後ナダ	灰色-灰白	良好、緻密	C層	18	23	340	
第2区-3	SYO3	灰A	13.5	8	3.5		底部部ヘラ切り	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	22	32	337	
第2区-4	SYO3	灰A	14.1	10.2	3.5		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	やや青(軟質)	B層	32	32	343	
第2区-5	SYO3	灰A	13.3	8	3.3		底部部ヘラ切り	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	28	32	344	
第2区-6	SYO3	灰A	12.2	4.2	3.8		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	表土	7	22	333	
第2区-7	SYO3	灰A	15	10.2	3.4		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	C層	19	28	338	
第2区-8	SYO3	灰A	13.6	8.2	3.5		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	29	32	338	
第2区-9	SYO3	灰A	13.9	10	3.6		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	14	32	353	
第2区-10	SYO3	灰A	14.2	9	3.9		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	C層	20	32	351	
第2区-11	SYO3	灰A	14.5	10.2	3.5		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	やや青(軟質)	C層	6	27	352	
第2区-12	SYO3	灰A	13.6	8.6	3.5		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	C層	9	16	348	
第2区-13	SYO3	灰A	13.7	9.2	2		底部部ヘラ切り	灰色-灰白	良好	C層	13	11	343	
第2区-14	SYO3	灰A	14	9	4.2		底部部ヘラ切り後ナナデ	灰色-灰白	良好	C層	12	13	350	
第2区-15	SYO3	灰A	14	9.2	4.8		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	28	32	339	
第2区-16	SYO3	灰A	14.4	5.9	3.5		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	22	32	335	
第2区-17	SYO3	灰A	14.3	6.8	3.85		底部部ヘラ切り後板ヘラナナデ	灰色-灰白	良好	焼成窓未直	32	32	341	
第2区-18	SYO3	灰A	15	10.7	4.1		底部部ヘラ切り	灰色-灰白	良好	C層	3	30	345	
第2区-19	SYO3	灰A	15	9.2	4.1		底部部ヘラ切り	灰色-灰白	良好	C層	14	25	346	
第2区-20	SYO3	杯A	14.8	6.9	4.35		底部部ヘラ切り後小ナナデ	灰色-灰白	やや青(軟質)	C層	9	16	342	
第2区-21	SYO3	杯A	15.2	1.7			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好	C層	28	371		
第2区-22	SYO3	盞B	15.6	1.6			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	焼成窓未直	24	364		
第2区-23	SYO3	盞B	15.5	2.4			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好	C層	29	380		
第2区-24	SYO3	盞B	14.6	2.5	1		天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	C層	30	372		
第2区-25	SYO3	盞B	15.4	2.5			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	B層	35	375		
第2区-26	SYO3	盞B	16	2.5			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	B・C層	27	361		
第2区-27	SYO3	盞B	15.2	2.5			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	A層	13	532		
第2区-28	SYO3	盞B	16.4	2.4			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	C層	6	366		
第2区-29	SYO3	盞B	14.7	2.7			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	塑	3	536		
第2区-30	SYO3	盞B	15.2	3.1			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	A層	12	540		
第2区-31	SYO3	盞B	15.9	2.4			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	C層	22	357		
第2区-32	SYO3	盞B	15	2.35			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	C層	21	373		
第2区-33	SYO3	盞B	17.5	3			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	A層	5	535		
第2区-34	SYO3	盞B	17.1	2.3			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	B・C層	16	359		
第2区-35	SYO3	盞B	15	3			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	C層	11	362		
第2区-36	SYO3	盞B	15.4	2.2			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	B・C層	20	369		
第2区-37	SYO3	盞B	15.8	2.6			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	C層	19	356		
第2区-38	SYO3	盞B	15.8	2.6			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	燒成窓底直	32	377		
第2区-39	SYO3	盞B	15.8	3			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	B・C層	32	374		
第2区-40	SYO3	盞B	14.5				天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	塑	10	541		
第2区-41	SYO3	盞B	16.6	2.7			天津部回転ヘラ削り	灰色-灰白	良好、緻密	燒成窓底直・C層	25	379		

清水山窟跡須恵器觀察表

図版番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	厚さ (cm)	技術の特徴		形状	色調	焼成	層位	寸法 (mm) 底面 (mm) 側面 (mm)		整理 番号	備考	
							天井部回転へラ削り	天井部回転へラ削り									
第65区-42	SY03	蓋B	15.5	2.95						良好、織密	底皮底座C層		32	363			
第65区-43	SY03	蓋B	16.3	3						良好、織密	底皮底座A-C層		32	358			
第65区-44	SY03	蓋B	14.5	2.7						良好、織密	A・B層		3	530			
第65区-45	SY03	蓋B	15.2	3.2						良好、織密	C層		28	370			
第65区-46	SY03	蓋B	15.6	3						良好、織密	B層		32	376			
第65区-47	SY03	蓋B	16.3	3						良好、織密	C層		25	378			
第65区-48	SY03	蓋B	16.8	2.4						井	灰色 沖色	良好、織密 表土	8	542	摘みなし		
第65区-49	SY03	蓋B	17.8	2.8						良好、織密	C層		3	368			
第65区-50	SY03	蓋B	17	3.1						良好、織密	A-B-C層		32	360			
第167区-51	SY03	杯B	14.1	10.6	2.4	2.8	底部回転へラ削り	底部回転へラ削り		良好、織密	底皮底座床直		21	32	382		
第65区-52	SY03	杯B	14.6	11.2	2.9	3.7				良好、織密	C層		19	32	381		
第65区-53	SY03	杯B	15	11.8	2.7	3.2				良好、織密	A層		12	19	384		
第65区-54	SY03	杯B	15.2	11.5	3.3	3.8				良好、織密	C層		10	14	383		
第65区-55	SY03	杯B	9.4							井	褐色-褐色	良好	4	区床下	9 551		
第65区-56	SY03	杯B	16	2.5			底部回転へラ削り	底部回転へラ削り		褐色-褐色	良好	底成都床直	6	828			
第65区-57	SY03	高杯A	16.5							井	褐色-褐色	良好	5	537			
第65区-58	SY03	短頸甌A	6.8				底部上部外面部カキメ	底部上部外面部カキメ		褐色-褐色	C層		5	688			
第65区-59	SY03	長頸甌A					底部外観ノホリナデ	底部外観ノホリナデ		褐色-褐色	良好、織密	底成都床直	5	534			
第65区-60	SY03W	燒瓶					不明瞭	不明瞭							857 SW01と接合		
第65区-61	SY03	燒瓶					体部外面タクキスリケシ	体部外面タクキスリケシ	井?	褐色-褐色	良好、織密 表土		5	569			
第65区-62	SY03	燒瓶	20.4				ヨコナデ	ヨコナデ		褐色-褐色	良好	底成都床直	6	829			
第65区-63	SY03	變A	24.1				口頸部タクキスリケシ	口頸部タクキスリケシ		褐色-褐色	良好、織密	C層	5	393			
第65区-64	SY03	鉢D	28.6				体部外面タクキスリケシ	体部外面タクキスリケシ		褐色-褐色	良好	A層	4	389			
第65区-65	SY03	變D	27.4				体部外面タクキスリケシ、体部内面ハケ	体部外面タクキスリケシ、体部内面ハケ		褐色-褐色	良好、織密	B層	2	396			
第65区-66	SY03	鉢D	30				体部外面タクキスリケシ(ヘラ状工具による)	体部外面タクキスリケシ(ヘラ状工具による)	井?	褐色-褐色	良好、織密	C層	9	388			
第65区-67	SY03	變D	32				褐色-褐色	褐色-褐色		褐色-褐色	良好、織密	B-C層	24	385			
第65区-68	SY03	變E	14.6				体部外面タクキスリケシ	体部外面タクキスリケシ	井?	褐色-褐色	良好、織密 表土		9	545			
第168区-69	SY03	變C	20.7				底部外面タクキスリケシ	底部外面タクキスリケシ		褐色-褐色	やや古く軟質	黒褐色土?	9	545			
第65区-70	SY03	變C	18				底部外面タクキスリケシ	底部外面タクキスリケシ		褐色-褐色	やや古く軟質	C層	5	390			
第65区-71	SY03	變C	21.4				底部外面タクキスリケシ	底部外面タクキスリケシ		褐色-褐色	良好	底成都床直	7	391			
第65区-72	SY03	變C	19.6				底部外觀タクキスリケシ、体部内面(其底あり)	底部外觀タクキスリケシ、体部内面(其底あり)		褐色-褐色	良好、織密	C層	32	403			
第65区-73	SY03	變E	41.4				体部外面タクキスリケシ、底部内面(其底あり)	体部外面タクキスリケシ、底部内面(其底あり)	井?	褐色-褐色	やや古く軟質	A-B層	5	398			
第65区-74	SY03	變C	20.7				口頸部焼痕一ツ紋	口頸部焼痕一ツ紋		褐色-褐色	やや古く軟質	C層	5	390			
第65区-75	SY03	變A	57.4				口頸部焼痕波状紋	口頸部焼痕波状紋		褐色-褐色	良好	B-C層	3	397			
第65区-76	SY03	變A	64.2				口頸部焼痕波状紋	口頸部焼痕波状紋		褐色-褐色	良好、織密	C層	3	400	色調外-内火葬		
第65区-77	SY03	變A	53.6				口頸部焼痕波状紋	口頸部焼痕波状紋		褐色-褐色	良好、織密	C層	24	401			
第65区-78	SY03	變A	35.6				口頸部タクキスリケシ	口頸部タクキスリケシ		褐色-褐色	良好、織密	底成都床直	5	395			
第65区-79	SY03	變A					變の一部	變の一部		褐色-褐色	良好	底面		787 燃台			
第71区-1	SW01	杯A	13.6	9.2	2.8		底部へラ切り 布目痕あり	底部へラ切り 布目痕あり		褐色-褐色	良好	PP22 PM01 PL01	9	14	591		
第71区-2	SW01	杯A	13.8	8.8	3.1		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	IIb層	5	8	462		
第71区-3	SW01	杯A	12.6	8.6	3.3		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	B②区II層	8	13	590		
第71区-4	SW01	杯A	13.6	7.4	3.4		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	IIb層	4	18	470		
第71区-5	SW01	杯A	13.5	7.2	3.4		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	IIbトレンチ	17	16	459 色調外-内火葬		
第71区-6	SW01	杯A	14	9.3	3.2		底部へラ切り後ナデ	底部へラ切り後ナデ		褐色-褐色	良好	II層	18	32	417		
第71区-7	SW01	杯A	14.4	9	3.2		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	TA-I層	8	11	601		
第71区-8	SW01	杯A	13.1	7	3.3		底部不明瞭	底部不明瞭		褐色-褐色	良好、織密	F001MB層	9	13	418		
第71区-9	SW01	杯A	13	5.8	3.4		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	やや古く軟質	I層	7	11	465		
第71区-10	SW01	杯A	13.8	8.8	3.7		底部へラ切り後ナデ	底部へラ切り後ナデ		褐色-褐色	良好	FM03MB層	24	8	422 色調外-内火葬		
第71区-11	SW01	杯A	13.3	8.6	3.5		底部不明瞭	底部不明瞭		褐色-褐色	やや古く軟質	JA-I層	14	13	467		
第71区-12	SW01	杯A	13.2	7	4.1		底部へラ切り後ナデ	底部へラ切り後ナデ		褐色-褐色	良好	IIIb層	18	20	472		
第71区-13	SW01	杯A	13.8	5.2	3.5		底部へラ切り後ナデ	底部へラ切り後ナデ		褐色-褐色	良好	IIIb層	6	12	461		
第71区-14	SW01	杯A	14.6	10.4	3.6		底部へラ切り後板へナデ	底部へラ切り後板へナデ		褐色-褐色	良好	IIIbトレンチ	6	10	463		
第71区-15	SW01	杯A	15	10.4	3.5		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	FL03	7	12	427		
第71区-16	SW01	杯A	14.3	9.2	3.4		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	良好	II層	12	16	458		
第71区-17	SW01	杯A	15	7.4	3.4		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	古く軟質	PM03MB層	8	20	421		
第71区-18	SW01	杯A	14.2	5.2	3.5		底部へラ切り後板へナデ	底部へラ切り後板へナデ		褐色-褐色	E	III 4層	7	13	466		
第71区-19	SW01	杯A	13.4	7.6	4.2		底部へラ切り後ナデ	底部へラ切り後ナデ		褐色-褐色	良好	FN01MB層	6	16	426		
第71区-20	SW01	杯A	13.6	9.2	3.7		底部へラ切り	底部へラ切り		褐色-褐色	やや古く軟質	不明	12	32	587		

清水山廬跡須恵器観察表

図版番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 H(cm)/壁厚 B(cm)	技法の特徴	ヘラ 焼き	化粧	焼成	層位	断面 形状	断面 寸法	編 番号	備考	
第171-21	SW01	杯A	13.8	8.8	3.8	底部へラ切り後ナデ	無地	良好	PLEICH層	4	19	424			
第172-22	SW01	杯A	14.4	9.2	3.6	底部ヘラ切り	無地	良好	PLEICH層	8	12	423			
第172-23	SW01	杯A	13.4	7.6	3.9	底部へラ切り後ナデ	無地	良好	PKE-III層	18	30	471			
第172-24	SW01	杯A	14.8	9.6	4.2	底部へラ切り後板へナナア	無地	良好	PKE-III層	8	16	460			
第172-25	SW01	杯A	13.2	7.6	4	底部へラ切り後ナデ	褐色-青色 やや古く放熱	1層		6	17	454			
第172-26	SW01	杯A	14.5	5	3.7	底部ヘラ切り	褐色-青色 やや古く放熱	1層	レトレンチ	16	16	458			
第172-27	SW01	杯A	14.2	8.2	4	底部へラ切り	褐色-青色 良好	月桂日輪Ⅲ層	10	11	600	木葉底			
第172-28	SW01	杯A	14.6	8.5	3.8	底部へラ切り後ナデ	褐色-青色 良好、縦筋	月桂日輪Ⅲ層	1層	3	19	473			
第172-29	SW01	杯A	14.8	4.2	—	底部へラ切り後板へナナア	褐色-青色 良好	良好	PLEICH層	9	9	420			
第172-30	SW01	杯A	13	6	4.2	底部へラ切り後板へナナア	褐色-青色 良好	良好	卷葉面高尾土	7	12	588			
第172-31	SW01	杯A	18.8	4.8	4.2	底部へラ切り後ナデ	褐色-青色 良好	今やく放熱	PKE-III層	16	19	469			
第172-32	SW01	杯A	14	6.8	4.3	底部へラ切り	褐色-青色 良好、縦筋	AOGII層	3	26	425				
第172-33	SW01	杯A	14.4	8.6	4.6	底部へラ切り後板へナナア	褐色-青色 良好	良好	BORFELI層	6	26	592			
第172-34	SW01	杯A	17.2	9.4	4.2	底部不明瞭	褐色-青色 良好、縦筋	TA-1層	10	9	589				
第172-35	SW01	杯A	13.8	8.4	4.5	底部板へナナア	褐色-青色 良好	良好	TA-1層	3	8	689	色調内均あり		
第172-36	SW01	杯A	14	8.4	3.5	不明	—	甘口放熱	PM-04III層	16	611				
第172-37	SW01	盤B	15.8	—	1.8	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	HII b層	4	632					
第172-38	SW01	盤B	16.8	—	1.9	窓付付着のため不明	褐色-青色 良好	良好	III b層	10	558				
第172-39	SW01	盤B	15.8	—	2.1	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	TA-1層	5	633				
第172-40	SW01	盞	27	—	—	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	8	558				
第172-41	SW01	盞	15.4	—	1.9	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	III b層	3	652				
第172-42	SW01	盞	16.4	—	2.1	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	III b層	5	654				
第172-43	SW01	盞	15.8	—	2.5	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	III b層	6	685				
第172-44	SW01	盞	15.3	—	2.8	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PM-01III層	6	414				
第172-45	SW01	盞	15.2	—	1.9	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	HII b層	1	536				
第172-46	SW01	盞	16	—	2.7	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	I 層	11	655				
第172-47	SW01	盞	14.3	—	2.6	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	7	631				
第172-48	SW01	盞	15.8	—	2.6	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	I 层	15	630				
第172-49	SW01	盞	18	—	2.3	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	PM-02III層	2	411				
第172-50	SW01	盞	15.4	—	1.6	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PL-6III層	19	412				
第172-51	SW01	盞	15.6	—	2.3	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	1	657				
第172-52	SW01	盞	16.2	—	2.7	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	5	627				
第172-53	SW01	盞	16.6	—	2.7	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	I 层	5	635				
第172-54	SW01	盞	16.6	—	3	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	FK03III層	5	638				
第172-55	SW01	盞	18.4	—	2.4	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	PM-03III層	6	416				
第172-56	SW01	盞	14.8	—	2.5	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PM-02III層	15	637				
第172-57	SW01	盞	15.6	—	2.3	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	3	639				
第172-58	SW01	盞	16.6	—	2.8	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PM-03	10	413				
第172-59	SW01	盞	16.8	—	2.5	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	14	640				
第172-60	SW01	盞	15.4	—	2.7	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	トランク高尾土 主張土	10	641				
第172-61	SW01	盞	16.8	—	3.3	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	5	656				
第172-62	SW01	盞	16.9	—	3.2	天井部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	主張土	7	634				
第172-63	SW01	盞A?	—	—	—	天井部回転へラ削り	井	褐色-青色 良好	検出面		644				
第172-64	SW01	盞A	—	—	—	天井部回転へラ削り	井	褐色-青色 良好	良好	PM-04WADAKA	642				
第172-65	SW01	杯B	14.4	12	2.3	2.8	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA	12	485			
第172-66	SW01	杯B	13.2	13	2.6	3.2	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	TA-1層	5	648			
第172-67	SW01	杯B	14.8	12	2.2	2.9	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	表土	4	13	618		
第172-68	SW01	杯B	15.8	12	2.5	2.8	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PL-6III層	7	15	437		
第172-69	SW01	杯B	14.4	10.7	2.3	3.2	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PM-02III層	7	16	428		
第172-70	SW01	杯B	14.8	12	2.5	3	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	PL-6III層	14	31	436		
第172-71	SW01	杯B	15.4	11.2	3.2	—	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PL-6III層	6	16	474		
第172-72	SW01	杯B	15.2	11.6	2.5	3.1	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	PM-02高尾土	19	33	613		
第172-73	SW01	杯B	15.8	11.8	3.1	—	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	B-02II層	7	15	476		
第172-74	SW01	杯B	16	11.3	2.7	3.3	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	PM-02高尾土	1	33	522		
第172-75	SW01	杯B	14.8	11.4	2.7	3.2	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	トランシ	4	7	477		
第172-76	SW01	杯B	16	13.6	2.5	3	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	III b層	4	9	479		
第172-77	SW01	杯B	14.2	10.8	3	3.5	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好、縦筋	II-02高尾土	5	12	616		
第172-78	SW01	杯B	14.6	10.6	3	3.3	底部回転へラ削り	褐色-青色 良好	良好	PM-02高尾土	8	11	433		

清水山墓跡須恵器觀察表

区段番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	枝植の特徴	ハラ 抜き	色調	施成	層位	日付 昭和 年月 日	測定 番号	備考
第12段-79	SW01	杯B	16	13.1	3.4		底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	II a 層	5 7 475		
第2段-80	SW01	杯B	15.4	12.2	3.3	3.6	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好	FMO3IIIb層	8 18 430	手作業仕上	
第2段-81	SW01	杯B	17	13.4	2.6	3.3	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	FO01IIIb層	5 10 429		
第2段-82	SW01	杯B	16.9	11.4	3.3	3.9	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好	FLO5	2 24 482		
第2段-83	SW01	杯B	14.8	11	3.4	4	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好	II-1層	14 32 619		
第2段-84	SW01	杯B	11	7.5	3.1	3.7	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	FLO3IIIb層	6 13 432		
第2段-85	SW01	杯B	12.2	10	3.2	4	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	FMO4IIIb層	8 5 435		
第2段-86	SW01	杯B	15	10	5.1	5.6	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	FMO4IIIb層	2 32 478		
第2段-87	SW01	杯B	15	10.2	5.2	5.7	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	TA I 层	1 13 481		
第2段-88	SW01	杯B	14	10.2	5.5	5.3	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好、縦密	II-1層	11 16 480		
第2段-89	SW01	杯B	15.4	9.8	3.6	4.8	底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好	II-1層	7 14 615		
第2段-90	SW01	杯B	13.8				(杯B ?)休部にヘラ削き絵	?	黒色-褐色	良好	FL04IIIb層	4	778	
第2段-92	SW01	杯B	10				底部回転ヘラ削り	-	黒色-褐色	良好	FK05	10 486		
第2段-93	SW01	杯B	8.8				底部回転ヘラ削り	-	井	良好、縦密	II 层	10 625		
第2段-94	SW01	杯B	10.6				底部回転ヘラ削り	-	井	良好、縦密	FN03	9 623		
第2段-95	SW01	杯B	10.4				底部回転ヘラ削り	-	井	良好、縦密	土	11 624		
第2段-96	SW01	杯B	11				底部回転ヘラ削り	-	井	良好、縦密	FN04IIIb層	14 621		
第2段-97	SW01	杯B	9.8				底部回転ヘラ削り	-	井	良好、縦密	FN04IIIb層	12 620		
第17段-97	SW01	碗B	14.2	6.8	5.5	6.2	底部欠損	-	黒色-褐色	良好	II b 层	13 6 693		
第2段-98	SW01	碗	15.6	11.4	6.9	7.6	底部欠損	-	黒色-褐色	良好、縦密	II-1層	14 20 695		
第2段-99	SW01	柄C	16	11.4	7.2	8	底部欠損	-	黒色-褐色	良好、縦密	II-1層	23 19 694		
第2段-100	SW01	柄C	20				休部外面に被る脱ける	井	褐色-褐色	中空-中空	FN02II-1層	7	790	
第2段-101	SW01	柄C	20				口頭部回転ナデ	井	褐色-褐色	良好	FN02II-1層	4	903	中骨西周文化
第2段-102	SW01	高杯A	17.2				底部回転ヘラ削り	-	褐色-褐色	良好	DN02II-1層	15	671	中骨西周文化
第2段-103	SW01	口A	18.6	2.6			底部回転ヘラ削り	-	褐色-褐色	良好、縦密	FN04IIIb層	2	673	
第2段-104	SW01	口A	22.5	2.3			底部ヘラ削り	-	褐色-褐色	良好、縦密	DN04II-1層	8	572	
第2段-105	SW01	口頭部脱	8	12.4	3.3		頭部脱離の無い部分が削り落してある	井	褐色-褐色	良好	DN04II-1層	4	592	
第2段-106	SW01	無底盤	7				口頭部ヘラ削り	大	褐色-褐色	良好	II-1層	21 832		
第2段-107	SW01	無底盤	6.2				口頭部ヘラ削り、肩部ナデ(抜き工具)	井	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層	4 592		
第2段-108	SW01	深腹盤C	7.2				休部脱離ヘラ削り、休部有段	井	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層	16 687		
第2段-109	SW01	深腹盤C	5.8				底部回転ヘラ削り、休部外圓面有段3条	井	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層	32 683		
第2段-110	SW01	口頭部C					口頭部に沈殿2本	灰白	良好	SYSMEK層		880		
第2段-111	SW01	口頭部C					肩部ヘラ削り、肩部3本の凹槽が2条	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		850		
第2段-112	SW01	浅腹盤					頭部-基部ナデ、基部 有段	褐色-褐色	良好、縦密	II 层		844		
第2段-113	SW01	尖頭吸					休部タクタキリケン	褐色-褐色	良好、縦密	TA I 层		842		
第2段-114	SW01	長頭吸					頭部-基部回転ナデ、基部 有段	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		841		
第2段-115	SW01	尖頭吸	10.7				口頭部回転ナデ	灰色-褐色	良好、縦密	II-1層		10 453		
第2段-116	SW01	深頭吸A	8.8	12.2	21.7	22.7	底部回転ヘラ削り、底脚内側に凹槽がある	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		32 682		
第2段-117	SW01	深頭吸A					休部脱離ヘラ削り、底部ヘラ削り有段2条	褐色-褐色	良好	II-1層		846		
第2段-118	SW01	横瓶	8.9				休部外圓面タクタキ、休部内面ハケ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		775		
第2段-119	SW01	横瓶	10				口頭部外圓面タクタキ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		968		
第2段-120	SW01	横瓶	13				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		5 509		
第2段-121	SW01	横瓶	12.8				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		16 451		
第2段-122	SW01	横瓶	10.2				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		7 610		
第2段-123	SW01	横瓶	11.4				口頭部回転ナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		6 503		
第2段-124	SW01	横瓶	12.6				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		7 514		
第2段-125	SW01	横瓶	14				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		5 507		
第2段-126	SW01	横瓶	10.5				口頭部回転ナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		5 605		
第2段-127	SW01	横瓶	11.8				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		6 447		
第2段-128	SW01	横瓶	13				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		11 492		
第2段-129	SW01	横瓶	15.2				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好	II-1層		10 495		
第2段-130	SW01	横瓶	10.5				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		9 680		
第2段-131	SW01	横瓶	12.1				口頭部回転ナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		4 684		
第2段-132	SW01	横瓶	12.7				口頭部ヨコナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		8 496		
第2段-133	SW01	横瓶	12.6				口頭部前斜ナデ	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		5 665		
第2段-134	SW01	横瓶					横瓶内側へうがり、底脚内側面に留め縫合があり、底脚外側タクタキケン	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		897		
第2段-135	SW01	横瓶					休部内側タクタキケン	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		833		
第2段-136	SW01	横瓶					休部外側タクタキケン	褐色-褐色	良好、縦密	II-1層		16 686		

清水山廬跡須恵器觀察表

因應番号	造構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ A(cm)	厚さ B(cm)	技術的特徴	ヘラ 括り	色調	焼成	看位	出典 (参考書 名)	監 査 番 号	備 考
第17区-137 SW01	横瓶						体部外面タクシスコケシ、底部外面部ハケ	灰白、灰白	良好、緻密	FNO4Ⅲ層	781			
第2区-138 SW02	横瓶						体部外面部ハケ削り、底部外面部ハケ削り	灰白、灰白	良好、緻密	I層	700			
第2区-139 SW02	横瓶						体部外面部ハケ削り、底部外面部ハケ削り	灰白、灰白	良好、緻密	TAⅠ層	699			
第2区-140 SW02	横瓶						側部外面部タクシスコケシ、底部外面部ハケ削り	灰白、灰白	良好、緻密	SW01Ⅲ層	858			
第17区-141 SW02	横瓶						体部外表面タクシスコケシ、半尖頭削付柄あり	灰白、灰白	良好、緻密	TAⅡ層	836			
第2区-142 SW02	横瓶						体部外表面削付柄タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	TAⅢ層	834			
第2区-143 SW02	短頸壺A	5.8					口部部-月部ヨコナデ	灰白、灰白	良好、緻密	検出上層	8	670		
第2区-144 SW02	壺蓋	9.7					天井部凹削ヘラ削り	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	20	574		
第2区-145 SW02	短頸壺B	10.6					口部部ヨコナデ	灰白、灰白	良好	IⅡ b 層	8	501		
第2区-146 SW02	短頸壺B	8.4					口部部ヨコナデ、体部外面部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	FNO4Ⅲ層	7	488		
第2区-147 SW02	短頸壺B	8.6					肩部に本種の3つ条、体部外面部カキメ	灰白、灰白	良好、緻密	FL05Ⅲ層	11	849		
第2区-148 SW02	短頸壺B	11.4					口部部回転ナデ	灰白、灰白	良好、緻密	FK03	5	499		
第2区-149 SW02	短頸壺C	13.8					側部外面部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	IⅡ b 層	3	512		
第2区-150 SW02	短頸壺C	13.2					口部部ヨコナデ	灰白、灰白	良好、緻密	TAⅠ層	3	515		
第2区-151 SW02	短頸壺C	13.8					口部部ヨコナデ、体部外面部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	FN01Ⅲ層	7	457		
第2区-152 SW02	短頸壺C	11.8					休部外面部ナデ(ハラ状のもの)	灰白、灰白	良好、緻密	FNO4	8	446		
第2区-153 SW02	短頸壺C	13.8					休部外面部ナデ(板状工具による)	灰白、灰白	良好、緻密	FNO5Ⅲ層	4	439		
第2区-154 SW02	短頸壺C	13.8					休部外面部ナデ(板状工具による)	灰白、灰白	良好、緻密	FM05Ⅲ層	2	442		
第2区-155 SW02	短頸壺C	14.6					休部外面部ナデ(板状工具による)	灰白、灰白	良好、緻密	FM05Ⅲ層	7	442		
第2区-156 SW01	燒C	15					口部部-休部外面部ナデ、無部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	燒出黑褐色土	6	665		
第2区-157 SW01	燒C	16					口部部ヨコナデ、休部外面部カキメ	灰白、灰白	良好、緻密	FN04	7	441		
第2区-158 SW01	燒變形壺	9					口部部ヨコナデ(側面工具による)	灰白、灰白	良好、緻密	FM05Ⅲ層	12	851		
第2区-159 SW01	燒A	22.4					口部部回転ナデ	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	20	493		
第2区-160 SW01	燒A	18.1					口部部内面凹痕、口部部不明瞭	灰白、灰白	良好、緻密	I層	4	633		
第2区-161 SW01	燒D	19					口部部回転ナデ	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	5	506		
第2区-162 SW01	燒C	16					休部外面部タクシスコケシ、底部ハケ削り	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	26	438		
第75区-163 SW01	燒D	22.8					口部部内面凹痕、口部部不明瞭	灰白、灰白	良好、緻密	FM01Ⅲ層	6	450		
第2区-164 SW01	燒C	22.8					休部外面部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	8	656		
第2区-165 SW01	燒D	30					休部部不明瞭(タクシスコケシ)、口部部ヨコナデ	灰白、灰白	良好	I層	4	448		
第2区-166 SW01	燒A	30					口部部ヨコナデ	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	7	456		
第2区-167 SW01	燒D	32.5					休部外面部タクシスコケシ、口部部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	3	452		
第2区-168 SW01	燒A	25.2					口部部ヨコナデ	灰白、灰白	良好、緻密	FL03	5	449		
第2区-169 SW01	燒A	27					休部外面部タクシスコケシ、口部部内面凹痕	灰白、灰白	良好、緻密	FN04Ⅲ層	6	454		
第2区-170 SW01	燒A	27.2					休部外面部タクシスコケシ、口部部内面凹痕	灰白、灰白	良好、緻密	B-2区II層	9	440		
第2区-171 SW02	燒A	34.5					口部部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	FL04Ⅲ層	10	457		
第2区-172 SW02	燒A	28.4					口部部タクシスコケシ	灰白、灰白	良好、緻密	接土	7	660		
第2区-173 SW02	燒A	61.4					口部部燒造一ツ波、接接波状	暗褐色	良好	TAⅠ層	881			
第2区-174 SW02	燒A						口部部燒造波状	灰白、灰白	良好、緻密	FM05Ⅲ層	6	455		
等級區別P1	SW02	燒					ツミ部 ツマミなし	井	良好					
等級區別P1	SW01	燒A					底部ヘラ削り	灰白	良好	FN05	646			
等級區別P1	SW01	杯B					底部ヘラ削り(一方刃)	井	良好	FN05TA	679			
等級區別P1	SW01	杯B	9.6				底部回転ヘラ削り	井	良好	接土	12 807			
等級區別P1	SW01	燒					休部外底部タクシスコケシ	井	良好、緻密	I層	663			
第17区-1 SK13	杯A	13.4	8	3.6			底部ヘラ削り	灰白	良好		873			
第2区-2 SK11	杯B	8.5					底部不明瞭	赤褐色	甘く軟質		859			
第2区-3 SK11	杯A	14.8	8.5	4.4			底部ハラ削り	暗褐色	良好		870			
第2区-4 SK11	盞B	16.8	1.5	2.3			天井部凹軸ヘラ削り	暗褐色	良好		873			
第17区-1 SX01	杯A	13.2	8	3.6			底部凹軸系切り	灰	良好、緻密		855			
第2区-2 SX02	杯A	12.4	6.8	4			底部凹軸系切り	灰	良好、緻密		865			
第2区-3 SX01	杯A	14	5.5	4.3			底部凹軸系切り	灰	良好		888			
第2区-4 SX01	杯A	13.6	6.5	4.1			底部凹軸系切り	暗褐色	良好		888			
第2区-5 SX01	杯A	13.4	6.6	3.8			底部凹軸系切り	灰	良好、緻密		891			
第2区-6 SX02	杯A	12.8	6.8	4			底部凹軸系切り	灰白	良好		893			
第2区-7 SX02	杯A	13.27		3.7			底部凹軸系切り	灰白	良好		887			
第2区-8 SX02	杯A	11.8	6.4	3.7			底部凹軸系切り	暗褐色	良好、緻密		895			

池田端発跡須恵器・土器器観察表

図版番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器高 (cm)	技術の特徴		ヘラ 焼き	色調	鉢底	肩位	測定 寸法 (cm) 横 幅 × 深 さ × 高 さ	整理 番号	備考
							底部不規則	底部外面内面ナデ							
第199図-1	SY01	杯A	13.5	7.8	3.2	3.2	底部不規則	底部外側内面ナデ	黄褐色	古く軟質	1層	4	14	7	
第200図-2	SY01	杯A	14.4	7.3	3.5	3.5	底部外側内面ナデ	底部外側内面ナデ	黄褐色	良好	II	8	13	2	
第201図-3	SY01	杯A	14.5	10	3.7	3.7	底部直軸へラ削り	底部直軸へラ削り	黄褐色	やや古く軟質	II	6	17	3	
第202図-4	SY01	杯A	15.7	9.2	3.5	3.5	底部へラ切り後板へラナデ	底部へラ切り後板へラナデ	灰	良好	II	10	16	1	
第203図-5	SY01	杯A	13.5	6	4.2	4.2	底部直軸へラナデ	底部直軸へラナデ	黄褐色	やや古く軟質	II	14	14	4	
第204図-6	SY01	杯A	14.2	8	4.4	4.4	底部板へラナデ	底部板へラナデ	黄褐色	やや古く軟質	II	5	14	5	
第205図-7	SY01	杯A		7.3			底部板へラナデ	底部板へラナデ	黄褐色	やや古く軟質	II	32	6		
第206図-8	SY01	盃B	14.9	2.3	3	3	天井部直軸へラ削り	天井部直軸へラ削り	灰	良好、緻密	II	20	13		
第207図-9	SY01	盃B	14.7	2.9	3.6	3.6	天井部回転へラ削り	天井部回転へラ削り	灰	良好、緻密	II	13	15		
第208図-10	SY01	盃B	15.4				天井部回転へラ削り	天井部回転へラ削り	灰白	古く軟質	II	21	10		
第209図-11	SY01	盃B	18.1	2.5	3.2	3.2	天井部直軸へラ削り	天井部直軸へラ削り	灰白	良好	II	9	12		
第210図-12	SY01	盃B	16.2	3	3	3	天井部直軸へラ削り	天井部直軸へラ削り	灰	良好、緻密	II	19	11		
第211図-13	SY01	盃B	18.7	3.2	4	4	天井部直軸へラ削り	天井部直軸へラ削り	灰白	良好	II	21	17		
第212図-14	SY01	盃B	19.1	1.9	2.6	2.6	天井部直軸へラ削り	天井部直軸へラ削り	灰	良好、緻密	II	29	16		
第213図-15	SY01	盃B	18.2	1.8	2.4	2.4	大井部直軸へラ削り	大井部直軸へラ削り	灰	良好、緻密	II	10	14		
第214図-16	SY01	杯B	13.8	10.8	3.1	3.1	底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	灰	良好、緻密	II	1	6	8	
第215図-17	SY01	杯B		13			底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	灰白	やや古く軟質	II	14	9		
第216図-18	SY01	横扒					内部凹凸ありナデ、底部ナデ、外側江戸ナデ	内部凹凸ありナデ、底部ナデ、外側江戸ナデ	灰	良好	II	17			
第217図-19	SY01	甕底部		10.5			外側タクシ、内面ナデ	外側タクシ、内面ナデ	灰	良好、緻密	II	7	18	平底	
第220図-1	SY02	杯A	13.3	8	3.7	3.7	底部タクシ、底部回転へラ削り、底部細孔取具による目皿ナデ	底部タクシ、底部回転へラ削り、底部細孔取具による目皿ナデ	灰	やや古く軟質	2層・3層・5層	15	32	19	
第221図-2	SY02	杯A	14.4				底部欠損	底部欠損	灰白	やや古く軟質	檢7区・2層	14	20		
第222図-3	SY02	杯B	13.2	9.2	3.3	3.3	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	灰	やや古く軟質	3層	14	17	35	
第223図-4	SY02	杯B	13.4	9.8	3.5	3.5	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	灰	良好	2層	5	6	26	
第224図-5	SY02	杯B	13.8	9.6	3.4	3.4	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	灰白	良好	II	8	16	36	
第225図-6	SY02	杯B	13.7	9.9	3.2	3.5	底部回転へラ削り(修理後取具による目皿ナデ)	底部回転へラ削り(修理後取具による目皿ナデ)	灰白	やや古く軟質	2層・3層	16	16	37	
第226図-7	SY02	杯B	13.8	9.6	3.3	3.5	底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	灰	良好	II	4	13	23	
第227図-8	SY02	杯B	14.6	10.0	3.4	3.4	底部回転へラ削り、体部内・外側板状工具痕	底部回転へラ削り、体部内・外側板状工具痕	灰	やや古く軟質	2層	5	13	29	
第228図-9	SY02	杯B	15.4	11.4	3.4	3.4	底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	黄褐色	良好	II	5	11	33	
第229図-10	SY02	杯B	13.8	9.2	3.8	4.1	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	底部回転へラ削り、体部板状工具痕	灰白	やや古く軟質	2層	18	21	38	
第230図-11	SY02	杯B	14	10.2	3.7	3.7	底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	黄褐色	良好、緻密	II	2	5	22	
第231図-12	SY02	杯B	14.6	11.2	3.8	4.5	底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	灰白	良好、緻密	T-A-①	10	16	28	
第232図-13	SY02	長縫蓋	7.2				ヨコナデ	ヨコナデ	墨褐色	良好	1層	18	42		
第233図-14	SY02	横扒					内面あて具痕あり、外側タクシ	内面あて具痕あり、外側タクシ	灰	良好、緻密	II		39		
第234図-15	SY02	甕A	44				口頭部彫造横状紋	口頭部彫造横状紋	墨褐色	良好、緻密	II	2	40		
第235図-16	SY02	甕A	25				口縁部一内度ヨコナデ	口縁部一内度ヨコナデ	灰	良好、緻密	II	4	44		
第236図-17	SY02	土器骨長脚蓋	23				ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	古く軟質	1層	9	41		
第237図-18	SY05	杯A	13.6	7.4	2.9	2.9	底部へラ切り後子子	底部へラ切り後子子	灰白色	やや古く軟質	2層	10	18	57	
第238図-19	SY05	杯A	13	9	3.3	3.3	底部回転へラ切り	底部回転へラ切り	灰白色	やや古く軟質	II	9	12	58	
第239図-20	SY05	杯A	18	12	6.3	6.3	底部不規則(ヘラ糊り?)	底部不規則(ヘラ糊り?)	灰白色	やや古く軟質	II	20	24	68	
第240図-21	SY05	杯A	17				底部欠損	底部欠損	灰	良好	II	5	57		
第241図-22	SY05	盃B	14.2	2.6	3.3	3.3	天井部直軸へラ削り	天井部直軸へラ削り	墨褐色	やや古く軟質	II	10	66		
第242図-23	SY05	盃B	13.8	9.8	3.7	4.2	底部直軸へラ削り	底部直軸へラ削り	墨褐色	古く軟質	II	6	16	60	
第243図-24	SY05	盃B	14.2	9.4	4.2	4.5	底部直軸へラ削り	底部直軸へラ削り	墨褐色	やや古く軟質	II	30	31	61	
第244図-25	SY05	盃B	13.4	7.4	3.5	3.5	底部回転へラ切り	底部回転へラ切り	灰白色	やや古く軟質	II	13	11	59	
第245図-26	SY05	盃B	9				底部回転へラ切り後回転へラ削り	底部回転へラ切り後回転へラ削り	灰	やや古く軟質	II	10	63		
第246図-27	SY05	盃B	9.5				底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	墨褐色	やや古く軟質	II	32	65		
第247図-28	SY05	盃B	9.6				底部回転へラ削り	底部回転へラ削り	墨褐色	やや古く軟質	II	32	64		
第248図-29	SY05	杯A	10.2				底部回転へラ切り	底部回転へラ切り	灰白色	古く軟質	II	15	62		
第249図-30	SY05	盃B					横縫ナメ(底部回転へラ削り)	横縫ナメ(底部回転へラ削り)	墨褐色	良好	無1-無2-無3-無4-無5-無6			178	
第250図-31	SY06	杯A	12.6	6.4	3.4	3.4	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	9層・上	26	32	135	
第251図-32	SY06	杯A	12.8	5.8	3.5	3.5	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	6層	14	32	179	
第252図-33	SY06	杯A	12.6	6.4	3.9	3.9	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	9層・上	25	32	70	
第253図-34	SY06	杯A	13.2	5.4	3.6	3.6	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	II	12	32	87	
第254図-35	SY06	杯A	12	6.2	3.7	3.7	底部へラ切り	底部へラ切り	黄褐色	古く軟質	II	30	22	124	
第255図-36	SY06	盃B	12.4	6	3.7	3.7	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	6層	26	32	136	
第256図-37	SY06	盃B	12.8	6	3.6	3.6	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	9層	15	32	76	
第257図-38	SY06	盃B	13	5.8	4	4	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	II	30	32	125	
第258図-39	SY06	盃B	12.8	5.5	3.8	3.8	底部回転糸切り	底部回転糸切り	黄褐色	古く軟質	9層・上	25	32	82	

池田端塗跡須恵器・土器類觀察表

函番番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 A(cm)	器高 B(cm)	技術の特徴	ヘラ 絞き	色調	焼成	層位	測定 寸法 (cm)	測定 寸法 (cm)	測定 寸法 (cm)	備考	
第211回-10	SY06	杯A	12.8	5.2	3.9		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層	32	32	73		
第2回-11	SY06	杯A	13	4.4	3.8		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	32	32	69		
第2回-12	SY06	杯A	13.7	6.1	3.5		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	#	12	32	86		
第2回-13	SY06	杯A	12.4	5.2	3.9		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	3層・4層	11	32	131		
第2回-14	SY06	杯A	12.8	5.8	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	4層	32	32	139		
第2回-15	SY06	杯A	13.2	6	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	29	32	74		
第2回-16	SY06	杯A	12.8	5.6	4.3		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	6層・7層	20	32	138		
第2回-17	SY06	杯A	12.8	5.2	4.1		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	29	32	133		
第2回-18	SY06	杯A	13.2	6.6	3.8		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	#	11	32	84		
第2回-19	SY06	杯A	18	6.2	3.8		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	#	24	32	83		
第2回-20	SY06	杯A	13.4	6	4.4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	#	19	32	134		
第2回-21	SY05	杯A	13.8	5.8	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	6層・7層	15	32	132		
第2回-22	SY05	杯A	13.4	6.2	3.9		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質	9層上面	4	32	130		
第2回-23	SY05	杯A	10.1	5.5	4.5	5.2	底部回転糸切り		灰	良好、緻密	焼成部未実	6	32	89		
第2回-24	SY05	杯B			9.6		底部回転ヘラ削り		灰	良好	#	5	94			
第2回-25	SY05	台形付耳口					外面タタキ、内面ナデ		灰	良好	2a層			92		
第2回-26	SY05	縫					把手部		灰	良好	9層上面			93	把手	
第2回-27	SY05	甕A					口輪部直線状状況、口沿部～口縁部内側部に痕あり		黒褐色	良好	不明			215	口輪部直線状	
第2回-28	SY05	甕A	62				口輪部横擱波状状況、内面ヨコナデ		灰	良好、緻密	3層	2		95		
第2回-29	SY05	甕	11.4				外面タタキ、内面指痕ありナデ		灰	良好	9層	3	96	平底		
第2回-30	SY05	甕底部	16.4				内面ナデ、外面タタキ		灰	良好	1層	6	91	平底		
第212回-1	SY07	甕A	5.8				底部回転糸切り		黄褐色	やや甘く軟質	2層?			19	209	
第2回-2	SY07	甕A	6.4				底部回転糸切り		黄褐色	やや甘く軟質	2a層	32	141			
第2回-3	SY07	甕A	6.4				底部回転糸切り		黄褐色	やや甘く軟質	不明			32	149	
第2回-4	SY07	甕A	5.6				底部回転糸切り		灰	良好	3層			20	210	底部回転糸切り
第2回-5	SY07	甕B					天井部回転ヘラ削り		灰	良好	1層			145	天井部削除	
第2回-6	SY07	甕B	12				底部回転ヘラ削り		灰	やや甘く軟質	1層	7	142			
第2回-7	SY07	甕底部	8				底部回転糸切り外周ヘラ削り		黄褐色	やや甘く軟質	3層?	32	143	底部		
第2回-8	SY07	占削白有					外周不明瞭、内面ナデ		黒褐色	良好	1層			148		
第2回-9	SY07	甕A					ヨコナデ		灰	やや甘く軟質	3層			146		
第2回-10	SY07	甕A	50.2				口頭部傷剥波状紋		灰	やや甘く軟質	不明	2		150		
第2回-11	SY07	甕					外面タタキ、内面ナデ		黄褐色	良好	1層			144	丸底	
第2回-12	SY07	甕底部	16.2				外面タタキ、内面不明瞭		灰	今や甘く軟質	上部表土	1	147	平底		
第214回-1	SW02	甕A	12.87		4.1		底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好、緻密	#	8	9	110		
第2回-2	SW02	甕A	12.88		5		底部回転ヘラ削り		灰白	良好	RM10	7	10	106		
第2回-3	SW02	甕A	13.88		4.3		底部ヘラ切り後ナデ、底部内面ハケ		灰白	良好	RO08	1	9	108	底部回転ヘラ削り	
第2回-4	SW02	甕A	14.59		4.2		底部ヘラ切り後ナデ		灰白	良好	#	2	10	105		
第2回-5	SW02	甕A	13.89		6.8		底部ヘラ切り後ナデ		灰白	良好	RN11	3	16	104		
第2回-6	SW02	甕A	14.69	9.4	3.7		底部回転ヘラ削り後ナデ		灰	やや甘く軟質	トレンチED	15	15	109		
第2回-7	SW02	甕A	13.89	9.2	3.6		底部ヘラ切り後ナデ		灰	良好	RO08	19	19	107		
第2回-8	SW02	甕B	14.2	11.6	3.2		底部回転ヘラ削り		灰白	良好	RM10	7	8	113		
第2回-9	SW02	甕B	14.8	8.8	3.4	3.7	底部回転ヘラ削り		灰	良好、緻密	RO08	1	5	111		
第2回-10	SW02	甕B	12.8	8.6	4.7		底部回転ヘラ削り		灰白	良好	#	4	8	112		
第2回-11	SW02	甕B	16.2	9.6	6.8	7.1	底部回転ヘラ削り		赤褐色	やや甘く軟質	RO08	15	14	115		
第2回-12	SW02	甕B					東洋陶器・うなぎ、つみみに合めたための墨書き模様あり		灰白色	やや甘く軟質	RN16			102	うなぎの墨書き	
第2回-13	SW02	高甕	16	13	1.2		底部回転ヘラ削り		灰白色	良好	レンチ	11	17	118		
第2回-14	SW02	甕			17.6		回転ヘラ削り		灰	良好、緻密	RN11	5		117		
第2回-15	SW02	円腹甕	24				回転ナデ後へによる切込み		灰	良好、緻密	RL12	2		221		
第2回-16	SW02	長颈甕A	7.8	10.4	19.7	内・外面直板ナデ、ロ番部つまみ出し		灰	良好、緻密	RO08・トレンチED・RN11	25			116		
第2回-17	SW02	凸唇直耳甕					外面タタキ、内面ハケノ、耳縫穿孔あり		灰	良好	不明			101		
第2回-18	SW02	甕A	30.5				外面タタキ、内面あて具痕あり(開心円)		灰	良好、緻密	RO08	6		122	内面開心円文	
第2回-19	SW02	甕A	34.6				口頭部横割波状紋		灰	良好、緻密	一括	3		121		
第2回-20	SW02	甕A	50.6				口頭部傷剥波状紋		灰	良好	RP12			120		
第2回-21	SW02	甕A	50.6				口頭部指痕状紋、荷接状紋、露骨一級		灰	良好、緻密	RO10, RN10	5		123		
第2回-22	SW02	甕A					外面タタキ、内面ナデ		黄褐色	甘く軟質	RN10			98	丸底	
第226回-1	SK15	土井小型甕					不明瞭(回転ナデ?)		浅黃	良好				158		
第225回-1	SK01.3	唐慶屋版灰					外漏ナデ、口輪部内側凹字、脚接部人字模様あり		灰白色	良好				214	唐慶屋版灰	

池田櫻塚跡須恵器・土器器類観察表

国版番号	遺構名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 H(cm)	器高 B(cm)	枝状の特徴	ヘラ 鑿き	色調	焼成	層位	測定 位置 (cm)	測定 位置 (cm)	測定 位置 (cm)	備考		
第226図-1	SK22	壺腹下半部	13	—	—	—	内面不明瞭、外面タクタキ後カキ	黄褐色	甘く軟質	—	—	160	—	—	腹部		
第2-4-2	SK22	壺腹下半部	9	—	—	—	外面不明瞭、内面ハケ	浜白色	甘く軟質	—	—	15	161	—	—		
第226図-1	SK23	杯A	14	8.2	3.5	3.5	底部ヘラ切り	灰白	良好	—	—	5	17	205	—		
第2-5-2	SK23	杯A	12.5	7	3.5	3.5	底部ヘラ切り	灰白	良好	—	—	8	17	204	—		
第2-5-3	SK23	杯B	18.2	12	3.3	3.8	底部内輪赤色切り後外輪開板ヘラ削り	灰	良好	—	—	18	32	154	輪郭部削りと焼成		
第2-5-4	SK23	杯B	14.2	8.2	6	6.4	底部頭部ヘラ削り後中空部ヘラ削り	黄褐色	甘好、緻密	1層ブラン直上	14	32	225	—	—		
第2-5-5	SK23	土瓶長颈部	19.4	—	—	—	コ縫影コナデ、伏窓ハケ、内面不明瞭	赤褐色	甘く軟質	—	—	6	—	155	—		
第2-5-6	SK23	凸唇部直壁	—	—	—	—	外面タクタキ、体上部内面指痕残あり	黑褐色	良好、緻密	—	—	—	—	166	—		
第227図-1	SK24	土瓶短颈部	4	—	—	—	外腹ヘラ削り、内面ハケ	黄褐色	甘く軟質	—	—	18	157	—	—		
第227図-1	SK23	甕底部	—	—	10.8	—	外腹タクタキ、底部内輪削りあり、底部窓	黄褐色	甘く軟質	—	—	15	189	平底	—		
第227図-2	SK23	甕E	35.4	—	—	—	口頭部内面ヨコナデ、体上部内面タクタキ	灰白	甘く軟質	—	—	7	194	—	—		
第227図-1	SK23	甕F	—	—	—	—	外面タクタキ、内面ハケ	灰	良好	—	—	—	—	164	—		
第227図-1	SK23	杯A	13.2	6.6	3.6	—	底部頭部ヘラ削り	灰	良好、緻密	薄ブラン直上	5	32	226	—	—		
第2-5-2	SK34	土瓶直壁	11.7	—	—	—	外縫影コナデ、底部内輪削り、底部窓	赤褐色	甘く軟質	II層直上	25	32	186	—	—		
第2-5-3	SK34	土瓶小切妻	6.4	—	—	—	体上部内輪カキ、内面削り、体上部内面カキ	赤褐色	甘く軟質	—	—	24	190	—	—		
第227図-1	SK34	甕頭部	—	—	—	—	外腹タクタキ、底部内面長度あり(同心円)	黑褐色	糞垢	—	—	218	—	—	—		
第227図-1	SK34	甕底部	—	—	—	—	外腹タクタキ、内面ハケ	赤褐色	良好、緻密	—	—	7	163	—	—		
第228図-1	SK34	甕底部	11.4	—	—	—	二顎部ヨコナデ、外腹タクタキ、内面ナデ	灰白色	甘く軟質	—	—	13	187	—	—		
第228図-1	SK45	甕C	16.8	—	—	—	内腹不規則、外腹窓あり(クロクロ利用)	赤褐色	甘く軟質	—	—	10	162	—	—		
第228図-1	SK45	甕E	19.8	—	—	—	外腹不規則、外腹窓あり(クロクロ利用)	赤褐色	甘く軟質	—	—	32	165	—	—		
第228図-1	SK53	甕F	11.2	—	21.7	—	内腹不規則、外腹窓あり(クロクロ利用)	灰	良好、緻密	—	—	4	18	207	平底		
第2-5-3	SK53	三輪短颈部	23.6	9.8	—	—	4.5	—	底部内面削り、外腹窓あり(クロクロ利用)	浅黄褐	甘く軟質	—	—	203	丸底	—	
第2-5-4	SK53	甕G	—	—	—	—	底部内面削り、外腹窓あり(クロクロ利用)	黑褐色	良好、緻密	—	—	31	198	丸底	—		
第2-5-5	SK53	甕H	10.8	14.8	—	—	12.5	—	口縫影コナデ、底部内面削り、底部窓あり、底部窓	灰	良好	—	—	6	185	—	—
第229図-1	SK62	甕頭部	15.2	—	—	—	外腹内面削り、底部内面削り、底部窓あり	灰白色	良好	—	—	12	218	中腹 距離島 沖縄方面	—		
第229図-1	SK62	甕F	15.4	—	—	—	外腹タクタキ、内面あわ(肩)あり(肩内凹)	灰	良好、緻密	1層	—	168	距離島 タカキあり	—	—		
第229図-1	SK71	甕頭部	8	—	—	—	外腹タクタキ、底部内面削り残すあり	黑褐色	良好、緻密	—	—	7	167	平底	—		
第2-4-2	SK71	甕底部	—	—	—	—	外腹タクタキ、内面ナデ	灰	良好	—	—	—	—	169	—		
第2-5-1	SK71	甕頭部	—	—	—	—	体上部内面タクタキ、底部内面削り、内面削りナデ	灰	良好、緻密	1層黒色土	—	169	—	—			
第227図-1	SK71	甕頭部	—	—	—	—	外腹タクタキ、底部内面削り、内面ナデ	灰	良好、緻密	1層黒色土	—	170	—	—			
第229図-1	SK71	甕頭部	—	—	—	—	体上部内面タクタキ、底部内面削り、内面削りナデ	灰白	良好	—	—	206	平底	—	—		
第230図-1	SK71	甕頭部	12.8	—	23.6	—	内面内輪削り残すあり、体上部内面タクタキ	灰	良好	—	—	14	32	152	丸底		
第2-4-2	SK71	甕C	22	—	—	—	ヨコナデ	灰	良好、緻密	—	—	17	171	—	—		
第2-5-3	SK71	甕	—	—	—	—	外腹タクタキ、内面ナデ	黑褐色	良好、緻密	—	—	173	近畿地方 淡路島方面	—	—		
第227図-1	SK71	甕頭部	—	—	—	—	体上部内面削り、底部内面削り、内面削りナデ	灰	良好、緻密	—	—	211	—	—	—		
第230図-1	SK71	甕頭部	—	—	—	—	内面内輪削り残すあり、体上部内面タクタキ	灰白	良好	—	—	32	32	152	丸底		
第230図-1	SK71	甕頭部	—	—	—	—	内面内輪削り残すあり、体上部内面タクタキ	灰	良好	—	—	14	32	153	丸底		
第2-5-3	SK71	甕頭部	—	—	—	—	内面内輪削り残すあり、体上部内面タクタキ	黑褐色	良好、緻密	—	—	172	中央地方 近畿地方	—	—		
第2-5-4	SK71	甕頭部	—	—	—	—	内面内輪削り残すあり、体上部内面タクタキ	黑褐色	良好、緻密	—	—	199	丸底	—	—		
第2-5-5	SK71	甕頭部	—	—	—	—	内面内輪削り残すあり、体上部内面タクタキ	浅黄褐	甘く軟質	—	—	20	208	丸底	—		
第2-5-6	SK71	甕頭部	10	—	—	—	体上部内面削り残すあり、底部内面削り、底部窓あり	灰	良好、緻密	—	—	32	201	底部	—		
第2-5-7	SK71	甕C	19.2	32.6	—	—	外腹タクタキ、内面あわ(肩)あり(肩内凹)	灰	良好、緻密	—	—	229	—	—	—		
第2-5-8	SK71	甕底部	—	—	—	—	外腹タクタキ、底部内面削り残すあり	灰白色	甘く軟質	—	—	155	丸底	—	—		
第2-5-9	SK71	甕頭部	—	—	—	—	体上部内面削り残すあり、底部内面削り、内面削りナデ	灰	良好、緻密	B一折	13	197	丸底	—	—		
第230図-1	SK95	甕D	26.4	—	25.5	—	底部内面削り残すあり、底部窓あり	灰	良好	—	—	26	31	181	—		
第230図-1	SK95	甕B	13	7.8	3.3	3.5	底部内面削り残すあり、底部窓あり	灰白	良好、緻密	—	—	21	32	191	—		
第2-4-2	SK95	甕B	17.8	12.4	5.2	5.5	底部内面削り残すあり、底部窓あり	灰	良好、緻密	—	—	13	174	—	—		
第2-5-3	SK95	甕C	18.4	—	—	—	ヨコナデ	黑褐色	良好、緻密	—	—	21	32	184	—		
第232図-1	SK99	甕A	12.8	8.2	—	3.9	底部板ヘラナデ	灰白	良好	—	—	21	32	184	—		
第2-4-2	SK99	甕A	9	—	—	—	底部ヘラ切り	灰白色	甘く軟質	—	—	32	156	—	—		
第233図-1	SK01	土瓶小切妻	14.5	9.4	—	14.9	外腹不規則、内面ヨコナデ	赤褐色	甘く軟質	底部頭部直上	30	32	202	—	—		
第2-5-2	SK01	土瓶小切妻B	21	—	—	—	口縫影コナデ、内面ハケ	赤褐色	甘く軟質	—	—	5	195	—	—		
第2-5-3	SK01	土瓶直壁B	—	—	—	—	外腹ヘラ削り、内面ナデ	黑褐色	甘く軟質	—	—	177	丸底	—	—		
第2-5-4	SK01	甕	10.5	—	—	—	ヨコナデ	黑褐色	良好、緻密	—	—	13	174	—	—		
第233図-1	SD03	甕	45	—	—	—	底部内面削り残すあり、底部窓あり	灰	良好	—	—	220	—	—	—		
第2-5-3	SD03	甕	45	—	—	—	外腹横波状紋、内面内輪削りナデ	灰	良好、緻密	—	—	1	224	—	—		
第2-5-4	SD03	甕	45	—	—	—	外腹横波状紋、内面内輪削りナデ	灰	良好、緻密	—	—	2	222	—	—		
第2-5-5	SD05	甕B	12.2	8.6	5.3	4.1	底部内面削り	灰	良好、緻密	—	—	15	15	183	—		

池田端窓跡須恵器・土師器観察表

出展品番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 A(cm)	器高 B(cm)	技法の特徴	ヘラ 接き	色調	焼成	肩型	寸法 横幅 (cm)	寸法 縦幅 (cm)	寸法 高さ (cm)	監査 番号	備考
第233回-6	SD06	杯B	12.2	7.2	3.3	3.8	底部回転ヘラ削り	灰	良好、緻密			17	19	182		
第2回-7	不明	杯A	13.4	8.0	3.8		底部不明原(ナダ?)	灰				6	14	227		
第2回-8	不明	斐	23.4				ヨコナゲ	灰	良好	②		3		190		

牛出古窯跡須恵器・土師器観察表

出展品番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 A(cm)	器高 B(cm)	技法の特徴	ヘラ 接き	色調	焼成	肩型	寸法 横幅 (cm)	寸法 縦幅 (cm)	寸法 高さ (cm)	監査 番号	備考
第276回-1	SY01	杯A	13	7	3.4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		14	32	129		
第2回-2	SY01	杯A	14	5.6	3.7		底部回転糸切り	灰	良好			14	16	99		
第2回-3	SY01	杯A	15	7	3.5		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		11	32	94		
第2回-4	SY01	杯A	13	6	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		8	8	91		
第2回-5	SY01	杯A	12.4	6.4	4.5		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		20	32	87		
第2回-6	SY01	杯A	12	5	4		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		8	32	89		
第2回-7	SY01	杯A	12	6	4.3		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		21	32	95		
第2回-8	SY01	杯A	14	7.2	3.8		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		8		90		
第2回-9	SY01	杯A	13	6.4	4.1		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		9	32	127		
第2回-10	SY01	杯A	13.57	4.1			底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		20	29	93		
第2回-11	SY01	杯A	14	6.4	4.2		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		11	32	88		
第2回-12	SY01	杯A	14.27	4.5			底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		12	32	128		
第2回-13	SY01	杯A		6.4			底部回転糸切り	大	浅黄褐	やや甘く軟質			32	311	底部に大印	
第2回-14	SY01	蓋B	15		1.7	2.4	天井部回転ヘラ削り		灰白	良好		2		269		
第2回-15	SY01	蓋B	18.7	3	2.4	2.4	天井部3/2回転ヘラ削り		赤褐色	良好	隔壁内	8		342		
第2回-16	SY01	蓋B					天井部回転ヘラ削り		灰	良好				271		
第2回-17	SY01	蓋B	17.1	1.8			天井部回転ヘラ削り		灰	良好				270		
第2回-18	SY01	杯B		9.6			底部回転糸切り後外周三三転ヘラ削り		黒褐色	良好		32	327	全体付着		
第2回-19	SY01	杯B		8.4			底部欠損		灰	良好		4		265		
第2回-20	SY01	杯B		7.8			底部へラ切り後ナダ(不定方向)	一	灰	良好		18		263		
第2回-21	SY01	杯B	16.6				底部欠損		灰	良好、濃密		4		262		
第2回-22	SY01	短頸蓋C					回転ナデ(口縁部のみ)		褐色	良好		4		341		
第2回-23	SY01	皿C?	13.8	12.2	1.4		回転ナデ		褐色	良好、濃密		4	5	307		
第2回-24	SY01	短頸蓋C	15.8				内・外面回転ナダ		灰	良好		5		276		
第2回-25	SY01	短頸蓋C	16				回転ナデ		黑褐色	良好		3		277		
第2回-26	SY01	蓋A	24				回転ナデ		黑褐色	良好		11		279		
第2回-27	SY01	蓋A	23.8				回転ナデ		暗褐色	良好		2		278	盃み有り	
第2回-28	SY01	蓋A?	26.6				回転ナデ		暗褐色	良好		2		275		
第2回-29	SY01	蓋A					外面タタキ、内面回転ナデ		暗褐色	良好				281		
第2回-30	SY01	蓋A	41.6				回転ナデ		灰	良好		2		282		
第2回-31	SY01	蓋A?					回転ナデ		灰	良好				283	線刻	
第2回-32	SY01	土岐頭割削	11				内・外面土岐頭ナダ、底部回転ヘラ削り		浅黄褐	やや甘く軟質			14	100		
寺真御頭PL	SY01	杯A	13.8	7.6	4.1		底部回転糸切り		黄褐色	やや甘く軟質		26	32	92		
寺真御頭PL	SY01	杯A	13.8	7.7	3.9		底部回転糸切り		黄褐色	甘く軟質		30	32	96		
寺277回-1	SW01	杯A	13	6	3.3		底部回転糸切り		灰	良好		12	13	178		
第2回-2	SW01	杯A	13.2	5.6	3.6		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		4	14	180		
第2回-3	SW01	杯A	13.3	5.8	3.5		底部回転糸切り		灰白	良好		8	14	179		
第2回-4	SW01	杯A	13.4	7	3.5		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		6	14	181		
第2回-5	SW01	杯A	12	6.5	4.1		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		3	7	256		
第2回-6	SW01	杯A	13	6	3.6		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		5	6	182		
第2回-7	SW01	杯A	13	6.4	3.6		底部不明破		灰白	良好		2	15	186		
第2回-8	SW01	杯A	13	6	3.6		底部回転糸切り		灰	良好		10		168		
第2回-9	SW01	杯A	13	6	3.8		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		3	18	170		
第2回-10	SW01	杯A	13	7.8	3.0		底部回転糸切り		灰白	やや甘く軟質		6	24	198		
第2回-11	SW01	杯A	13	6.2	4.8		底部回転糸切り		灰白	良好		7	32	195		
第2回-12	SW01	杯A	13	6.2	3.9		底部回転糸切り		灰	良好、緻密		16	32	188		
第2回-13	SW01	杯A	13	6	3.9		底部豆紙糸切り		灰	良好		6	10	171		
第2回-14	SW01	杯A	13	6	4.5		底部豆紙糸切り		灰白	良好		6	15	194		
第2回-15	SW01	杯A	14	7	3.6		底部回転糸切り		灰白	良好		5	32	173		
第2回-16	SW01	杯A	14	7.8	4.1		底部回転糸切り		灰白	良好		35	32	196		
第2回-17	SW01	杯A	14	6.6	3.1		底部回転糸切り		灰白	良好		14	32	197		

牛出古窯跡須恵器・土師器觀察表

国際番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	技術的特徴	ヘラ 端身	色調	焼成	層位	測定 寸法 (cm) 横幅 × 高さ × 厚さ	鑑定 番号	備考
第277号-15	SW01	杯A	14	8	4		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	12 192		
第277号-19	SW01	杯A	14	8	4.2		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	12 15 199		
第277号-20	SW01	杯A	14	7.4	4.1		底部回転糸切り	灰白	良好		I	12 191		
第277号-21	SW01	杯A	13	6.3	4.1		底部不規則	灰	良好		I	7 169		
第277号-22	SW01	杯A	13.6	6.3	4.2		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	32 172		
第277号-23	SW01	杯A	13.4	7.2	4.3		底部回転糸切り	暗褐色	良好		I	15 187		
第277号-24	SW01	杯A	14	5.8	3.5		底部回転糸切り	灰	良好、微密		I	16 177		
第277号-25	SW01	杯A	14.2	7.2	3.9		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	31 176		
第277号-26	SW01	杯A	14.6	7.6	4.1		底部回転糸切り	灰白	甘く軟質		I	32 184		
第277号-27	SW01	杯A	14.6	8.6	4		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	29 175		
第277号-28	SW01	杯A	15	6.8	3.5		底部回転糸切り	灰	良好、微密		I	14 183		
第277号-29	SW01	杯A	15.1	8.8	3.7		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	15 174		
第277号-30	SW01	杯A	14.3	8.2	4.1		底部回転糸切り	灰白	良好		I	32 193		
第277号-31	SW01	杯A	14.6	8.4	3.8		底部回転糸切り	灰白	良好		I	14 190		
第277号-32	SW01	杯A	14.1	7.4	4.1		底部回転糸切り	灰白	やや青(軟質)		I	14 189		
第277号-33	SW01	杯A	14.4	6.8	3.9		底部回転糸切り	灰	良好		I	185		
第277号-34	SW01	蓋B					天井部回転ヘラ削り	暗褐色	良好		I	254		
第277号-35	SW01	蓋B					天井部回転ヘラ削り	暗褐色	良好、緻密		I	255		
第277号-36	SW01	盖B	13.6	2.6	3.8		天井部回転ヘラ削り、宝吹み蓋	灰白	良好		I	200		
第277号-37	SW01	杯B	11.8	7.2	3.4	3.6	底部欠損	灰	良好		I	5 202		
第277号-38	SW01	杯B	13	7.2	3.9	4.2	底部瓦軒へラ削り	灰	良好		I	32 204		
第277号-39	SW01	杯B	12.4	7.4	3.8	4.1	底部瓦軒へラ削り	灰白	良好		I	26 201		
第277号-40	SW02	杯B	12.6	7.2	3.5	4	底部瓦軒へラ削り	灰	良好		I	15 203		
第277号-41	SW02	雙A	25.8				回転ナデ	灰白	甘く軟質		I	251 口縁		
第277号-42	SW01	短頸蓋C	18.6				口縁タクミメリケシ内面黒子ア	灰	良好、緻密	I 潜	I	7 250		
第277号-43	SW01	短頸蓋C	20				回転ナデ	次白	やや青(軟質)		I	252 口縁		
第277号-44	SW01	雙A	13				外而夕タグ、内而不規	暗褐色	良好、緻密	I 層	I	9 249 底部		
第277号-45	SW02	杯A	12.6	6	4		底部回転糸切り	灰	良好		I	32 259 047385.1		
第277号-46	SW02	杯A	13	6.2	4.1		底部回転糸切り	灰	良好		I	32 258		
第277号-47	SW02	杯A	13.4	6.5	4.2		底部回転糸切り	灰	良好		I	16 257		
第277号-48	SW02	蓋B	13.2	2.2	1		天井部回転ヘラ削り	灰	良好		I	251 窓付付		
第277号-49	SW02	蓋B	17.6				天井部回転ヘラ削り	暗褐色	良好		I	260		
第278号-21	SW03	杯A	12.5	6.4	4		天井部回転糸切り、体部板状工具痕	灰白	良好	II - III層	II	25 255 板状工具痕		
第278号-22	SW03	杯A	12.8	6.8	4		底部回転糸切り	灰白	良好		II	32 165		
第278号-23	SW03	杯A	12				底部欠損、体部板状工具痕	灰	良好、微密	II - III層	II	256 板状工具痕		
第278号-24	SW03	杯A	14.4	7.2			底部不規則(ヘラ切りか?)	灰白	やや青(軟質)	II - III層	II	7 227		
第278号-25	SW03	杯A	13.4	6	4.3		底部回転糸切り後瓦軒へラ削り	灰白	良好		II	16 167 重ね焼		
第278号-26	SW03	蓋B	14				天井部回転糸切り後回転ヘラ削り	灰	良好、微密	II - III層	II	288 糸切り痕		
第278号-27	SW03	蓋B	13.4	1.8	2.4		天井部回転ヘラ削り	灰白	やや青(軟質)		I	4 161		
第278号-28	SW03	蓋B	15	2	2.7		天井部回転ヘラ削り、瓦軒内面心ナゲ、裏リゲツまみ	灰	良好		I	1 166		
第278号-29	SW03	杯B		7.4			底部瓦軒へラ削り	灰	良好、微密	II - III層	II	312 並排ヘラ削		
第278号-30	SW03	杯B	12	8	3.1	3.5	底部瓦軒へラ削り後瓦軒へラ削り	灰	良好	II - III層	II	32 164		
第278号-31	SW03	杯B	12.4	7.5	3.7	4.1	底部瓦軒へラ削り	暗褐色	良好	II - III層	II	32 301		
第278号-32	SW03	杯B	14.1	6	5.8	7.4	底部回転ヘラ削り	灰	良好、微密	II - III層	II	16 163		
第278号-33	SW03	杯A	12.8				底部回転糸切り	灰	良好		II - III層	II	228	
第278号-34	SW03	杯A					透かし窓あり	灰	良好		II - III層	II	290	
第278号-35	SW03	蓋B	8.2				回転ナデ	灰	良好	II - III層	II	254 口縁		
第278号-36	SW03	長頸蓋B	11				回転ナデ	灰	良好	II - III層	II	297 口縁		
第278号-37	SW03	長頸蓋					回転ナデ	暗褐色	良好		II - III層	II	222	
第278号-38	SW03	長頸蓋	14				回転ナデ	灰白	良好	II - III層	II	303 口縁		
第278号-39	SW03	蓋B	12.4				天井部不明、天井部内面カキ	灰白	やや青(軟質) II - III層	II	285			
第278号-40	SW03	蓋B	11				外面タクミメリケシ内面回転ナデ	暗褐色	良好	II - III層	II	3 298		
第278号-41	SW03	短頸蓋B	11				回転ナデ	灰	良好	II - III層	II	230		
第278号-42	SW03	短頸蓋B	11				外・内面回転ナデ	灰	良好、微密	II - III層	II	226		
第278号-43	SW03	短頸蓋B	13.6				回転ナデ	灰	良好	II - III層	II	315 膨らみ火乍		
第278号-44	SW03	短頸蓋B					回転ナデ	灰	良好、微密	II - III層	II	315 窓付大仰		
第278号-45	SW03	短頸蓋B					回転ナデ	大	暗褐色	II - III層	II	313 窓付大仰		
第278号-46	SW03	短頸蓋B					内面回転ナデ、外面不明瞭	灰	やや青(軟質)	II - III層	II	314 窓付(?)		
第278号-47	SW03	三足壺					脚部六角形のヘラ削り	暗褐色	良好、微密	II - III層	II	327 脚部		

牛出古墳遺跡須恵器・土師器觀察表

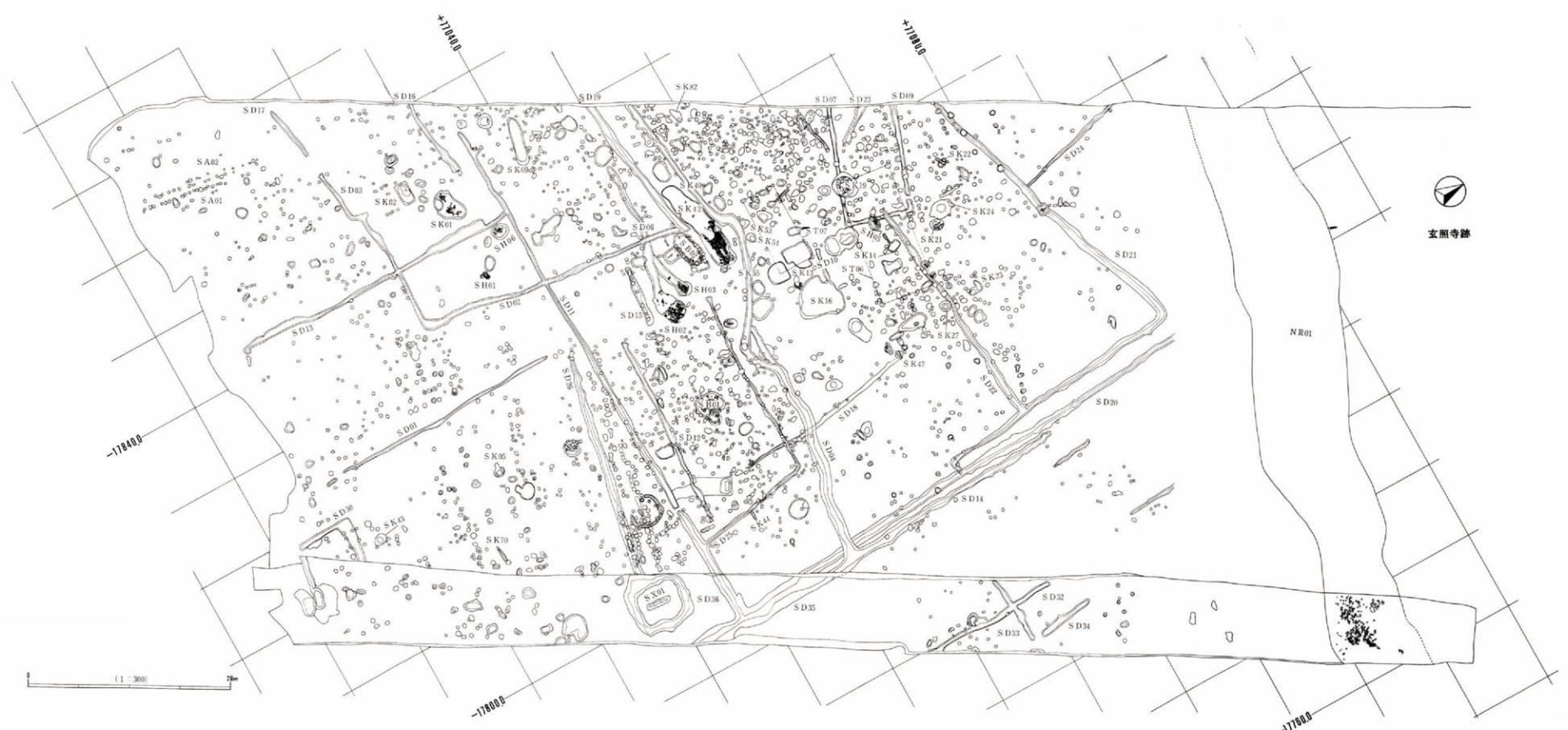
団番号	遺物名	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ A(cm)	厚さ B(cm)	被施の特徴	ヘラ 焼き	色調	焼成	層位	上層 中層 下層	整理 番号	備考
第278回-27	SW03	三足壺					四脚が八角形、下部が六角形のヘラ削り	暗褐色	良好、繊密	II・III層		326	脚部	
第2回-28	SW03	三足壺					脚部六角形のヘラ削り	暗褐色	良好、繊密	III層		329	脚部	
第2回-29	SW03	短頸壺C	13.2				四脚ナデ	灰白	良好	II・III層	3	226	続台	
第2回-30	SW03	短頸壺B					四脚ナデ	灰白	やせぐれ質	II・III層		292	続台	
第2回-31	SW03	短頸壺B	16				四脚ナデ	灰	良好、繊密	II・III層	4	316		
第2回-32	SW03	短頸壺B	16.8				四脚ナデ	灰	良好、繊密	II・III層	14	232	續台	
第2回-33	SW03	短頸壺B					耳部ヘラ削り穿孔あり	灰白	良好	III層		317		
第2回-34	SW03	壺					把手部	灰	良好	II・III層		318	把手	
第2回-35	SW03	壺A	39.8				四脚ナデ	暗褐色	やせぐれ質	III層	2.5	304	口縁	
第2回-36	SW03	壺底部			19.6		底部面付ナデ(漆器外装ナタキ強化ナシ)、底部内面ナデ	灰	良好	II・III層		18 291	平底	
第2回-37	SW03	壺底具					底道具	灰	良好	II・III層		320	底台	
第2回-38	SW03	底道具					底道具	灰	良好	I層		319	底台	
第279回-1	SK01	杯A	12.4	7	3.4		底部回転糸切り	灰	良好		5	19 234		
第2回-2	SK01	杯A	12.5	5.6	3.7		底筋不明瞭(回転糸切り?)	灰白	良好		6	15 309		
第2回-3	SK01	杯A	13.6	7.6	3.4		底部回転糸切り	灰	良好		6	13 310		
第2回-4	SK01	盃	11				内面回転ナデ、外面不明瞭	黒褐色	良好			236		
第2回-5	SK01	土師圓筒B	20.6				ヨコナデ	浅黄褐	やせぐれ質		12	235		
第280回-1	SB02	杯A	11.7	8.2	3.3		底部静止糸切り、内面底部ナデ	灰白	やせぐれ質		32	32 19		
第2回-2	SB02	杯A	12.4	4	4.2		底筋ヘラ削り後ナデ	灰	良好		7	10 52		
第2回-3	SB02	杯A	12.8	6.6	3.8		底部回転糸切り	灰	良好			32 32 55		
第2回-4	SB02	杯A	14	7.4	5.8		底部回転糸切り	灰	良好		6	5 9		
第2回-5	SB02	蓋B	13.8		2.2	2.8	天井部回転ヘラ削り	灰	やせぐれ質		5	10		
第2回-6	SB02	蓋B	14		2.3	3	天井部回転ヘラ削り	灰	良好		5	11		
第2回-7	SB02	蓋B	13.5		2.3	3.15	天井部回転ヘラ削り	灰	良好		12	60		
第2回-8	SB02	蓋B	17.5		1.1	2	天井部回転ヘラ削り	灰白	やせぐれ質		27	54		
第2回-9	SB02	蓋B	13		2.2	2.7	天井部回転ヘラ削り	灰	良好		32	56		
第2回-10	SB02	杯B	12.4	9	2.7	3.1	底筋回転ヘラ削り	灰	良好、繊密		4	12 6		
第2回-11	SB02	杯B	13	5.6	2.6	3.2	底筋回転ヘラ削り	灰	良好、繊密		8	10 5		
第2回-12	SB02	杯B	11.8	8.4	3.1	3.6	底部ヘラ削り	灰	良好、繊密		9	16 51		
第2回-13	SB02	杯B	12.8	8	4	4.1	底筋ヘラ削り、内面底部絞糸ナデ	赤褐色	やせぐれ質		30	28 53		
第2回-14	SB02	杯B	12.5	8.4	3.4	3.7	底筋ヘラ削り	灰	良好		25	32 50		
第2回-15	SB02	杯B	12.4	9.4	3.6	4.2	底部回転ヘラ削り	灰	良好		6	32 8		
第2回-16	SB02	杯B	14	9.2	3.2	3.7	底部回転ヘラ削り	灰	良好		6	12 7		
第2回-17	SB02	板C	13.6				互転ナデ	灰白	良好	機	2	332		
第2回-18	SB02	板C	16	7	5.7		底筋ヘラ削り後ナデ	灰	良好、繊密		32	32 57		
第2回-19	SB02	土燈					右目痕、穿孔あり	灰白	やせぐれ質			59		
第2回-20	SB02	櫛C					口周ヨリヨリ、底部ナタキあり、底部回転糸あり	黒褐色	良好			81		
第2回-21	SB02	土燈小蒸窓	10.8				口周ヨリヨリナタキナタキ、底部ナタキあり(ヘラ削り)	浅黄褐色	甘く軟質		3	2		
第2回-22	SB02	土燈小型窓	12.6				口周ヨリヨリナタキナタキ、底部ナタキあり(ヘラ削り)	浅黄褐	甘く軟質		14	58		
第2回-23	SB02	土燈鉢B	32.6				口周墨塗及び内面底部ナデ、底筋ヘラ削り	浅黄褐	やせぐれ質		3.5	3		
第2回-24	SB02	土燈鉢B	16				外腹ヘラ削り後ハケ、内面ハケ	浅黄褐	やせぐれ質		16	63		
第2回-25	SB02	土燈鉢B	26				口周墨塗・底筋上部墨塗ナタキ、底部回転ヘラ削り	浅黄褐	やせぐれ質		6	1		
第280回-1	SH01	器體不詳	12.7	10		2.5	底部回転ヘラ削り	灰	良好、繊密			13		
第2回-2	SH01	杯A	11.4	6.8	3.2		底筋ヘラ削り	灰白	やせぐれ質		13	32 17		
第2回-3	SH01	杯A	12.6	6.6	3.7		底部回転糸切り	暗褐色	良好		32	35 19		
第2回-4	SH01	杯A	12.8	7.8	4.6		底部回転糸切り	灰白	やせぐれ質		7	32 21		
第2回-5	SH01	蓋C	18.5		3.7	5.1	天井部回転ヘラ削り	灰	良好、繊密		32	16		
第2回-6	SH01	杯B	12	8.4	3.5	3.7	底筋ヘラ削り後ナデ	灰	良好、繊密		13	32 14		
第2回-7	SH01	杯B	12.9	8.6	3.4	3.5	天井部回転糸切り後外腹回転ヘラ削り	灰	やせぐれ質		13	18 20		
第2回-8	SH01	杯B	13.3	9.4	3.6	4	底部回転ヘラ削り	暗褐色	良好、繊密		32	35 18		
第2回-9	SH01	蓋C					つまみ接合部糸切り痕あり	暗褐色	良好			15		
第285回-1	SH01	器體不詳	12.7	10										
第2回-2	SH01	杯A	11.4	6.8	3.2		底筋ヘラ削り	灰白	やせぐれ質					
第2回-3	SH01	杯A	12.6	6.6	3.7		底部回転糸切り	暗褐色	良好					
第2回-4	SH01	杯A	12.8	7.8	4.6		底部回転糸切り	灰白	やせぐれ質					
第2回-5	SH01	蓋C	18.5		3.7	5.1	天井部回転ヘラ削り	灰	良好、繊密					
第2回-6	SH01	杯B	12	8.4	3.5	3.7	底筋ヘラ削り後ナデ	灰	良好、繊密					
第2回-7	SH01	杯B	12.9	8.6	3.4	3.5	天井部回転糸切り後外腹回転ヘラ削り	灰	やせぐれ質					
第2回-8	SH01	杯B	13.3	9.4	3.6	4	底部回転ヘラ削り	暗褐色	良好、繊密					
第2回-9	SH01	蓋C												
第2回-10	SH01	杯A	12.8	6	3.7									
第2回-11	SH01	杯A	12.8	6.4	4.1		底部回転糸切り	灰	良好、繊密					
第2回-12	SH01	杯B	16.8		3.1	3.5	天井部回転ヘラ削り	灰	良好					
第2回-13	SH01	杯B	15.5	9.2	6.2	6.7	天井部回転糸切り	灰	良好、繊密					
第2回-14	SH01	杯B	13.6				杯部中心指ナデ	灰	良好、繊密					
第2回-15	SH01	蓋A	20				口頭部回転ナデ	灰	良好					
第2回-16	SH01	長頸壺B			9.4			黒褐色	良好、繊密					

牛出古墳跡・須恵器・土師器観察表

区段番号	遺物名	基 確	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (mm)	器高 (mm)	枝詰の特徴	ヘラ 摺き	色調	施威	層位	測定 位置 X Y Z	測定 位置 X Y Z	備 考
第268区-5	SB12 長颈壺	16					底部ナテ、体部回転ヘラ削り		黒褐色	良好		32	66	高台付蓋
第 2 区-9	SB12 頸A	15					体部内面アカキ、底部内面みて具輪あり、底部内面アカキ、底部内面アカキ		灰	良好、繊密		30	67	平底
第 3 区-10	SB12 頸A	14.6					底部内面アカキ、底部内面アカキ、体部外面タキ		灰	良好、繊密		17	69	平底
第 3 区-11	SB12 頸	1.4					口縁部タキアカキ、底部内面アカキ、底部内面アカキ		灰	良好				64
第 3 区-12	SB12 頸	7					外面部タキ、内面みて具輪あり、底部内面アカキ		灰	良好				65 丸底
第 3 区-13	SB12 土師小型壺	7					底部回転糸切り、体部内・外面カキ		洗黄緑	やや青く軟質		32	77	
第 3 区-14	SB12 土師長颈壺B	6.0					外面部ヘラ削り、内面ナテ		浅黄緑	やや青く軟質				109
第 3 区-15	SB12 土師長颈壺A	9.4					底部ナテ、底部内面ナテ、外周ナテ		浅黄緑	やや青く軟質		32	80	
第 3 区-16	SB12 土師小壺	2	7.6		16.2		底部回転糸切り、体部内面アカキ、底部内面アカキ		浅黄緑	甘く軟質		28	75	
第 3 区-17	SB12 土師小壺	2	7.6		16.2		底部回転糸切り、体部内面アカキ、底部内面アカキ		灰白	やや青く軟質		28	76	
第 3 区-18	SB12 土師長颈壺	22					口縁部・内面ニコナテ、体部ヘラ削り		浅黄緑	やや青く軟質		3	143	
第 3 区-19	SB12 刀子													5004
第 3 区-20	SB12 丸瓦													4003
第 3 区-21	SB12 N.													4024
第 3 区-22	SB12 瓦													4036
第 3 区-23	SB12 五													4036
第29区-1	SH13 杯A	13.2 6.4	4.1				底部回転糸切り		灰	良好		13	32	22
第 2 区-2	SB13 杯A	13.5 6.4	4				底部回転糸切り		灰白	やや青く軟質		5	16	23
第 3 区-3	SB13 杯A	13.4 6.8	3.75				底部回転糸切り	別	灰	良好		29	32	85
第 3 区-4	SB13 杯A	14.1 7	4.3				底部回転糸切り	別	灰	良好		29	32	85
第 3 区-5	SB13 杯B	13.4	2.6	3.5			天井部回転ヘラ削り		灰	良好、繊密		23	44	
第 3 区-6	SB13 杯B	13.8	1.95	2.8			天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好		15	41	
第 3 区-7	SB13 杯B	13	2.4	3.1			天井部回転ヘラ削り		灰	良好		18	36	
第 3 区-8	SB13 杯B	13.9	2.4	3			天井部回転ヘラ削り		暗褐色	良好		22	34	
第 3 区-9	SB13 杯B	13.8	2.4	3			天井部回転ヘラ削り		灰	良好		9	35	
第 3 区-10	SH13 杯B	12.8	3	3.7			天井部回転ヘラ削り		灰白	やや青く軟質		27	28	
第 3 区-11	SB13 杯B	13.4	2.4	3.2			天井部回転ヘラ削り?		灰白	良好		28	29	
第 3 区-12	SB13 杯B	13	2.8	3.3			天井部回転ヘラ削り		灰	良好		18	31	
第 3 区-13	SB13 杯B	13.2	2.3	3			天井部回転ヘラ削り		灰	やや青く軟質		10	33	
第 3 区-14	SB13 杯B	13	2.1	2.7			天井部回転ヘラ削り		灰	良好		32	30	
第 3 区-15	SB13 杯B	14.6	2.4	3			天井部回転ヘラ削り		赤褐色	良好		1	46	
第 3 区-16	SB13 杯B	13.1	2.3	3.5			天井部回転ヘラ削り		灰	良好、繊密		32	39	
第 3 区-17	SB13 杯B	13.5	2.6	3.4			天井部回転ヘラ削り		灰	良好		30	32	
第 3 区-18	SB13 杯B	17.2	2.5	2.9			天井部回転ヘラ削り		暗褐色	やや青く軟質		4.6	40	
第 3 区-19	SB13 杯B	15.2	2.4	3.1			天井部豆豆ヘラ削り		暗褐色	良好		8	43	
第 3 区-20	SB13 杯B	18	2.65	4.2			天井部豆豆ヘラ削り		灰	良好		32	48	
第 3 区-21	SB13 杯B	18	2.6	3.7			天井部豆豆ヘラ削り		灰	良好、繊密		5	42	
第 3 区-22	SB13 杯B	18	3.4	4.7			天井部豆豆ヘラ削り		灰	良好		31	49	
第 3 区-23	SB13 杯B	18.2	3.4	4.6			天井部豆豆ヘラ削り		灰	良好、繊密		16	45	
第 3 区-24	SB13 杯B ?	18.2	3.3				天井部豆豆ヘラ削り		灰	良好		32	47	
第 3 区-25	SB13 杯B ?	15					天井部豆豆ヘラ削り		灰	良好		5	37	
第 3 区-26	SB13 杯B	12	8.6	3.4			天井部豆豆ヘラ削り		灰白	良好		18	32	26
第 3 区-27	SB13 杯B	11.5	8.4	3.3			底部回転糸切り		暗褐色	良好		32	32	25
第 3 区-28	SB13 杯B	12.4 8.6	2.9	3.3			底部回転糸切り		灰	良好、繊密		25	32	24
第 3 区-29	SB13 杯B	12.4 9	2.9	3.3			底部回転糸切り後外周豆豆ヘラ削り		暗褐色	良好		22	32	27
第 3 区-30	SB13 杯B						同窓ナテ		灰	良好、繊密				330 杯部分
第 3 区-31	SB13 杯B	8.5					外面部不明瞭		灰	良好、繊密		14	137	
第 3 区-32	SB13 短頸壺		,5.8				体部の底へ下部ナテ(一深さ1cm)、内面体上部糸切りナテ、底部内面アカキ(一深さ1cm)		灰	良好、繊密		27	156	底部
第 3 区-33	SB13 壺A	45.8					内・外面部回転ナテ		灰	良好				146
第 3 区-34	SB13 壺A						内・外面部ヨコナテ		AAA	良好				145
第 3 区-35	SB13 壺A						口頭部タキ後削出波状紋		灰	良好				147
第222区-68	SB13 壺A ?						外面部タキ、底部内面ヘタ、内面周て両端に凹字あり		灰	良好、繊密				124
第 3 区-87	SB13 壺A ?						外面部タキ、体部内面ヘタ、体部内面ナテ		灰	良好				125 丸底
第 3 区-88	SB13 壺A ?						外面部タキ、内面ヨコナテ		灰	良好、繊密				126
第 3 区-89	SB13 壺A						同窓ナテ		灰	良好				148
第 3 区-90	SB13 壺A						外面部タキ、内面内面凹字、内面周て両端に凹字あり		灰	良好、繊密				149
第 3 区-91	SB13 壺A						外面部タキ、体部内面ヘタ、体部内面ナテ		灰	良好、繊密				150
第 3 区-92	SB13 壺A						外面部タキ、体部内面ヘタ、体部内面ナテ		浅黄緑	良好				138

牛出古窯跡須恵器・土師器観察表

面版番号	造様名	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	厚さ A(cm)	厚さ B(cm)	特徴	ヘラ 括り	色調	焼成	層位	昭和 年月 (西暦) (西暦)	整理 番号	備考	
第293面-43	SB13	土師瓦頭鏡E	20.6				口頭部コナチ、体部内側カキ後へ削り、内側カキ	浅黄褐色	やや甘く軟質	15	141				
第2面-44	SB13	土師瓦頭鏡D	18.6				内面カキ、口頭部外側頭部のみ、体部内側カキ	赤褐色	甘く軟質	9	138				
第2面-45	SB13	土師瓦頭鏡A	16	7	22		口頭部、外側頭部カキ、内側内面カキ	浅黄褐色	甘く軟質	9	22 135				
第2面-46	SB13	土師瓦頭鏡B	2				外側カキ後へ削り、内側カキ	浅黄褐色	やや甘く軟質	32	133				
第2面-47	SB13	土師瓦頭鏡E	23.6				口頭部、内面カキ後へ削り、内側内面カキ(削り方)、内側内面カキ後へ削り、外側内面カキ(削り方)	浅黄褐色	やや甘く軟質		144				
第294面-1	SD05	杯底部					底部回転糸切り	別灰	良好、無質	抽出		333	内面「頭」印		
第2面-2	SD05	杯底部					底部回転糸切り	別灰	灰	血紅、繊維	一括抽出		334	内面「頭」印	
第2面-3	SD05	鋸鉋車					手づくね、中央に穿孔	灰白色	良好			338	土師(SHOUH12)		
第297面-1	SB14	土師杯	10.6	5.6	2.9		底部回転糸切り	赤褐色	やや甘く軟質	9	35 103				
第2面-2	SB14	蓋B	14.2	2.1	2.8		天井部回転へ削り、中央部のすれた所に繊維あり	暗褐色	良好			32	104		
第2面-3	SB14	土師鈎B	6.8				底部不明瞭	赤褐色	甘く軟質			32	108		
第2面-4	SB14	土師鈎B	6.6				底部不明瞭	赤褐色	甘く軟質			32	107		
第2面-5	SB14	凸側面西耳尊					外側タキ凸番付、内面あて有痕あり	灰白	良好				106		
第2面-6	SB14	蓋A					口頭部ヨコナデ	灰	良好				148		
第2面-7	SB14	甕A					口頭部ヨコナデ	灰白	やや甘く軟質				149		
第2面-8	SB14	土師羽笠	24				内・外面部回転ナデ	浅黄褐色	ややせり軟質	1		105			
第297面-1	SB15	杯A	12.2	6.4	4.1		底部回転糸切り	灰	良好	5	8	111			
第2面-2	SB15	杯A		8			底部回転糸切り	灰白	やや甘く軟質	15		120			
第2面-3	SB15	杯A	14.8	7.2	4		底部ナデ(中央部へラ切り痕あり)	灰白	やや甘く軟質			12	112		
第2面-4	SB15	蓋B	13	2.3	3		天井部回転へ削り、張り引ぎつまみ蓋	灰	良好、無質			32	118		
第2面-5	SB15	蓋B	14.8	2.4	3.1		天井部回転へ削り	灰	良好			22	119		
第2面-6	SB15	杯B	9.2	6	3.2	3.6	底部不明	灰	やや甘く無質	3	5	113			
第2面-7	SB15	杯B	10.2	7	3.7	4.1	底部不明	灰	やや甘く軟質	7		121			
第2面-8	SB15	杯B	9.6				底部回転糸切り後外側回転へ削り	灰白	良好			20	122		
第2面-9	SB15	瓶頸壺	8				外・内面部回転ナデ	無褐色	良好			32	117		
第2面-10	SB15	甕A					口頭部タキ後横描波状紋	灰	良好				150		
第2面-11	SB15	甕C	18				口頭部タキ後横描波状紋	灰白	やや甘く軟質				12	116	
第2面-12	SB15	甕C					口頭部タキ後横描波状紋	黃褐色	やや甘く軟質				123	丸底	
第2面-13	SB15	甕C	7.8				外・面内面アテ異痕あり	黒褐色	良好			32	110 丸底		
第2面-14	SB15	土師瓦頭鏡C	20				外・面内面アテ異痕あり	黒褐色	やや甘く軟質	10		115			
第300面-1	SK13	黒色甕A	13	5	3.85		内面へ削き、外側内面ナデ、底部回転糸切り	黑色	やや甘く軟質			25	32 240		
第2面-2	SK13	黒色甕A	13.4	6.2	3.4		内面へ削き、外側内面ナデ、底部回転糸切り	黑色	やや甘く軟質			17	25 235		
第2面-3	SK13	黒色甕A	13.5	6.5	4		内面へ削き、外側内面ナデ、底部回転糸切り	黑色	やや甘く軟質			25	32 248 墓碑?		
第301面-1	SK10	土師瓦頭鏡A	13.4				回転ナデ。口縁端部丸縫	橙色	ややせり軟質	No.23	6	345			
第2面-2	SK10	土師瓦頭鏡A	24				口縁端部面取り後回転ナデ	橙色	ややせり軟質	No.3	2.5	346			
第2面-3	SK10	土師羽笠					回転ナデ	橙色	軟質	No.16		348	昭和35年(1960)、 昭和36年(1961)、 昭和37年(1962)		
第2面-4	SK10	土師甕	24.3				回転ナデ	褐色	軟質	No.32	2.5	347	昭和35年(1960)、 昭和36年(1961)、 昭和37年(1962)		
第2面-5	SK12	土師甕	14				口縁部面取り後回転ナデ、口縁端部三角形	橙色	軟質		2	344			
第2面-6	SK12	土師瓦頭鏡	22				口縁端部面取り後回転ナデ	橙色	軟質		5	343			
第306面-1	SX02	杯A	13.8	7.2	4.3		底部回転糸切り	暗褐色	良好	9	7	244			
第2面-2	SX02	杯B	12.6	9	2.7	3.3	底部回転へ削り	暗褐色	白紅、微赤	11	8	243			
第2面-3	SX02	盞B	12.6	1.6	2.3		天井部回転へ削り	灰	良好、無質			7	247		
第2面-4	SX02	盞B	13.8	1.1	1.5		天井部回転へ削り	灰白	良好	4		245			
第2面-5	SX02	盞B	13.8	1.7	2.3		天井部回転へ削り	灰白	良好	12		246			
第2面-6	SX02	捷底座	11.8				内面あて有痕あり、外側タキ	灰	良好			32 241	平底		



付図 玄照寺跡・飯田古里敷遺跡遺構配置図

報告書抄録

書名	上信越自駆車道埋蔵文化財発掘調査報告書13
著者名	飯田古屋敷遺跡・玄無寺跡・がまん窓遺跡・沢田鍋土遺跡 清水山窓跡・池田窓跡・牛出古窓遺跡
巻次	小布施町内・中野市内その1・その2
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	24
編著者名	土屋 穣 鶴田典昭 中島英子 中島庄一
編集・発行機関	長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒387 長野県更埴市屋代字清水260-6 TEL026-274-3891
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積m ²	調査 原因
飯田古屋敷遺跡・玄無寺跡	上高井郡小布施町 大字飯田	20541	15	36°41'19"	138°17'48"	1992年7~11月	12,300	上信越 自動車
がまん窓遺跡	中野市大字大字間	20211	92	36°43'20"	138°19'08"	1991年7~11月	3,000	道建設
沢田鍋土遺跡	中野市大字立ヶ花	H		36°43'26"	138°19'05"	1991年4~12月	20,000	伴う
清水山窓跡	H	H	109	36°43'32"	138°19'13"	1992年9~12月	5,000	事前調
池田窓跡	H	H	110	36°43'44"	138°19'18"	1992年4~8月	16,000	査
牛出古窓遺跡	中野市大字牛出	H	121	36°44'03"	138°19'14"	1993年4~12月	8,500	

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯田古屋敷遺跡	集落	中世・近世	溝・水田	木製品・陶器	
玄無寺跡	集落	中世・近世	獨立式陶物址・井戸・海	磁器・五輪塔	
がまん窓遺跡	集落	EJ石器・繩文早期	ブロック	石器・土器	
沢田鍋土遺跡	窓跡・集落	弥生時代後期 奈良時代	柱列・環濠・竪穴住居址4	土器・鐵鎌・管玉	高地性防衛集落
清水山窓跡	窓跡	奈良時代	窓跡2・竪穴住居址2	須恵器・土師器	
池田窓跡	窓跡	奈良時代	窓跡3	須恵器	高井・佐久郡銘の 須恵器
牛出古窓遺跡	集落・窓跡	古墳時代前期 奈良・平安時代	竪穴住居址1 窓跡7・粘土探査跡	土師器 須恵器・土師器	
		EJ石器・古墳前期	ブロック・竪穴住居址8	土器・勾玉・ガラス玉	
		奈良時代	窓跡1・竪穴住居址7	須恵器・土師器	